青森県埋蔵文化財調査報告書　第362集

三内丸山遺跡22

平成14年度

青森県教育委員会

正誤表訂正済

青森県埋蔵文化財調査報告書　第362集

三内丸山遺跡22

―第13・14・17・20次調査報告書１―
遺構・遺構内遺物編

平成14年度

青森県教育委員会

第20次調査区全景（南東から）
口絵 1

道路跡に並列する環状配石墓（南東から：第14次調査）

環状配石墓（第11号配石　南東から：第14次調査）

土坑墓の壁に立つ炭化板材（第11号配石土坑Ａ：第14次調査）

環状配石墓（第17号配石：第20次調査）

土坑墓底面の赤色顔料（第17号配石：第20次調査）

環状配石墓内部の土盛り（中央の明るい部分：第16号配石）

道路跡（北から：第13次調査）

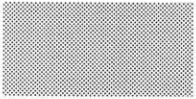
道路跡断面（南東から：第20次調査）

示した。

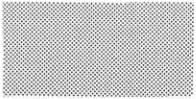
12　発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室が保管している。

13　第13、14、17、20次調査に関しては、本報告書がこれに先立つ全ての資料・報文等に優先する。

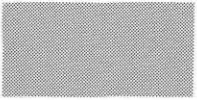
14　図中に使用したスクリーントーンは以下のものを表す。



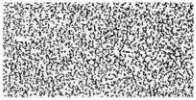
たたき



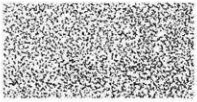
柱　痕



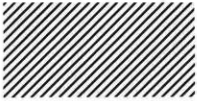
光　沢



焼　土



す　り



地　山

目　　次

口　絵
序
例　言
目　次

第Ⅰ章　調査の概要
第1節　調査目的 ……1
第2節　調査要項 ……4
第3節　調査の方法 ……8
第4節　整理の方法 ……9
第5節　調査の経過 ……13
第6節　調査区内の層序 ……16
第7節　各調査の概要 ……20

第Ⅱ章　検出遺構と遺構内出土遺物
第1節　縄文時代の検出遺構と遺構内出土遺物 ……29
1）配石遺構・環状配石墓 ……29
2）土坑・土坑墓 ……54
3）埋設土器 ……91
4）道路跡 ……99
5）竪穴住居跡 ……112
6）柱穴 ……138
7）西盛土－北東部分 ……139
第2節　平安時代以降の検出遺構と遺構内出土遺物 ……141
1）溝跡 ……141
2）畠跡 ……149
検出遺構一覧 ……152

第Ⅲ章　調査の成果と今後の課題
土坑・環状配石墓について ……159
道路跡について ……168

これまで刊行された発掘調査報告書（表） ……174
写真図版 ……175
報告書抄録 ……239

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査目的

三内丸山遺跡では、平成６年に保存が決定され、平成７年３月には遺跡整備のための青森県総合運動公園遺跡ゾーン基本構想が策定された。この基本構想を受け、県教育委員会では遺跡の学術的解明のための発掘調査を継続して行っており、平成７年度からは文化庁の補助金の交付を受け、国史跡指定に向けての範囲確認調査を実施し、平成９年３月には国史跡、平成12年11月には国特別史跡に指定された。

しかしながら、30数ヘクタールにおよぶ遺跡全体については、これまでの試掘調査で各種遺構が存在することは判明しているものの、集落の全体構造とその変遷、あるいは各遺構群相互の関係等、なお多くの課題がある。これらの課題を解決するために、そして中・長期的な保存、活用、整備計画の策定や推進のために、必要箇所について発掘調査を継続して実施するものとしている。遺跡西側の墓域についても平成10年度に第13次調査、11年度に第14次調査、12年度に第17次調査として調査が行われた。

一方、三内丸山遺跡の整備については平成10年３月に策定された青森県総合運動公園遺跡ゾーン基本計画によりさらに具体化し、見学者への総合的なサービス施設となる縄文時遊館が遺跡西側に整備され平成14年度に開館することとなった。縄文時遊館から遺跡中心部までの区域は、第13・14・17次調査で縄文時代中期の道路跡と環状配石墓などが確認されているため、それらを取り入れた形で園路を整備することとなった。しかし、これまでの調査は立ち木を避けながらの部分的な調査であり、整備を行うための情報としては十分なものではなかった。

そこで県土整備部からの受託調査として、第13・14・17次調査で確認された道路跡を中心に調査区を設定し、遺跡西側の道路跡と墓域の全体像をつかむことを目的に第20次調査を実施することとなった。

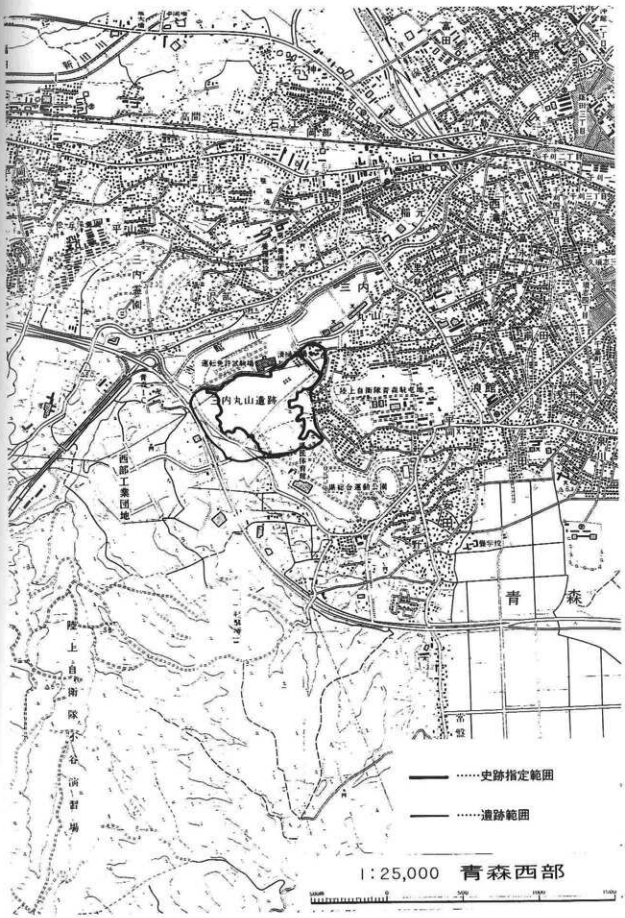
（斎藤　岳）

年　　度	調査地点と調査目的	調　査　主　体
平成４年度	野球場建設予定地本調査	埋蔵文化財調査センター
	第６鉄塔地区本調査	
	第７鉄塔地区本調査	
	第８鉄塔地区本調査	
平成５年度	野球場建設予定地本調査	〃
	第６鉄塔地区本調査	
平成６年度	野球場建設予定地本調査	〃
	野球場取り付け道路建設予定地試掘調査	
	サッカー場建設予定地試掘調査	
	テニスコート建設予定地試掘調査	
	近野遺跡地区試掘調査	
平成７年度	第１次調査（北地区、集落の範囲確認）	三内丸山遺跡対策室
	第２次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	

表１　発掘調査一覧（1）

年　　度	調査地点と調査目的	調　査　主　体
平成７年度	第３次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	三内丸山遺跡対策室
	第４次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	
平成８年度	第５次調査（南地区、集落の範囲確認）	〃
	第６次調査（北地区、低湿地の調査）	
	第７次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	
平成９年度	第８次調査（北地区、土坑墓と道路跡の範囲確認）	〃
	第９次調査（北地区、木柱周辺の遺構確認）	
	第10次調査（南地区、集落範囲と変遷の確認）	
平成10年度	第11次調査（南地区、集落範囲と変遷の確認）	〃
	第12次調査（北地区、有機質遺物と遺構の確認）	
	第13次調査（北地区、墓域の確認）	
平成11年度	第14次調査（北地区、環状配石墓の範囲確認）	〃
	第15次調査（北地区、遺物包含層の範囲確認）	
	第16次調査（北地区、竪穴住居跡の年代の確認）	
平成12年度	第17次調査（北地区、墓域の範囲確認）	〃
	第18次調査（北地区、集落範囲と変遷の確認）	
	第19次調査（北地区、木柱取り上げと周辺の遺構確認）	
平成13年度	第20次調査（北地区、遺跡整備に伴う環状配石墓と道路跡の範囲と年代の確認）	〃
	第21次調査（北地区、墓域の範囲と年代の確認）	
	第22次調査（北地区、竪穴住居跡及び粘土採掘坑などの範囲）	
平成14年度	第23次調査（北地区、環状配石墓と道路跡の範囲と年代の確認）	〃
	第24次調査（北地区、墓域の範囲と年代の確認）	
	第25次調査（北地区、木柱取り上げと周辺の遺構確認）	

表２　発掘調査一覧(2)



1図 遺跡位置図

第２節　調査要項

1　調査目的

史跡三内丸山遺跡の発掘調査を行い、集落の全体像を解明し、今後の保存活用に資する。

2　調査期間

第13次調査	平成10年６月１日～平成10年10月30日
第14次調査	平成11年５月12日～平成11年10月29日
第17次調査	平成12年５月22日～平成12年10月27日
第20次調査	平成13年６月18日～平成13年11月22日

3　遺跡名及び所在地　三内丸山遺跡　青森市三内字丸山279－１他

4　調査面積

合　　計	8,235平方メートル（内、重複面積1,146平方メートル）
第13次調査	1,040平方メートル
第14次調査	2,086平方メートル
第17次調査	1,020平方メートル
第20次調査	4,089平方メートル

5　調査主体　青森県教育委員会

6　調査担当機関　青森県教育庁文化課（現、文化財保護課）三内丸山遺跡対策室

7　調査協力機関　青森市教育委員会

8　調査員等

（平成10年度）

調査指導員	村越　潔	青森大学考古学研究所所長（考古学）
	市川　金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査協力員	池田　敬	青森市教育委員会教育長
調　査　員	高島　成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	山口　義伸	青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
	赤沼　英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員（保存科学）

（平成11年度）

調査指導員	村越　潔	青森大学考古学研究所所長（考古学）
	市川　金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査協力員	池田　敬	青森市教育委員会教育長
調　査　員	高島　成侑	八戸工業大学教授（建築史）

	山口　義伸	県史編さん室総括主幹（地質学）
	赤沼　英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員（保存科学）
（平成12年度）		
調査指導員	村越　　潔	青森大学考古学研究所顧問（考古学）
	市川　金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査協力員	池田　　敬	青森市教育委員会教育長
調　査　員	高島　成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	山口　義伸	県史編さん室総括主幹（地質学）
	赤沼　英男	岩手県立博物館主任専門学芸員（保存科学）
（平成13年度）		
調査指導員	村越　　潔	青森大学考古学研究所顧問（考古学）
	市川　金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査協力員	角田　栓二郎	青森市教育委員会教育長
調　査　員	高島　成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	山口　義伸	文化・スポーツ振興課県史編さん室総括主幹（地質学）
	赤沼　英男	岩手県立博物館主任専門学芸員（保存科学）

9　調査担当者　　青森県教育庁文化課（現、文化財保護課）三内丸山遺跡対策室

（平成10年度）

文化財保護主幹	岡田　康博
文化財保護主査	中村　美杉
文化財保護主事	齋藤　　岳
文化財保護主事	小笠原　雅行
文化財保護主事	秦　光次郎
文化財保護主事	葛城　和穂
調査補助員	本間　順子、土岐　耕司、漆畑　宗人、福田　優子

（平成11年度）

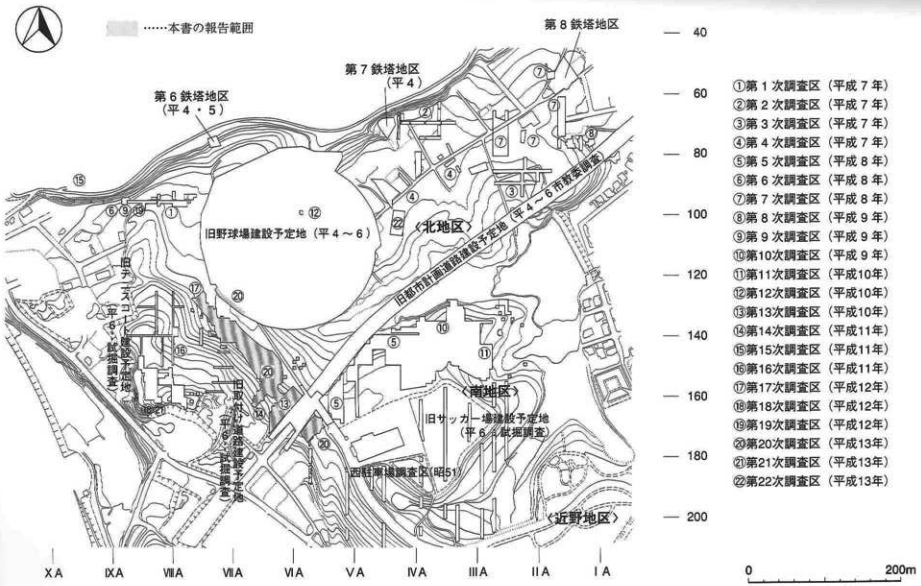
文化財保護主幹	岡田　康博
文化財保護主査	中村　美杉
文化財保護主査	齋藤　　岳
文化財保護主事	小笠原　雅行
文化財保護主事	秦　光次郎
文化財保護主事	葛城　和穂
調査補助員	土岐　耕司、漆畑　宗人、福田　優子、川村　恵利子、沼畑　伸一

（平成12年度）

文化財保護主幹	岡田　康博
文化財保護総括主査	中村　美杉
文化財保護主査	齋藤　　岳
文化財保護主事	小笠原　雅行
文化財保護主事	秦　光次郎
文化財保護主事	増木　智江
調査補助員	福田　優子、沼畑　伸一、市川　亜紀子

（平成13年度）

文化財保護主幹	岡田　康博
文化財保護総括主査	中村　美杉
文化財保護主査	齋藤　　岳
文化財保護主事	秦　光次郎
文化財保護主事	佐々木　雅裕
文化財保護主事	増木　智江
調査補助員	福田　優子、沼畑　伸一、柴山　大樹


……本書の報告範囲
第８鉄塔地区
第７鉄塔地区
（平４）
第６鉄塔地区
（平４・５）
旧野球場建設予定地（平４～６）
〈北地区〉
旧都市計画道路建設予定地（平４～６市教委調査）
旧テニスコート（建設予定地）（平６・試掘調査）
旧周辺道路建設予定地（平６・試掘調査）
〈南地区〉
旧サッカー場建設予定地（平６・試掘調査）
西駐車場調査区（昭51）
〈近野地区〉
40
60
80
100
120
140
160
180
200
XA
IXA
VIIIA
VIIA
VIA
VA
IVA
IIIA
IIA
IA
0
200m
①第１次調査区（平成７年）
②第２次調査区（平成７年）
③第３次調査区（平成７年）
④第４次調査区（平成７年）
⑤第５次調査区（平成８年）
⑥第６次調査区（平成８年）
⑦第７次調査区（平成８年）
⑧第８次調査区（平成９年）
⑨第９次調査区（平成９年）
⑩第10次調査区（平成９年）
⑪第11次調査区（平成10年）
⑫第12次調査区（平成10年）
⑬第13次調査区（平成10年）
⑭第14次調査区（平成11年）
⑮第15次調査区（平成11年）
⑯第16次調査区（平成11年）
⑰第17次調査区（平成12年）
⑱第18次調査区（平成12年）
⑲第19次調査区（平成12年）
⑳第20次調査区（平成13年）
㉑第21次調査区（平成13年）
㉒第22次調査区（平成13年）

２図　調査区位置図

第３節　調査の方法

平面座標には、平成４年度から同一の座標系を使用している。座標の基準点には、平成４年度に調査区内に設置されていた野球場建設工事用の杭を使用した。日本測地系に基づき、杭№21（日本測地系第Ｘ系　Ｘ＝89,860.0000、Ｙ＝-11,160.0000）と杭№20（Ｘ＝89,860.0000、Ｙ＝-11,180.0000）を結ぶ直線を東西の基線100（Ｘ＝89,860.0000）、これに直交し杭№21を通る直線を南北の基線ⅥＡ（Ｙ＝-11,160.0000）とし、杭№21の座標名をⅥＡ－100とした（註１）。

この座標系に基づき、20×20ｍの大グリッド、４×４ｍの小グリッドを設定した。東から西にＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットを、北から南へ１・２・３…と算用数字を付し、座標交点は東西のアルファベット－南北の算用数字の形で表記している。グリッドは北東隅の座標交点をもって呼称することとした。なお、アルファベットが重複する場合には、最初にローマ数字を付して区別した。ベンチマークは県総合運動公園内の水準点（Ｈ＝16.071ｍ）から引用し、必要に応じて調査区内の適地に随時設定した。

基本層序は、平成４～６年度に行われた旧野球場建設予定地調査での設定を基に、各調査区で認定を行った。層名は、層序の上位から下位にローマ数字を付し、遺構内堆積土については算用数字を付して呼称している。細分される場合は小文字のアルファベットを、更に細分される場合はハイフォンと算用数字を付して表した。土色は『新版標準土色帖』（小山、竹原1990）に沿い、マンセル記号を用い記録した。

土層の掘り下げにあたっては、面的に分層発掘を行なうことを原則とした。遺構分布の確認を最優先としているため、検出遺構の分布状況によっては調査区の拡張も行った。

確認した遺構は種類毎に、平成４年度調査時からの連番で遺構番号を付している。遺構の精査にあたっては、調査目的に沿って検出遺構の選定を行った。

精査は原則として二分法・四分法で行い、堆積土観察用のベルトを設けて土層を観察しながら進めた。

遺物の取り上げは、遺構単位・グリッド単位・層序単位で行った。遺構内出土遺物のうち、時代決定のできる遺物については極力その出土位置の記録を行った。

遺構の実測は、簡易遣り方と光波測量器による測量を併用している。実測時の縮尺は１/20を基本としたが、種類や規模の大小により１/10、１/40、１/50その他とした。

写真記録は、主に35mmモノクロームとカラーリバーサルの２種を併用し、作業の進展に応じて行った。特に重要と判断したものは、６×4.5mmのカラーリバーサルを用いた撮影も行った。

（秦　光次郎）

註１　日本測地系に基づいた座標系は、平成４年度から用いている。過去の報告書で「杭№21をＶＡ－100と」「磁北を基準」と記載されたことがあるが、近野遺跡報告書（青森県教委　2002）内で指摘されたように、それぞれ「杭№21をⅥＡ－100と」「（日本測地系における）座標北を基準」が正しい。

第４節　整理の方法

室内整理は、平成10年11月から同15年３月までの期間に、青森県教育庁文化課（現、文化財保護課）三内丸山遺跡対策室松原分室および三内丸山遺跡展示室内の整理室で行った。以下に遺構と遺物について整理作業の手順を示す。

遺構

調査現場で記録した図面（原図）のグリッド・セクションポイント等の確認、位置と標高の割り出しを行った。平面図・断面図を鉛筆トレースし、２次原図を作成した。断面図は書式上、平面図の下側・右側に載せるため、必要に応じて裏トレースしたものもある。遺構の面積は、デジタル・プラニメーターで３回計測し、その平均値を使用した（小数点二位以下は四捨五入した）。

土層注記は、注記表に簡潔化して記載した。

掲載した図はページ上方が北方向になることを原則としている。ただし、大型の遺構についてはその限りではない。各遺構の掲載時のスケールは、1/50を基本にしている。しかし、微細図等場合によっては縮尺を変えているものもあるため、それぞれの図にはスケールを付けている。また、位置を確認するため、平面図ごとにグリッドを入れている。

なお、図中に記したアルファベットは以下のものを示す。

P…土器、S…石器、W…木、LB…ロームブロック

遺物

遺物は水洗い、注記、復元作業などを行い、選別した後に実測または採拓を行った。

径の１/３以上を復元し得た土器はできるだけ実測図を作成した。また、それ以外の土器片は時期が明確なものを中心に採拓を行った。

石器・土製品・石製品のうち、主なものは図化・掲載した。剥片石器は委託実測を併用し、敲磨器類は補助員、整理作業員が実測を行った。石器の実測図に使用したスクリーントーンは、凡例３を参照されたい。

これらの遺物は、掲載ページ下側に遺物観察表を付した。縮尺は、土器は１/2.5、土偶・土製品・石製品・軽石・軽石製品は１/２、礫石器は１/３、磨製石斧・剥片石器２/３である。

遺物掲載写真の撮影は、専門家に委託した。掲載時の縮尺は約１/３、２/３、その他である。

今回報告分の遺物原図及び遺物は、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室松原分室と、三内丸山遺跡内の遺物収蔵庫で保管している。

遺物の分類

(1)土器

土器は時代ごとに次のように分類した。

第Ⅰ群　縄文時代草創期～早期

第Ⅱ群　縄文時代前期

1類　円筒下層ａ式より古く位置付けられる土器群

2類　円筒下層ａ式に位置づけられるもの

3類　円筒下層ｂ式に位置づけられるもの

4類　円筒下層ｃ式に位置づけられるもの

5類　円筒下層ｄ式に位置づけられるもの

さらに2つに細分する　1　d_1式

2　d_2式

6類　1～5類で時期を特定できないもの

第Ⅲ群　縄文時代中期

1類　円筒上層ａ式に位置づけられるもの

2類　円筒上層ｂ式に位置づけられるもの

3類　円筒上層ｃ式に位置づけられるもの

4類　円筒上層ｄ式に位置づけられるもの

5類　円筒上層ｅ式に位置づけられるもの

6類　1～5類で、時期を特定できないもの

7類　榎林式以前に位置づけられる大木式土器系のもの

8類　榎林式に位置づけられるもの

9類　最花式・中の平Ⅲ式に位置づけられるもの

10類　大木10式併行に位置づけられるもの

11類　8～10類で時期を特定できないもの

第Ⅳ群　縄文時代後期

1類　十腰内遺跡第Ⅰ群以前に位置づけられるもの

2類　十腰内遺跡第Ⅰ群に位置づけられるもの

第Ⅴ群　縄文時代晩期

第Ⅵ群　弥生時代

(2)石器

石器は形態・機能ごとに次のように分類した。

A類　石鏃

a　有茎Ｔ基のもの

b　有茎Ｙ基の〃

c　尖基　〃

d　平基　〃

e　円基　〃

f　凹基　〃

B類　石槍

　a　無茎のもの

　b　有茎　〃

C類　石匙

　a　縦型のもの（以下のd～gに該当するものを除く）

　b　横型　〃　（　　〃　　）

　c　斜型　〃　（　　〃　　）

　d　両面加工で石槍状の尖端をもつもの

　e　　〃　　石錐　　〃

　f　四角形の短辺部分に抉りをもち、長辺部分を刃部とするもの

　g　細部加工がほとんど加えられないもの

D類　石錐

　a　棒状のもの

　b　つまみがあるもの（以下のcに該当するものを除く）

　c　尖端のみつくりだしたもの

　d　石鏃を転用したもの

E類　石篦

　a　短冊型のもの

　b　撥形　〃

F類　ピエス・エスキーユ

G類　不定形石器

　a　いわゆるスクレイパー類

　b　　〃　R．フレイク

　c　　〃　U．フレイク

H類　石斧

　a　磨製石斧

　b　打製石斧

I類　敲磨器類

　a　主に凹のあるもの

　b　〃敲打痕　〃

　c　〃磨痕　〃

J類　半円状扁平打製石器

K類　抉入磨製石斧

L類　石皿・台石

M類　石棒類

　a　石棒

　b　石刀

N類　石錘

O類　石冠

　a　北海道式石冠

　b　三角柱状もしくは斧状の突出部を持つ磨製石器

P類　石核類

　a　石核

　b　原石

　c　剥片・砕片（剥片石器の製作に関するもの）

　d　剥片・砕片（礫石器の製作・使用に関するもの）

Q類　その他

R類　異形石器

S類　砥石

　a　楕円礫を素材とし、顕著な擦痕をもつもの

　b　扁平あるいは板状の礫を素材とするもの

　c　大型のもの（L類から分離されるもの）

T類　軽石・軽石製品

　a　使用痕・加工痕の認められないもの

　b　使用痕・加工痕の認められるもの

U類　角柱状の礫・礫石器

　a　使用痕・加工痕の認められないもの

　b　使用痕・加工痕の認められるもの

V類　擦切具

W類　礫

（石器：齋藤　岳、土器：秦　光次郎）

第５節　調査の経過

第13次調査は平成10年9月14日から開始し、グリッド、ベンチマークの設定、ⅥＤ－165付近から北東方向に向けての表土剥ぎを行った。同日、旧都市計画道路予定区の北側壁面を清掃したところ、層の欠落・第Ⅵ層土のブロックによる層など、縄文時代の道路跡を示す痕跡が確認された。今回の調査区内にも分布が及ぶと予想されたため、今後第Ⅱ層の掘り下げは、硬化面・削平面・ロームブロックの存在に注意し、細かく段階を分けて行うこととした。

９月下旬になり、道路跡の断面が確認された壁面の西側で環状配石遺構（第11号配石）が確認された。以後第11号配石周辺の遺構確認作業を集中して行うこととなった。また、上述の壁面のさらに南側の壁面でも道路跡の痕跡が確認され、南側に延びることが予想された。

10月上旬に道路跡の路面が露出し、さらに北西方向に延びると思われるようになった。

10月中旬には第11号配石周辺の第Ⅱ層の除去が終了し、新たに２基の配石遺構（第12・13号配石）が確認された。第11号配石と共に列状の配置をとることが判明し、道路に沿って北東方向に延びることが予想された。

10月下旬に入って、道路と環状配石遺構の延長を確認するため、第13号配石の北東から旧野球場建設予定地にかけてトレンチを設定した。また、配石遺構の分布範囲を調べるため周辺のボーリング探査も平行し、北側にかけてさらに３基の環状配石遺構が探知された。結果、道路跡は確認部分で最長89mに及び、これに沿って環状配石遺構の列も北側に延びていくことが明らかになった。

10月30日に全ての作業を終了し、器材の撤収を行った。出土遺物は段ボール箱にして６箱であった。

第14次調査は平成11年５月12日から開始した。第13次調査区の埋め戻し土を除去するとともに、更に北側に調査区を拡張した。グリッドとベンチマークは第13次調査のものを再使用した。前年度ボーリング探査によって探知された環状配石遺構については、遺構の中心に土層観察用ベルトを設定したのち検出作業を開始した。調査区の多くは杉林の中であるため、立木を残しながら粗掘りを進めた。

調査開始２日目、ⅥＪ・Ｋ－155・156で環状配石（第16号配石）が確認された。配石の内外で異なる土壌の分布が見られたことから、マウンドを伴う可能性があるとして、精査の方法を再検討した。

環状配石遺構では、14・15号配石の2基が新たに確認され、第11～13号配石と共に列状に配置されることがわかってきた。この他第12号配石の精査も開始し、土坑の有無の確認を行った。

５月下旬、粗掘りに着手するにあたって、環状配石遺構列の西側斜面をボーリング探査し遺構の分布を事前に探った。第16号配石周辺の粗掘りでは、ⅥＪ・Ｋ－152・153から新たに第17号配石遺構が確認された。また、第16号配石東側の平坦地ⅥＦ～Ｈ－149・150にトレンチを設定して道路跡の確認を進めた結果、ロームブロックの分布と第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層の欠如が認められた。

６月上旬から、環状配石墓列の西側斜面に調査区を広げ、墓域の広がりを確かめていった。

６月中旬、140ライン以北の粗掘りを開始した。ⅥＭ・Ｎ－143・144のトレンチでは第Ⅱ層の下でロームブロックの分布が確認された。

６月下旬、調査区北側のⅥＴ－135・136で、第Ⅴ層が削平された痕跡とロームブロックの分布が確認され、道路跡の総延長が170m余りに達することがわかった。また、ⅦＢ－138・ⅦＣ－137で中期末葉の埋設土器、ⅥＳ－141で日時計型の組石遺構（第18号配石）が確認された。

7月中旬から墓域の北側、140ライン以北の遺構確認が作業の中心となり、竪穴住居跡、土坑墓が検出されるようになった

7月下旬からは第11号配石の遺構精査を開始した。ベルトを設定して配石内を掘り下げたところ、重複した3基の土坑墓が確認された。140ライン以北では遺構確認を継続し、確認した土坑墓とその周辺の遺構確認を行った。また、ⅦGライン以西にも粗掘りを拡張した。

8月上旬から、環状配石墓以外の遺構でも、状態の良いものに限定して精査を開始した。環状配石墓の第11号配石は、伴う土坑墓のうち残存状態の良い最新の1基の精査を開始した。ⅦA～E－134～136ではロームブロックの分布が確認された。これによって、道路跡が直進しないことも考えられ、西側に曲がるかの確認も今後の検討課題となった。

8月下旬から、土坑墓の有無を確かめるため、他の環状配石墓でも下部の遺構確認を行った。第11号配石では、直接的な埋葬に関わる痕跡の検出を期待して、土坑堆積土を5㎝ずつスライスする精査法をとった。また、調査区北側で相当数の土坑墓の存在が予想されたため、調査区の拡張と遺構確認作業を重点的に行った。

9月中旬、第18号配石の周辺から、新たに2基の日時計型配石遺構が確認された。第13・17号配石の下部からは長楕円形の土坑が確認され、環状配石墓となることがわかった。

9月下旬、第11号配石内土坑の壁際から、炭化粒が多く検出されるようになった。

10月上旬、第11号配石内土坑の西壁で炭化板材が検出され、板壁を持つ土坑墓であろうと判断した。

10月中旬、第16号配石の内部からも土坑が確認された。精査を行った環状配石遺構の全てにおいて土坑が確認されたことにより、以後同様の遺構を環状配石墓と呼称することとした。土坑墓・埋設土器については精査が終了し、図化・撮影を行った。

10月下旬、調査区北側の遺構確認作業が終了し、土坑墓の検出数は130基に達する事がわかった。平行して、調査終了部分の埋め戻し準備を行った。

10月29日に調査を全て終え、機材の撤収を行った。出土遺物は段ボール箱にして106箱であった。

第17次調査は平成12年5月22日から開始した。昨年度実施した第14次調査区の、更に北西側に調査区を拡張して粗掘りを行った。第14次調査区の隣接部については埋め戻し土を除去し、遺構確認と遺構精査の準備を行った。グリッド、ベンチマークともに、第14次調査区に準じた。

6月上旬、墓域と道路の広がりを確かめるため、東西及び南方向に粗掘り作業を広げた。5月に着手した西側では、第Ⅱ層中から多くの遺物が出土するようになった。

6月中旬から下旬、調査区北西側の遺物密集区にトレンチを設定して調査した結果、西盛土の縁辺部であることが判明した。遺物出土量はこの時点でダンボール箱にして100箱を超えた。第14次調査区西端部付近では多数重複した土坑墓が認められるようになり、状態の良いものから精査を開始した。

8月下旬、土坑墓の分布は西盛土近くまで達することが判明した。一方、道路跡についてはいずれの痕跡も確認できず、本調査区内には延びていないものと判断した。遺構精査は第16・21号配石遺構及び第552号住居跡で行うことを決め、直上の埋め戻し土の除去を開始した。

9月中旬から10月中旬、第552号住居、第1119・1127～1129・1169・1183・1184・1194・1195・1210・1220号土坑の精査と記録を進めた。

10月20日、埋め戻し作業以外の全ての調査を終了した。出土遺物は段ボール箱で199箱に及んだ。

第20次調査は平成13年6月18日から開始した。まず、平成6年度に実施した旧野球場建設予定地内と、第13次調査区の埋め戻し土の除去作業を行い、遺構確認と遺構精査の準備を併せて行った。グリッド、ベンチマークはともに第17次調査区に準じて設定した。

7月中旬、第14次調査区の北側で基本層序の第Ⅱb層上面において平安時代の畠跡を確認した。7月下旬にはこの調査を終え、縄文時代の道路跡の検出作業へと移行した。道路跡の調査に際しては、これまで道路跡の特徴と把握されていた、第Ⅵ層を起源とするロームブロックの広がりと、第Ⅲ層以下での削平痕跡の検出に加え、硬化面の検出に注意を払った。また、道路跡と墓列の時間的関係が把握できるよう、グリッド単位あるいは斜面に対して直交する土層観察用ベルトを設定し、検出作業を進めた。これと併行して、調査区の南東側に広がる雑木林について7月初旬から伐採作業を開始し、その作業は8月上旬まで続いた。伐採の終了に伴い、調査区の表土と第14次調査区に重複する箇所の埋め戻し土を除去し、再び基本層序の第Ⅱb層上面で平安時代の畠跡を確認した。その後10月上旬に入り、道路跡上面におけるロームブロックの分布と、削平により第Ⅲ・Ⅴ層が、地点によっては第Ⅵ層あるいは第Ⅶ層の一部までが欠落するあり方が確認され、道路跡の様相と、加えて墓列との関係が把握されてきた。

一方、調査区の南東端では環状配石墓と道路跡の広がりが予測されていたことから、ボーリング探査を先行して行った。この結果を踏まえて、各グリッド単位に、あるいは遺構の中心を通る土層観察用ベルトを設定し、検出作業を進めた。9月上旬には予測された箇所から2基の環状配石墓（第24・25号配石）を検出し、さらに道路跡の広がりも明らかとなった。調査区の南東端での調査結果により、これまで確認された道路跡と墓列の総延長は約220mとなった。また、環状配石墓の検出に際しては、第16号配石遺構の例に窺える、配石内に土盛りを伴う可能性を考慮し、注意を払い作業を進めた。さらに、道路跡を境界に環状配石墓（第24・25号配石遺構）の向かい側では、環状配石墓とは構造の異なる、列状配列の配石遺構が2基（第26・27号配石）検出された。

また、検出された道路跡の状況から第13次調査区部分が道路幅を考える上で重要であると判断され、10月下旬から第13次調査区部分を東側に拡張した。その結果、道路跡の削平状況や帯状に続くロームブロックの広がり方が良好に確認された。さらには、11月上旬に第17号配石遺構内側の土坑墓から、三内丸山遺跡で初の事例となる赤色顔料が検出された。11月22日に器材の撤収を行い、作業を終了した。

（秦　光次郎、佐々木　雅裕）

第６節　調査区内の層序

平成６年度に設定された基本層序（註１）のうち、第Ⅳ層を除いた全ての層の堆積が認められる。調査区内の各層の概要は次のとおりである。

第Ⅰ層は表土である。第Ⅱ層に比べて色調が明るく、コバルト顔料の陶磁器片やガラス片が入っていることがある。

第Ⅱ層は均質な黒色土で、調査区の全域に堆積している。第Ⅱb層とした白頭山火山灰を上位に含む層を境として、上が第Ⅱa層、下が第Ⅱc層に細分される。

第Ⅱa層は均質な黒色土である。粘性がなく、しまりも弱い。第Ⅱc層とほぼ同質であり、第Ⅱb層が介在しない地点での識別は困難である。

第Ⅱb層は若干赤みがかった砂質シルト層である。道路範囲を中心とした窪地に６cm未満の厚さで堆積する。本層の上面で検出される均質な黄灰色シルトは白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）である。

第Ⅱc層は均質な黒色土で、道路跡、環状配石墓などの直上で堆積が確認されている。縄文時代中期後葉の最花式期や、中期末葉の大木10式並行期の遺物が包含される割合が高い。列状墓と道路跡の分布域では第Ⅲa・Ⅲb・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層との不整合面を持って堆積する。

第Ⅲ層は縄文時代中期の包含層である。黒色～暗褐色で、道路跡を除く広い範囲に堆積する。第Ⅲ層は、第Ⅲa・Ⅲb層の２層に細分される（註２）。

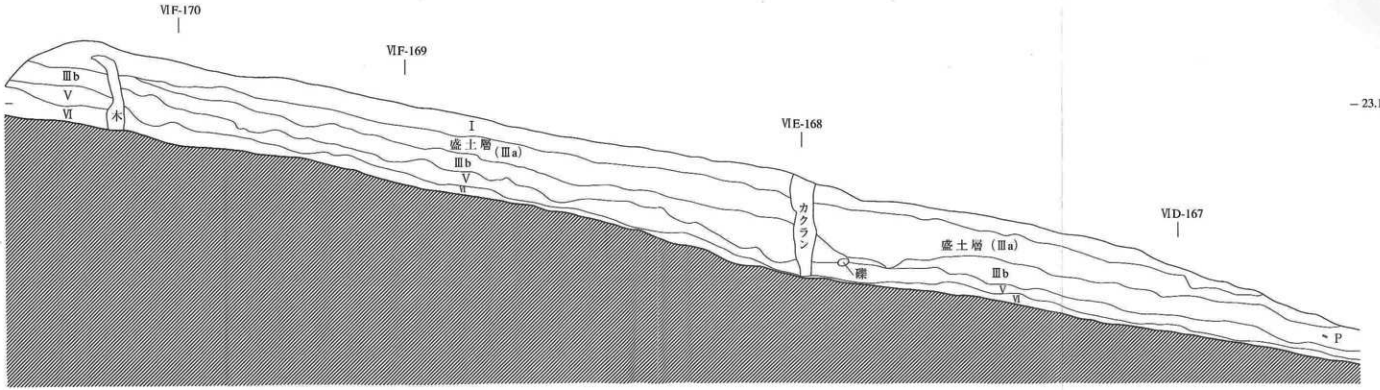
第Ⅲa層は、縄文時代中期中葉の遺物を含む暗褐色土層である。第Ⅴ層及び第Ⅵ層由来と思われる土壌が混入するため、色調が明るい。分布は非連続的で、特に道路範囲内での堆積が見られない。

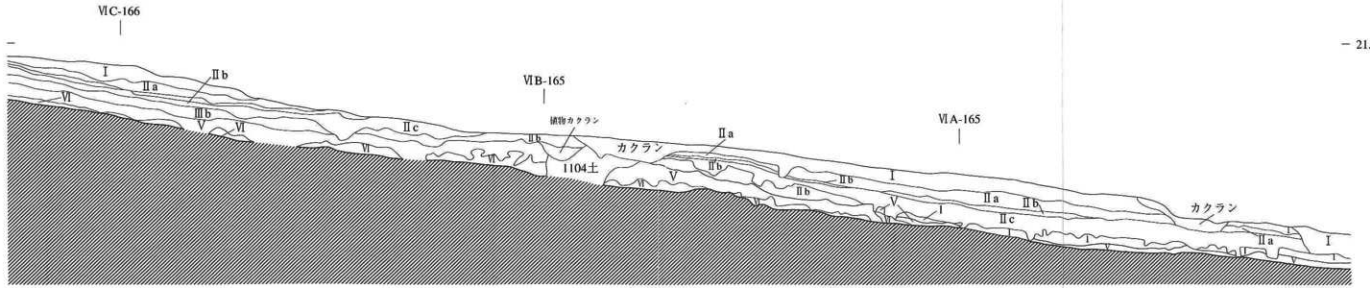
第Ⅲb層も縄文時代中期中葉までの遺物を含む層で、第Ⅱ層に近い黒色の土層である。第Ⅲa層より広い範囲で堆積し、道路跡中にも残存する。縄文時代中期中葉の遺物を包含するが、色調その他の土質から見て第Ⅳ層に由来する再堆積層の可能性がある。

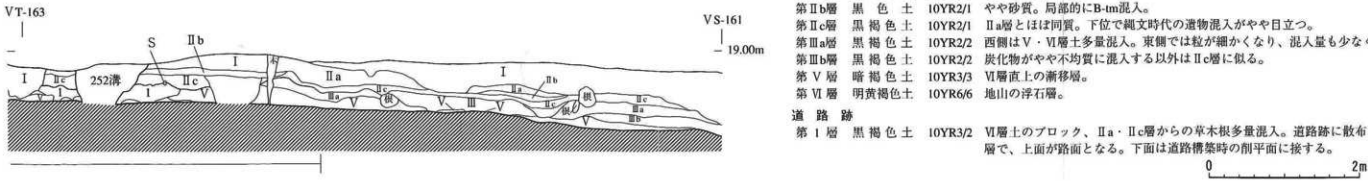
第Ⅴ層の漸移層以下は無遺物層である。

第Ⅵ層は、千曳浮石や碇ヶ関浮石層に対比される黄褐色軽石層である。調査区全域に堆積していたと思われるが、土坑密集区と道路跡の北側では欠落している。第Ⅶ層上面に小規模な窪みがある場合に残存する点、斜面の中途で帯状に欠落する点から、第Ⅱ層堆積以前の人為的な土地改変によって失われたものと考えられる。なお、縄文時代の道路跡に散布される「ロームブロック」とは、本層からの土壌である。

註１　調査初年の平成４年、基本層序設定（山口義伸「遺跡周辺の地形及び地質について」；青森県教委1995第１分冊　第Ⅳ章　第２節）に用いた土層断面は、その後の調査によって自然堆積の状態を示していないことがわかり、平成６年に再設定されている（山口義伸　1998　「遺跡内の基本層序」；青森県教委　1998第１分冊　第Ⅲ章　第１節所収）。再設定に用いた土層断面は、青森市教委が調査した都市計画道路建設予定地Ｃ区（青森市教委　1996）のＯ－36グリッド付近で、本報告書３・４図でのＶＳ－161付近に相当し、今回の調査で縄文時代の道路跡の東側にかかっていることがわかった。「ブロック状の混入が目立ち色調も明るく」（山口　1998）とは、ロームブロックが散布された道路面についての記述と考えられ、平成６年設定の第Ｖｂ層は自然堆積にはならない可能性が強い。







道　路　跡

第Ⅰ層	黒褐色土	10YR3/1	表土。耕作や近年の盛り土が見られる。
第Ⅱa層	黒　色　土	10YR2/1	均質でしまりなし。
第Ⅱb層	黒　色　土	10YR2/1	やや砂質。局部的にB-tm混入。
第Ⅱc層	黒褐色土	10YR2/1	Ⅱa層とほぼ同質。下位で縄文時代の遺物混入がやや目立つ。
第Ⅲa層	黒褐色土	10YR2/2	西側はⅤ・Ⅵ層土多量混入。東側では粒が細かくなり、混入量も少なくなる。
第Ⅲb層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物がやや不均質に混入する以外はⅡc層に似る。
第Ⅴ層	暗褐色土	10YR3/3	Ⅵ層直上の漸移層。
第Ⅵ層	明黄褐色土	10YR6/6	地山の浮石層。

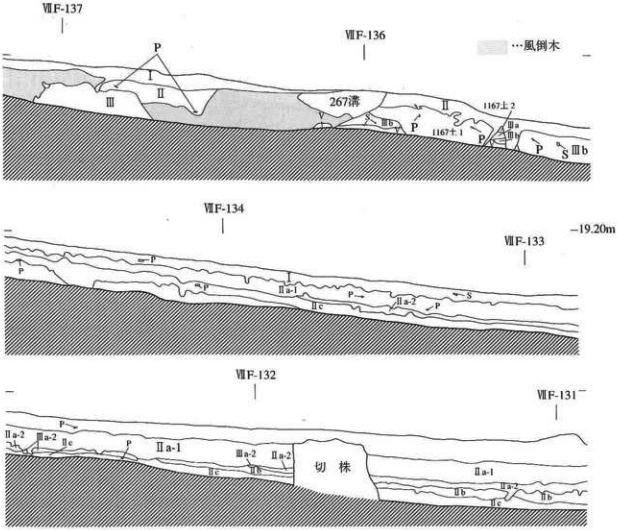
道　路　跡

第Ⅰ層	黒褐色土	10YR3/2	Ⅵ層土のブロック、Ⅱa・Ⅱc層からの草木根多量混入。道路跡に散布された土層で、上面が路面となる。下面は道路構築時の削平面に接する。

3・4図　調査区の層序(1)

註2　平成4～6年度に行なわれた旧野球場建設予定地内の谷、盛土遺構の調査においても、堆積時期によって第Ⅲa・Ⅲb層に分層した包含層を調査している。本調査区内では、主に色調と混入によって細分しており、上記の地点での第Ⅲa・Ⅲb層とは堆積時期の上でも異なる。

（秦　光次郎）



第Ⅰ層　暗褐色土　10YR3/2　表土。
第Ⅱ層　黒褐色土　10YR2/2　浮石粒・砂粒微混量。
第Ⅱa層　暗褐色土　10YR3/3　浮石粒・砂粒微混量。斜面下方で色調が1層に近づく。
第Ⅱb層　黒褐色土　10YR2/2　B-Tmと思われる橙色降下火山灰（10YR4/4）がブロック状に中量。炭化物・焼土粒微混量。
第Ⅱc層　黒　色　土　10YR2/1　Ⅱa層が識別できる地点でのみ識別可能。
第Ⅲ層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物・浮石粒微量。縄文中期遺物包含層。
第Ⅲa層　暗褐色土　10YR3/3　炭化物・浮石粒微量。縄文中期までの遺物微混量。Ⅴ層由来の土塊からなる。西盛土を覆うニセ地山。
第Ⅲb層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物・遺物少量、浮石粒微混量
第Ⅳ層　黒褐色土　10YR3/2　浮石粒・Ⅶ層土中量。ⅡないしⅡ層とⅦ層の混移層
第Ⅶ層　褐　色　土　10YR4/4　浮石とその風化粒から成る地山。

第1167号土坑
第1層　暗褐色土　10YR3/3　1167土最上層。
第2層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物・浮石粒微量。
第267号溝
第　層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物少量。Ⅱ層由来のシルト。

5図　調査区の層序(2)

第７節　各調査の概要

第13・14・17・20次調査は、集落の主体部が広がる低位の段丘から、南西側の中位段丘にかけての標高23.4～16.5mの斜面で行っている。南側では、昭和51年に青森県教育委員会が西駐車場区を、平成６年度に青森市教育委員会が都市計画道路建設予定地Ｃ区を調査しており、ともに配石遺構を伴う墓域であることが確かめられている。西側では平成６年度に試掘調査を行っており、縄文時代中期の盛土遺構と住居跡の分布が確認されていた。さらに北側には、遺跡の中心部である旧野球場建設予定地が隣接する。

第13次調査は、平成６年度に確認された西側の墓域の範囲確認を目的として行った。期間は平成10年９月14日から10月29日までで、1,040㎡を調査した。また、配石遺構の分布確認のため、周辺の約4,500㎡についてボーリング探査も行った。

検出した縄文時代の遺構は、環状配石遺構３基、道路跡１条である。何れも確認のみに留め精査は行っていない。その他、平安時代の焼土遺構と、近・現代のものと思われる溝跡が１条確認されている。

出土遺物は縄文時代中期前葉から後葉の縄文土器や石器などダンボール箱６箱分である。中心となる時期は縄文時代中期中葉である。それ以外の遺物では、縄文時代中期前葉の土偶３点、三角形土製品などが出土した。

調査の結果、これまで第８次調査、平成６年の南地区試掘調査などで確認されていた環状配石遺構が、初めて列状の配置をとって確認された。道路跡の検出は、第７～８次調査で確認された集落東側に次いで２番目である。

第14次調査は、第13次調査で確認された墓域の、範囲確認を目的として行った。調査期間は平成11年５月12日から10月29日までで、2,086㎡を調査した。

検出した縄文時代の遺構は、環状配石墓４基を含む配石遺構10基、土坑135基、埋設土器11基、道路跡１条、竪穴住居跡12棟である。うち、環状配石墓１基、土坑５基、埋設土器４基、竪穴住居跡２棟を精査した。その他、平安時代の竪穴住居跡１棟、平安時代以降の溝11条、時期不明の柱穴３基が確認されている。

出土遺物は縄文時代前期末葉から晩期の縄文土器・石器など、ダンボール箱106箱分である。中心となる時期は縄文時代中期中葉である。それ以外の遺物では、縄文時代中期の土偶や、土製耳飾、三角型土製品、石棒などが出土した。土偶・石棒は、北側の竪穴住居跡群から出土している。また、石鏃の出土が目立ち、139点を数える。

調査の結果、環状配石遺構は、環状配石を伴う土坑墓であることがわかった。環状配石墓のうち１基では、土坑墓が３基重複しており、うち１基には板壁が施されていたこともわかった。

土坑墓と少数の埋設土器で長さ約180mの墓列を形成していたが、道路跡を挟んだ東側ではそれらの埋葬施設は確認されなかった。時期が特定できた埋葬施設は僅かであったが、最も古いもので縄文時代中期前葉の円筒上層ｂ式期、新しいもので中期末葉の大木10式併行期が見られた。

道路跡は総延長約170mまで確認した。旧野球場建設予定地内に直進し、南盛土西側の掘立柱建物跡群に続くものと予想される。

第17次調査は、第14次調査で確認された墓域の範囲と年代の確認等を目的として行った。調査期間は

平成12年5月22日から10月27日までで、第14次調査の312㎡を含む1,020㎡を調査した。

調査区は、集落が主に広がる低位の段丘から、南西側の中位段丘にかけての斜面に位置する。南側では平成6年度の試掘調査区によって西盛土が確認されている。北側に隣接する旧野球場建設予定地では、平成6年度の発掘調査によって掘立柱建物跡群が確認されている。

検出した縄文時代の遺構は、土坑36基、埋設土器5基、竪穴住居跡3棟である。うち、土坑8基、埋設土器1基、竪穴住居跡2棟を精査した。また、第14次調査で確認した遺構の内、環状配石墓1基、配石遺構1基、土坑9基、竪穴住居跡1棟も今回精査した。多くの遺構は縄文時代中期と思われるが、埋設土器には縄文時代前期末葉～中期初頭のものが1基含まれる。道路跡の延長は確認できなかった。その他、平安時代の竪穴住居跡1棟、時期不明であるが古代以降と思われる溝跡13条、時期不明の柱穴6基が確認されている。

出土遺物は縄文時代前期末葉から中期末葉の縄文土器・石器など、ダンボール箱199箱分である。中心となる時期は縄文時代中期中葉～末葉で、多くが調査区西側の西盛土から出土している。土器・石器以外の遺物では、縄文時代中期の土偶や、石棒などが出土した。石鏃の出土量は300点余りと特に多い。

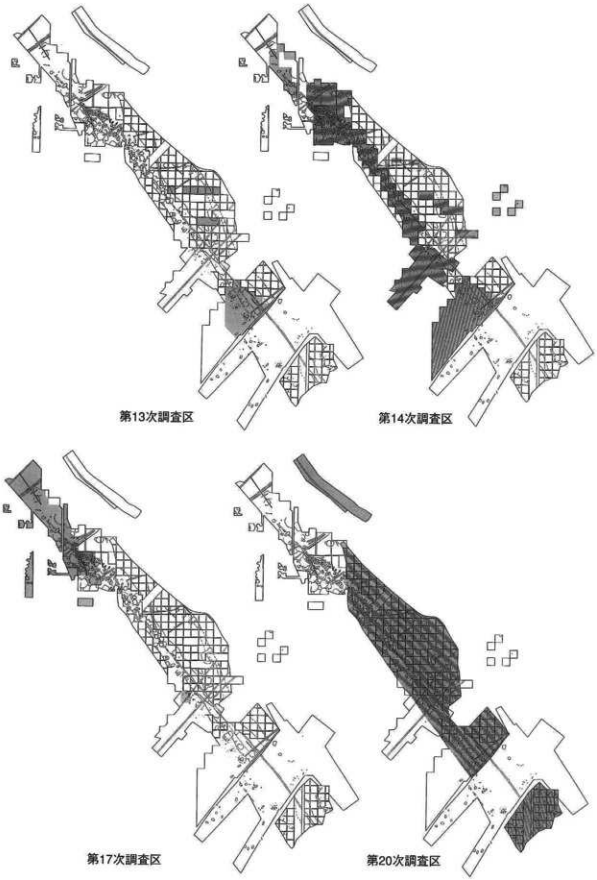
第17次調査の結果、列状墓と西盛土の分布が確認できた。墓域は西盛土の縁辺まで確認し、重複するとしても西盛土最上面から掘り込まれるものではなかったようである。そのほか、西盛土直下では、直径約45cmの柱穴が確認され、直径約1mの日時計型の配石は埋葬施設でないことが判明した。

第20次調査は、平成10・11・12年度の調査（第13・14・17次調査）で検出した墓域と道路跡の範囲及び年代の確認を主な目的に行った。発掘調査は平成13年6月18日から11月22日にかけて実施し、これまでの調査区と重複する1,146㎡を含む4,089㎡を調査した。調査区の南側では、平成6年度の試掘調査において西盛土が、北側に隣接する旧野球場建設予定地では、平成6年度の発掘調査において掘立柱建物跡群が検出されている。また、平成10・11・12年度の調査（第13・14・17次調査）を通じ、土坑墓・配石墓・環状配石墓で構成される墓域が列状に並ぶ様相が明らかとなった。あわせて道路跡が確認されたことから、集落の東側における墓域と同様、両者の関係が注意されていた。

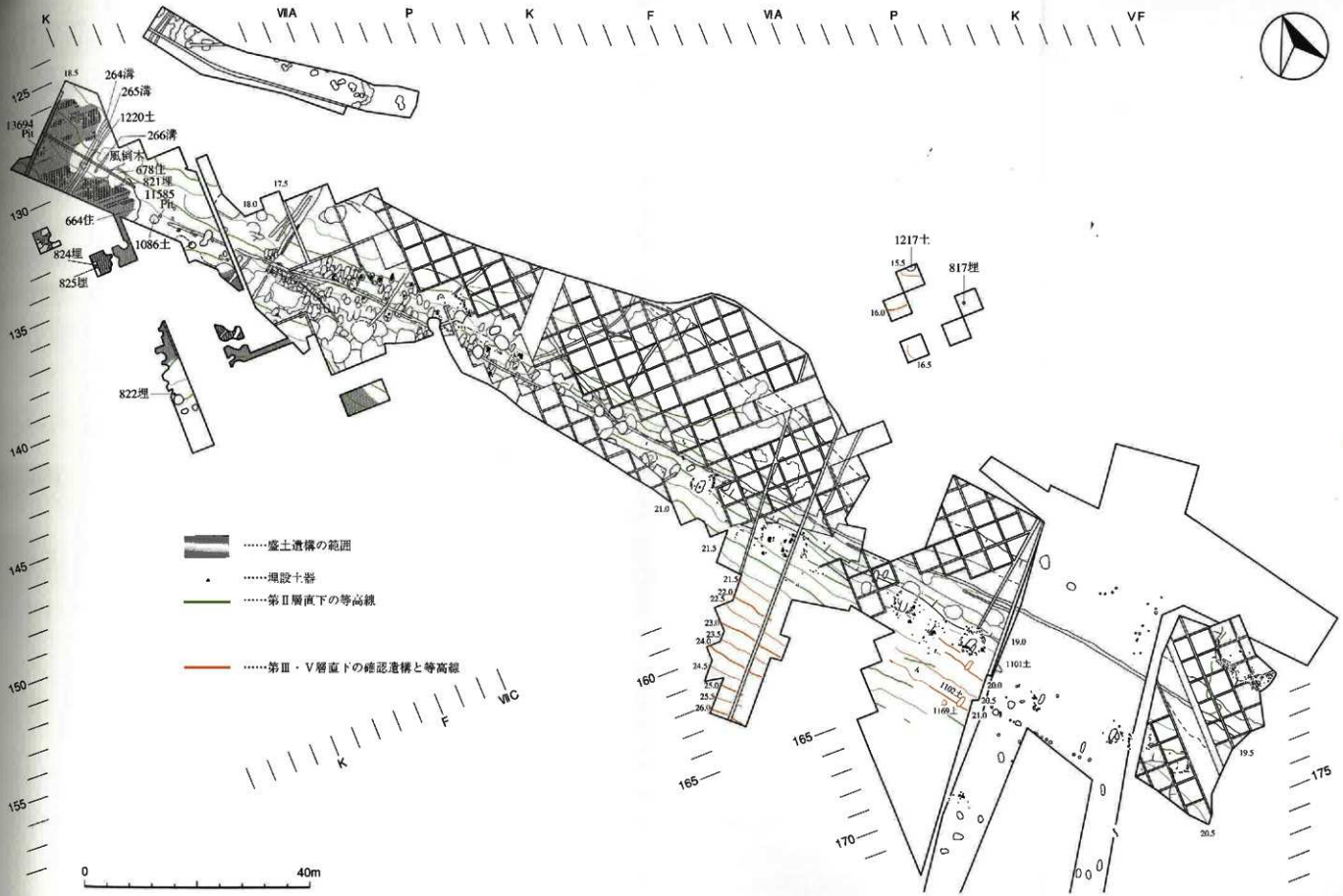
第20次調査で新たに検出した縄文時代の遺構は、道路跡1条、土坑6基、環状配石墓3基、配石遺構2基である。このうち、第14次調査で確認された第17号配石内側の土坑を含め、土坑4基を精査した。その他、平安時代の畠跡、古代以降と考えられる溝跡6条が確認された。出土遺物は縄文時代前期末葉から中期末葉の縄文土器・石器を中心とし、その総数はダンボール箱で73箱である。これ以外に、琥珀や土偶、石棒等も出土している。

調査の結果、道路跡と墓列を含めた集落南側の様相が把握された。道路跡は墓列と並行しながら、墓列とともに約220mにわたり延びている状況が明らかとなった。また、調査区南東側において新たに2基の環状配石墓と道路跡を確認し、両者はさらに南東側へ広がる可能性が高い。さらに、この調査区南東側で、道路跡を挟んで環状配石墓に向かい側で2基の配石遺構（第26・27号配石）を検出した。

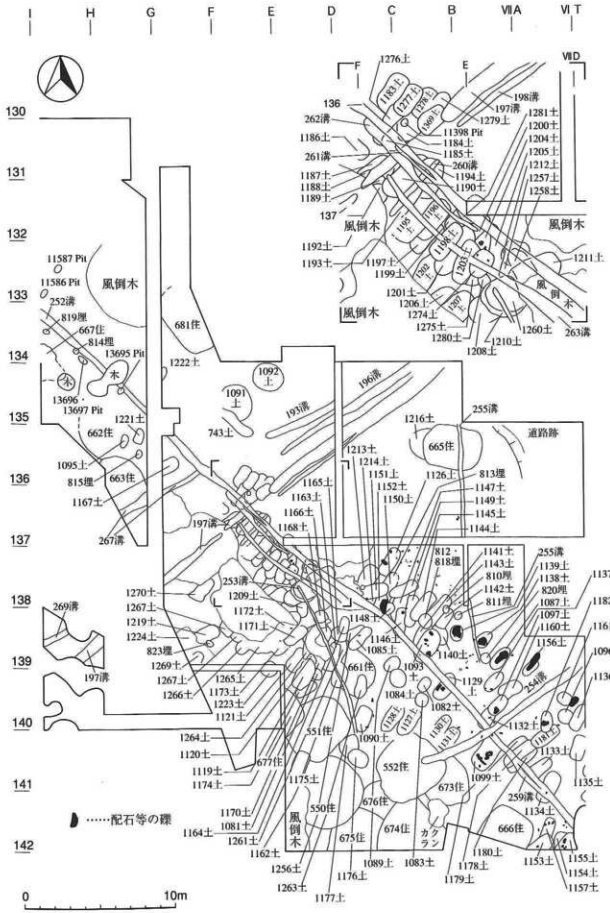
（秦　光次郎、佐々木　雅裕）



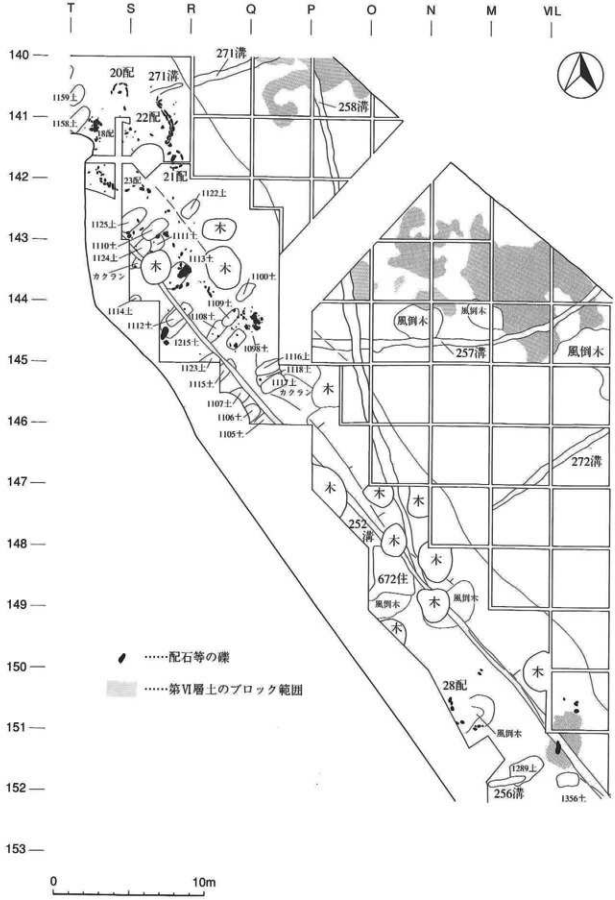
6図　各調査区の範囲


K
VIIA
P
K
F
VIA
P
K
VF
264溝
265溝
1220土
266溝
風倒木
678住
821埋
11585 Pit
664住
1086土
824埋
825埋
822埋
13694 Pit
1217土
817埋
1101土
1160土
1169土
……盛土遺構の範囲
……埋設土器
……第Ⅱ層直下の等高線
……第Ⅲ・Ⅴ層直下の確認遺構と等高線
VIIC
0
40m

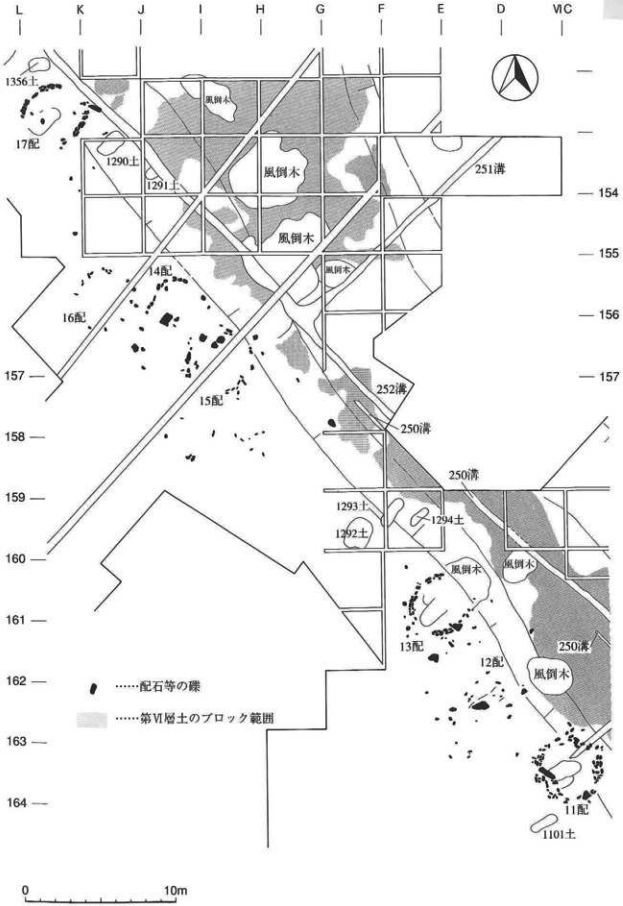
7・8図　調査区全体図


I
H
G
F
E
D
C
B
VIIA
VI T
VIID
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
風倒木
……配石等の礫
0
10m

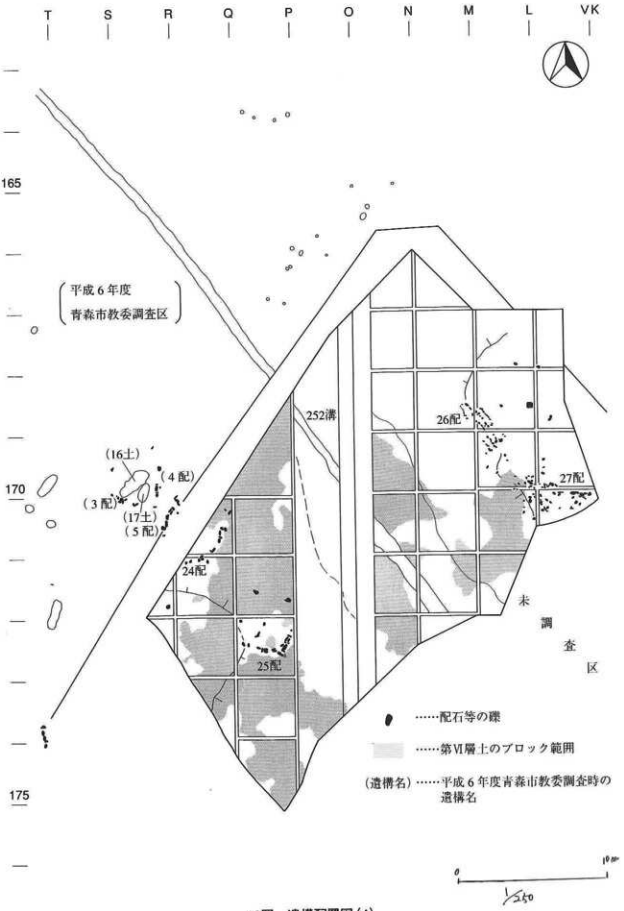
9図　遺構配置図(1)


T
S
R
Q
P
O
N
M
VIL
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
271溝
20配
271溝
1159土
1158土
19配
22配
258溝
23配
21配
1122土
1125土
1110土
1124土
カクラン
1111土
1113土
1100土
1109土
1108土
1112土
1215土
1095土
1116土
1118土
1123土
1115土
1117土
カクラン
1107土
1106土
1105土
風倒木
257溝
風倒木
272溝
252溝
672住
28配
1289土
256溝
1356土
……配石等の礫
……第Ⅵ層土のブロック範囲
0
10m

10図　遺構配置図(2)


L
K
J
I
H
G
F
E
D
VIC
1356土
17配
1290土
1291土
風倒木
風倒木
風倒木
風倒木
251溝
154
155
156
157
14配
16配
15配
252溝
250溝
250溝
158
159
160
161
162
163
164
1293土
1294土
1292土
風倒木
風倒木
13配
12配
250溝
風倒木
11配
1101土
……配石等の礫
……第VI層土のブロック範囲
0
10m

11図　遺構配置図(3)


T
S
R
Q
P
O
N
M
L
VK
165
170
175
平成６年度
青森市教委調査区
252溝
26配
27配
(16土)
(4配)
(3配)
(17土)
(5配)
24配
25配
未
調
査
区
……配石等の礫
……第Ⅵ層土のブロック範囲
(遺構名)……平成６年度青森市教委調査時の遺構名
0
10m
1/250

12図　遺構配置図(4)

第Ⅱ章　検出遺構と遺構内出土遺物

第１節　縄文時代の検出遺構と遺構内出土遺物

１）配石遺構・環状配石墓

調査区の南側を中心に18基確認された。内、環状に礫が配列されるものが10基で、さらに内部に土坑墓が確認されたものは５基である。この土坑墓と環状配石からなる遺構を、本報文中では環状配石墓と呼称する。

これら環状配石墓は、過去に土坑墓として報告したことがある（青森県教委　1999a、2002a）。その後の調査で内部に複数の土坑墓を持つ例が確認され、また、内部の土坑墓の検出を行わなかったものもあるため、便宜上本報文中では配石遺構として番号を付して記述することとした。

第11号配石（13・14・15図、写真７～10・44、口絵２・３）

[位置と確認]　ⅥＢ・Ｃ－163・164に位置する環状配石墓である。第13次調査において第Ⅱ層下位を調査中に配石を確認した。配石は第Ⅲb層上面に構築され、配石上面での標高は19.54～20.40mである。

第14次調査において配石内部の第Ⅲb層を掘り下げたところ、第Ⅴ層上面で３基重複した土坑を確認している。新しい順に土坑墓Ａ、土坑墓Ｂ、土坑墓Ｃと呼称し、精査は土坑墓Ａで行った。

[重複]　道路跡との重複部分で、若干配石がせり出した様な構築層の高まりが見られた。道路跡に伴う掘削時に配石を掘り残したものと見られ、本遺構が古い可能性が高い。

南西側のサブトレンチの底面では、直上の配石と16cm前後のレベル差をもって同様の礫が確認された。礫の配置から、位置・形状下部にも同様の配石が存在するものと思われる。伴う掘り方は見られず、第Ⅲb層の堆積に伴って埋没したものと判断した。

[配石平面形・規模]　長軸５m43cm、短軸４m15cmの範囲で礫が置かれている。張り出し部分を除いた環状の主体部は、内径３m～外径４m70cmのほぼ円形で、概ね直径４mを中心として配列されたものと思われる。使用された礫は総数83個で、配置も密である。礫は長20～40cmのものが多く、50cmを超える大型のものは、南東側と西側の２個のみである。南東の大型の礫は、最大長62cmの板状礫である。西側の柱状の礫は長さ１m25cmに及ぶが、第Ⅰ層堆積後に礫の上面・側面を人為的に露出させた掘削痕跡が検出され、原位置ではないことが判明した。土坑墓Ａ上に第Ⅱ層の落ち込みが見られ、柱状の礫の端部に規模が似ることから、本来ここの立石であった可能性が考えられる。

その他の礫の配列は、礫の長軸の向きに規則性が見られる。礫の長軸を、環に対して平行－直交と交互に向けて置くものである。平行する礫は３個の並列、直行する礫は１個となる組み合わせが多い。確認範囲が少ないが、直下に確認された配石も同様の配置を取るものと思われる。

北側では、礫が環から約１m張り出して配置される箇所がある。また西側と東側では、礫がより密に配置される箇所がある。

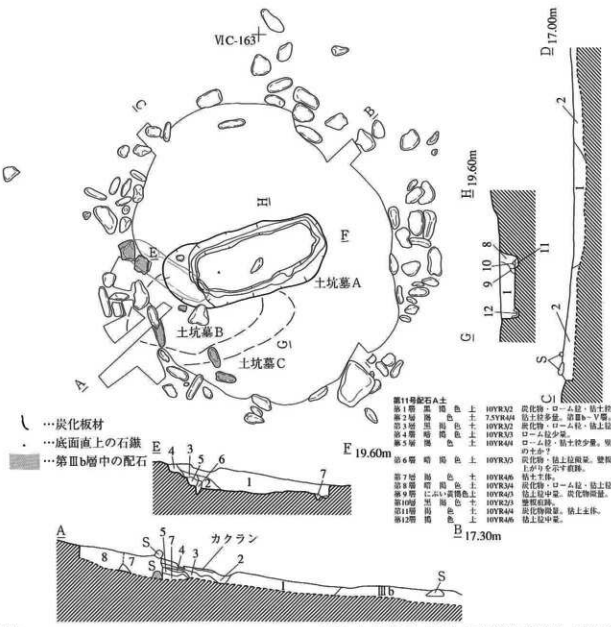
[土坑平面形・規模]　精査した土坑墓Ａは長楕円形の平面形である。規模は開口部の長軸２m20cm、短軸92cm、周溝を除いた底面は長軸164cm、短軸60cmである。長軸方向はＮ－73°－Ｅである。土坑墓Ｂは長軸１m85cm、短軸１m15cmの楕円形で、土坑墓Ａの南西側の壁と重複する。土坑墓Ｃは長軸約

180cmで、土坑墓Bの南東側の壁と重複する。

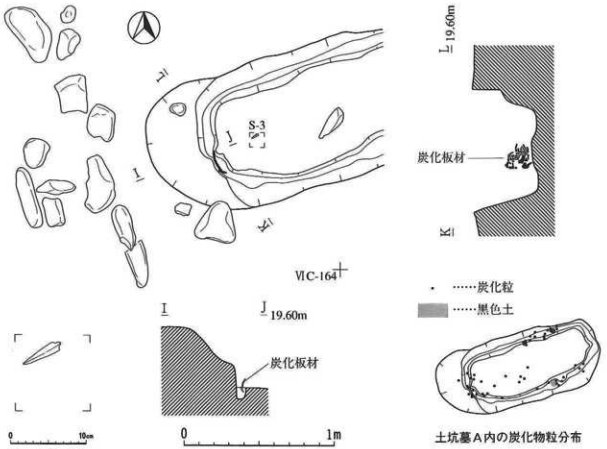
［壁・底面］　土坑墓Aの壁は第Ⅲb・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層を掘り込んで構築され、西壁を除いて垂直に立ち上がる壁である。各壁の残存高は、東壁10cm、西壁41cm、南壁17cm、北壁20cmである。

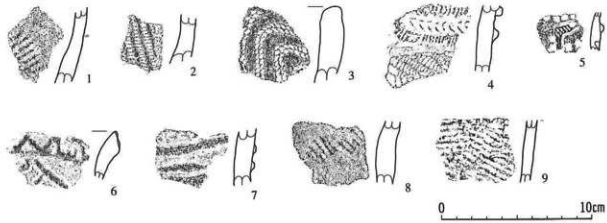
土坑墓Aの底面は第Ⅶ層中に作られる。中央部がわずかに窪む以外は、総じて平坦である。底面には汚れが見られるが、貼り土はなされていない。

壁溝は、底面の壁際に幅10～25cm、深さ４～10cmで、ほぼ途切れなく掘り込まれていた。壁溝の南西



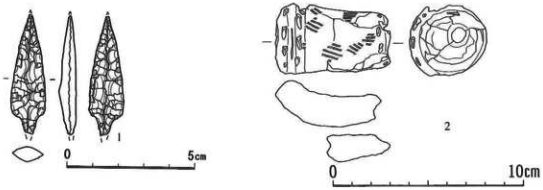
13図　第11号配石





番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	11配土坑A	5層		RL		ミガキ		Ⅲ-5・11	炭化物付着(外面)
2	〃	堆積土	R原絡1押					Ⅱ-5・2	
3	11配	確認面	LR押			ミガキ		Ⅱ-5・2・Ⅱ-1	
4	〃	〃	貼付(L押)、L押	RL(結束第1種?)		〃		Ⅲ-2	
5	〃	〃		貼付(L押)、刺突		〃		Ⅲ-3	
6	〃	〃	貼付	貼付		〃		Ⅲ-4	
7	〃	〃		貼付		〃		Ⅲ-4	
8	〃	〃		RL				Ⅲ-6	
9	〃	〃		LR		ミガキ		Ⅲ-11	

14図　第11号配石・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	11配上坑墓A	底面直上	(47)	13	7	(3.2)	珪質	Ab	S-3　VIB-163	32732

番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	分類	備考	整理番号
2	11配石土坑墓A	直上	38	51	48	35	土製品	有孔	8087

15図　第11号配石出土遺物

部では、縦16cm、横18cm、厚さ1cm弱の炭化板材が、壁溝に埋め込まれ直立した状態で検出されている。土圧による変形や表面の破砕が進み、保存状態が悪いものの、各炭化粒の木目が揃い、全体で板状をなしていることから板材と判断した。炭化材の小口あたる部分を観察したところ、長1cm未満の炭化粒による厚さ約2mmの薄層と、それに挟まれた砂質土のウェハース状の構造が認められた。表面を焦がした板材が使用され、内側の木質部が失われて砂質土が流入した結果であると推測している。壁溝上の堆積土では炭化粒が確認されることが多く、南西側以外でも同様に腰板が存在した可能性が高い。分析の結果、クリ材であることが判明した。

土坑墓Aの壁面観察から、土坑墓Bは5～10cm、土坑墓Cは約15cmの壁高であることがわかった。底面はともに平坦で、壁溝、炭化材等は見られなかった。

[堆積土]　土坑墓A内の堆積土は12層に分層した。黒褐色土主体で、細分されるのは主に西壁から北壁にかけての範囲である。確認面から厚さ5cm単位で堆積土を掘り下げていった結果、確認面下10cm以下で炭化粒を多く検出している。壁溝の直上では特に集中していた。壁溝中には褐色土と暗褐色土が主に堆積するが、南側には一部黒色土が見られる。土坑墓Aの南西壁に現れた断面から、土坑墓Bは黒褐色土、土坑墓Cは上位に黄褐色土、下位に黒褐色土が堆積していた。

土坑墓上を除く配石範囲全体では、配石直下に第Ⅲb層、直上に第Ⅱc層と思われる第Ⅱ層が堆積するが、マウンド等の存在を示す堆積は確認できなかった。

[出土遺物]　土坑墓Aの南西部、底面直上より石鏃が1点、先端部を南西に向けた状態で出土した。土坑墓Aの堆積土からはⅡ群5類、Ⅲ群5～11類の土器片と礫1点が、土坑墓A堆積土上、柱状の礫の直下で貫通孔を持つ土製品が、配石確認面からⅢ－1・2・3・4・6類の土器片と剥片1点、礫4点が出土している。

[時期]　縄文時代中期中葉の第Ⅲb層上に配石が構築される点と、土坑墓A内堆積土出土の土器片、直上の堆積層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

（秦　光次郎、葛城　和穂）

第12号配石（16・17・18図、写真10・42）

[位置と確認]　ⅥC～E－161～163に位置する。配石上面での標高最大値は19.31mである。第13次調査において第Ⅱ層を掘り下げたのち、第Ⅲb層の上面で確認した。第14次調査で配石内部の第Ⅲb層を掘り下げて土坑を確認したことにより、環状配石墓であるとした。

その後の検討の結果、この遺構は2基の環状配石墓の重複であるか、2段階の構築を示すものである可能性が高まった。南側を第12a号配石、北側を第12b号配石として記載する。

[重複]　第12a号配石、第12b号配石の先後関係は不明である。他の遺構との重複は見られなかった。

[配石平面形・規模]　全体で南北8m82cm、東西6m72cmである。2基の重複、または2段階と見た場合、第12a号は主体部の最大径4m20cm、第12b号は主体部の直径4m25cm～64cmで、共に円形配置をとると思われる。礫は、第12a号が20個、第12b号が11個用いられ、疎らに配列される。ともに、環から東側に約1m20cm離れた位置にも礫が置かれる。重複する位置に置かれる礫は特に大きく、長1m16cmの大礫が使用されている。

[土坑平面形・規模]　大礫の直下から1基確認された。長さは約2m40cmで、長軸はN－40°－Eを向く。土坑2基が重複している可能性もあるが、確証は得られなかった。

[堆積土]　土坑墓の確認面では黒褐色土の堆積が見られた。配石内では、構築層である第Ⅲb層の直上に第Ⅱ層が堆積していた。

[出土遺物]　配石の確認面よりⅡ群5類、Ⅲ群4～6・8～11類の土器片と石鏃、剥片が各2点、不定形（U．フレイク）、凹石、石皿・台石類と軽石が各1点と15点の礫、環状石製品の破片が、配石下部の第Ⅲ層より磨石1点と石棒の破片1点、剥片1点、礫8点が出土した。

[時期]　配石の構築層位と直上の堆積土等から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

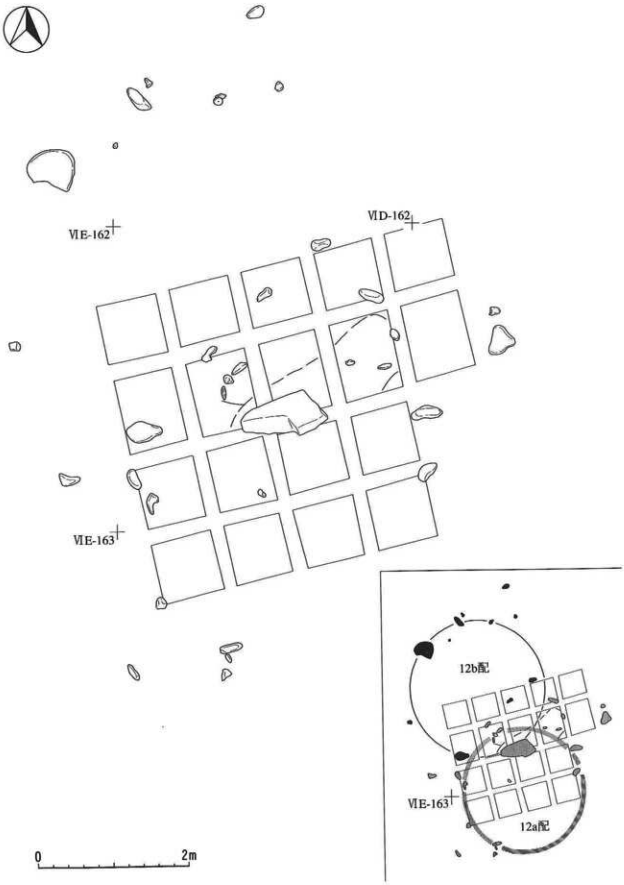
第13号配石（19・20図、写真10・11・42・43）

[位置と確認]　ⅥD・E－160・161に位置する。配石上面での標高は19.14mである。第13次調査で基本層序第Ⅱ層を掘り下げた際、第Ⅲa・Ⅲb層上面で配石部分を確認した。第14次調査でこの配石内部を掘り下げたところ、ほぼ中央から土坑墓が検出されたため環状配石墓であるとした。第11号配石同様本遺構も直下に礫が確認されており、下部にも配石が存在する可能性が高い。

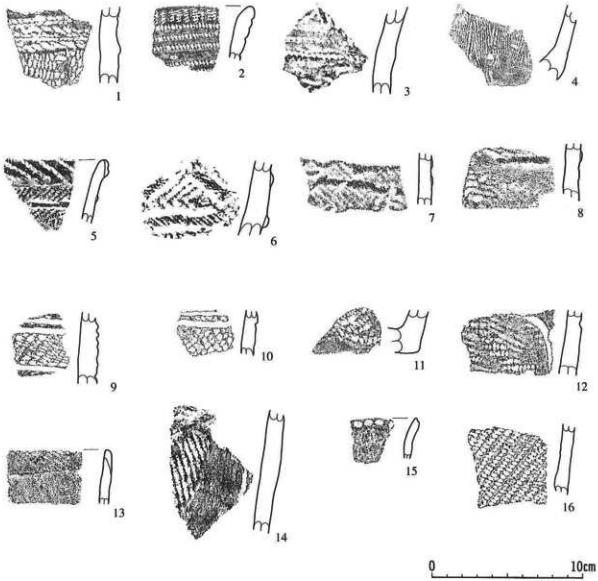
[重複]　北東部分を風倒木によって失っている。

[配石平面形・規模]　第Ⅲ層上面の配石は長軸4m14cm、第Ⅲ層中を含めて4m87cm、短軸が3m08cmの範囲で礫が置かれている。張り出し部分を除いた環状の主体部は、3m12cm～4m28cmの楕円に近い円形で、斜面上方で環が途切れる。概ね直径3m68cmのラインを中心として配列されたものと思われる。北東側は風倒木によって失われ不明であるが、風倒木痕中に礫がほとんど混入してない点や第17号配石の例から見て、斜面下方でも環が途切れていた可能性が高い。長さ20cm前後の川原石状の礫が中心で、使用礫の総数は54個である。

礫の配列は、環に対して2個平行－2個平行－1個直交と、交互に長軸を向けて置くもので、特に南側で顕著である。南側には台石状の板状礫が置かれる。最大長70cmで、他の使用礫に比べ大きさが際立っている。ほか、側縁を上に向けて立つ礫が多いが、個々の堀り方は検出されなかった。

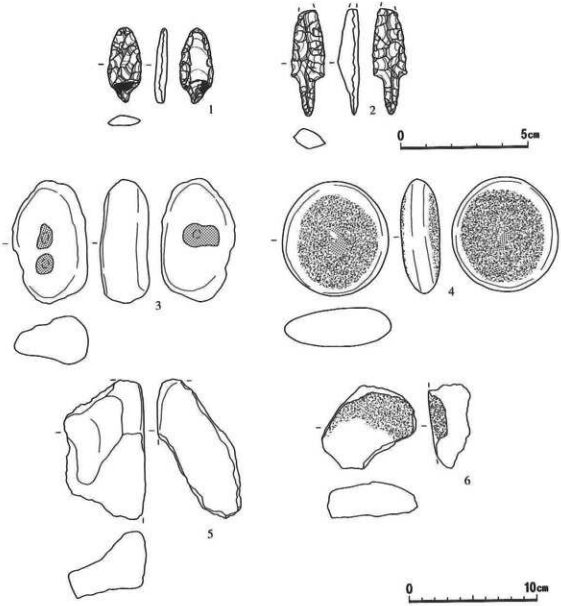


16図　第12号配石

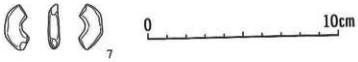


番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	12配	補記画	LR・RL押	LR単絡１		ミガキ		Ⅱ-5-2	
2	〃	〃	RL単絡１押			〃		〃	
3	〃	〃	貼付(刻目)、RR単１押、LR押			〃		Ⅱ-5-2・Ⅱ-1	
4	〃	〃			RL単絡１ａ	〃		Ⅱ-6	
5	〃	〃	貼付(LR押)、LR、貼付			〃		Ⅲ-4	
6	〃	〃		結束Ｉ種(LR-RL)、貼付(LR押)		〃		〃	
7	〃	〃		結束Ｉ種(LR-RL)、貼付		〃		〃	
8	〃	〃		LR、貼付				〃	
9	〃	〃		RL、沈線		ミガキ		Ⅲ-5	
10	〃	〃		RL、沈線		〃		〃	
11	〃	〃			LR	〃		Ⅲ-6	
12	〃	〃		LR、沈線		〃		Ⅲ-9・10	
13	〃	〃	貼付(折り返し状)、RL					〃	
14	〃	〃		磨消(LR、沈線)		ミガキ		Ⅲ-10	
15	〃	〃	刺突(口縁)			〃		Ⅲ-11	
16	〃	〃		RL		〃		〃	北陸系谷起源説；清沢A類

17図　第12号配石出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	12配	確認面	30	13	5	1.9	玉髄	Ab	アスファルト　VIE-163	32733
2	〃	〃	(42)	13	8	(3.5)	珪質	Aa	〃	32734
3	〃	〃	97	58	38	243.1	流	1a	VID-163	90797
4	12配下部	Ⅲb	90	83	30	328.8	安	1c	〃	90196
5	12配	確認面	(110)	(62)	(64)	(252.6)	流	L	〃	90240
6	12配下部	Ⅲb	(66)	(74)	(32)	(127.3)	安	Ma	VIE-162	90795



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
7	12配石	確認面	(24)	(13)	(6)	1	凝灰岩	石製品		7143

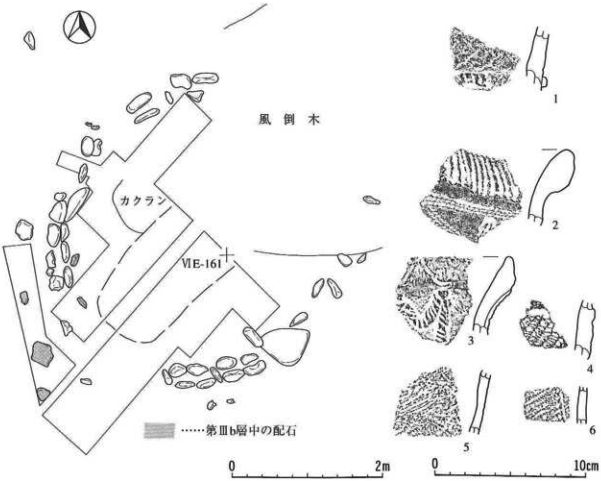
18図　第12号配石出土遺物(2)

[土坑平面形・規模]　残存長軸１m74cm、短軸１m12cmの長楕円形の平面形であったと思われる。長軸方向はN－45°－Eである。

[堆積土]　土坑墓の確認面では、中央に褐色土、壁際に黒褐色土の堆積が見られた。土坑墓中央の褐色土は第Ⅴ・Ⅵ層の混土で、人為堆積と思われる。配石内は、構築層である第Ⅲb層の直上に、第Ⅱ層が堆積していた。

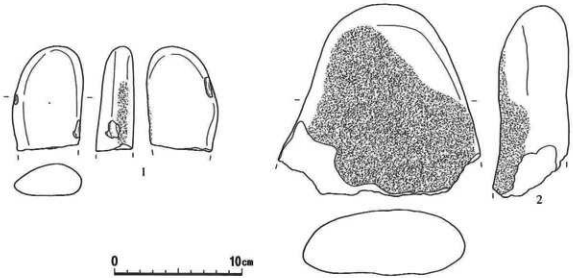
[出土遺物]　確認面からⅢ群１・３～４・６・11類の土器片、磨石１点、石皿・台石類１点、礫１点、土偶と軽石製の石製品が出土した。また、配石内部を掘り下げた際にⅢ群６類の土器片と剥片１点、ミニチュア土器１点が出土した。

[時期]　遺構の構築層位と直上の層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

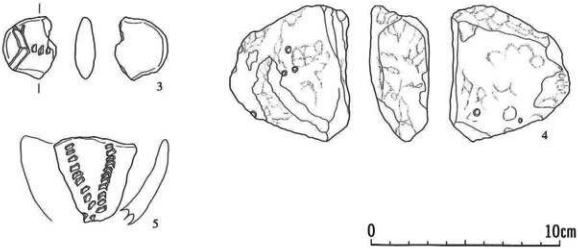


番号	出土地点	出土層位	外面文様				内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半					
1	13配	内部Ⅲa		貼付(L押)、LR					Ⅲ-6	
2	〃	確認面	R単				ミガキ		Ⅲ-1	波状口縁
3	〃	〃	貼付(L押)、L押	貼付(L押)、LR			〃		Ⅲ-3・4	
4	〃	〃		RL、沈線			〃		Ⅲ-5・11	
5	〃	〃		結束第１種(LR・RL)			〃		Ⅲ-6	
6	〃	〃		RL、沈線			〃		Ⅲ-11	

19図　第13号配石・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	13配	確認面	(83)	55	(29)	(170.8)	流	Ic	VIE-161	90212
2	〃	〃	(153)	(158)	(58)	(1540.6)	安	L	VIE-162	90799



番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ	計測値 幅	計測値 厚さ	文様 表面	文様 裏面	分類	備考	整理番号
3	13配石	確認面	(33)	(28)	(11)	無文	無文	上偶	脚部	10800

番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
4	13配	確認面	51	65	31	57.2	凝灰岩	石製品		8082

番号	出土地点	出土層位	外面横様 口縁部	外面横様 胴部上半	外面横様 胴部下半	内面調整	底面	分類	備考	整理番号
5	13配	トレンチ	刺突	刺突	刺突	成形痕		ミニチュア土偶		8051

20図　第13号配石出土遺物

第14号配石（21図、写真43）

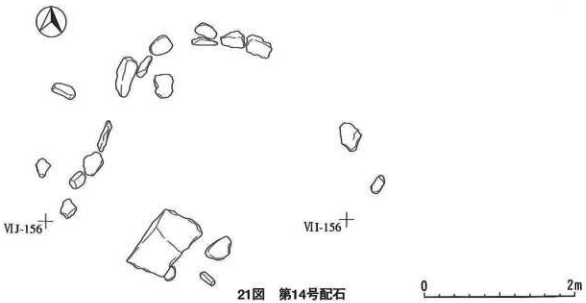
[位置と確認]　Ⅵ H・Ⅰ－155・156に位置する。配石上面での標高は19.53mである。第14次調査で第Ⅱ層の掘削中に、第Ⅲb層上面において部分的に確認した。配石全体が露出したのは第20次調査においてである。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓であると認定した。

[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　東西 3 m74cm、南北 2 m75cmの範囲で、20個の礫が配置されている。円形を意図した配石と思われるが、東側・南側の礫は疎らであり、礫が密な北側・西側から類推しても不正な円形となっている。使用される礫は30cm前後のものが主体であるが、南側では最大長 1 cm 8 cmの板状礫が例外的に使用されている。

[出土遺物]　第20次調査において、配石内部の構築面から、長 1 ～1.4cmの琥珀が 2 点出土した。その他、確認面から礫が 1 点出土している。

[時期]　構築される層位と直上の層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。



21図　第14号配石

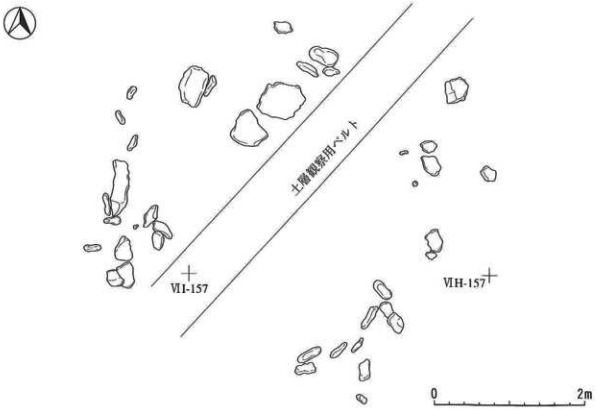
第15号配石（22図、写真11・43）

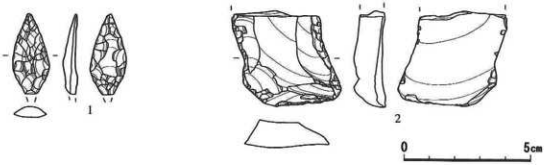
[位置と確認]　Ⅵ H・Ⅰ－156・157に位置する。配石上面での標高は19.12mである。第13次調査で行ったボーリング探査で探知されている。配石全体は、第14次調査で第Ⅱ層を掘り下げた際に確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓であるとした。

[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　配石は長軸 5 m24cm、短軸が 4 m25cmの範囲で礫が置かれている。張り出し部分を除いた環状の主体部は、 2 m76cm～ 5 m06cmの楕円に近い円形で、概ね直径 4 m34cmのラインを中心として配列されたものと思われる。径4.65～5.24mの円形で、斜面の上方の南西側で環が途切れる。主に使用される礫は長さ17～40cmと差があり、特に西側と北側では50cmを超える大礫が使用されている。北側の 3 個は長50～65cmの板状礫である。環に対して縦に長軸を向ける礫はわずかである。

[堆積土]　配石内は、構築層である第Ⅲb層の直上に、第Ⅱ層が堆積しており、他の人為的な土盛り層





番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	15配	確認面	(31)	14	6	(2.8)	珪質	Ab	Ⅶ H-157	100515
2	〃	〃	(37)	(42)	12	(20.8)	〃	Ga	〃	100578

22図　第15号配石・出土遺物

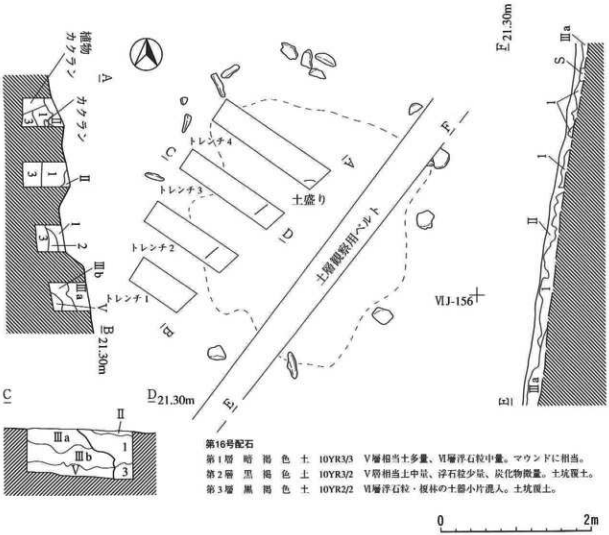
等は識別できなかった。

[出土遺物]　確認面から石鏃とスクレイパー類が出土した。

[時期]　構築される層位と直上の堆積層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第16号配石（23図、写真11～13・43、口絵４）

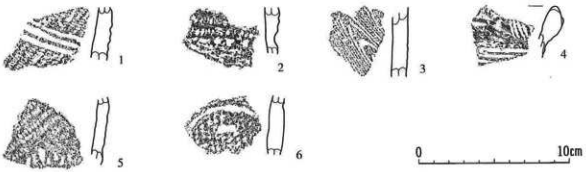
[位置と確認]　Ⅵ J・K－155・156の、北東向き緩斜面上に位置する環状配石墓である。第13次調査でのボーリング棒による探査で探知され、第14次調査において第Ⅱ層の掘削したところ、第Ⅱ層の下位



第16号配石

第1層　暗　褐　色　土　10YR3/3　Ⅴ層相当土多量、Ⅵ層浮石粒中量。マウンドに相当。
第2層　黒　褐　色　土　10YR3/2　Ⅴ層相当土中量、浮石粒少量、炭化物微量。土坑覆土。
第3層　黒　褐　色　土　10YR2/2　Ⅵ層浮石粒・板状の土器小片混入。土坑覆土。

0　2m



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	16配土坑	堆積土		RL、沈線		ミガキ		Ⅲ-5・8	トレンチ3内
2	16配	土盛り	R単節1押、刺突					Ⅲ-5・2	繊維混入
3	〃	〃		R単節1a		ミガキ		Ⅱ-6	繊維混入
4	〃	〃	貼付、L押	沈線				Ⅲ-5	波状口縁
5	〃	〃		結束第1種(LR・RL)				Ⅲ-6	
6	〃	〃		RLR、沈線				Ⅲ-9	

23図　第16号配石・出土遺物

で配石を確認した。内部の土坑は第14次調査で設定した小トレンチで確認され、第17次調査まで精査が継続した。配石は第Ⅲb層の上面に構築され、配石上面での標高は21.21～20.40mである。

[重複]　畠跡より古い。

[配石平面形・規模]　長軸４m35cm、短軸が３m75cmの範囲で礫が置かれている。環状の主体部は３m34cm～４m42cmの楕円に近い円形で、概ね直径３m94cmのラインを中心として配列されたものと思われる。長さ10～36cmの礫が16個使用されている。礫数が少なく配置も疎らであるが、礫の長軸は円弧に対して平行・直交を交互に繰り返して配列される。幾つかの礫は側縁を上に向けて据え付けられるが、個別の掘り方は確認できなかった。

[土坑平面形・規模]　土坑墓の長軸は約２mで、長軸の方向はN－42°－Eである。底面まで精査を行っていないため、詳細については不明である。

[堆積土]　配石内部の第Ⅲ層上面では、土盛りと思われる人為的堆積土の高まりが確認された。第Ⅴ・Ⅵ層の浮石粒が多く含まれるため、周囲の層より色調が明るくなっている。土層観察用ベルトで確認したところ、確認面からの残存高は最大で７cmであった。耕作による攪乱と植物攪乱を受けており、上部の残存状態は不良である。主に土坑墓上から南東側にかけて堆積しており、概ね配石内に収まる。特に土坑墓内では深く落ち込み、約40cmの厚さで堆積する。

また、盛り土直下の第Ⅲ層上面は、周囲より約５～10cm低くなっている。斜面上方の南西側では不自然に落ち込む部分も見られ、盛り土以前に配石内全体を浅く掘り下げていた可能性がある。

[出土遺物]　土盛りの内部からⅡ群５類、Ⅲ群５．６．11類の土器片と剥片１点、礫11点が、トレンチ内の土坑墓堆積土中からは、Ⅲ群５～８類に分類される土器片が出土している。

[時期]　遺構の構築層位と直上の堆積土、土盛りとトレンチ内の出土遺物から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

（秦　光次郎）

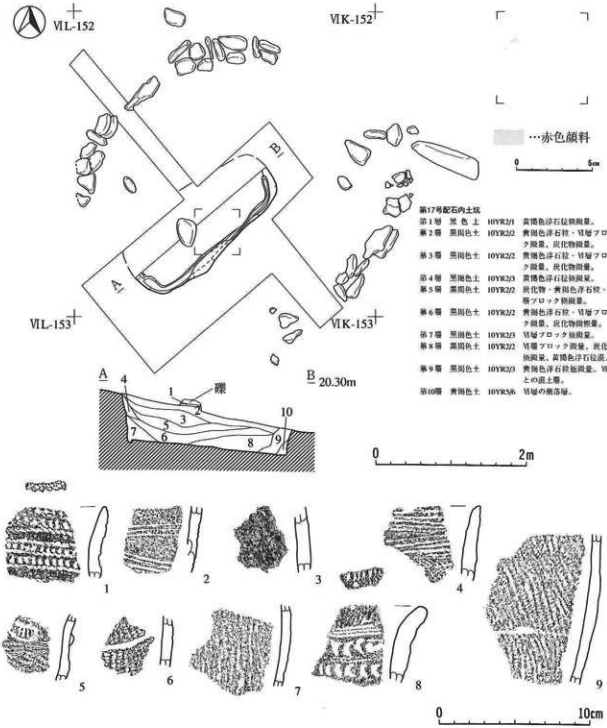
第17号配石（24・25図、写真13・14・43、口絵４・５）

[位置と規模]　Ⅵ（Ⅴ）Ｊ・Ｋ－152、ⅤＫ－153の北東向き緩斜面上に位置し、配石を構成する礫の上面での標高最大値は19.09mである。第14次調査において第Ⅱ層を調査する過程で、第Ⅲa層上面で確認され、次いで第20次調査において配石の北西側で新たに10点の礫を確認した。また、第14次調査において配石内側の中央部南西側寄りで土坑墓を確認し、環状配石墓であることがわかった。第20次調査ではこれを半截して精査を行った。

[重複]　なし。

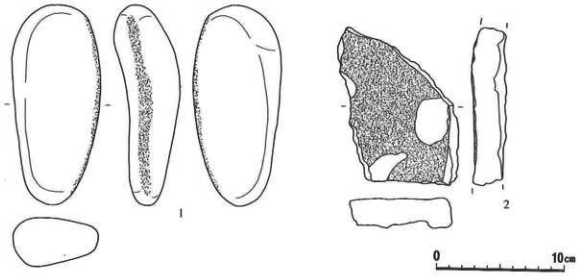
[配石平面形・規模]　径４m～４m49cmの規模で環状に配置される。北東側と南西側の配列に空白が認められ、二対の弧状配列が向き合う。これらは50点の礫で構成され、配列の北東側には長さ94cmの大型の礫を配置する。配置のあり方には環に対して、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる規則性が窺える。特に北西側の配列に顕著なあり方が示されている。また、土坑墓上面の中央に礫１点が据え置かれる。

[土坑平面形・規模]　平面形は長楕円形を呈し、その規模は長軸２m30cm、短軸96cmである。長軸の方位はN－50°－Eを示す。北東側及び南西側の壁はともに急斜度で立ち上がり、その残存する壁高は



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	17配	トレンチ	LR押、刺突			ミガキ		Ⅲ-5-2	確認面した10cm
2	〃	〃		沈線		〃		Ⅲ-5	胎土に多量の長石・石英・赤色粒子含む
3	〃	〃		無文		〃		Ⅲ-11	〃
4	〃	確認面	RL押	結束第1種(LR・RL)		〃		Ⅱ-4・5-1	縄文混入
5	〃	〃	LR押			〃		Ⅲ-2	波状口縁
6	〃	〃	貼付(LR押)	RL(結束第1種?)		〃		Ⅲ-2・3	
7	〃	〃		RL、沈線		〃		Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
8	〃	〃		LR、沈線		〃		Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
9	〃	〃		RL		〃		Ⅲ-11	炭化物付着(外面)

24図　第17号配石・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　考	整理番号
1	17配	確認面	158	69	52	637.3	雲	Ⅰc	Ⅵ K-152	90207
2	〃	〃	(124)	(95)	(27)	(342.0)	凝	L	〃	90238

25図　第17号配石・出土遺物

北東側で36cm、南西側で62cmである。底面は北東側の斜面下方へ約5°の角度で緩やかに傾斜する。また、底面の壁際には幅と深さに差違が認められるものの、幅約6～12cm、深さ約4cmで壁溝が巡る。

[堆積土]　土坑墓内の堆積土は10層に分層された。黒褐色土を主体に凹レンズ状に堆積し、第Ⅵ層を起源とする浮石粒が混入する。配石の内側では、配石が構築される第Ⅲa層の上位に第Ⅱ層が堆積する。

[出土遺物]　土坑墓の確認過程でⅡ群5類、Ⅲ群5・11類の土器片が、確認面からⅢ群2・3・5・11類の土器片と磨石2点、石皿・台石類の破片および剥片と磨製石斧が各1点、礫16点が出土した。また、土坑内からの出土遺物は土器の微細片4点と希薄であるが、底面の中央部から約5cmの範囲に広がる赤色顔料を検出した。

[時期]　本遺構の構築される層位とその上位に堆積する層位との関係、確認面の出土遺物から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

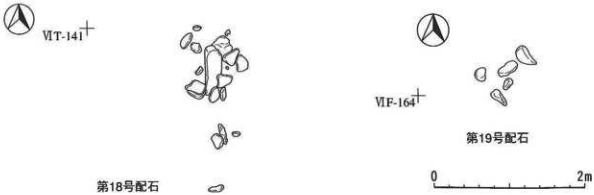
（佐々木　雅裕）

第18号配石（26図、写真14）

[位置と確認]　Ⅵ S－141に位置する。第14次調査において第Ⅱ層の掘削中に立石を確認した。構築面は第Ⅴ層で、配石上面での標高は18.8mである。礫を残しての調査のため、下部に土坑等の掘り込みを確認するに至らなかった。

[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　長さ70cmを超える立石を中心に、16～32cmの礫8個と小礫からなる組石遺構である。南側も含めて、計18個の礫から構成される。立石の頭部は北側に倒れ、地面とは約30度の角度をなしている。



26図　第18・19号配石

［出土遺物］　なし。

［時期］　遺構の構築層位と直上の堆積土から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第19号配石（26図、写真14）

［位置と確認］　ⅥＥ－163・164に位置する。第14次調査において第Ⅱ層を掘り下げ、確認した。配石上面での標高は21.3mである。配石の構築面である第Ⅲａ層上面では、伴う土坑墓は検出されなかった。

［重複］　なし。

［配石平面形・規模］　長さ17～32cmの礫５個が、長軸64cm、短軸48cmのＴ字形に配列される。

［出土遺物］　なし。

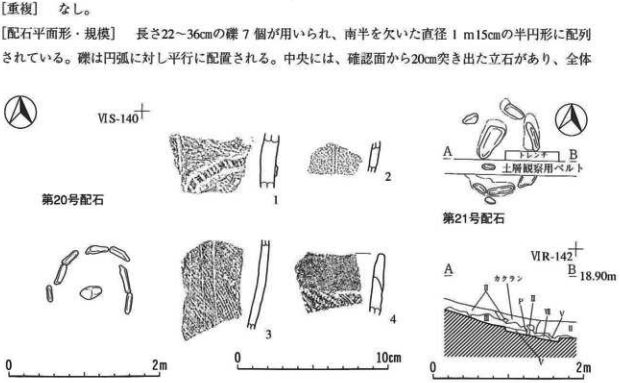
［時期］　遺構の構築層位と直上の堆積土から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第20号配石（27図、写真15・43）

[位置と確認]　ⅥS－140に位置する。配石上面での標高は18.08mである。第14次調査において確認され、確認面・遺構構築面はともに第Ⅴ・Ⅵ層の上面である。下部の土坑墓については検出されなかった。

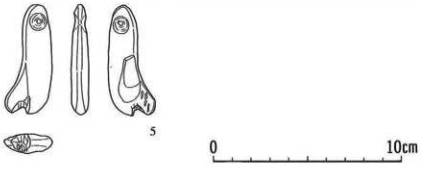
[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　長さ22～36cmの礫７個が用いられ、南半を欠いた直径１m15cmの半円形に配列されている。礫は円弧に対し平行に配置される。中央には、確認面から20cm突き出た立石があり、全体



第21号配石
第Ⅱ層　黒　色　土　10YR1.7/1　Ⅵ層浮石粒・遺物少量。腐食に富む砂質シルト。
第Ⅲ層　黒褐色土　10YR3/2　Ⅵ層浮石粒少量、炭化物微量。配石直埋土。
第Ⅳ層　褐　色　土　10YR4/4　第層粘土少量。粘質シルト。
第Ⅴ層　明黄色土　10YR5/6　粘質シルト。

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	20配	確認面		結束帯Ⅰ種(LR・RL)、貼付(LR)、沈線		ミガキ		Ⅲ-4・5	
2	〃	〃		RL、沈線、刺突		〃		Ⅲ-9	内面炭化物付着
3	〃	〃		RL、沈線		〃		〃	炭化物付着(内面)
4	〃	〃	折返口縁			〃		〃	波状口縁、表皮剥離を内面に



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
5	21配石	確認面	58	25	9	11	凝灰岩	石製垂飾		7140

27図　第20・21号配石・出土遺物

が簡素な日時計型の組石となっている。

[出土遺物]　~~なし~~。確認面からⅢ群4～5，9種の土器片が数点出土した。

[時期]　遺構の構築層位と直上の堆積土から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第21号配石（27図、写真15・43）

[位置と確認]　Ⅵ R－141に位置する。配石上面での標高は18.40mである。第14次調査で第Ⅱ層を掘り下げた際、第Ⅲ層上面において確認した。第17次調査では、礫を残したまま構築面の第Ⅲ・Ⅴ層を掘り下げ、掘り方の有無を調べている。下部に土坑は確認されなかった。

[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　長さ14～39cmの礫 8 個が用いられ、直径 1 m20cmの円形に配列される。中央には長48cmの礫が、長軸を北東に向けて置かれる。他の礫より深く埋め込まれ、北東側の端部がやや上を向くことから、構築当初は直立していたものと考えられる。

第Ⅶ層上面まで掘り下げた結果、個々の礫に伴う掘り方が検出された。礫の大きさに対して掘り方に余裕が無く、礫面が掘り方の開口部と接する箇所が多い。

[堆積土]　礫の掘り方には暗褐色土が堆積していた。

[出土遺物]　確認面からⅢ群４．５類の土器片と、先端部に抉りを持つ石製穿孔垂飾品が出土した。

[時期]　遺構の構築層位と直上の堆積土から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第22号配石（28図、写真16）

[位置と確認]　Ⅵ R－140・141に位置する。第14次調査で第Ⅱ層を掘り下げたのちの、第Ⅴ・Ⅵ層上面で確認した。西側の第Ⅴ・Ⅵ層上面からは伴う土坑が検出されなかった。配石上面での標高は18.0mである。

[重複]　南西部に風倒木痕が接している。

[配石平面形・規模]　長さ10～41cmの礫32個が密に配列された、弧状の配石である。環状配石となる可能性も検討したが、東側、西側では対応する礫は確認されなかった。

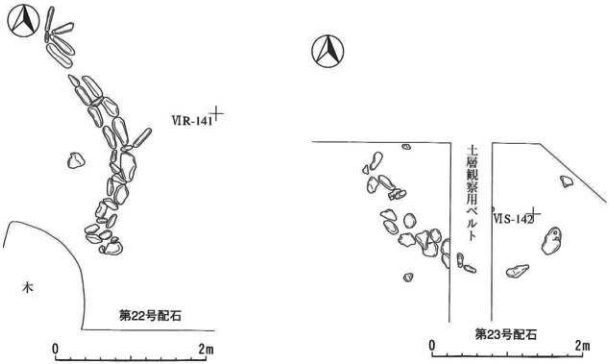
礫の配置は、北側が第13号配石と同様で、環に対して２個平行－２個平行－１個直交と、交互に長軸を向けて置かれるものである。対して南側では、弧から東に張り出して置かれる礫を境として２個平行－１個直交－２個平行が繰り返され、配置法則に相違が見られる。

[出土遺物]　なし。

[時期]　遺構の構築層位と直上の堆積土から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第23号配石（28図、写真16）

[位置と確認]　Ⅵ R・S－141・142に位置する。標高19.1m第14次調査で第Ⅱ層を掘り下げたのちの、第Ⅲ a 層上面で確認した。同調査で配石中心部の第Ⅲ層を掘り下げたが、伴う土坑は確認できなかっ



28図　第22・23号配石

た。

[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　長さ11～37cmの礫26個による弧状の配石である。土層観察用ベルトをボーリング探査するなど、環状配石となる可能性も検討したが、北側で対応する礫は確認されなかった。

礫の長軸の向き方による配置の法則は見出せなかった。

[出土遺物]　なし。

[時期]　遺構の構築層位と直上の堆積土から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

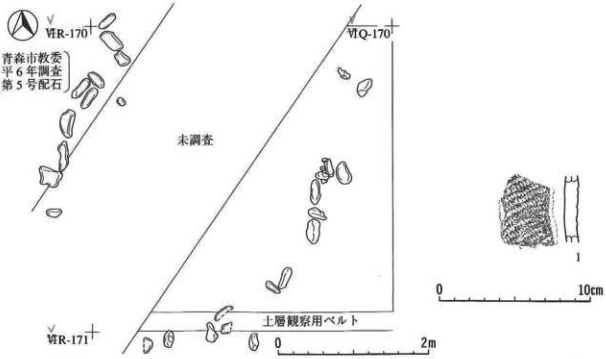
（秦　光次郎）

第24号配石（29図、写真17・43）

[位置と確認]　ＶＱ－170・171、ＶＲ－170の東向き緩斜面上に位置する。配石を構成する礫の上面での標高最大値は20.4mである。本遺構の北西側半分は、平成６年度に青森市教育委員会により、都市計画街路事業（３・４・15号里見丸山線）に伴い発掘調査が実施されている（第５号配石遺構）。このため第20次調査では予めボーリング探査を行い、配石の所在を確認した。その成果を踏まえ、第Ⅱ層から調査する過程で、第Ⅲ層上面において配石遺構の南東側にあたる部分を確認した。なお、土坑墓の確認は行っていないが、形態から判断して環状配石墓であると考えられる。

[重複]　配石の内側に、道路跡上面と同質の黄褐色を呈するロームブロックが一部及ぶ。道路跡上面の広がりとは連続したあり方を示しており、時間差を示す痕跡は認められなかった。

[配石平面形・規模]　径約４ｍの規模で環状に配置される。北東側と南西側に空白が認められ、弧状



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	24配	確認面		RL、沈線		ミガキ		Ⅲ-11	

29図　第24号配石・出土遺物

の配列が向かい合う。平成６年度の調査では11点の礫が、第20次調査では16点の礫が確認されており、合計27点の礫で構成される。その配置のあり方には規則性が認められ、環に対して、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる。

[堆積土]　配石の内側には、配石が構築される第Ⅲ層の上面に第Ⅱc層が堆積しており、土盛りと推察される堆積層は確認されなかった。

[出土遺物]　配石の確認面よりⅢ群10類の土器片が出土している。

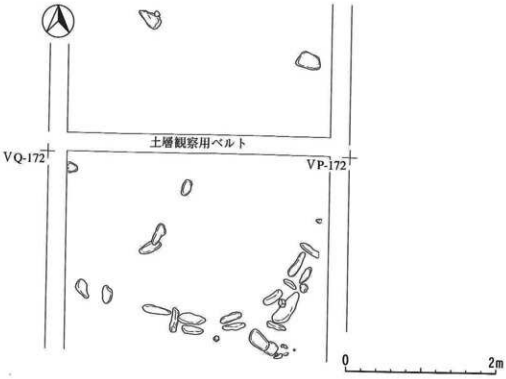
[時期]　本遺構が構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第25号配石（30図、写真17・18）

[位置と確認]　ＶＰ－171・172の東向き緩斜面上に位置する。配石を構成する礫の上面での標高最大値は20.54ｍである。第20次調査において表土を除去した後、予めボーリング探査を行い、配石の所在を確認した。その成果を踏まえて、第Ⅱ層から調査する過程で、第Ⅲ層上面において配石遺構を確認した。なお、土坑墓の確認は行っていないが、形態から判断して環状配石墓であると考えられる。

[重複]　配石の内側に、道路跡上面と同質の黄褐色を呈するロームブロックが一部及ぶ。道路跡上面の広がりとは連続したあり方を示しており、時間差を示す痕跡は認められなかった。

[配石平面形・規模]　径約４.５ｍ程の規模で弧状の配置に留まる。礫の配置のあり方には規則性が認められ、環に対し、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる。この弧状に配置された石組の、環の延長上にあたる北東側には、間隔を隔てて礫１点が据え置かれる。一方、この西側には弧状の配列から外れた位置に礫が点在する状況が認められる。その分布状況に注意すると、同一の配置のあり方



30図　第25号配石

を示すもう一つの弧状の配列が捉えられる。配石遺構が互いに重複している可能性も考えられるが、土坑墓の確認作業と、その配置関係による検証が今後の課題となる。

［堆積土］　配石遺構の内側には、配石が構築される第Ⅲ層の上面に第Ⅱｃ層が堆積する。また、ＶＱ－172付近を中心に第Ⅱc層以下が、僅かに盛り上がる様相が確認され、土盛りの可能性も考えられる。

［出土遺物］　配石遺構の確認面より第Ⅲ群10類の土器片が出土している。なし。

［時期］　本遺構が構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第26号配石（31図、写真19・20）

［位置と確認］　ＶＬ・Ｍ－168・169に位置する。配石を構成する礫の上面での標高最大値は19.12mである。第20次調査において表土を除去した後、予めボーリング探査を行い、配石の所在を確認した。その成果を踏まえて、第Ⅱ層から調査する過程で、第Ⅲa層上面において本遺構を確認した。この地点は、第20次調査区の南東端にあたり、本遺構を含めた２基の配石遺構（第26・27号配石遺構）が隣接して確認された。これらは道路跡を境界に環状配石墓と向かい合い、道路跡の両側に遺構が並ぶ様相が把握された。

［重複］　なし。

［配石平面形・規模］　拳大の礫を列状に配置し、４列の直線的な配列が30～45cmの一定した間隔で並列する関係を示す。この並列する４列の直線的な配列は、規模に長短の差違が認められ、列は北東側から南西側に至り、それぞれ長さ１m75cm、２m60cm、３m68cm、３m75cmである。これらの配置のあり方に連続性が捉えられることから、一つの構造を形成しているものと推察される。その一方で、礫の

配置のあり方をさらに注意すると、直線的な中にも曲線的な配置が認められ、いくつかの長楕円形状の配置が捉えられる。この場合、長さ約90～180㎝の長楕円形状の配列が基本的な単位として抽出され、これらを並列あるいは直列の関係で配置させた構造を示しているとも把握される。この北側から北東側の位置にも礫が点在する状況が認められるが、この東側は攪乱を受けており原形が失われていると考えられるため、関連性を示すものか全体構造の把握には課題が残る。配石下部の構造や墓域との関連性を検証するとともに、今後の調査で検証していく必要性がある。なお、配石を構成する礫の中に凹石１点が認められた。

[堆積土]　本遺構の上位に第Ⅱc層が堆積する。

[出土遺物]　縄文時代中期後葉から末葉の土器を主体に点在する。なお、平成14年度の第23次調査において継続して調査を行っており、その本報告において遺物の詳細について言及する予定である。

[時期]　本遺構の構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第27号配石（31図、写真19・20）

[位置と確認]　道路跡の東側にあたるＶＫ・Ｌ－169・170に位置する。配石を構成する礫の上面での標高最大値は19.30ｍである。第20次調査において表土を除去した後、予めボーリング探査を行い、配石の所在を確認した。その成果を踏まえて、第Ⅱ層から調査する過程で、第Ⅲa層上面において本遺構を確認した。

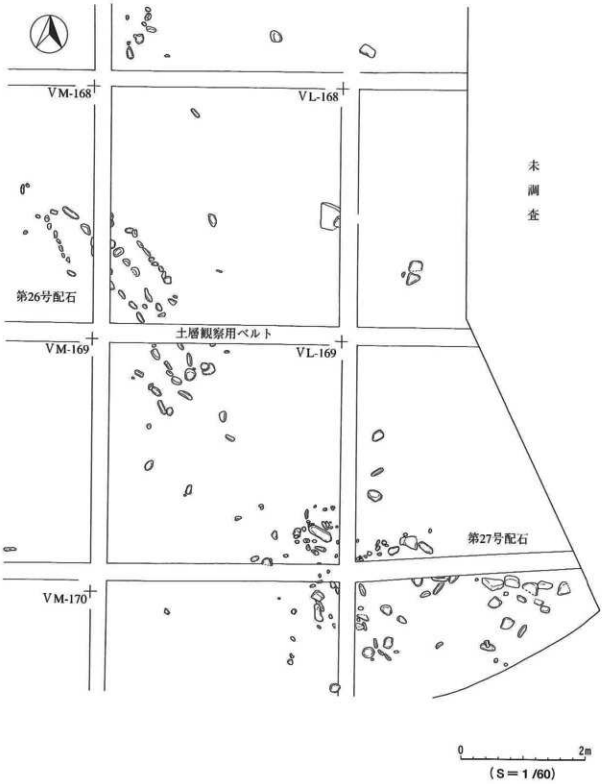
[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　部分的に礫が欠如する箇所が認められるものの、互いの配列が30～50㎝の一定した間隔で並列する関係が認められる。この並列する列状の配列は、検出した部分で約２ｍ80㎝を計測するものの、その南東側は未調査区域であり、規模はこれ以上であると推察される。配列のあり方には視覚的に連続性が認められることから、一つの構造を形成しているものと推察されるが、その一方で、第26号配石遺構と同様に、個別の単位に分節される可能性も考えられる。礫の配置のあり方に注意すると、直線的な中にも曲線的な配置を認めることも可能で、いくつかの長楕円形状の配列が捉えられる。この場合、長さ約90㎝～120㎝の長楕円形状の配列が基本的な単位として抽出され、これらを並列あるいは直列の関係で配置させた構造とも把握される。一方、本遺構の北西端には長さ約40㎝の長楕円形を呈する礫が傾倒しており、立石であった可能性も想起される。さらに、東側では、礫が北東方向と南東方向に放射状に点在する分布状況が認められ、同時に列状の配列を構成する礫に比して大型の礫で構成される点も指摘される。しかし、これらの東側は攪乱を受けており、原形は失われているものと考えられるため、全体構造の把握には課題が残る。配石下部の構造及び墓域との関連性についても、今後の調査で検証していく必要性がある。本遺構と第26号配石遺構との配列のあり方には、互いに一定の方向性が窺え、また構造上の類似点も認められる。

[堆積土]　本遺構の上位に第Ⅱc層が堆積する。

[出土遺物]　縄文時代中期後葉から末葉の土器を主体に点在する。平成14年度の第23次調査において継続して調査を行っており、その本報告において遺物の詳細について言及する予定である。

[時期]　本遺構の構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から、縄文時代中期中葉から後



31図　第26・27号配石

葉の時期に構築されたものと考えられる。

第28号配石（32図、写真20）

[位置と確認]　ⅥM－150の東向き緩斜面上に位置し、配石を構成する礫の上面での標高最大値は19.74mである。第20次調査において第Ⅱ層から調査する過程で確認され、第Ⅲa層上面に礫が弧状に点在する状況が把握された。また、これに近接する第14次調査で確認されていた土坑が、両者の位置関係から、これに伴う可能性が高いと判断されたことから、本遺構は環状配石墓であると考えられる。

[重複]　なし。

[配石平面形・規模]　径約４ｍ程の規模で弧状の配列に留まる。配石を構成する礫は12点と希薄であるものの、その配置には環に対して礫の長軸を平行に据え置くあり方が窺える。また、他の配石遺構と比べ、礫の扁平で面積の広い面を上方に据え置く。

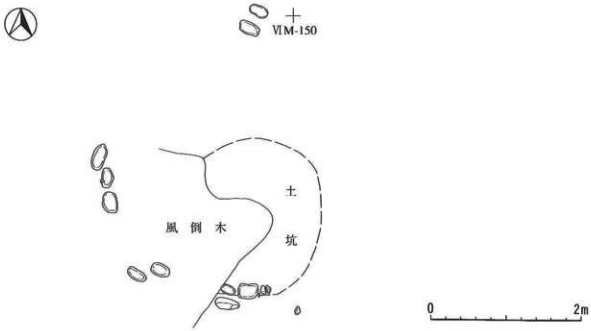
[土坑平面形・規模]　配石の中央南寄りに位置し、平面形が円形状を呈する。その規模は南北軸２ｍ10cmを計測する。

[堆積土]　確認面で観察する限り、土坑の堆積土は黒褐色土を主体とし、第Ⅵ層を起源とする浮石粒を混入する。

[出土遺物]　なし。

[時期]　本遺構が構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

（佐々木　雅裕）



32図　第28号配石

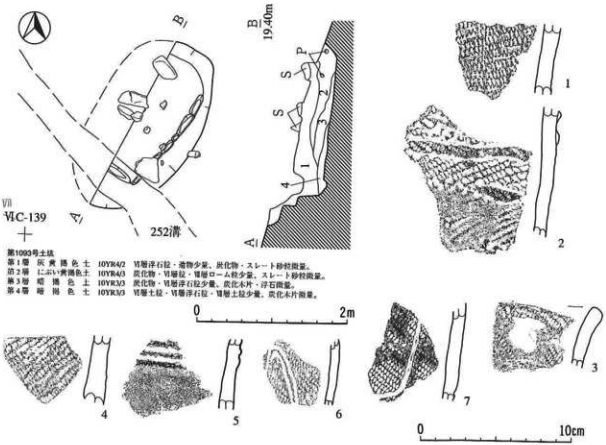
2）土坑・土坑墓

第14次調査で136基、第17次調査で29基、20次調査で７基の計172基を確認している。調査区内の全域に見られるが、道路跡の西側、特に北寄りに集中・重複する。盛土遺構の上面では確認されなかった。検出された土坑の大部分は長楕円形の平面形であり、土坑墓として捉えている。

精査は部分的なものも含め、14次６基、17次15基、20次３基の計24基で行っている。なお、環状配石墓内から検出された土坑墓、平成６年青森市教委確認分は上記の集計には入っていない。以下、精査を行った遺構を中心に記述する。

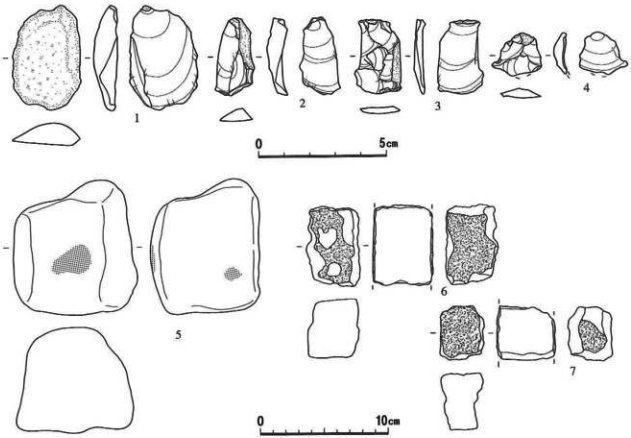
第1093号土坑（33・34図、写真21・44）

［位置と確認］　Ⅶ B －138に位置する。底面の標高は18.64mである。第14次調査において第Ⅱ層を除去後、礫を伴う暗褐色土の落ち込みとして確認した。精査は、同じく第14次調査において東半部のみ行



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1093土	堆積土-30cm			多軸絡	ミガキ		Ⅱ-6	
2	〃	堆積土-20cm		縄文原体1種(LR・RL)、刷目風		〃		Ⅲ-4	
3	〃	堆積土-10cm	LR			〃		Ⅲ-4・5	
4	〃	堆積土-10cm		結束第1種(LR)				Ⅲ-6	
5	〃	堆積土-30cm		除沈線				Ⅲ-7	
6	〃	堆積土-30cm		LR、沈線		ミガキ		Ⅲ-9	
7	〃	焼認面		RL、沈線		〃		Ⅲ-9・10	

33図　第1093号土坑・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	1093土	堆積土	41	26	9	9.9	珪頁	Pc		39984
2	〃	〃	31	15	7	2.7	〃	〃		39981
3	〃	〃	29	18	4	1.7	〃	〃		39982
4	〃	〃	(17)	19	5	(1.0)	〃	〃		39987
5	〃	〃	106	96	85	1197.4	安	1 b		39967
6	〃	確認面	(63)	(41)	(47)	(140.3)	凝	L		90985
7	〃	〃	(43)	(34)	(45)	(66.8)	安	〃		91014

34図　第1093号土坑出土遺物

っている。

［重複］　第252号溝より古く、第1140・1141号土坑より新しい。

［平面形・規模］　開口部は長軸2m45cm、短軸1m40cmの楕円形で、長軸の方位はN－27°－Eをとる。確認面で長9～47cmの礫が7個確認されている。

［壁・底面］　壁は第Ⅶ層を掘り込んでつくられ、若干外傾しながら直線的に立ちあがる。各壁の残存高は北壁27cm、東壁46cm、南壁72cmである。

底面は第Ⅶ層中に平坦につくられ、全体が北東方向に約6°傾斜している。壁際の底面では深さ2～5cm、幅6～12cmの壁溝が検出された。南壁際で35cm以上、東壁際で長さ10cm～30cmの浅い溝が連続したものである。北壁際では確認されなかった。

［堆積土］　堆積土は４層に分層した。上層の１・２層は色調が明るく、第Ⅲ層に類似した土質である。下層の３・４層は暗い色調で、第Ⅵ層土の混入が目立つ。各層ともに人為堆積であると考えられる。

［出土遺物］　堆積土下位ではⅡ群６類、Ⅲ群７・９類の土器片と敲石１点、剥片２点、礫10点が、堆積土中～上ではⅢ群４～６類と剥片９点、不定形１点、礫７点が、堆積土から剥片１点と礫３点が、確認面からはⅢ群９・10類の土器片と石皿類の破片２点、剥片１点、礫６点が出土した。

［時期］　堆積土下位の遺物から、縄文時代中期後葉の最花式期に近い時期と考えられる。

第1095号土坑（35～37図、写真21・22・44）

［位置と確認］　ⅦＧ－135に位置する。底面の標高は19.95ｍである。第14次調査において第Ⅱ層を除去後、楕円形の黒褐色土の落ち込みを確認し、精査も行っている。精査中に２基の土坑墓の重複である事が判明したため、古い方を第1215号土坑としている。第14次調査で精査を行い、完掘している。

［重複］　第662号住居跡との重複関係は不明だが、出土遺物からみて本遺構が古い。

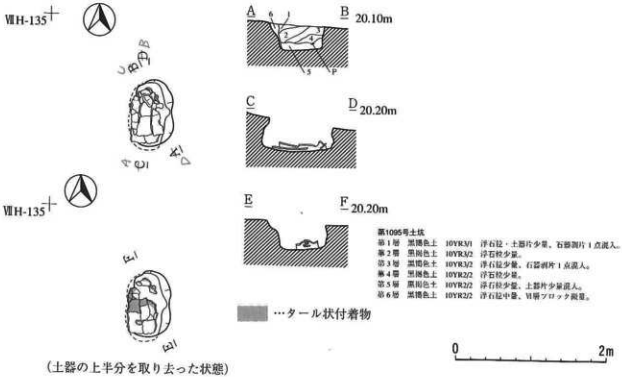
［平面形・規模］　開口部は長軸87cm、短軸50cmの楕円形で、長軸の方位はほぼ座標北をとる。

［壁・底面］　壁は第Ⅴ層から掘り込まれる。東壁を除いては内傾し、若干袋状に近い断面形となる。各壁の残存高は東壁34cm、南壁39cm、北壁27cmである。底面は全体が中央にかけて緩く落ち込む。

［堆積土］　黒褐色土主体の堆積土で、５層に分層した。第Ⅵ層の粒が多いことを除いて第Ⅲb層に似た土質である。第Ⅲ・Ⅴ層の土塊が斑状に混入することから、人為堆積による埋没と考えられる。

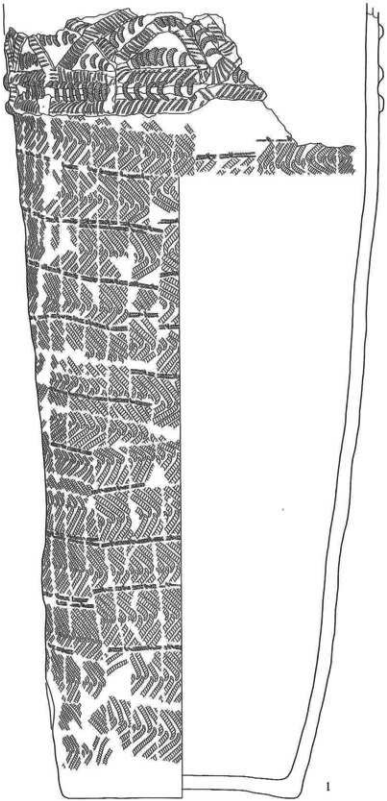
［出土遺物］　底面から、内部に磨石１点の入ったⅢ群２類が横位で出土し、その他から剥片２点と礫片１点が出土した。

［時期］　底面出土の個体土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層ｂ式期である。



（土器の上半分を取り去った状態）

35図　第1095号土坑

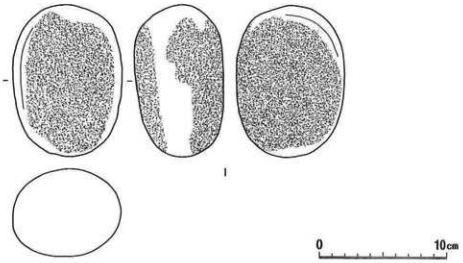


(S＝1/3)

0　10cm

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1095土	5層	刻付(LR)、L押(馬蹄状)	結束第1種(LR・RL)	結束第1種	ミガキ	ミガキ	甕-2	炭化物(胴中位内面)

36図　第1095号土坑出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	1095上	底面	120	84	70	950.4	流	Ⅰc		90852

37図　第1095号土坑出土遺物(2)

第1101号土坑（38・39図、写真22・44）

[位置と確認]　ⅥC－164に位置する。底面の標高は19.8mである。第14次調査において第Ⅲb層を除去後、楕円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。第14次調査においては堆積土を半割し、南半部の精査も行っている。

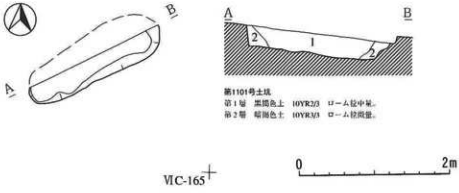
[重複]　見られなかった。

[平面形・規模]　開口部は長軸1m90cm、短軸60cmの長楕円形で、長軸の方位はN－64°－Eをとる。

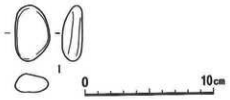
[壁・底面]　壁は第Ⅴ・Ⅵ層中につくられ、西壁を除いては若干外傾する。各壁の残存高は北東壁22m、南東壁19cm、南西壁27cmである。

底面は第Ⅵ層中につくられ、中心軸にそって樋状に局面を形成するために壁との境界が明瞭ではない。底面全体が北東方向に約7°傾斜している。

[堆積土]　堆積土は2層に分層した。黒褐色土主体で、直上の第Ⅲb層に類似した土質である。



38図　第1101号土坑



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	1101上	堆積土	44	27	15	24.5	流	W		90758

39図　第1101号土坑出土遺物

［出土遺物］　底面直上から石鏃が1点、堆積土から土器の微細片と礫片2点、剥片1点が出土した。

［時期］　堆積土から縄文時代中期と考えられる。

第1103号土坑（40図、写真22）

［位置と確認］　Ⅵ C・D－166に位置する。底面の標高は20.86mである。第14次調査で土層断面観察用の壁面を清掃中、壁際において楕円形の暗褐色土の落ち込みを確認した。また、第14次調査では堆積土を半割して精査を行っている。

［重複］　見られなかった。

［平面形・規模］　開口部は長軸1m74cmの長楕円形で、長軸の方位はN－50°－Eをとる。

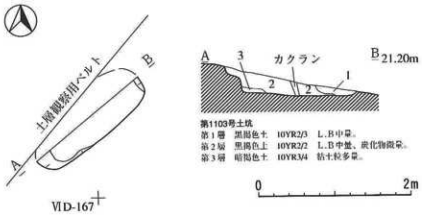
［壁・底面］　土層観察用壁面を観察したところ、壁は第Ⅲb層中から掘り込まれていた。東西の壁は外傾し、南壁が直線的に立ち上がる。各壁の残存高は北東壁5m、南東壁12.5cm、南西壁27cmである。

底面は第Ⅵ層中に平坦につくられ、傾斜がほとんどみられない。

［堆積土］　堆積土は3層に分層した。黒褐色土主体で、直上に堆積する第Ⅲb層に類似した土質である。なお本土坑では、底面直上土を採集しての脂肪酸分析を行っている。

［出土遺物］　なし。

［時期］　層位関係から、縄文時代中期初頭～中葉の間と考えられる。



40図　第1103号土坑

第1112号土坑（41図、写真22・23・44）

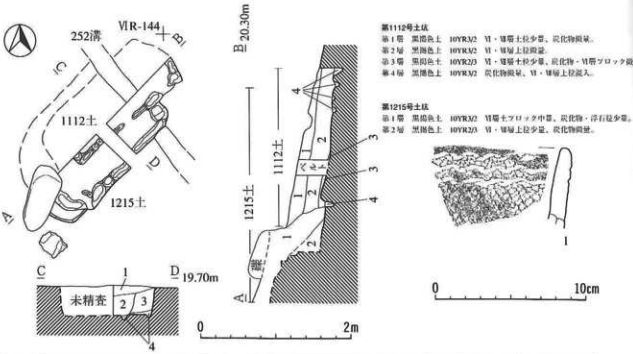
[位置と確認]　Ⅵ Q・R－144に位置する。底面の標高は19.33mである。第14次調査で第Ⅱ層を除去後、黒褐色土の落ち込みを確認した。同調査で半割した結果、２基の土坑墓の重複である事が判明し、古い方を第1215号土坑とした。

[重複]　第1215号土坑より新しく、第252号溝より古い。

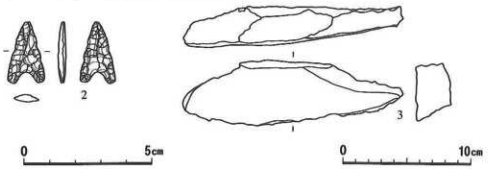
[平面形・規模]　開口部は長軸2m10cmで、平面形は隅丸長方形に近い。長軸の方位はN－45°－Eをとる。

[壁・底面]　壁は東壁のみ確認している。第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層を垂直に掘り込んでつくられ、各壁の残存高は東壁で38m、断面に現れた西壁で40cmである。

底面は第Ⅶ層中につくられ、全体が北東方向に約7.5°傾斜している。底面の壁際には幅７～16cm、



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1112土	確認面	RLR、LR結回	RLR		ミガキ		Ⅱ-2	須恵器入、炭化物(米・小麦)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
2	1112土	埋積土	24	14	3	0.8	珪質	Af		32731
3	〃	確認面	52	172	32	245.8	安	W		90742

41図　第1112号土坑・出土遺物

深さ13～22cmの壁溝が巡っている。壁溝の掘り方は起伏に富み、長さ12～20cmの小ピットが連結したような形状となっている。また、底面のほぼ全体、壁溝の内側に至るまで、暗褐色土を混入した第Ⅶ層が貼られている。

[堆積土]　堆積土は２層に分層した。第Ⅲｂ層に似た黒褐色土を主体とする土層である。第Ⅵ・Ⅶ層の粒やブロックが不均一に混入することから、人為堆積であると考えられる。

[出土遺物]　堆積土中位より石鏃が１点、確認面からⅡ群１類の土器片と礫片２点が出土した。

[時期]　層位関係から、縄文時代中期中葉か、後葉と考えられる。

第1119号土坑（42・43図、写真23・44）

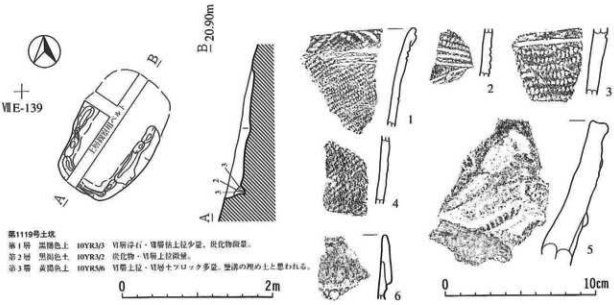
[位置と確認]　ⅦＤ－138・139に位置する。底面の標高は20.0mである。第14次調査で第Ⅲ層を除去中、暗褐色土のプランを確認し、第17次調査で精査を行っている。

[重複]　第1081・1120・1174号土坑より新しい。

[平面形・規模]　開口部は長軸1m70cm、短軸1m15cmで、平面形は隅丸長方形に近い。長軸の方位はＮ－35°－Ｅをとる。

[壁・底面]　壁は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられている。各壁の残存高は、東壁15cm、南壁12m、西壁12mである。北壁は検出できなかった。

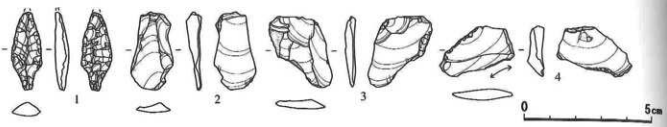
底面は第Ⅵ・Ⅶ層中につくられ、全体が北東方向に約７°傾斜している。底面の南半は、第Ⅶ層の土壌による貼り土がなされている。底面の壁際では、幅８～24cm、深さ３～12cmの壁溝が巡る。短い溝と



第1119号土坑
第１層　黒褐色土　10YR3/3　Ⅵ層浮石・埋層粘土位少量。炭化物微量。
第２層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物・Ⅵ層土粒微量。
第３層　黄褐色土　10YR5/6　Ⅵ層土位・Ⅵ層土ブロック多量。壁溝の埋め土と思われる。

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1119上	堆積土	貼付(LR押)	LR、沈線		ミガキ		Ⅲ-5	
2	〃	〃		RL、沈線		〃		〃	炭化物付着(内面)
3	〃	〃		RL、沈線		〃		Ⅲ-5・11	
4	〃	〃		L		〃		Ⅲ-6	
5	〃	確認面	貼付(刻み)、貫通孔			〃		Ⅲ-3	波状口縁
6	〃	〃	折り返し口縁	円形刺突		〃		Ⅲ-9	

42図　第1119号土坑・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	1119土	堆積土	(31)	12	5	(2.0)	珪質	Ab	S-9	102046
2	〃	〃	31	16	6	1.7	〃	Pc	S-5	102058
3	〃	〃	28	25	4	2.0	〃	Gb	S-4	102057
4	〃	〃	20	30	6	2.2	〃	Ga	S-8	102060

43図　第1119号土坑出土遺物

小ピットが、コの字型に連結したような平面形である。また、壁溝の堆積土上面では、幅2cmの暗褐色土帯が検出されている。この暗褐色土帯の直上では貼り土が見られなかった。

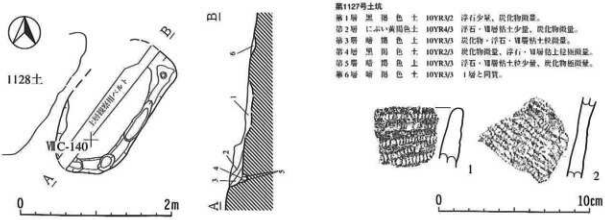
[堆積土]　堆積土は3層に分層した。暗褐色土主体の土層で、第Ⅵ・Ⅶ層土の粒・ブロックを混入することから、人為堆積の可能性が高い。壁溝中の堆積土は、縦方向に大きく3つに分かれる。中央の暗褐色土は、壁溝の確認面から底面まで2cm幅で堆積する。内側と外側の堆積土は第Ⅵ・Ⅶ層土粒を多く混入する。板状の埋設物と、根固めの埋め土に対応するものと考えられる。

[出土遺物]　堆積土からⅢ群5・6類の土器片、石鏃1点、不定形石器2点と剥片8点が、確認面から礫2点が出土した。

[時期]　堆積土出土の土器片から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期に近い時期と考えられる。

第1127号土坑（44図、写真23・44）

[位置と確認]　ⅦB－139・140に位置する。底面の標高は19.74mである。第14次調査中、第Ⅵ層上面



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備　考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1127土	堆積土	R単節1押			ミガキ		Ⅱ-5-2	
2	〃	〃		RL		〃		Ⅲ-6	

44図　第1127号土坑・出土遺物

で暗褐色土のプランを確認した。翌年の第17次調査で精査を行っている。

[重複]　第552号住居跡、第1225号土坑より新しく、第1128土より古い。

[平面形・規模]　開口部は長軸1m97cm、短軸1m05cmで、平面形は不整な楕円形である。長軸の方位はN－39°－Eをとる。

[壁・底面]　壁は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられている。北壁は確認できなかった。各壁の残存高は北東壁5m、南東壁5cm、南西壁14mである。

底面は第Ⅶ層中につくられ、南半は第Ⅶ層と黒褐色土の混土が貼られ、底面全体は北東方向に約5°傾斜する。底面の北東・南東の壁際では、幅12～34cm、深さ9～19cmの壁溝が検出された。壁溝の底面は、深さ5～10cmの小ピットが20～30cmの間隔で形成されていた。

[堆積土]　堆積土は3層に分層した。堆積土の残存が少ないが、暗褐色土主体の土層といえる。壁溝中の堆積土は、中に挟まれる幅3cmの暗褐色土を除いて第Ⅶ層の粒を比較的多く混入する。板状の埋設物と、根固めの埋め土に対応するものと考えられる。

[出土遺物]　堆積土からⅡ群5類～Ⅲ群1類、Ⅲ群6類の土器片と剥片1点が出土した。

[時期]　堆積土出土の土器片から、縄文時代中期前半と考えられる。

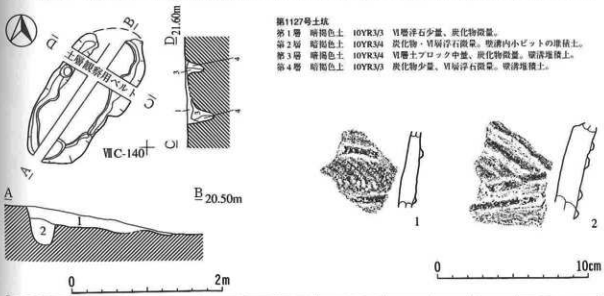
第1128号土坑（45図、写真23・44）

[位置と確認]　ⅦC－139・140に位置する。底面の標高は19.73mである。第14次調査において、第Ⅵ層上面で暗褐色土のプランを確認した。翌年の第17次調査で精査を行っている。

[重複]　第1127号土坑より新しい。

[平面形・規模]　開口部は1m94cm、短軸90cmで、平面形は楕円形である。長軸の方位はN－35°－Eをとる。

[壁・底面]　壁は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられている。各壁の残存高は北東壁2cm、北西壁4cm、



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1128上	堆積土		沿底面1帯(RL・LR)、貼付				Ⅲ-4	
2	〃	確認面		貼付		ミガキ		Ⅲ-6	

45図　第1128号土坑・出土遺物

南東壁13cm、南西壁16cmである。

底面は第Ⅵ・Ⅶ層中に起伏を持たずにつくられ、南半には第Ⅶ層土が貼り付けられる。底面全体は北東方向に約5°傾斜する。南側を除く底面の壁際では幅7～22cm、深さ22～41.8cmの壁溝が巡っていた。壁溝内には、2ヶ所で小ピットが見られる。南西側のものは長60cm以上の大きさで、上面は貼り土に覆われていた。

[堆積土]　堆積土は4層に分層した。暗褐色土主体の土層である。壁溝中の堆積土は外側・内側の2層に分かれる。内側は第Ⅶ層の粒・ブロックを多く混入し、人為的な埋め土であったと考えられる。

[出土遺物]　堆積土からⅢ群4類の土器片と剥片が1点、壁溝内から剥片が1点出土した。

[時期]　堆積土出土の土器片から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期に近い時期と考えられる。

第1184号土坑（46・47図、写真24・44）

[位置と確認]　ⅦE－136に位置する。底面の標高は18.64mである。第17次調査において、第1185号土坑の精査中に確認した。南半部のみ精査を行っている。

[重複]　第1185・1277～1279号土坑、第13698号ピットより古い。

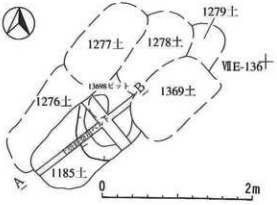
[平面形・規模]　開口部は長軸1m、短軸85cmで、平面形は楕円形と推定される。

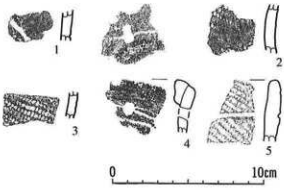
[壁・底面]　壁は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられる。南壁の残存高は18cmである。底面は第Ⅵ・Ⅶ層中に起伏を持って作られ、壁溝、貼り土は確認されなかった。

[堆積土]　にぶい黄褐色土主体の堆積土である。重複する他の遺構に比べ、若干色調が明るい。

[出土遺物]　堆積土からⅢ群11類の土器片と敲石、礫、軽石と不定形石器が各1点、確認面から敲石が1点出土した。

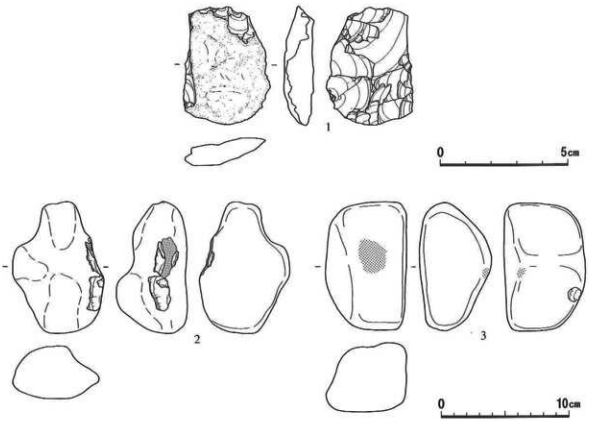
[時期]　堆積土出土の土器片と重複関係から、縄文時代中期末葉と考えられる。





番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1184土	堆積土		沈線		ミガキ		Ⅲ-11	
2	〃	〃		RL		〃		〃	
3	〃	〃		LR				〃	炭化物付着(外面)
4	〃	確認面	沈線			ミガキ		Ⅲ-10	敲石(内面)、剥形石。炭化物付着
5	〃	〃		LR、沈線		〃		〃	

46図　第1184号土坑・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	1184土	堆積土	47	34	12	20.1	珪頁	Gb		99881
2	〃	確認面	103	70	55	398.5	チャート	Ib		90643
3	1184・1185土	〃	101	63	57	390.7	安	〃	第1185土坑の可能性有	102372

47図　第1184・1185号土坑出土遺物

第1185号土坑（48図、写真24・44・45）

［位置と確認］　Ⅶ E－136に位置する。底面の標高は18.77mである。第17次調査において、第Ⅶ層上の暗褐色土の落ち込みとして確認した。

［重複］　第1184・1276号土坑より新しく、第1277～1279・1369号土坑、第13698号ピットより古い。

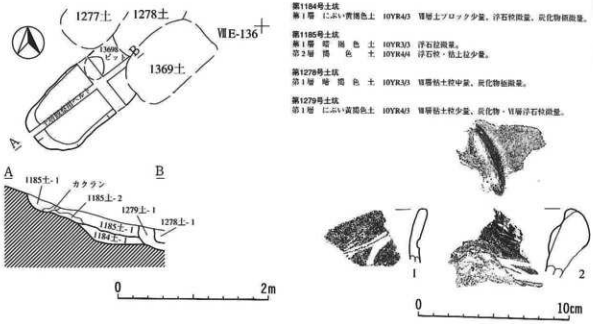
［平面形・規模］　開口部は長軸1m50cm以上、短軸84cm、平面形は楕円形と推定される。長軸の方位はN－52°－Eをとる。

［壁・底面］　壁は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられる。全体的に起伏があり、底面との境界も不明瞭である。壁の北東側は検出できなかった。各壁の残存高は南西壁14cm、南東壁5cm、北西壁11cmである。底面は第Ⅵ・Ⅶ層中につくられ、壁面同様に起伏が見られる。壁溝、貼り土は確認されなかった。

［堆積土］　2層に分層した。暗褐色土主体の土層である。

［出土遺物］　堆積土からⅢ群8～9類の土器片と石鏃1点、剥片2点と礫16点が出土した。

［時期］　堆積土出土の土器片と重複関係から、縄文時代中期末葉と考えられる。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1185土	堆積土	刺突(口唇)、沈線					Ⅲ-8・9	炭化物付着(内面)
2	〃	確認面	沈線			ミガキ		Ⅲ-4	粘土(内面)、波状口縁

48図　第1185号土坑・出土遺物

第1210号土坑（49・50図、写真24・45）

[位置と確認]　ⅦD－137に位置する。底面の標高は19.02mである。第14次調査において第Ⅴ層上の暗褐色土の落ち込みとして確認し、第17次調査で精査と遺構プランの修正を行った。

[重複]　第1208・1209・1211・1212・1260・1280号土坑より新しい。

[平面形・規模]　開口部は残存長1m68cm、平面形は不整な円形と推定される。

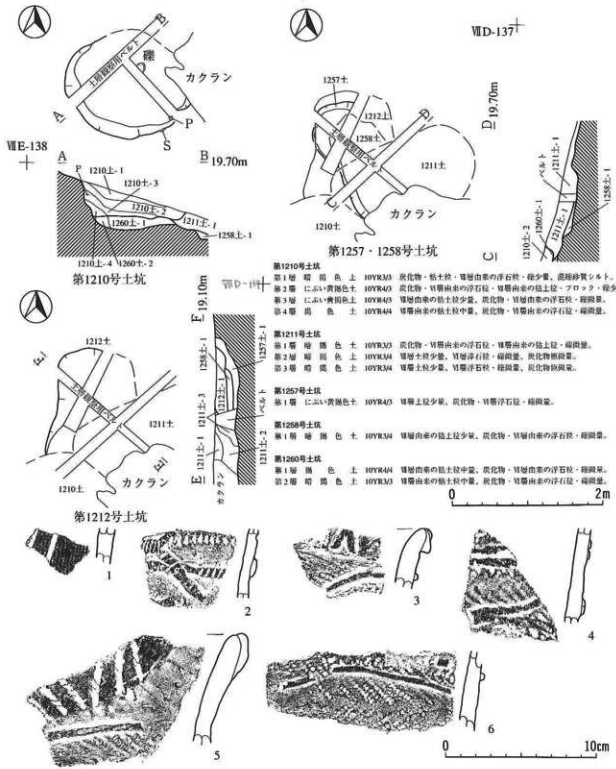
[壁・底面]　壁は第Ⅶ層を掘り込んでつくられ、若干外傾しながら直線的に立ち上がる。壁の北東側は検出できなかった。各壁の残存高は東壁25cm、南壁47cmである。

底面は、第1260号土坑の堆積土上に平坦に造られている。壁溝、貼り土は確認されなかった。

[堆積土]　3層に分層した。暗褐～褐色土層で、第Ⅶ層土の粒・ブロックを少量混入する。また、掘り込み層ではない第Ⅵ層の粒も少量混入する。

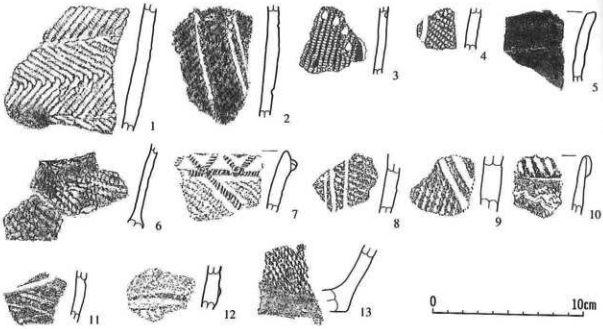
[出土遺物]　堆積土からⅢ群4・6・8～11類と石鏃1点、不定形石器1点、敲石2点、剥片40点と礫18点が、確認面からⅢ群8～9・11類の土器片が出土した。

[時期]　堆積土出土の土器片から、縄文時代中期末葉と考えられる。

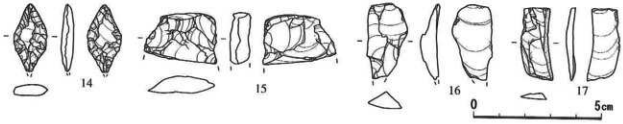


番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1210土	3.暗		RL?、沈線				Ⅲ-11	
2	*	堆積土	貼付(L押)、刺突			ミガキ		Ⅲ-3	炭化物付着(外面)
3	*	*	刺目、結束1種(LR-RL)、貼付			*		Ⅲ-4	波状口縁
4	*	*		結束1種(RL-LR)、貼付(RL)				*	
5	*	*	R押、RL、貼付(LR)			ミガキ		*	波状口縁
6	*	*		結束1種(RL-LR)、貼付		*		*	

49図　第1210・1211・1212・1257・1258・1260号土坑・出土遺物



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1210土	堆積土		結束第1種(RL・LR)		ミガキ		Ⅲ-6	炭化物付着(内外面)
2	〃	〃		RL、沈線		〃		Ⅲ-9	
3	〃	〃		RL、沈線、刺突		〃		Ⅲ-10	
4	〃	〃		RL、沈線		〃		Ⅲ-11	
5	〃	〃	無文			〃		〃	波状口縁
6	〃	〃			RLR	〃		〃	
7	〃	確認面	貼付(刻み)	結束第1種(RL・LR)、貼付(刻み)		〃		Ⅲ-4	
8	〃	〃		RL、沈線		〃		Ⅲ-8・9	
9	〃	〃		R単節1、沈線		〃		〃	
10	1211土	堆積土		RL、沈線		〃		Ⅲ-6	炭化物付着(外面)
11	〃	〃	貼付(LR押)	結束第2種(LR)		〃		Ⅲ-10	
12	〃	確認面		貼付		〃		Ⅲ-4	
13	〃	〃			L単節1			Ⅲ-11	炭化物付着(外面)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備考	整理番号
14	1210土	堆積土	(27)	13	5	(1.8)	玉髄	Ac	S-60	102044
15	〃	〃	(20)	(28)	(8)	(5.3)	堆頁	Ga	S-6	102075
16	〃	〃	(30)	16	7	(2.0)	〃	Pc	S-4	102074
17	〃	〃	29	12	3	1.0	〃	〃	S-20	102078

50図　第1210・1211号土坑・出土遺物

第1211号土坑（49～51図、写真24・47）

［位置と確認］　ⅦD－137に位置する。底面の標高は18.69mである。第14次調査において第Ⅴ層上の暗褐色土の落ち込みとして確認し、第17次調査で遺構プランの修正と精査を行った。

［重複］　第1212・1257・1258号土坑より新しく、第1210号土坑、第253・263号溝より古い。

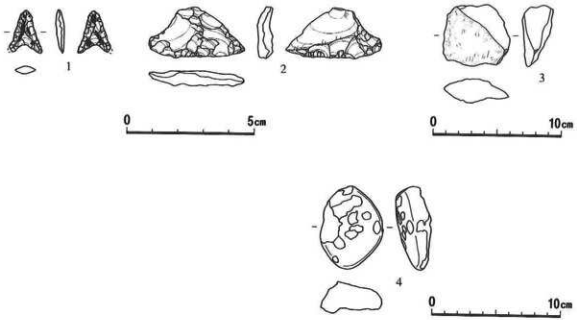
［平面形・規模］　開口部は長軸1m90cm、平面形は長楕円形で、長軸の方位はN－55°－Eである。

［壁・底面］　壁は北西側のみ検出された。第Ⅶ層、第1211・1258号土坑堆積土を掘り込んで造られ、若干外傾しながら直線的に立ち上がる。各壁の残存高は、南壁5.3cm、西壁27cmである。底面は第Ⅶ層上につくられ、全体でわずかな北東方向への傾斜が見られる。壁溝、貼り土は確認されなかった。

［堆積土］　3層に分層した。堆積土の多くが失われているが、主に暗褐色土からなる堆積土である。第Ⅶ層土の粒・ブロックが少量、第Ⅵ層の粒がわずか混入する。

［出土遺物］　堆積土からⅢ群6・5～11類の土器片と石鏃1点、剥片5点と敲石、不定形石器、礫が各1点、確認面からⅢ群4・11類の土器片と不定形石器、礫片が各1点出土した。

［時期］　堆積土出土の土器片と遺構間の重複関係から、縄文時代中期末葉と考えられる。



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	1211土	堆積土	17	(13)	3	(0.4)	珪頁	Af	アスファルト	102045
2	〃	〃	20	37	6	3.3	〃	Pc	S-70 石鏃失敗品？	102114
3	〃	確認面	(49)	(52)	(23)	(45.2)	安	Ma		90823
4	1212土	堆積土	65	49	27	82.4	流	W		102414

51図　第1211・1212号土坑・出土石器

第1212号土坑（49・51図、写真24・45）

［位置と確認］　ⅦD－137に位置する。底面の標高は18.64mである。第14次調査において第Ⅴ層上の暗褐色土の落ち込みとして確認し、第17次調査で遺構プランの修正と精査を行った。重複が激しいため、残存部分はわずかである。

［重複］　第1257・1258号土坑より新しく、第1210・1211号土坑、第252・253・263号溝より古い。

［平面形・規模］　開口部の残存長は1m54cmの長楕円形で、長軸の方位はN－15°－Eである。

［壁・底面］　第Ⅶ層、第1257号土坑の堆積土を掘り込んでつくられ、外傾しながら直線的に立ち上がる。東壁と南壁は検出されなかった。各壁の残存高は西壁24.3cm、北壁13cmである。

底面は、第Ⅶ層、第1257・1258号土坑の堆積土上につくられる。

［堆積土］　覆土の多くが失われているが、主に暗褐色土からなる。

［出土遺物］　堆積土から自然礫が1点と剥片2点が出土したのみである。

［時期］　遺構間の重複関係から、縄文時代中期中葉～後葉と考えられる。

第1215号土坑（41図、写真22・23）

［位置と確認］　ⅥR－144に位置する。底面の標高は19.46mである。第14次調査での第1112号土坑精査中に確認した。

［重複］　第1112号土坑・第252溝より古い。

［平面形・規模］　開口部は長軸1m90cm、短軸は推定で1m37cm、隅丸長方形に近い平面形である。長軸の方位はN－45°－Eをとる。

［壁・底面］　北東壁は確認されなかった。南東・南西壁は第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられ、垂直に立ち上がる。各壁の残存高は南東壁29cm、南西壁58cm、堆積土断面で確認した北東壁で17cmである。

底面は第Ⅶ層中につくられ、全体で北東方向に約7.5°傾斜している。壁溝を除いた底面全体に、暗褐色を混入した第Ⅶ層による貼り土が見られる。底面の壁際には幅6～22cm、深さ3～23cmの壁溝が検出された。

［堆積土］　堆積土は、壁溝内と合わせて2層に分層した。第Ⅲb層に似た黒褐色土を主体とする土層である。第Ⅵ・Ⅶ層の粒やブロックが不均一に、かつ多く混入することから、人為堆積であると考えられる。壁溝内の堆積土には特徴的な違いが見られなかった。

［出土遺物］　なし。

［時期］　層位関係から、縄文時代中期中葉か、後葉と考えられる。

第1219号土坑（52図、写真45）

［位置と確認］　ⅦF－138に位置する。底面の標高は20.83mである。第17次調査において、第Ⅰ層の除去後、第Ⅴ層上面で暗褐色土のプランと露出した底面を確認した。

［重複］　第1224号土坑より古い。遺構の上部と東側の底面は、第Ⅰ層の時期の土地造成によって失われている。西壁はさらに、植物撹乱によっても失われている。

［平面形・規模］　開口部は短軸92cm、残存長1m72cmで平面形は長楕円形である。長軸の方位はN－62°－Eをとる。

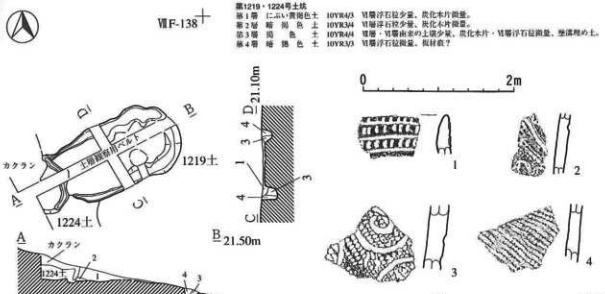
[壁・底面]　第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んだ壁が、北側と南側にわずかに残存する。各壁の残存高は南壁5cm、北壁4cm、である。

底面は第Ⅴ・Ⅵ層中に平坦につくられ、傾斜がほとんど見られない。底面の外縁では幅4～32cm、深さ5～20cmの壁溝がほぼ途切れなく巡っていた。

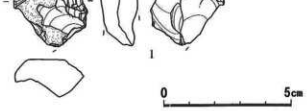
[堆積土]　堆積土は4層に分層した。暗褐色土主体の土層である。壁溝中の堆積土は、外側と内側の2層に分かれ、内側は第Ⅵ層の粒・ブロックを比較的多く混入する。

[出土遺物]　堆積土からⅡ群5類、Ⅲ群5・8・11類の土器片と不定形石器、石皿が各1点、剥片と礫が各2点出土した。

[時期]　堆積土出土の土器片から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1219土	堆積土	LR押、刺突(半截竹管状)			ミガキ		Ⅲ-5・1・2	
2	*	*		結束7種(RL)、沈線		*		Ⅲ-5	
3	*	*		LR、沈線		*		Ⅲ-8	
4	*	*			RL	*		Ⅲ-11	



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	1219土	堆積土	(36)	(29)	(14)	(12.9)	珪質	Ga		102120

52図　第1219号土坑・出土遺物

第1220号土坑（53・54図、写真24・45）

［位置と確認］　Ⅶ K－128・129に位置する。底面の標高は19.34mである。第17次調査において第Ⅱ層を除去した際、第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。同調査で半割・精査を行っている。

［重複］　第264・265号溝より古い。

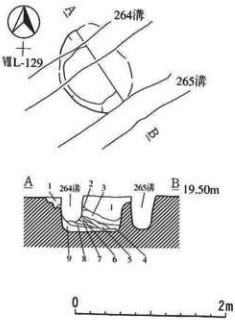
［平面形・規模］　開口部は長軸で85cmの楕円形だが、底面の平面形は円形になるものと思われる。

［壁・底面］　壁は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込み、垂直に立ち上がる。各壁の残存高は北西壁45cm、南東壁45cm、南西壁47cmである。底面は第Ⅵ層中に平坦につくられる。傾斜はほとんど見られない。

［堆積土］　堆積土は９層に分層した。黒褐色土が主体だが、第Ⅵ層土・炭化物の混入で各層に分かれることから、人為堆積によるものと思われる。

［出土遺物］　堆積土からⅢ群１・４．６類の土器片と、石核、礫が１点出土した。

［時期］　直上の堆積土と、堆積土出土の土器片から、縄文時代中期中葉～後葉と考えられる。

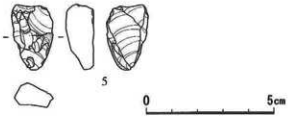


第1220号土坑

第1層	黒褐色土	10YR3/2	浮石粒少量、地上位混量。	
第2層	暗褐色土	10YR3/3	浮石粒混量。	
第3層	黒褐色土	10YR2/2	浮石粒・軽石粒中量、炭化物混量。	
第4層	暗褐色土	10YR3/4	浮石粒・軽石少量、炭化物混量。	
第5層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物・浮石粒・軽石粒・ローム粒混量。	
第6層	褐褐色土	10YR3/3	炭化物・浮石粒・軽石粒・ローム粒上面混量、下位に黒色土が入りこみ。	
第7層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	浮石粒・軽石粒・ローム粒少量。	
第8層	黒色土	10YR4/6	浮石粒混量。	
第9層	褐黄褐色土	10YR6/6	浮石粒・軽石粒・ローム粒少量。	

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1220上	堆積土	LR押			ミガキ		Ⅲ-1	波状口縁
2	〃	〃		LRL、貼付(刺み)		〃		Ⅲ-4	
3	〃	〃		結束縄Ⅰ種(LR・RL)		〃		Ⅲ-6	
4	〃	〃		細沈線、沈線		〃		〃	

53図　第1220号土坑・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
5	1220土	堆積土	26	16	11	4.6	玉髄	Pa	両面石核	102120

54図　第1220号土坑・出土遺物

第1221号土坑（55図、写真24）

［位置と確認］　Ⅶ G－135に位置する。底面の標高は19.76mである。第17次調査で、第Ⅲ層の除去した後、第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。同調査で半割・精査を行っている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　開口部の長軸１m、短軸67cmの不整な楕円形である。

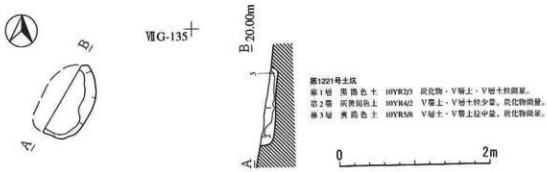
［壁・底面］　壁は第Ⅴb・Ⅴ層を掘り込み、やや外傾しながら立ち上がる。各壁の残存高は東壁17cm、南壁14cm、北壁10cmである。

底面は第Ⅴ・Ⅵ層中につくられる。平坦なつくりだが、全体で北東方向に約４°傾斜する。

［堆積土］　堆積土は３層に分層した。上位が暗褐色土で、下位は主に黄褐色土である。

［出土遺物］　なし。

［時期］　層位関係から、縄文時代中期のものと考えられる。



55図　第1221号土坑

第1257号土坑（49図、写真24）

［位置と確認］　Ⅶ D－137に位置する。底面の標高は18.59mである。第17次調査において、第1212号土坑の精査中に確認し、精査を行なった。

［重複］　第1212・1258号土坑、第252号溝より古い。

[平面形・規模]　残存する壁が西壁のみであり、不明である。

[壁・底面]　第Ⅶ層を掘り込み、直に立ち上がる壁である。西壁の残存高は28cmである。

底面は第Ⅶ層中につくられ、壁との境界が曖昧である。

[堆積土]　堆積土は暗褐色土主体である。第Ⅶ層土の粒を多く含むことから人為堆積によるものと思われる。掘り込み層位ではない第Ⅵ層の浮石もわずかに混入する。

[出土遺物]　なし。

[時期]　層位関係から、縄文時代中期のものと考えられる。

第1258号土坑（49図）

[位置と確認]　ⅦD－138・139に位置する。底面の標高は18.66mである。第17次調査において、第1212号土坑の精査中に確認し、精査を行なった。

[重複]　第1257号土坑より新しく、第1211・1212号土坑、第252・263号溝より古い。

[平面形・規模]　重複によって壁・底面の多くを失っている。残存長は1m20cmである。楕円形の平面形で、長軸がN－25°－Wを向く。

[壁・底面]　壁は、北側と西側で一部残存する。第Ⅶ層を掘り込み、わずかな傾斜で立ち上がる壁である。各壁の残存高は、西壁10cm、北壁7cmである。

底面は、第Ⅶ層中につくられた北側でのみ確認できた。南側の第1257号土坑堆積土中では不明瞭であったが、北東方向に幾分傾斜するものと思われる。

[堆積土]　堆積土は暗褐色土主体である。第Ⅶ層土粒の混入量が比較的多く、人為堆積の可能性が高い。掘り込み層位ではない第Ⅵ層の浮石もわずかに混入する。

[出土遺物]　堆積土から剥片が1点出土した。

[時期]　層位関係から、縄文時代中期のものと考えられる。

第1260号土坑（49図、写真24）

[位置と確認]　ⅦD－137に位置する。底面の標高は19.22mである。第17次調査において、第1210号土坑の精査中に確認し、精査を行なった。

[重複]　第1210号土坑より古い。

[平面形・規模]　重複によって壁の上部、北東側が失われている。残存長は1mで、略円形の平面形と推定される。

[壁・底面]　壁は第Ⅶ層を掘り込み、若干外傾して立ち上がる。各壁の残存高は、南東壁18cm、南西壁16cm、北西壁19cmである。

底面は第Ⅶ層中につくられ、中央にかけてゆるく凹んでいる。

[堆積土]　褐色土主体の堆積土である。下位に第Ⅶ層土粒が多く混入し、人為堆積の可能性が高い。掘り込み層位にはない第Ⅵ層の浮石もわずかに混入する。

[出土遺物]　なし。

[時期]　層位関係から、縄文時代中期のものと考えられる。

第1278号土坑（48図）

［位置と確認］　ⅦＥ－135に位置する。底面の標高は18.51ｍである。第17次調査で、第1185号土坑を精査中に確認した。

［重複］　第1184・1185号土坑より新しく、第1277・1369号土坑より古い。

［平面形・規模］　精査が部分的なため不明である。

［壁・底面］　壁の南西側のみ検出した。第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられる。全体的に起伏があり、底面との境界も不明瞭である。南西壁の残存高は24cmである。

底面は第Ⅵ・Ⅶ層中につくられ、壁面同様に起伏が見られる。壁溝、貼り土は確認されなかった。

［堆積土］　暗褐色土主体の土層である。

［出土遺物］　なし。

［時期］　層位関係より、縄文時代中期と考えられる。

（秦　光次郎）

第1290号土坑（56図、写真24）

［位置と確認］　ⅥＪ－152・153に位置する。底面の標高は19.25ｍである。第20次調査において第Ⅲ層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、第Ⅴ層上面で本遺構の輪郭が把握された。内部の構造を把握するため南東隅を部分的に精査を行った。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　開口部の平面形は不整な楕円形を呈し、その規模は長軸１ｍ93cm、短軸１ｍ07cmである。長軸の方位はＮ－49°－Ｅを示す。

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1				結束形１種(LR・RL)				Ⅲ-6	
2			単節１押					Ⅱ-6	

56図　第1290号土坑・出土土器

［壁・底面］　確認のため精査を行った南東側の壁は急斜度で立ち上がり、その深さは22cmを計測する。第Ⅵ層を底面とし、比較的平坦で壁溝は確認されなかった。

［堆積土］　黒褐色土を主体とし、第Ⅵ層起源の浮石粒が混入する。

［出土遺物］　堆積土中からⅡ群６類、Ⅲ群６類の土器片が出土した。

［時期］　層位関係と堆積土から判断して、縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

第1293号土坑（57図、写真24）

［位置と確認］　ⅥＥ・Ｆ－159に位置する。第20次調査において第Ⅲb層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、第Ⅴ層上面で本遺構の輪郭が把握された。内部の構造を把握するため北東隅を部分的に精査を行った。

［重複］　なし。

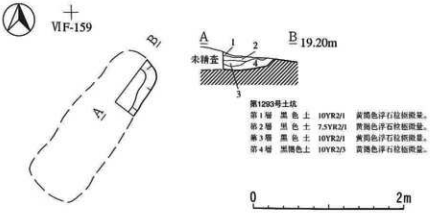
［平面形・規模］　開口部の平面形は長楕円形を呈し、その規模は長軸２ｍ18cm、短軸77cmである。長軸の方位はＮ－38°－Ｅを示す。

［壁・底面］　確認のため精査を行った北東側の壁は緩やかに立ち上がり、その残存する壁高は９cmで、深さ22cmである。第Ⅵ層を底面とし、比較的平坦である。また、壁溝は確認されなかった。

［堆積土］　堆積土は４層に分層し、凹レンズ状に堆積する。黒褐色土を主体に第Ⅵ層起源の浮石粒が混入する。

［出土遺物］　なし。

［時期］　層位関係と堆積土から判断して、縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。



57図　第1293号土坑

第1294号土坑（58図、写真24）

［位置と確認］　ⅥＥ－159に位置する。第20次調査において第Ⅲb層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、第Ⅴ層上面で本遺構の輪郭が把握された。内部の構造を把握するため南西側を半截して精査を行った。

［平面形・規模］　開口部の平面形は長楕円形を呈し、その規模は長軸１ｍ44cm、短軸46cmである。長軸方向はＮ－48°－Ｅを示す。

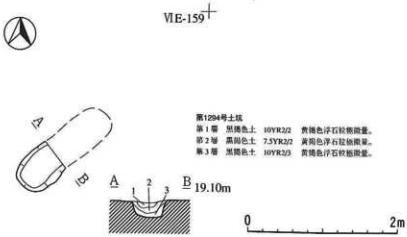
［壁・底面］　確認のため精査を行った北西・南東側の壁は急斜度で立ち上がり、その残存する壁高は北西側で21cm、南東側で20cmである。第Ⅵ層を底面とし、比較的平坦である。また、壁溝は確認されなかった。

［堆積土］　堆積土は黒褐色土を主体に３層に分層された。

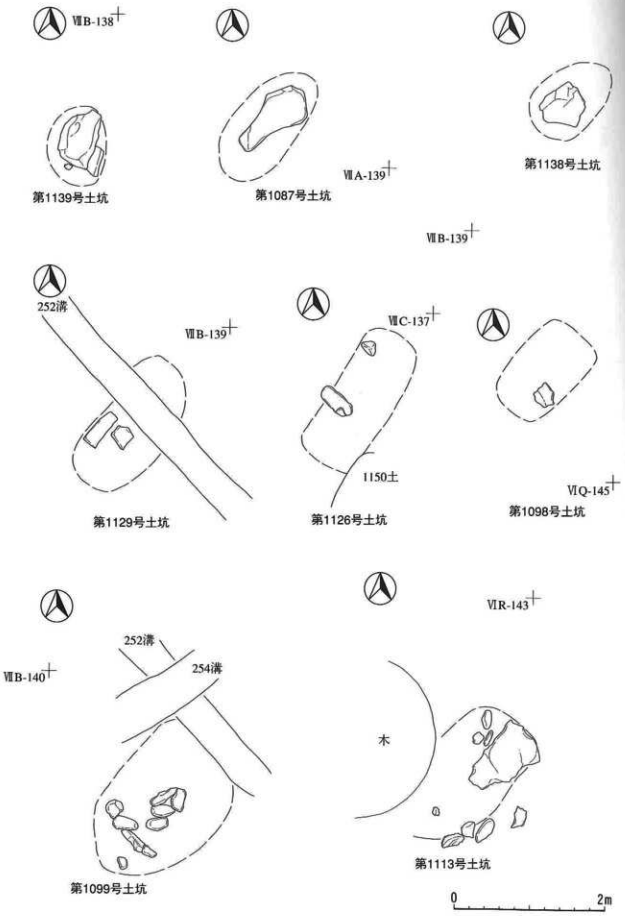
［出土遺物］　堆積土からは、土器の細片１点と小礫１点が僅かに出土した。

［時期］　層位関係と堆積土から判断して、縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

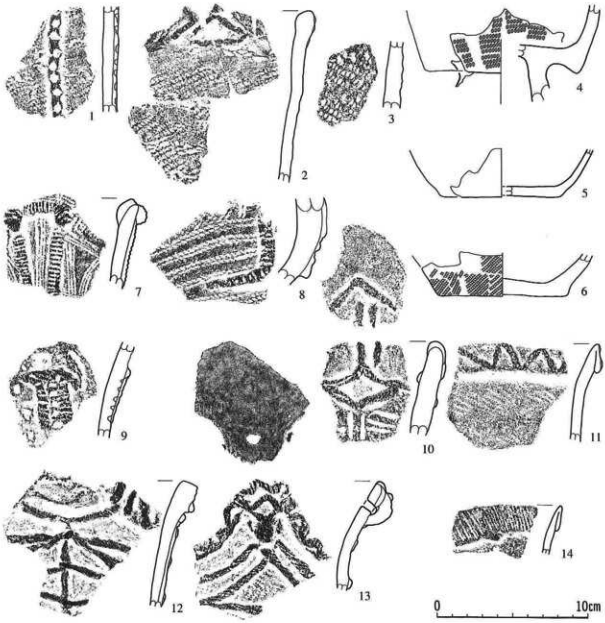
（佐々木　雅裕）



58図　第1294号土坑

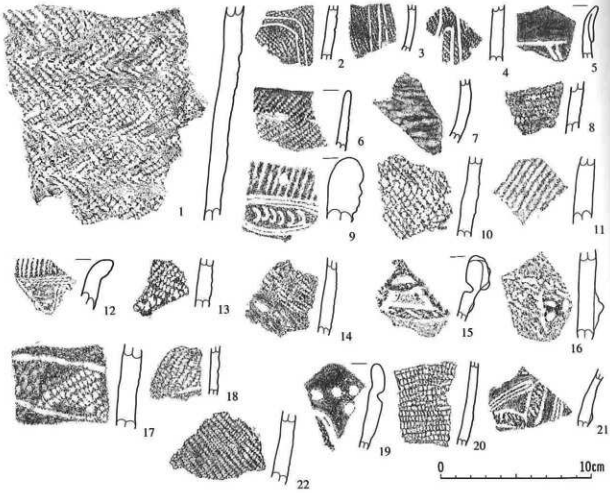


59図　上面に配石を伴う土坑墓



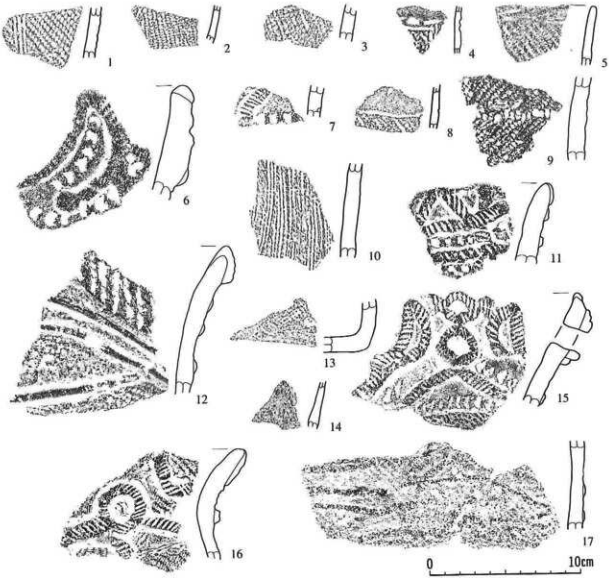
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1081上	縄認面		RL(結束第1種?)、貼付(竹管状刺突)		ミガキ		Ⅲ-5	
2	〃	〃	刺突(貼付)、LR押(口唇)	LR・結節		〃		〃	
3	1085土	〃		結束第1種(LR・RL)		〃		Ⅲ-6	
4	1086土	〃			L 2本組多節	〃	台付	Ⅱ-5-2	
5	〃	〃			ミガキ	〃	ミガキ	Ⅲ-11・Ⅳ	
6	〃	〃			LR	〃	〃	Ⅲ-11	
7	〃	〃	貼付(LR押)、LR押			〃		Ⅱ-5-2	波状口縁
8	〃	〃	貼付(L押)、L・R押			〃		Ⅲ-1	波状口縁
9	〃	〃	貼付(L押)、刺突			〃		Ⅲ-3	波状口縁
10	〃	〃	折返口縁(貼付)	結束第1種(LR・RL)		〃		Ⅲ-3・4	
11	〃	〃	貼付、貫通孔、橋状把手	結束第1種(LR・RL)、貼付(L押)		〃		Ⅲ-4	波状口縁
12	〃	〃		結束第1種		〃		〃 Ⅲ-4	波状口縁、刺突貼付帯(胴部)
13	〃	〃	貼付、沈線			〃		Ⅲ-5	波状口縁
14	〃	〃	折返口縁(L押)			〃		Ⅲ-6	炭化物付着(外面)

60図　その他の土坑出土土器(1)



番号	出土地点	出土層位	外面文様 口縁部	外面文様 胴部上半	外面文様 胴部下半	内面調整	底面	分類	備考
1	1086土	確認面		結束第1種(LR・RL)	結束第1種(LR・RL)	ミガキ		Ⅲ-6	炭化物付着(外面)
2	*	*		RL、沈線、円形刺突		*		Ⅲ-9	炭化物付着(外面)
3	*	*		RL、沈線		*		Ⅲ-9	
4	*	*		RL、沈線		*	台付	Ⅲ-9	炭化物付着(外面)
5	*	*	折返口縁	RL?、沈線		*	ミガキ	Ⅲ-9・10	波状口縁
6	*	*	折返口縁(LR)	LR		*	*	Ⅲ-9・10	炭化物付着(外面)
7	*	*			無文	*		Ⅲ-11	
8	1098上	*		LR				Ⅲ-11	
9	1099土	*	L押			ミガキ		Ⅲ-2	
10	*	*		結束第1種(RLR)		*		Ⅲ-6	炭化物付着(内面)
11	1100土	*		LR		*		Ⅲ-6	
12	1106上	*	R押(口唇)、R押			*		Ⅲ-1	波状口縁
13	1107土	*		結束第1種(LR・RL)		*		Ⅲ-6	
14	1124上	*		RL		*		Ⅲ-5・11	
15	1130土	*	貼付(RL、RL押)			*		Ⅲ-5	波状口縁、刺突(内面)
16	1133上	*		RL、貼付(指頭押圧)		*		Ⅲ-5	
17	1134土	*			結束第1種(LR)	*		Ⅲ-6	
18	1135上	*		RL、沈線		*		Ⅲ-11	
19	1138土	*	整形(LR?、沈線)、円形刺突			*		Ⅲ-9・10	波状口縁
20	1140上	*		LR				Ⅲ-11	炭化物付着(内・外面)
21	1141土	*	貼付(R押)、L・R押					Ⅲ-1	
22	*	*			RL	ミガキ		Ⅲ-11	

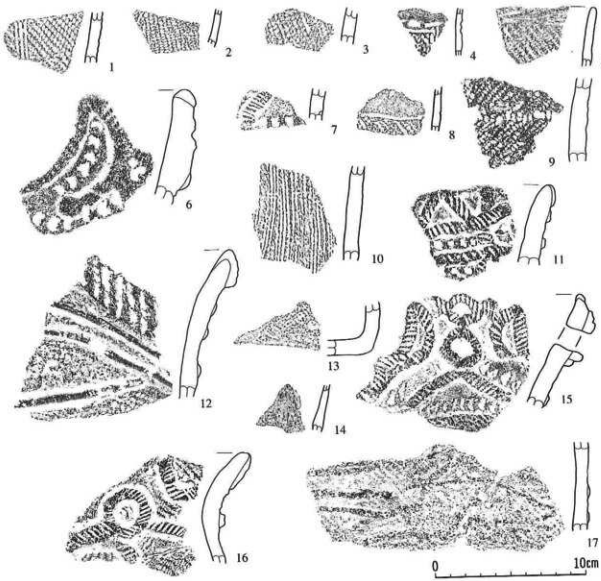
61図　その他の土坑出土土器(2)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1143土	確認面		LR、沈線				Ⅲ-9	
2	〃	〃		RL、沈線		ミガキ		Ⅲ-11	
3	1144土	〃		RLR		〃		Ⅲ-6	横羽混入
4	1146土	〃	短沈線	RL、沈線		〃		Ⅲ-9	
5	〃	〃	RL					Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
6	1147土	〃	貼付(L押)、刺突					Ⅲ-2	波状口縁
7	1148土	〃		貼付(L押)、刺突		ミガキ		Ⅲ-3	
8	1151土	〃		磨消(沈線、LR)		〃		Ⅲ-10	
9	1157土	〃		結束第1種(LR)		〃		Ⅲ-6	
10	1158土	〃		R単節1		〃		Ⅲ-6	
11	1160土	〃	貼付(L押)、刺突			〃		Ⅲ-3	波状口縁
12	1162土	〃	貼付(RL押；口唇)	LR貼付		〃		Ⅲ-4	波状口縁
13	1163土	〃			LR	〃	ミガキ	Ⅲ-6	横羽混入
14	1164土	〃		無文				Ⅲ-11	
15	1166土	〃	貼付(RL、RL押)			ミガキ		Ⅲ-2	波状口縁
16	1171土	〃	結束1種(LR-RL)、貼付(L押)			〃		Ⅲ-4	波状口縁
17	1172土	〃		LR、貼付		〃		Ⅲ-4	

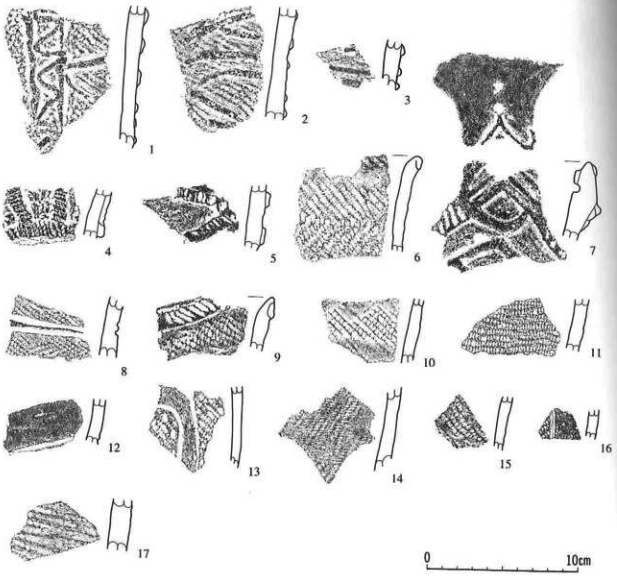
重複し、

62図　その他の土坑出土土器(3)



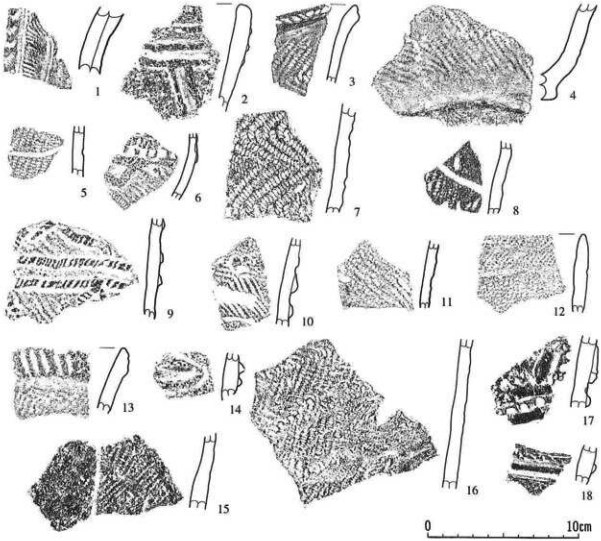
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1143土	確認面		LR、沈線				Ⅲ-9	
2	〃	〃		RL、沈線		ミガキ		Ⅲ-11	
3	1144土	〃		RLR		〃		Ⅲ-6	横線混入
4	1146土	〃	縦沈線	RL、沈線		〃		Ⅲ-9	
5	〃	〃	RL					Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
6	1147土	〃	貼付(L押)、刺突					Ⅲ-2	波状口縁
7	1148土	〃		貼付(L押)、刺突		ミガキ		Ⅲ-3	
8	1151土	〃		貼付(沈線、LR)		〃		Ⅲ-10	
9	1157土	〃		結束第1種(LR)		〃		Ⅲ-6	
10	1158土	〃		R単節1		〃		Ⅲ-6	
11	1160土	〃	貼付(L押)、刺突			〃		Ⅲ-3	波状口縁
12	1162土	〃	貼付(RL押；口唇)	LR貼付		〃		Ⅲ-4	波状口縁
13	1163土	〃			LR	〃	ミガキ	Ⅲ-6	横線混入
14	1164土	〃		無文				Ⅲ-11	
15	1166土	〃	貼付(RL、RL押)			ミガキ		Ⅲ-2	波状口縁
16	1171土	〃	結束1種(LR-RL)、刺突LR			〃		Ⅲ-4	波状口縁
17	1172土	〃		LR、貼付		〃		Ⅲ-4	

62図　その他の土坑出土土器(3)



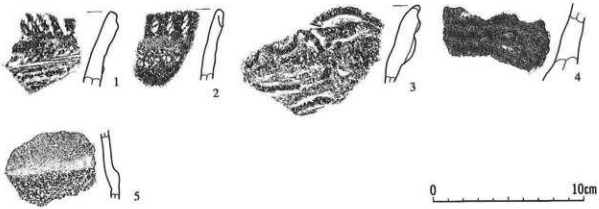
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1172土	確認面		縄束第Ⅰ種(LR・RL)、貼付			ミガキ	Ⅲ-4	
2	〃	〃		縄束第Ⅰ種(LR・RL)、貼付				Ⅲ-4	
3	1173土	〃		貼付		ミガキ		Ⅲ-4	
4	1174土	〃	貼付(L押)、L押			〃		Ⅲ-2	
5	〃	〃		貼付(R押)		〃		Ⅲ-4	
6	1175土	〃	縄束第Ⅰ種(LR・RL)			〃		Ⅲ-6	波状口縁
7	1176土	〃	貼付			〃		Ⅲ-4	波状口縁 縄束文状(粗目・粗皮・内面)
8	1177土	〃		RLR、沈線		〃		Ⅲ-5・8	
9	〃	〃	貼付(RL)	RL		〃		Ⅲ-6	
10	1178土	〃		RL		〃		Ⅲ-11	
11	1179土	〃		LR		〃		Ⅲ-5・11	
12	〃	〃		沈線		〃		Ⅲ-11	
13	1183土	〃		磨消(LR、沈線)、刺突		〃		Ⅲ-10	
14	〃	〃			RL	〃		Ⅲ-11	
15	〃	〃		LR		ミガキ		Ⅲ-11	炭化物付着(内外面)
16	〃	〃		RL、沈線				Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
17	1189土	〃		RLR		ミガキ		Ⅲ-6	

63図　その他の土坑出土土器(4)

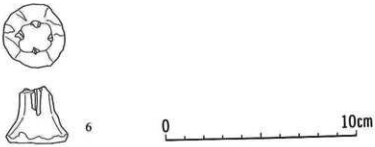


番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1190土	確認面	貼付(L押、L押馬蹄形)			ミガキ	ミガキ	Ⅲ-2	
2	＊	＊	結束第Ⅰ種(LR・RL)、押	結束第Ⅰ種(LR・RL)		＊		Ⅲ-4	波状口縁
3	＊	＊			結束第Ⅰ種(LR・RL)			Ⅲ-6	波状口縁
4	＊	＊			RL			Ⅲ-11	
5	1192土	＊		磨消(RL、沈線)		ミガキ		Ⅲ-10	炭化物付着(外面)
6	1193上	堆積土	貼付(刻み)、刺突	RL(結束第Ⅰ種？)		＊		Ⅲ-3	炭化物付着(外面)
7	1194土	確認面		結束第Ⅰ種(LR・RL)		＊		Ⅲ-6	
8	＊	＊		磨消(RL、沈線)				Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
9	1201土	＊		結束Ⅰ種(LR・RL)、貼付(押)				Ⅲ-4	
10	1202土	＊		貼付(L押)、L押(馬蹄形)		ミガキ		Ⅲ-2	
11	＊	＊			RL	＊		Ⅲ-11	
12	1203土	＊	結束第Ⅰ種(LR・RL)	RL				Ⅲ-4	縄種混入
13	＊	＊	LR押	結束第Ⅰ種(LR・RL)				Ⅲ-3・4	
14	＊	＊	貼付			ミガキ		Ⅲ-4	
15	1204上	＊			LR	＊		Ⅲ-11	
16	1206土	＊		結束第Ⅰ種(LR)		＊		Ⅲ-6	炭化物付着(外面)
17	1207上	＊		貼付、刺突		＊		Ⅲ-3	
18	＊	＊		RL、貼付		＊		Ⅲ-4	

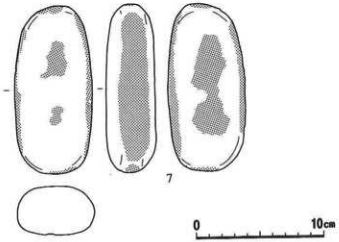
64図　その他の土坑出土土器(5)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	1208十	確認面	LR押	LR、貼付		ミガキ		Ⅲ-4	波状口縁(外面)
2	〃	〃	LR押	結束第1種(LR・RL)				Ⅲ-6	
3	1209十	〃	貼付					Ⅲ-4	波状口縁(外面)
4	〃	〃			無文	ミガキ		Ⅲ-6	
5	1213十	〃	無文	LR		〃		Ⅲ-9	

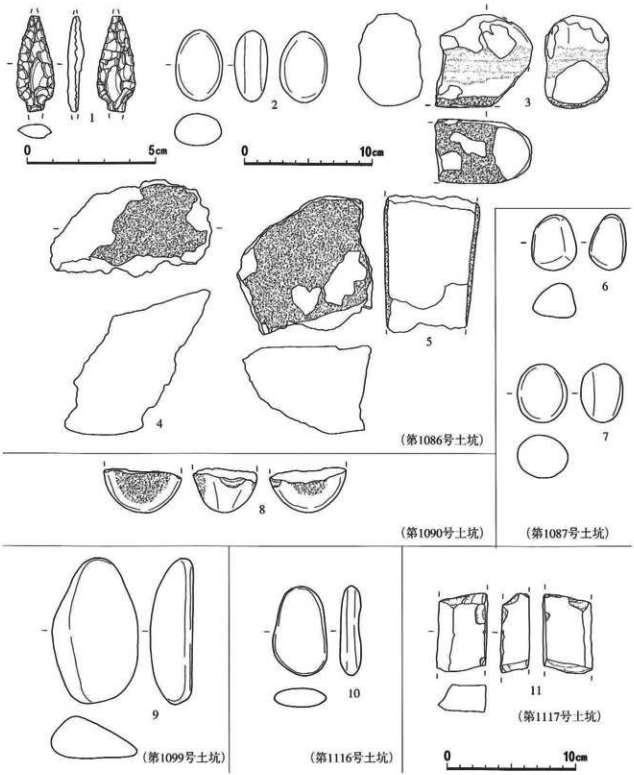


番号	出土地点	出土層位	外面様様			内面調整	底面	分類	備考	整理番号
			口縁部	胴部上半	胴部下半					
6	1086十	確認面			無文			ミニチュア土器	台部	8049



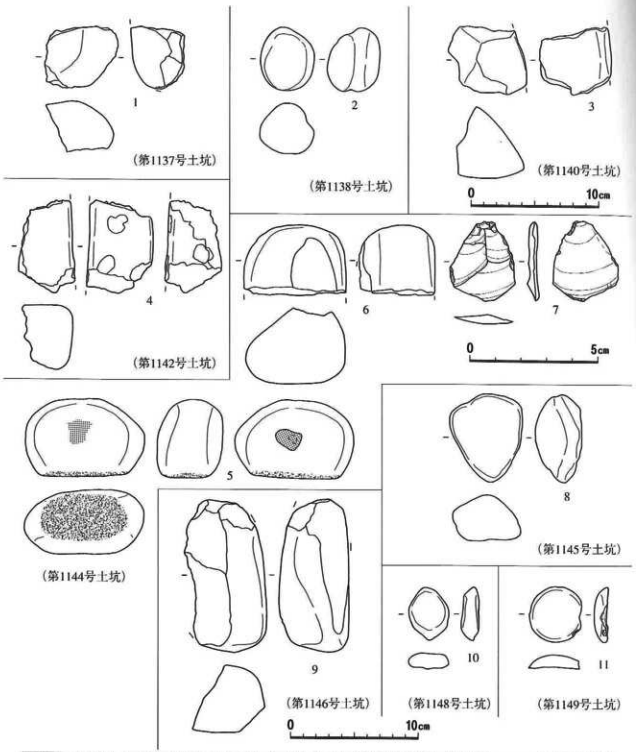
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備考	整理番号
7	1085十	確認面	133	61	38	464.8	安	1b		90990

65図　その他の土坑出土土器・土製品・石器



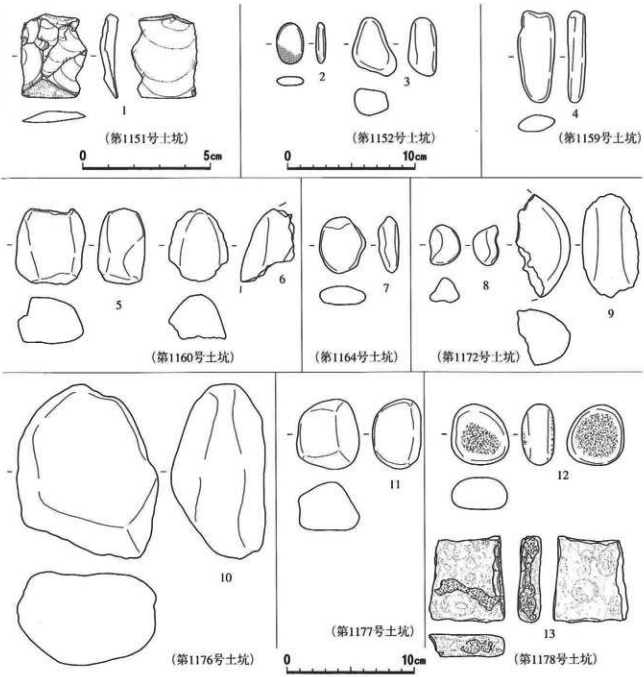
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	1086土	確認面	(38)	15	6	(2.9)	珪質	Ab		32729
2	〃	〃	55	36	25	70.6	頁	Sa		90995
3	〃	〃	(78)	(76)	50	(408.0)	安	Oa	焼け	91000
4	〃	〃	(76)	(122)	(115)	(728.2)	〃	L		91003
5	〃	〃	(109)	(106)	(74)	(938.0)	〃	〃		91004
6	1087土	〃	44	35	29	49.1	チャート	W		91005
7	〃	〃	45	39	34	76.0	流	〃		91006
8	1090土	〃	35	60	49	87.9	安	Ic		91009
9	1099土	〃	115	67	33	307.2	〃	W		90856
10	1116土	〃	70	43	17	68.8	頁	〃		90791
11	1117土	〃	(63)	40	22	(79.8)	流	Ua		90759

66図　その他の土坑出土石器（1）



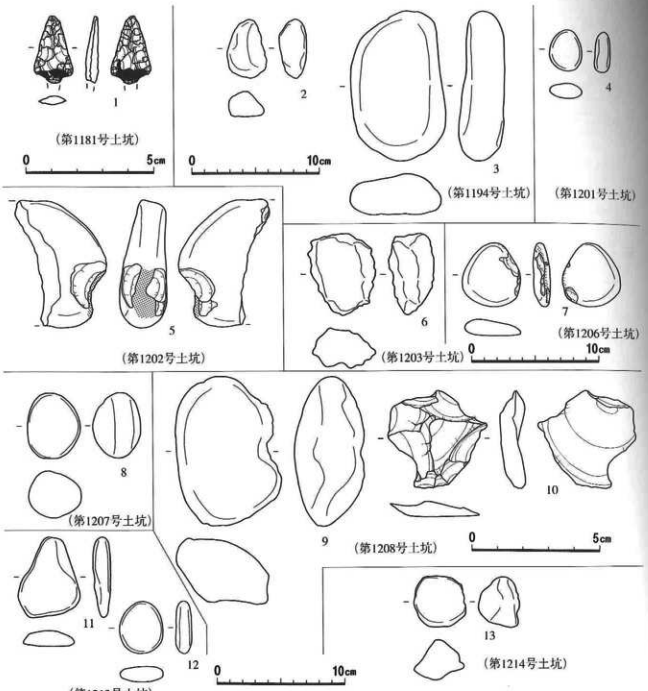
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　考	整理番号
1	1137土	確認面	(49)	(57)	(41)	(125.4)	安	W	焼け	90857
2	1138土	〃	50	42	41	90.5	〃	〃		90801
3	1140土	〃	(54)	(62)	(56)	(197.7)	〃	〃	焼け	90802
4	1142土	〃	(73)	(44)	(51)	(195.2)	流	〃	〃	90858
5	1144土	〃	52	93	51	402.8	凝	1 c		90642
6	〃	〃	(55)	(80)	(59)	(367.7)	安	W	焼け	90837
7	〃	〃	31	25	4	3.1	珪頁	Gc		39988
8	1145土	〃	69	57	36	161.1	安	W		90794
9	1146土	〃	(121)	(64)	(54)	(418.0)	〃	〃		90861
10	1147土	〃	41	31	14	23.4	〃	〃		90804
11	1149土	〃	44	41	11	18.6	凝	〃		90806

67図　その他の土坑出土石器(2)



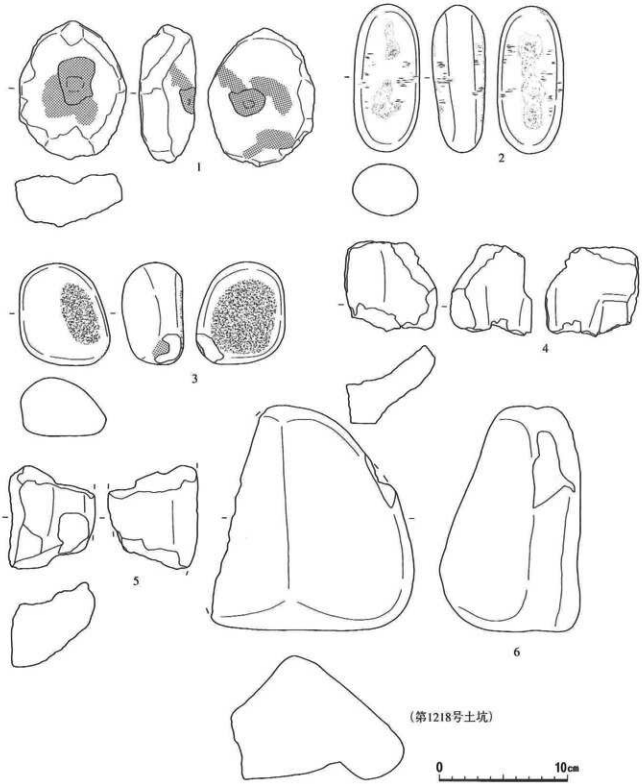
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	1151土	堆積土	33	26	7	4.6	珪頁	Pc		102063
2	1152上	確認面	32	21	7	7.9	頁	Q	光沢のある礫	90807
3	〃	〃	46	35	22	44.6	安	W		90796
4	1159上	〃	72	28	14	38.9	〃	〃		90792
5	1160土	〃	59	54	36	179.9	〃	〃		90838
6	〃	〃	(57)	(46)	(42)	(93.0)	〃	〃		90808
7	1164土	〃	44	36	16	37.3	〃	〃		90859
8	1172上	〃	(32)	(24)	(20)	(19.5)	凝	〃		90809
9	〃	〃	(81)	(42)	(44)	(137.3)	流	〃		90848
10	1176上	〃	138	110	74	1,275.3	チャート	〃		90860
11	1177土	〃	55	49	38	144.0	安	〃		90810
12	1178上	〃	48	44	25	82.6	〃	I c		90812
13	〃	〃	67	58	18	80.6	凝	〃		90752

68図　その他の土坑出土石器(3)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	1181上	確認面	(26)	15	5	(1.6)	珪頁	Ab	アスファルト	32730
2	1194上	〃	46	31	21	19.1	凝	W		90847
3	〃	〃	118	75	36	427.5	流	〃		90798
4	1201上	〃	32	26	13	15.0	頁	〃		90862
5	1202上	〃	(100)	(71)	(36)	(240.2)	安	Na		90734
6	1203上	〃	64	54	36	82.1	凝	W		90815
7	1206上	〃	50	45	13	30.3	安	I b		90816
8	1207上	〃	51	41	37	85.6	流	W		90834
9	1208上	〃	118	83	55	343.5	凝	〃		90874
10	〃	〃	39	39	10	6.1	珪頁	Pc		32995
11	1213上	〃	63	48	12	48.3	安	W		90840
12	〃	〃	41	34	12	28.8	チャート	〃		90875
13	1214上	〃	40	41	32	62.5	安	〃		90817

69図　その他の土坑出土石器(4)

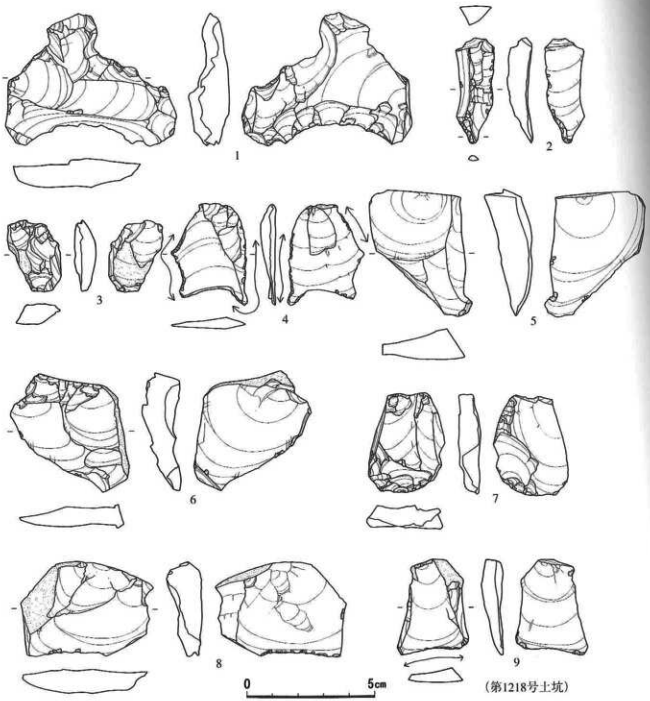


番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備考	整理番号
1	1218十	堆積十	108	83	44	323.5	凝	I a		102328
2	〃	〃	116	51	42	335.7	流	I b		102327
3	〃	〃	81	70	47	(393.1)	安	I c		102329
4	〃	〃	(71)	(73)	(63)	(179.9)	凝	L		102330
5	〃	〃	(81)	(67)	(70)	(235.2)	凝	〃		102427
6	〃	〃	179	(158)	110	(3396.2)	安	〃		120429

VIIJ-127

70図　その他の土坑出土石器(5)

第四層



(第1218号土坑)

番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	~~1218土~~	~~層位未~~	53	67	16	36.7	珪質	Cd		99895
2	〃	〃	42	15	10	4.3	〃	Dc		99932
3	〃	〃	28	21	8	4.3	〃	Gb	ビエス・エスキーユ？	99893
4	〃	〃	40	30	6	4.8	〃	Ge		99886
5	〃	〃	50	40	18	20.6	〃	Pc		99894
6	〃	〃	47	46	15	20.5	〃	〃		99885
7	〃	〃	39	30	9	10.5	〃	Ga	石匙？	99892
8	〃	〃	38	52	14	19.4	〃	Gc		99884
9	〃	〃	38	28	13	5.9	〃	〃		99883

VIII J-127　III

71図　その他の土坑出土石器(6)(2)

第III層

3）埋設土器

調査区内には計16基の埋設土器が分布する。うち第14次調査で11基、第17次調査で5基を確認した。ⅦB～Kの間でのみ確認され、VB・C－137・138では中期末葉のものが集中している。盛土遺構内で確認されるものは、全て中期初頭～中葉と思われる時期のものであった。精査は、計5基で行っている。

第812号埋設土器（72・74・78図、写真27・49・50）

[位置と確認]　ⅦB－138に位置する。確認面での標高は18.4mである。第14次調査において第Ⅲ層を掘り下げた際、第Ⅶ層の上面で確認し、精査も行った。精査中2基の埋設が重複していることが判明し、新しいものを第812号埋設とした。

[重複]　第1141・1143・1144号土坑より新しく、第818号埋設土器より古い。

[平面形・規模]　土器内・掘り方北側の68×44cmの範囲で配石が確認された。長24～39cmの礫5個と長15cmの小礫1個からなる。

掘り方は第1141・1143・1144号土坑の堆積土中につくられる。第818号埋設に伴うものとの識別ができなかった。合わせて南北2.2mの不整な円形となる。

[堆積土]　掘り方内は褐色土が主に堆積する。土器は正位で埋設され、底部に欠損が見られない。土器の内部では、上位に暗褐色土、下位に褐色土が主に堆積する。

[出土遺物]　土器はⅢ群10類である。土器の内部と掘り方からは、石皿・台石類4点、自然礫12点、加工のある礫石器小破片1点が出土した。

[時期]　大木10式併行期である。

第813号埋設土器（72・75図、写真27・28・49）

[位置と確認]　ⅦC－137に位置する。確認面での標高は18.3mである。第14次調査において第Ⅲ層掘削中に確認し、精査を行った。精査は南半のみ行い、土器の取り上げは行わなかった。

[重複]　第1150号土坑より新しい。

[平面形・規模]　土器の直上では長38cmの礫が1個確認された。土器の口縁から側面を覆う位置で確認されており、意図的に置かれたものと判断した。掘り方は、第1150号土坑の堆積土中から第Ⅶ層を掘り込んでつくられる。残存長50cmで、南壁は確認できなかったが、不正な円形であったと思われる。

[堆積土]　掘り方内は、主に第Ⅶ層のブロックを混入する褐色土が堆積する。土器は東側に口縁が傾き、横位に近い角度で埋設されている。土器内部では、礫の直下で黒色土が、他は褐色土が堆積する。

[出土遺物]　なし。

[時期]　大木10式併行期である。

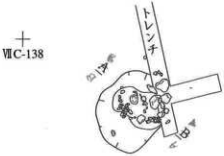
第814号埋設土器（72・76・79図、写真28・49・50）

[位置と確認]　ⅦH－133に位置する。確認面での標高は19.8mである。第14次調査で第Ⅱ層の掘削を行った際に確認し、同調査で西半を精査した。第Ⅰ層に伴う削平によって上半部が失われ、第252号溝により東側が失われている。なお、土器の取り上げは行わなかった。

[重複]　第252号溝より古い。

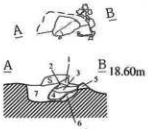
第810号埋設

第811号埋設

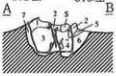


第813号埋設土器

第813号埋設			
第1層	黒褐色土	10YR3/3	縁辺堆。
第2層	褐色上	10YR4/4	Ⅵ層浮石粒・Ⅶ層上位混堆。
第3層	褐色土	10YR4/4	Ⅵ層浮石粒・Ⅶ層土粒少量。
第4層	褐色土	10YR4/4	炭化物・φ2mmまでの細少量、φ10mm前後の縁辺量。
第5層	灰黄褐色土	10YR4/2	Ⅶ層土粒・炭化物少量。
第6層	褐色土	10YR4/6	Ⅶ層上ブロック中量。上層片混入。
第7層	褐色上	10YR4/6	Ⅶ層上ブロック少量。

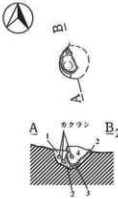


第813号埋設



第812・818号埋設

第812・818号埋設			
第1層	黒褐色土	10YR3/3	現土粒混。
第2層	褐色上	10YR4/4	Ⅵ層浮石粒少量。層状土。
第3層	褐色土	10YR4/4	Ⅵ層浮石粒微混堆。縁混入。812埋のみの堆積土。
第4層	褐色土	10YR4/4	Ⅵ層由来と思われる浮石の崩砂少量。
第5層	褐色上	10YR4/4	Ⅵ層由来と思われる浮石の崩砂・Ⅶ層上粒少量。
第6層	褐色上	10YR4/4	Ⅵ層由来と思われる浮石の崩砂・Ⅶ層上粒少量。Ⅴ層と比べてⅦ層土粒が若干少ない。



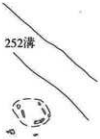
第814号埋設

第815号埋設

第816号埋設

第814号埋設			
第1層	黒褐色土	10YR2/3	Ⅶ層土ブロック少量、炭化物・浮石粒微量。上部はⅢ層に同化。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	重層上ブロック少量、浮石層部微量。
第3層	黄褐色上	10YR5/6	ほぼⅤ層のブロックより成る。
第4層	黒褐色土	10YR3/2	浮石粒微量。現土粒微混堆。

第817号埋設

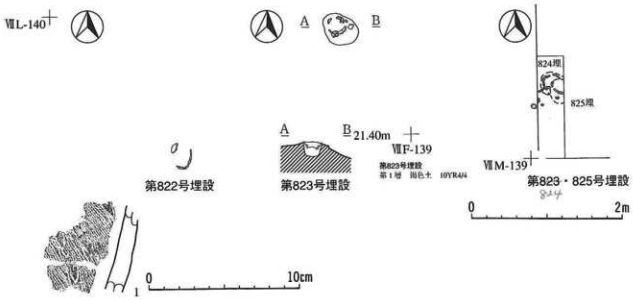


第819号埋設

第821号埋設

0　　2m

72図　第810・811・812・813・814・815・816・817・818・819・821号埋設土器



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	823埋	堆積土			R単節 1 a	ミガキ		Ⅱ-6	

73図　第822～825号埋設・出土遺物

[平面形・規模]　掘り方は第Ⅲ・Ⅴ層を掘りこんだもので、残存長44cmである。不正な円形であったと思われる。

[堆積土]　掘り方内は、周囲の第Ⅲ層に類似した暗褐色土が主に堆積する。土器は正位に埋設され、内部には黒褐色土が堆積する。

[出土遺物]　土器の確認面から小礫が1点出土したのみである。

[時期]　縄文時代中期中葉と思われる。

第818号埋設土器（72・77・78図、写真27・49・50）

[位置と確認]　ⅦB－138に位置する。確認面での標高は18.4mである。第14次調査において第812号埋設を精査中に確認した。

[重複]　第1141・1143・1144号土坑、第812号埋設土器より新しい。

[平面形・規模]　土器中央の上面に長14cmの礫を確認した。掘り方については、第818号埋設に伴うものとの識別ができなかった。

[堆積土]　掘り方内は褐色土が主に堆積する。土器は正位で埋設され、内部に暗褐色土が堆積する。また、土器内堆積土の下半部にも長14cmの礫が混入されていた。

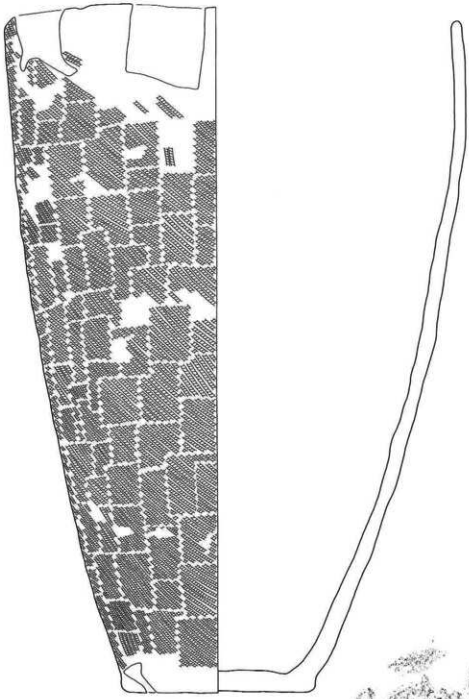
[出土遺物]　掘り方内から砥石類が出土した。

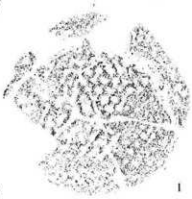
[時期]　大木10式並行期である。

（以上、秦　光次郎）

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	812埋	ⅦB-138	LR、沈線	LR、沈線	LR	ミガキ	ナデ	Ⅲ-10	

74図　第812号埋設土器・出土遺物



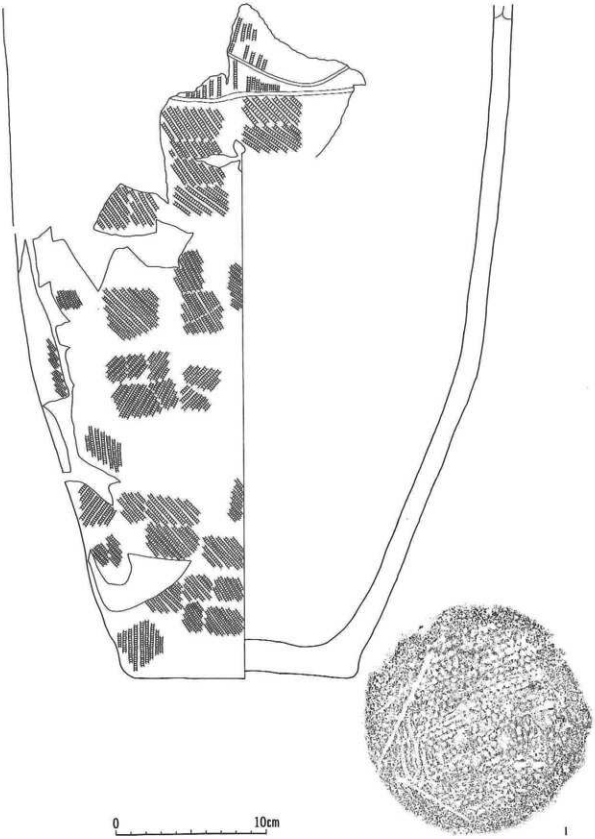


0　　10cm

1

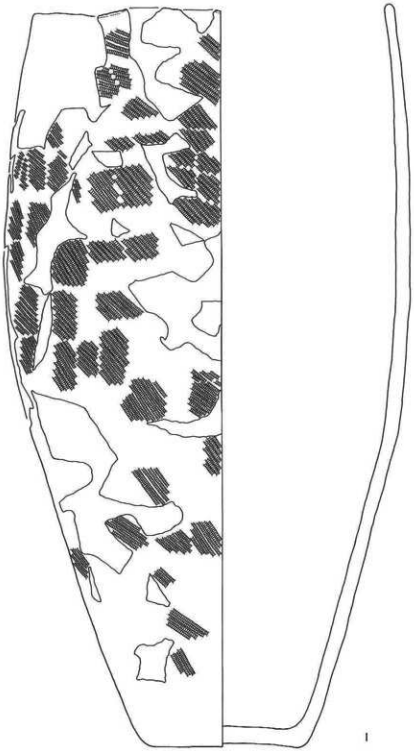
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	813埋	Ⅶ C-138	LR、ミガキ	LR	LR	ミガキ	網代痕	Ⅲ-10	

75図　第813号埋設土器・出土遺物



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	814埋	第H-13		RL、沈線	RL	ミガキ	胴代痕	Ⅲ-10	炭化物付着(外面)

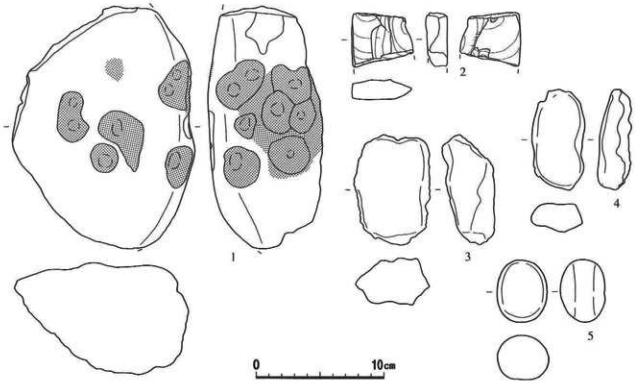
76図　第814号埋設土器・出土遺物



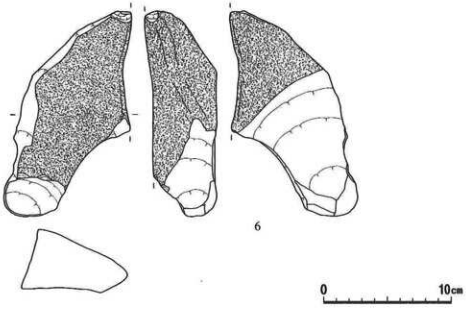
0 10cm

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	818環	第B-138	LR	LR	LR	ミガキ	網代痕	Ⅲ-10	波状口縁

77図　第818号埋設土器・出土遺物



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	812埋	埋積土	(192)	(142)	(90)	(2089.8)	凝	L		90876
2	〃	〃	(42)	(48)	(16)	(43.0)	流	Q		90787
3	〃	〃	87	59	37	144.1	凝	W		90831
4	〃	〃	79	41	26	107.4	流	〃	S-11	90777
5	〃	〃	49	40	35	91.1	安	〃	S-7	90782



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
6	818埋	埋積土	(162)	(99)	(56)	(506.0)	凝	Sd	S-2	90637

78図　第812・818号埋設土器・出土遺物

番号	出土地点	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	814埋	埋積土	27	18	10	6.4	頁	W		90736

79図　第814号埋設・出土遺物

4）道路跡

1条確認された。調査区内を縦断して分布しており、南端・北端ともに未確認である。第4・7・8次調査によって明らかとなった集落東側の道路跡と区別をつけるため、今回報告分する道路は第2号道路跡、集落東側の道路は第1号道路跡と遺構番号を付すこととした。

第2号道路跡（80～91図、写真30～35・51～53、口絵5）

[位置と確認]　中位段丘に移行する斜面際の、ⅦA－135からⅤK－170を結ぶ範囲に位置する。路面の標高は17.12～20.3mである。第13次調査において旧都市計画道路予定区の北側壁面を清掃した際、第Ⅱ層直下の第Ⅵ層土のブロック層と、第Ⅲ層の欠落範囲として確認された。第14・17・20次調査を通じ、範囲確認と精査の継続を行っている。

第13・14・17次調査では、第Ⅵ層土のブロックが集中する面をもって道路跡とし、範囲確認の基準とした。第14次調査で一部検出された路肩は、第20次調査で全体的に検出が可能であることがわかり、底面に露出した土層と合わせて検出・記録を行っている。

[重複]　第250・251・252・257・258・271号溝、畠跡より古い。第24・25号配石とは第Ⅵ層土のブロック層が、第11号配石とは削平痕跡が重複し、本遺構が新しい。多くの風倒木痕と重複するが、第ⅢまたはⅤ層が底面に残存する箇所に多い。

[平面形・規模]　N－33°－Wの方角で直進する帯状の痕跡である。調査区内での北端はⅦA－135、南端はⅤP－173であり、総延長にして185mが確認されている。掘り込み上端で計測した道幅は、最大がⅥⅠ－144～ⅥM－149の21.6m、最小がⅥA－159～ⅥD－161の14.5mで、平均幅は17.36mである。掘り込み下端では、最大がⅥⅠ－146～ⅥK－158の14.8m、最小がⅥC－159～ⅥD－159の5.5mで、平均幅9.27mである。ともに北側が広く、南側が狭い傾向がある。ロームブロックを含めた総面積は2,494㎡である。

[路肩・底面]　路肩は底面との境目が曖昧で、緩やかな角度である。掘り込み角度も緩やかであるため、全体としては上端、下端が不明瞭である。ⅥA～C－135でのみ、壁高6㎝の比較的明瞭な路肩が検出されたが例外的である。調査区の北側では第Ⅲb・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層、南側では第Ⅲb～Ⅴ層が壁面に露出しており、地点によって掘り込まれる土層に差異があることを示している。壁高は、西壁のⅥM－147・148で最高の92cmとなり、斜面に接する西壁が高くなる傾向が強い。

底面は起伏のない平坦な作りである。調査区の南側では第Ⅲ・Ⅴ層中に、北側では第Ⅵ・Ⅶ層を掘り込んで作られることが多い。底面の標高は、北側がⅥT－135で最低標高17.16mとなる。南側はⅤM－172で最高19.405mとなり、全体が旧野球場建設予定地の方向に僅かに傾斜する。

第Ⅵ・Ⅶ層の露出範囲では特に平坦だが、汚れが全面に目立つ。硬さも見られるが、第Ⅶ層本来の硬さを超える硬化面は認められなかった。

第Ⅲ・Ⅴ層が残存する底面では、第Ⅵ層に由来する粒径７㎝までのロームブロックが554㎡確認された。ブロックの輪郭は明瞭で風化が認められず、人為的に散布されたものと考えられる。第Ⅶ層が露出した面には少なく、第11～13、15～17、24～25号配石に沿った範囲において特に濃密である。また、路面の西側から路肩にかけてでは、粒径が小さく、密度の低い分布域が見られる。

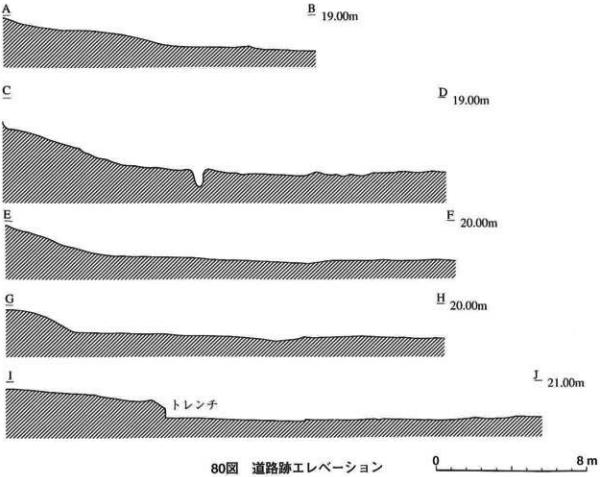
[堆積土]　底面・壁面の直上には第Ⅲ層は見られず、第Ⅱc層がのみ堆積する。層界は画然としているが、第Ⅵ層のブロックうち、少量が第Ⅱc層中に浮かんでいる。ブロックに風化が認められないことから、これは第Ⅱc層から多数入り込む細かい植物攪乱によって巻き上げられたものと判断した。

[出土遺物]　路面に接して、Ⅲ群４・６・８～11類の土器片と、石鏃、ピエス・エスキーユ、不定形石器、石核、石斧、敲磨器類、石皿類、石棒、砥石、角柱状の礫が出土した。

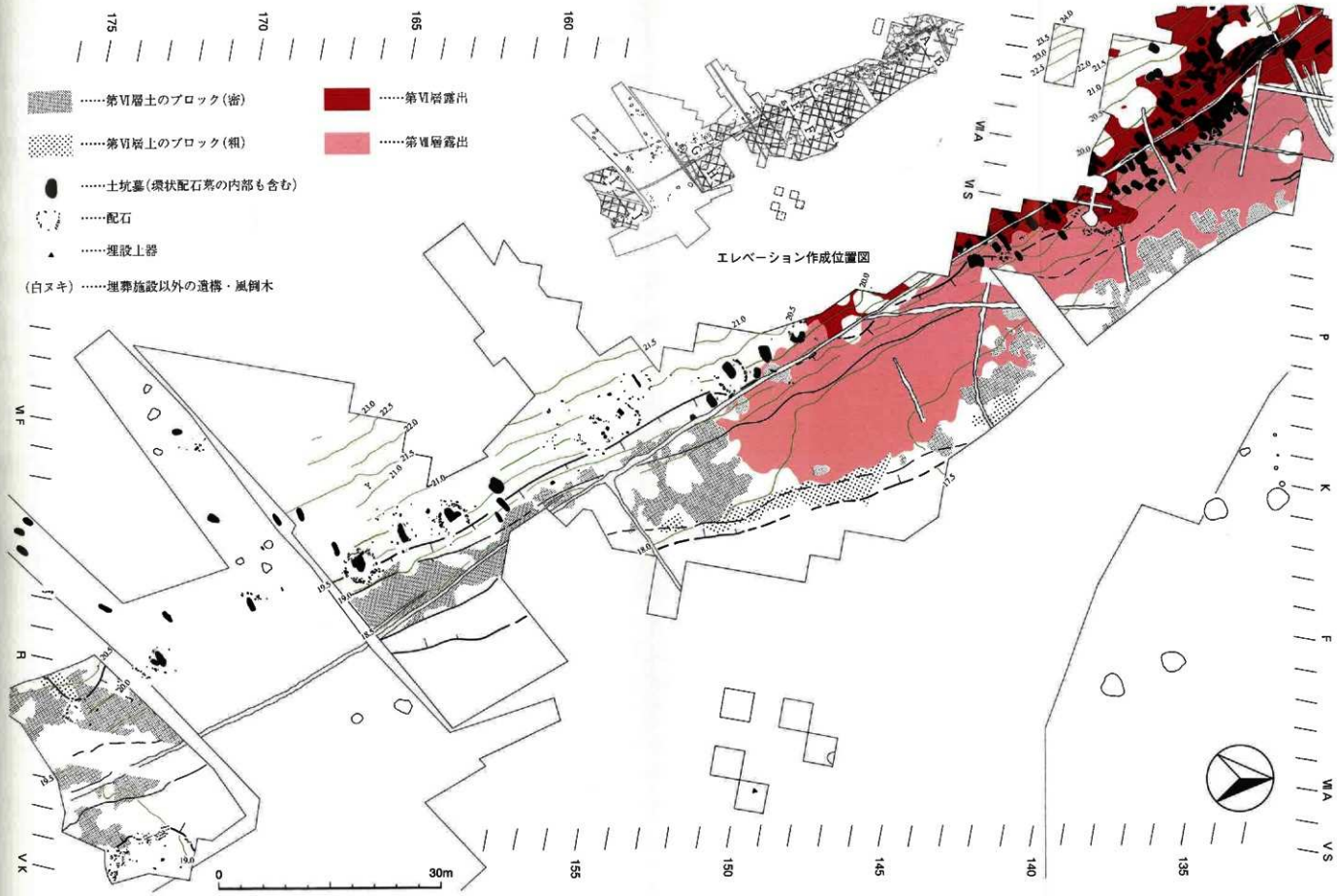
[時期]　調査区南側での層位関係から見て、縄文時代中期中葉の第Ⅲb層を掘り込み、中期後葉の最花式期以降に形成される第Ⅱc層が直上に堆積する点、第11号配石を掘り残している点から縄文時代中期中葉～後葉であると考えられる。道路面直上からの出土遺物からも同様の結果が導かれる。

ただし、遺構配置の点から考えた場合、並列する列状墓に中期前葉の土坑墓、中期末葉の埋設土器も含まれており、南側の層位関係から導かれた結果と整合しない。底面直上からは中期末葉の土器片が出土しており、出土遺物の点からも中期末葉までの存続期間が想定される。本遺構の構築に時間差・地点差を認める場合、中期前葉から末葉に至る時期幅が考えられる。

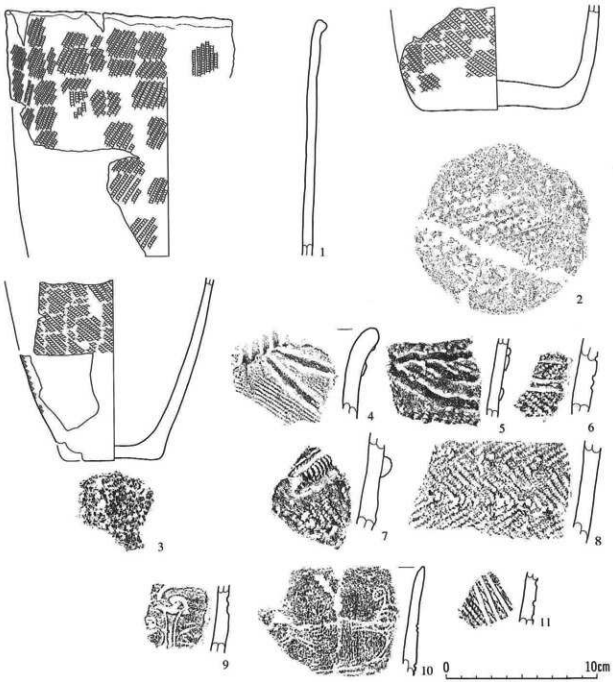
（秦　光次郎）



80図　道路跡エレベーション

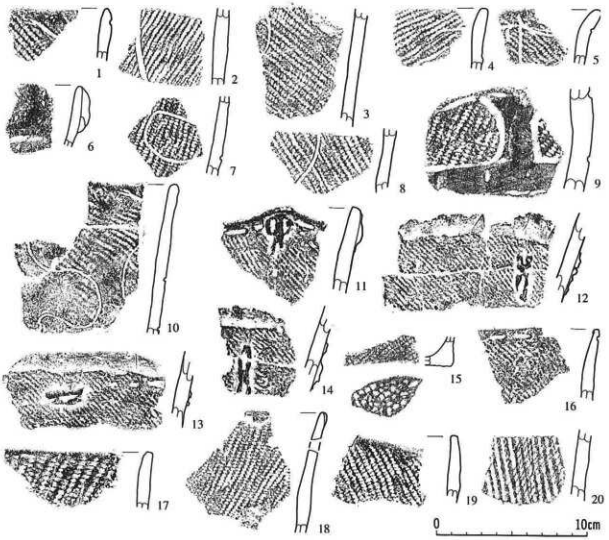


81・82図　第2号道路跡



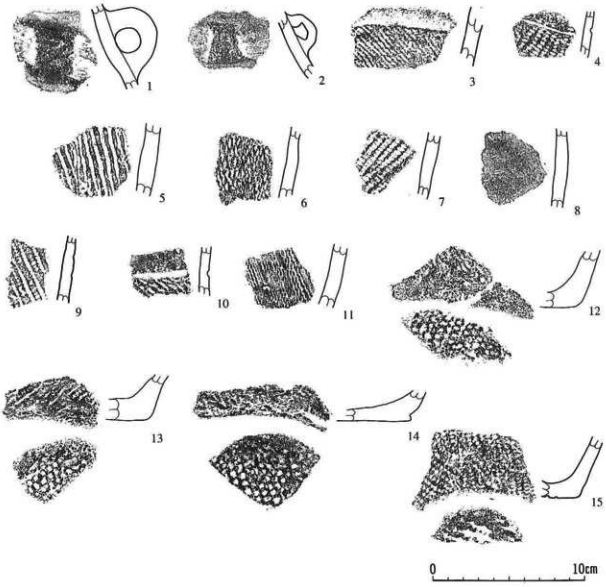
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	道路跡/EB444	路面（Ⅱc）	RL	RL		ミガキ		Ⅲ-11	
2	道路跡/EB442	＊			LR	＊	胴代跡	＊	
3	道路跡/EB469	路面（Ⅱ管下）		LR	＊		＊	＊	
4	道路跡/EB442	路面（Ⅱc）	LR押（口縁）、RL、貼付			ミガキ		Ⅲ-4	P-158 波状口縁
5	道路跡/EB439	＊		結束第Ⅰ種(LR・RL)、貼付				＊	P-444
6	道路跡/EB439	＊		RL、沈線		ミガキ		Ⅲ-5・8	P-446
7	道路跡/EB440	＊	貼付(L押)、L・R押	RL(結束第Ⅰ種)		＊		Ⅲ-6	P-346
8	道路跡/EL442	＊		結束第Ⅰ種(LR・RL)		＊		＊	P-159
9	道路跡/EL443	＊		沈線		＊		Ⅲ-8	P-164
10	道路跡/EL444	＊	L単節Ⅰ、沈線					＊	P-309
11	道路跡/EM442	＊		RL、沈線				Ⅲ-8・9	P-133

83図　道路跡出土遺物(1)



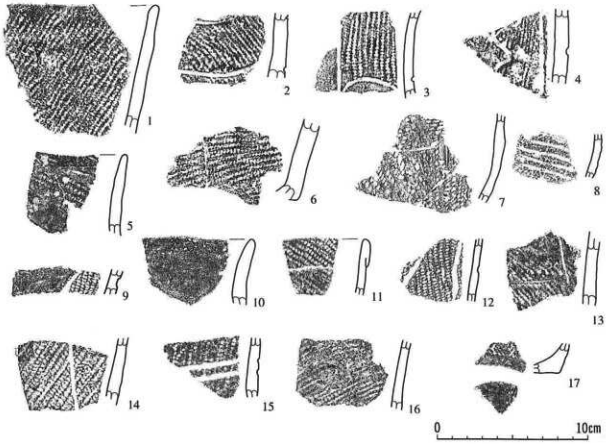
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	道路跡(Ⅲ4-142)	撹乱(Ⅲc)	LR、沈線			ミガキ		Ⅲ-9・10	P-234
2	道路跡(Ⅲ2-140)	〃		RL、沈線		〃		〃	P-464
3	道路跡(Ⅲ4-141)	〃		LR、沈線		〃		〃	P-237
4	道路跡(Ⅲ3-144)	〃	LR、沈線			〃		Ⅲ-10	P-227
5	道路跡(Ⅲ1-143)	〃	RL、沈線、刺突					〃	P-182
6	道路跡(Ⅲ8-142)	〃		貼付(ヒレ状・刺突)		ミガキ		〃	P-301、共伴指付蓋(内面)
7	道路跡(Ⅲ2-140)	〃		RL、沈線		〃		〃	P-469
8	道路跡(Ⅲ4-141)	〃		LR、沈線		〃		〃	P-238
9	道路跡(Ⅲ2-141)	〃		磨滅(RL、沈線)				〃	P-507
10	道路跡(Ⅲ3-140)	〃	RL、沈線			ミガキ		〃	P-336、共伴指付蓋(外面)
11	道路跡(Ⅲ4-143)	〃	L、貼付(刺突隆)、刺突隆			〃		Ⅲ-10 Ⅲ-4	P-246、波状口縁
12	道路跡(Ⅲ4-142-143)	〃		L、貼付(短沈線)		〃		〃	P-336・337、338・339三個体
13	道路跡(Ⅲ4-143)	〃	L、貼付(短沈線)			〃		〃	P-396、110・111二同一個体
14	道路跡(Ⅲ4-142-143)	〃		L、貼付(短沈線)		〃		〃	P-385、108・110三同一個体
15	道路跡(Ⅲ7-135)	〃			LR	〃	胴代跡	Ⅲ-11	
16	道路跡(Ⅲ4-143)	〃	L、短沈線			〃		〃	P-297
17	道路跡(Ⅲ6-143)	〃	RL			〃		〃	P-53
18	道路跡(Ⅲ3-144)	〃	貼付(折り返し状)、RL	RL		〃		〃	P-214
19	道路跡(Ⅲ4-142)	〃	LR			〃		〃	P-233
20	道路跡(Ⅲ9-141)	〃		L単節1		〃		〃	P-400

84図　道路跡出土遺物(2)



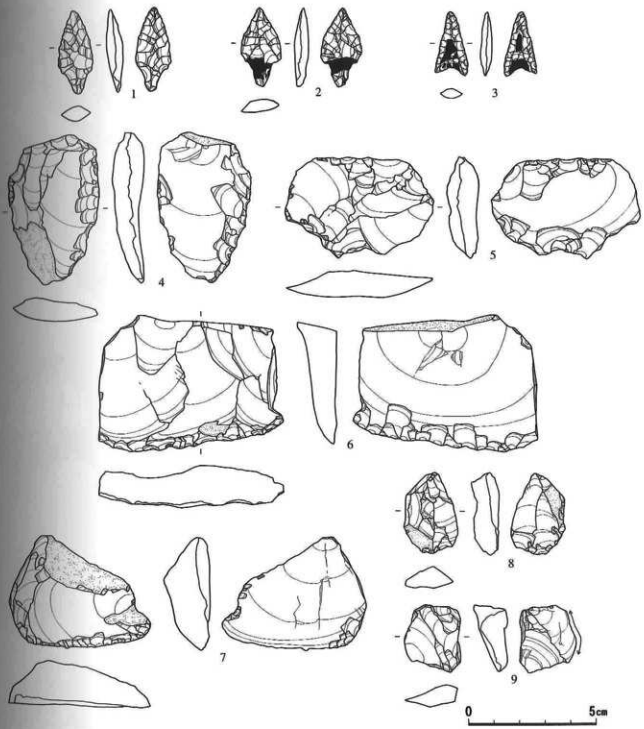
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	道路跡(XIM-143)	路面(Ⅱc)		橋状把手		ミガキ		Ⅲ-11	P-121
2	道路跡(XIP-140)	〃		橋状把手		〃		〃	P-439
3	道路跡(XIM-143)	〃			L	〃		〃	P-281
4	道路跡(XIP-140)	〃		RL、沈線		〃		〃	P-424
5	道路跡(XIP-140)	〃		L単節 I				〃	P-433
6	道路跡(XIQ-141)	〃		R単節 I		ミガキ		〃	P-502
7	道路跡(XIO-140)	〃		沈線		〃		〃	P-342
8	道路跡(XIK-143)	〃			RL	〃		〃	P-275
9	道路跡(XIM-142)	〃		LR、沈線		〃		〃	P-235
10	道路跡(XIQ-141)	〃		R、沈線		〃		〃	P-495
11	道路跡(XIK-138)	〃		R単節 I		〃		〃	
12	道路跡(XIQ-140)	〃			RL	〃	胴代跡	〃	P-481
13	道路跡(XIP-140)	〃			RL	〃	〃	〃	P-434
14	道路跡(XIQ-140)	〃					〃	〃	P-479
15	道路跡(XIK-143)	〃			RL	ミガキ	〃	〃	P-208、赤色顔料付着(内面)

85図　道路直上跡出土遺物(3)



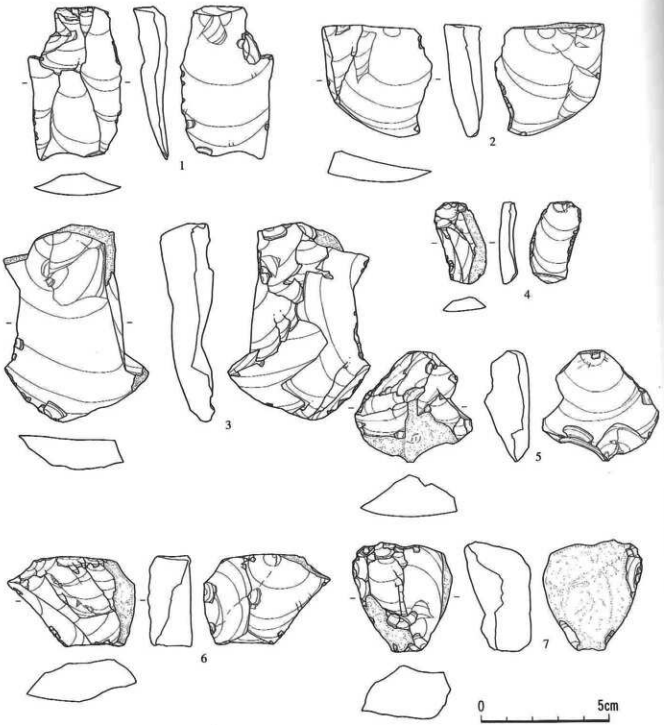
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	道路跡(Ⅶ-146)	路面(Ⅱb下位)	LR			ミガキ		Ⅲ-11	
2	道路跡(Ⅶ-126)	路面(Ⅱ下位)		RL、沈線		〃		Ⅲ-10	
3	道路跡(Ⅶ-172)	〃		磨消(RL、沈線)		〃		〃	
4	道路跡(Ⅶ-169)	〃		RL、沈線		〃		Ⅱ-11 Ⅳ-1	炭化物付着(内面)
5	道路跡(Ⅶ-130)	〃	RL			〃		Ⅲ-11	波状口縁
6	道路跡(Ⅶ-171)	〃			LR	〃		Ⅱ-6	礫混入
7	道路跡(Ⅶ-150)	路面(Ⅱ)			RL			Ⅲ-11	
8	道路跡(Ⅶ-135)	路面	L押?					Ⅱ-5-1	
9	道路跡(Ⅶ-156)	〃			磨消(沈線、LR)			Ⅲ-10	
10	道路跡(Ⅶ-143)	〃	無文			ミガキ		Ⅲ-11	
11	道路跡(Ⅶ-156)	〃	折返口縁(RL)	RL				〃	
12	道路跡(Ⅶ-142)	〃		RL、沈線				〃	
13	道路跡(Ⅶ-143)	〃		LR?、沈線				〃	
14	道路跡(Ⅶ-156)	〃			RL、沈線	ミガキ		〃	
15	道路跡(Ⅶ-143)	〃		RL、沈線		〃		〃	
16	道路跡(Ⅶ-157)	〃		LR		〃		〃	
17	道路跡(Ⅶ-144)	〃			RL			〃	

86図　道路跡直上出土遺物(4)



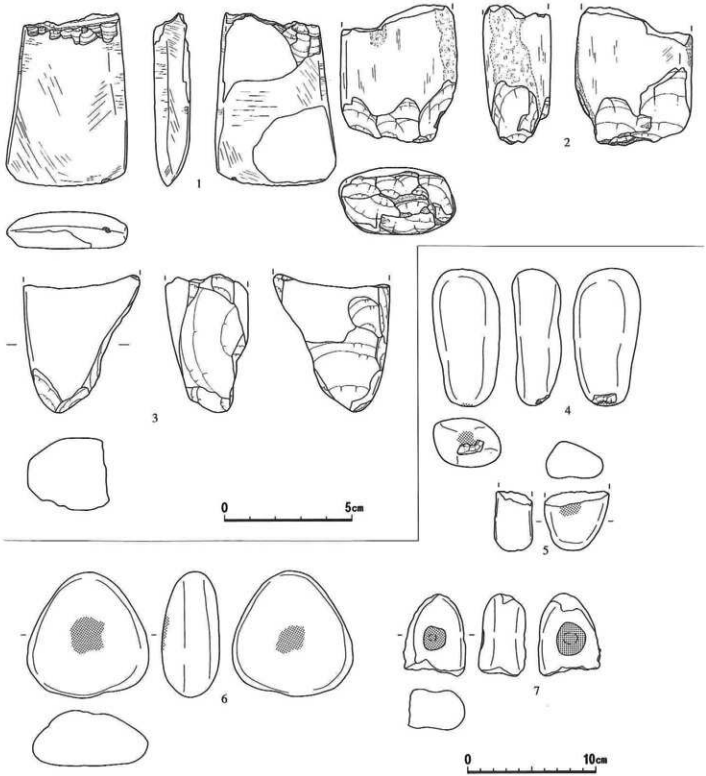
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	道路跡(ⅥM-143)	路面(Ⅲ)	33	14	6	2.2	珪頁	Ab		100523
2	道路跡(ⅥC-159)	〃	31	15	5	2.1	〃	〃	アスファルト	100502
3	道路跡(ⅥL-143)	路面(Ⅱe)	25	13	4	0.9	〃	Af	〃	100547
4	道路跡(ⅥI-146)	路面(Ⅱf)	60	37	12	24.2	〃	Ga		100580
5	〃	〃	40	58	12	26.0	〃	〃		100619
6	道路跡(ⅥM-143)	路面(Ⅱe)	54	72	16	54.6	〃	〃	S-25	100576
7	道路跡(ⅥM-142)	〃	45	56	18	35.7	〃	〃	S-30	100593
8	道路跡(ⅥK-146)	路面(Ⅱb?f)	33	26	11	10.2	〃	F		101096
9	道路跡(ⅤM-169)	路面(Ⅱ)	27	22	13	5.3	玉髄	Gc	両極	100438

87図　道路跡直上出土遺物(5)



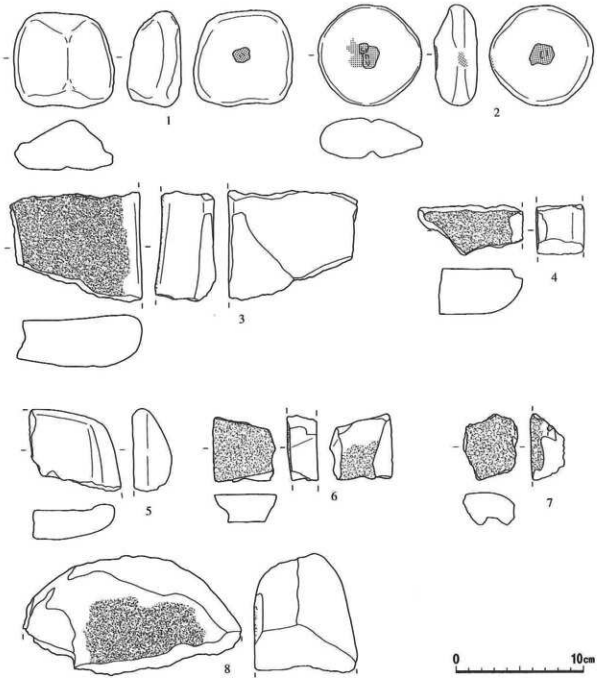
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	道路跡(VIM-143)	路面(Ⅲ)	61	37	18	17.8	硅質	Gc		100629
2	道路跡(VIN-144)	路面(Ⅱ下)	45	43	15	20.1	*	Gb		100597
3	道路跡(VI1-146)	*	78	56	21	67.4	*	Gc		100600
4	道路跡(VIM-168)	路面(Ⅱ)	32	20	7	4.2	*	*		100436
5	道路跡(VIL-146)	路面(Ⅱb)	44	46	17	24.8	*	Pc		101013
6	道路跡(VIM-169)	路面(Ⅱ)	36	49	17	30.0	*	*		100439
7	道路跡(VIF-152)	路面(Ⅲ)	44	39	26	42.2	*	Pa		100610

88図　道路跡直上出土遺物(6)



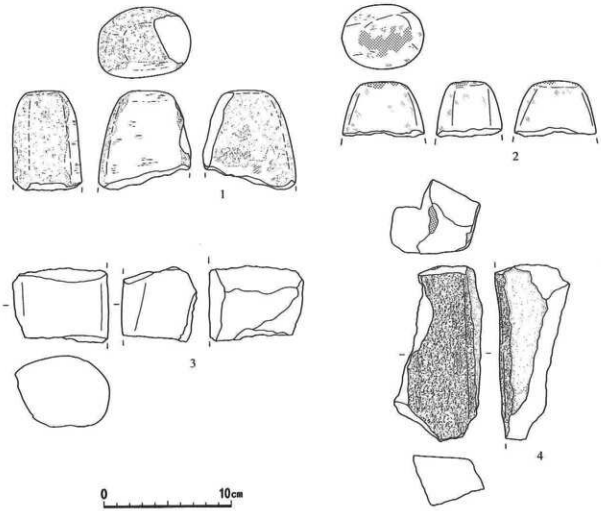
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	道路跡(Ⅶ M-143)	路面(Ⅱ)	68	47	14	(71.9)	頁	Ha		32986
2	道路跡(Ⅵ R-138)	路面(Ⅱe)	(55)	46	26	(104.6)	緑	*	S-85	100642
3	*	*	(54)	(45)	(32)	(88.2)	珪	*	S-86 焼け	102349
4	道路跡(Ⅶ M-142)	*	108	52	38	281.6	流	Ib	S-49	102338
5	道路跡(Ⅶ Q-141)	路面(Ⅱb)	(47)	(50)	(29)	(88.5)	安	*		102334
6	道路跡(Ⅵ I-145)	路面(Ⅱb下)	99	94	45	448.3	*	*		102335
7	道路跡(Ⅵ L-142)	路面(Ⅱe)	65	48	37	143.4	*	Ia	S-54	102337

89図　道路跡直上出土遺物(7)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	道路跡(VIM-142)	路面(Ⅱc)	76	78	42	289.2	凝	Ia		102348
2	道路跡(VIM-143)	〃	79	81	34	236.4	礫岩	〃		102350
3	道路跡(VIS-138)	〃	(87)	(101)	(47)	(519.6)	凝	L	S-93	102341
4	道路跡(VIM-142)	〃	(40)	(83)	(41)	(140.4)	〃	〃		102339
5	道路跡(VIO-140)	〃	(65)	(70)	(30)	(87.6)	〃	〃	S-59	102343
6	道路跡(VIK-144)	路面(Ⅱ)	(51)	(48)	(23)	(79.6)	〃	〃		90641
7	道路跡(VIM-143)	〃	(52)	(42)	(25)	(53.0)	安	Ic	石棒？	90789
8	道路跡(VIJ-148)	路面(Ⅱc)	(95)	(169)	(80)	(1435.9)	凝	L		102347

90図　道路跡直上出土遺物(8)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	道路跡(VIN-143)	路面(Ⅱ)	(78)	72	55	(415.9)	安	Ma	焼け 磨り石？	102346
2	〃	路面(Ⅱ)	(44)	(64)	(51)	(171.1)	凝	〃	破片	90744
3	〃	路面(Ⅱ上)	(59)	(74)	(59)	(345.2)	流	〃	〃	90751
4	道路跡(VIN-171)	路面(Ⅱ下)	(138)	(72)	(58)	(379.6)	凝	Sb		102333

91図　道路跡直上出土遺物(9)

5）竪穴住居跡

平成６年度の試掘調査で確認された３棟を含め、調査区の北西を中心に18棟が確認された。各調査での検出数は、第14次調査で13棟、第17次調査で２棟である。うち、第14次調査で２棟、第17次調査で１棟を精査している。

調査区内の住居跡は、墓域と盛土遺構に挟まれた位置に分布する。縄文時代の竪穴住居跡で時期の判明したものでいうと、第664号住居跡が前期末葉、他は全て中期中葉のものであった。

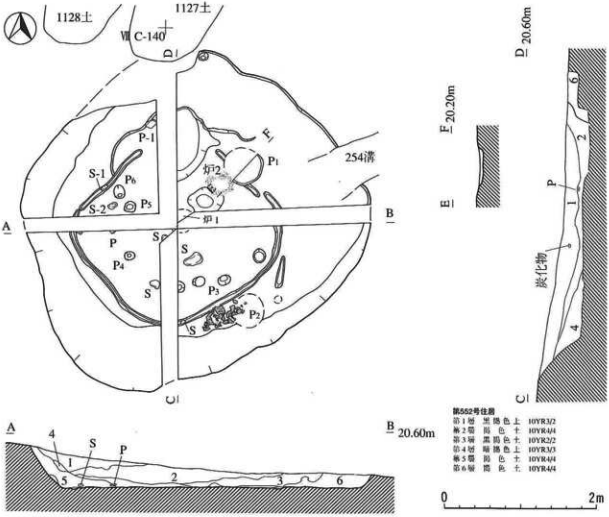
第552号住居跡（92～97図、写真36・54・55）

[位置と確認]　Ⅶ B・C－140・141に位置する。床面での標高は20.16mである。平成６年に行われた、旧取り付け道路建設予定地の試掘調査によって確認され、第17次調査で精査している。

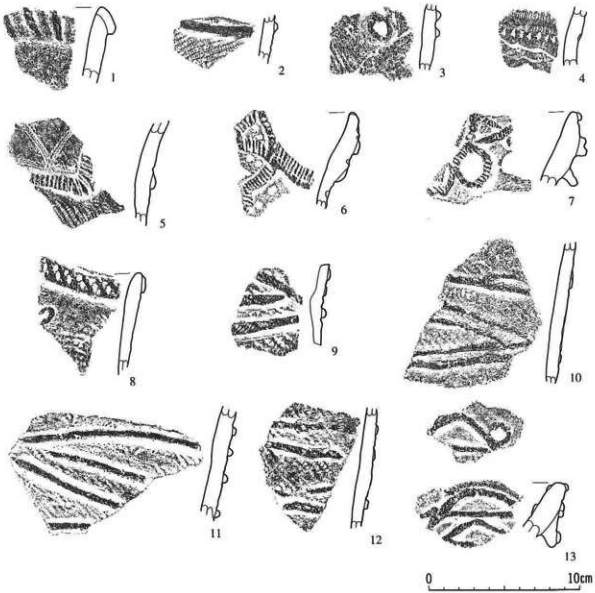
[重複]　第673・674・676号住居跡より新しく、第1127号土坑、第254号溝より古い。また、貼り床の下からは土坑墓と思われる遺構が確認されている。

[平面形・規模]　長軸は３m96cmの、円形に近い隅丸方形の平面形で、床面積は14.90m²である。

[壁・床]　第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層を掘り込んで比較的緩やかに立ち上がる。北壁28cm、西壁56cm、南壁52cmの壁高である。床面は第Ⅵ・Ⅶ層上につくられ、一部第Ⅵ層を用いた貼り床が施されていた。Pit２直

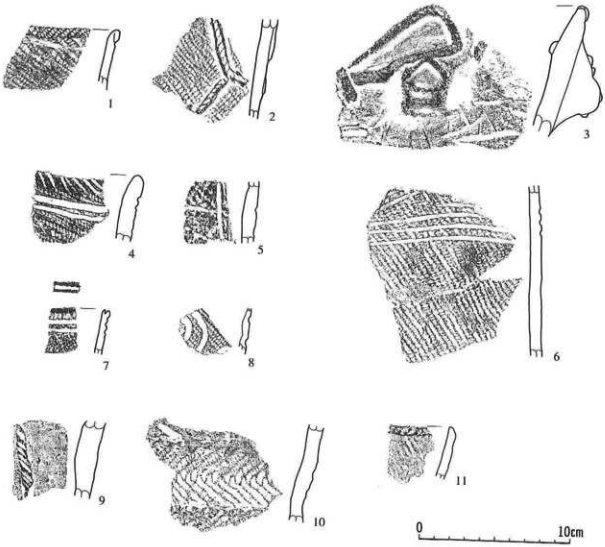


92図　第552号住居跡



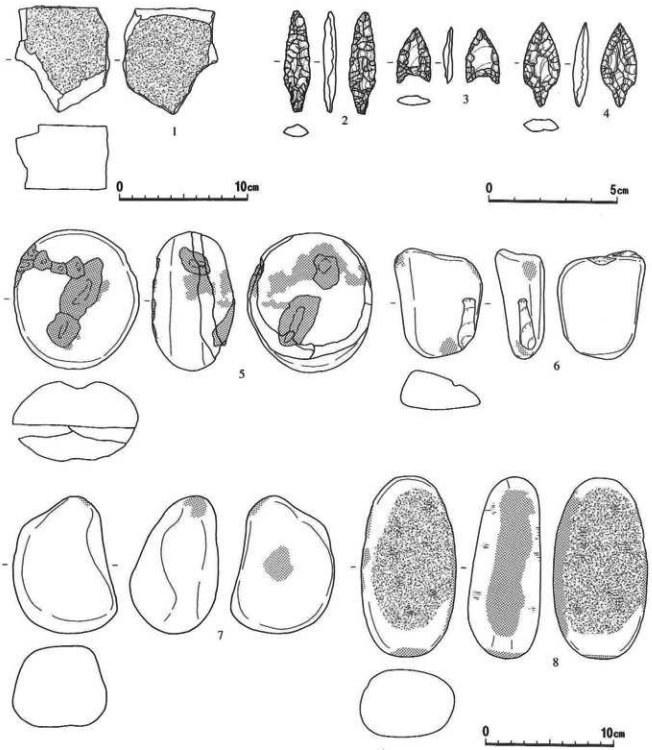
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	552H	床直	貼付					Ⅲ-4	
2	〃	〃		LR、貼付		ミガキ		〃	
3	〃	〃		RL、貼付		〃		〃	
4	〃	堆積土	R単節Ⅰ押、側突	RL、R結回		〃		Ⅱ-5-2	
5	〃	〃	貼付(R押)、R・L押	RL		〃		Ⅲ-1	
6	〃	〃	貼付(R押)、刺突、貫通孔			〃		Ⅲ-3	波状口縁
7	〃	〃	貼付(L押)、貫通孔			〃		Ⅲ-3・4	〃
8	〃	〃	貼付(L押)	RL、貼付		〃		Ⅲ-4	〃
9	〃	〃		〃				〃	
10	〃	〃		撚糸第Ⅰ種(LR・RL)、貼付		ミガキ		〃	
11	〃	〃		〃		〃		〃	
12	〃	〃		撚糸第Ⅰ種(LR・RL)、貼付(RL)		〃		〃	
13	〃	〃	貼付			〃		Ⅲ-4・5	波状口縁、内面に貼付・付着

93図　第552号住居跡・出土遺物(1)



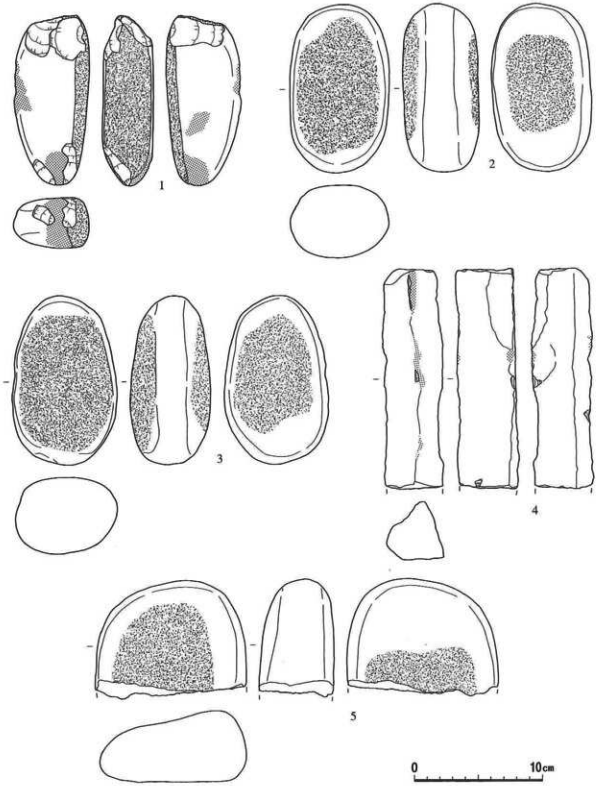
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	552H	埋積土	貼付(LR)、RL			ミガキ		Ⅲ-4・5	波状口縁
2	〃	〃		RL、貼付(LR)		〃		〃	
3	〃	〃	張付肥厚(渦巻状)、指圧	沈線		〃		Ⅲ-5	波状口縁、内面に粘付
4	〃	〃	R押、RLR、沈線			〃		〃	波状口縁、煤化物付着(外面)
5	〃	〃		RL、沈線		〃		〃	
6	〃	〃		〃		〃		〃	
7	〃	〃	沈線(口縁)、RL、沈線			〃		Ⅲ-8	炭化物付着(外面)
8	〃	〃		LR、沈線				〃	
9	〃	確認面		貼付(L押)		ミガキ		Ⅲ-3・4	
10	〃	〃		結束部1種(RL・LR)		〃		Ⅲ-6	
11	〃	〃	RL押、RL			〃		Ⅲ-11	

94図　第552号住居跡・出土遺物(2)



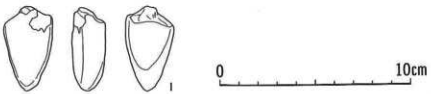
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	552住	床直	(84)	(73)	(51)	(416.2)	安	L	破片	第C-140 102331
2	*	埋積土	40	10	5	2.1	珪質	Ab	アスファルト	第B-140 91963
3	*	*	22	13	5	0.9	*	Af		第C-140 91964
4	*	*	33	14	6	2.2	玉髄	Ab		第B-140 99967
5	*	*	109	96	65	(578.9)	凝	Ia		第C-140 102353
6	*	確認面	87	68	38	257.2	安	Ib		第B-141 90957
7	*	*	108	81	69	654.2	頁	*		第C-141 90959
8	*	*	143	74	56	839.8	流	*		* 90960

95図　第552号住居跡・出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	552住	確認面	134	59	39	470.2	安	Ic	石庇？ 第B-141	90958
2	〃	埋積土	134	77	59	845.9	流	〃	第C-140	102355
3	〃	〃	134	81	63	825.0	〃	〃	〃	102356
4	〃	〃	(174)	48	48	(484.6)	〃	Ub	第B-140	102332
5	〃	〃	(93)	117	57	(909.9)	安	L	第C-140	102354

96図　第552号住居跡・出土遺物(4)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	備考	整理番号
1	552住	堆積土	45	25	13	15	土製品		8087

97図　第552号住居跡・出土遺物(5)

上から西側の長さ約60cm、幅約30cmの範囲の床面からは、炭化木片がまとまって検出されている。

［壁溝］　壁溝は幅約8cm、深さ3cmで、北側を除きほぼ全周する。

［柱穴］　柱穴は4基確認された。それぞれの深さは、P_3…22cm、P_4…12cm、P_5…24cm、P_6…7cmである。主柱配置は不明である。

［炉］　床面中央のやや北東よりで、地床炉を確認した。40×34cmの環状の焼土で、赤褐色に変色していた。未精査であるが、中央部からも地床炉と思われる掘り込みが検出されている。

［その他の施設］　西側の壁際からは、径48cm、深さ6cmの浅い円形ピットが確認された。P_1としたが、特殊施設に相当すると思われる。

［堆積土］　堆積土は6層に分層された。暗褐色土を主体で、粒状の炭化木片が比較的多く混入する。

［出土遺物］　床面直上からⅡ群5類、Ⅲ群4類の土器片と石皿・台石類1点、剥片2点が、堆積土からⅢ群4・5類の土器片と石鏃3点、R.フレイク9点、U.フレイク10点、凹石1点、磨石1点、石皿・台石類1点と角柱状の礫1点と土製品1点が、確認面からⅢ－4～6・11類の土器片とR.フレイク1点、敲石3点、磨石2点がピットからU.フレイク2点、剥片3点が出土している。

［時期］　床面直上・堆積土内出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

第661号住居跡（98図、写真36・55）

［位置と確認］　ⅦC・D－138・139に位置する。床面での標高は20.34mである。第14次調査で第Ⅴ層を掘り下げた際、その上面で確認した。同調査で東側の一部を精査している。

［重複］　第1085・1162号土坑、第253号溝より古い。第~~1263~~1163号土坑とは不明である。

［平面形・規模］　遺構の重複が激しいため、西側のプランは不明であった。円形に近い楕円形の平面形と思われる。

［壁・床］　第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層を掘り込んで比較的緩やかに立ち上がる。壁高は東壁で28cmである。床面は第Ⅵ・Ⅶ層上に平坦につくられる。

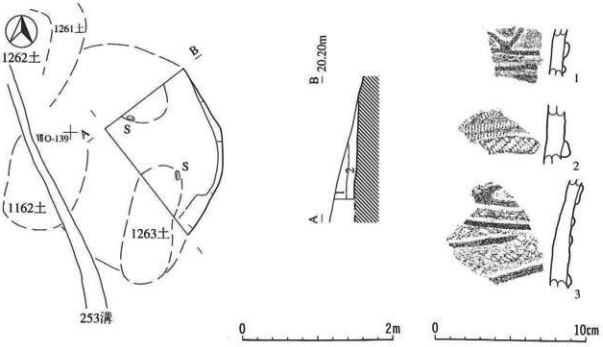
［柱穴］　北東側に1基確認された。

［炉］　精査範囲では検出されなかった。

［堆積土］　堆積土は2層に分層された。暗褐色土を主体とし、比較的均質な堆積である。

［出土遺物］　堆積土からⅢ群1・4類の土器片が確認面から剥片が1点出土している。

［時期］　堆積土内の出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期のものと考えられる。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
オ1	661H	堆積土	貼付8平3押,8平3押					Ⅱ-5-2・Ⅲ-1	
ヌ1	*	*		貼付		ミガキ		Ⅲ-4	
3	*	*		LR、貼付		*		*	

98図　第661号住居跡・出土遺物

第662号住居跡（99・100図、写真36・57）

[位置と確認]　Ⅶ G・H－134・135に位置する。床面での標高は19.75mである。第14次調査において第Ⅰ層除去中、Ⅲ層上に床面を確認した。第14次調査で精査を行っている。

[重複]　第663号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模]　削平により大半の壁、床を失っているため、平面形は不明である。残存長は3 m60 cmである。

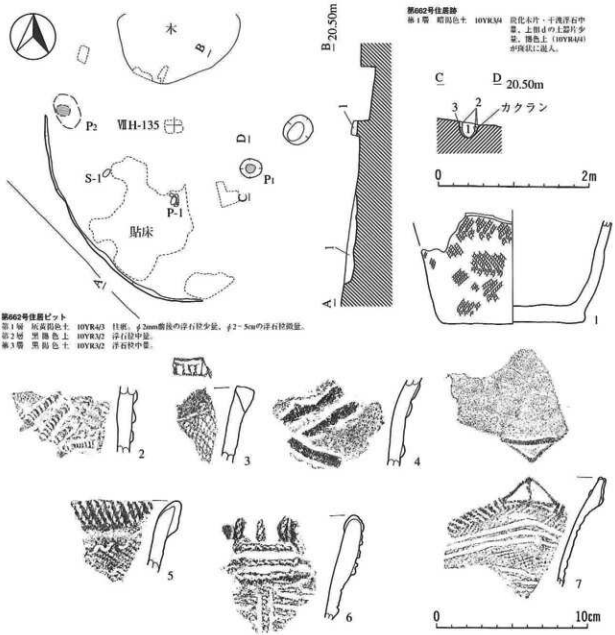
[壁・床]　壁は南西側のみ残存していた。第Ⅲ層を掘り込んでつくられ、壁の残存高は最大で8 cmである。床は第Ⅲ層中につくられる。残存した床面は平坦で、第Ⅵ層の浮石を細かく混入した土壌で貼床がなされる。床面には若干の硬化が見られた。

[柱穴]　2基確認された。P_1は長軸25～短軸29cmの楕円形で、直径18cmの柱痕が検出されている。深さは22cmである。P_2は未精査であるが、確認面で長20cmの柱痕が検出されている。規模は長軸46cm、短軸32cmである。

[炉]　検出されなかった。

[堆積土]　堆積土は暗褐色土を主体とし、粒状の炭化木片の混入が比較的多く見られた。

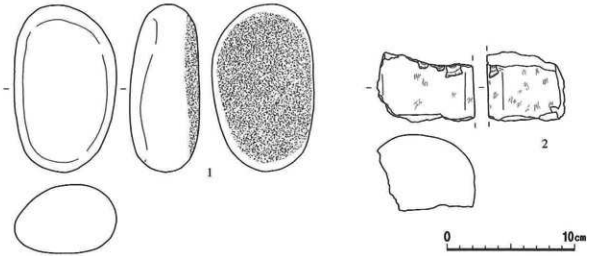
[出土遺物]　床面直上からⅢ群4・6類の土器片と磨石1点が、堆積土からスクレイパー類1点、R.フレイク1点、U.フレイク2点、剥片3点が、確認面からⅢ群4～6類の土器片とスクレイパー類1点、R.フレイク1点、磨石1点、石棒1点、剥片3点が出土している。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	662H	床面				ミガキ	ナデ	Ⅲ-6	
2	〃	堆積土			撚糸第1種(LR・RL)、結束(縦)	〃		Ⅲ-4	
3	〃	〃	刺突・沈線(口唇)	RLR		〃		Ⅱ群-4・5	
4	〃	確認面		貼付		〃		Ⅲ-4	
5	〃	〃	LR押	結束第2種(RL)		〃		Ⅲ-4・5	炭化物付着（外面）
6	〃	〃	貼付（LR押）	LR？、沈線		〃		Ⅳ-5	波状口縁
7	〃	〃	貼付、LR押	LR、沈線		〃		Ⅲ-5	波状口縁、炭化物付着（外面）

99図　第662号住居跡・出土遺物(1)

［時期］　構築層位及び堆積土出土遺物から、縄文時代中期中葉の円筒上層ｅ式期に近い時期である。



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	662住	床直	132	80	55	793.4	流	Ic	Ⅶ H-135	90963
2	＊	確認面	(55)	(77)	(61)	(320.1)	安	Ma	＊	90964

100図　第662号住居跡・出土遺物（2）

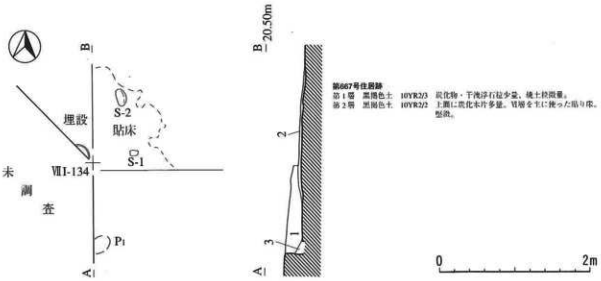
第667号住居跡（101図、写真36・57）

[位置と確認]　ⅦH・Ⅰ－133・134に位置する。床面での標高は19.89mである。第14次調査において第Ⅲ層を掘り下げ中、調査区の壁面において埋設土器を確認した。南西側は未確認である。確認・精査ともに第14次調査で行っている。

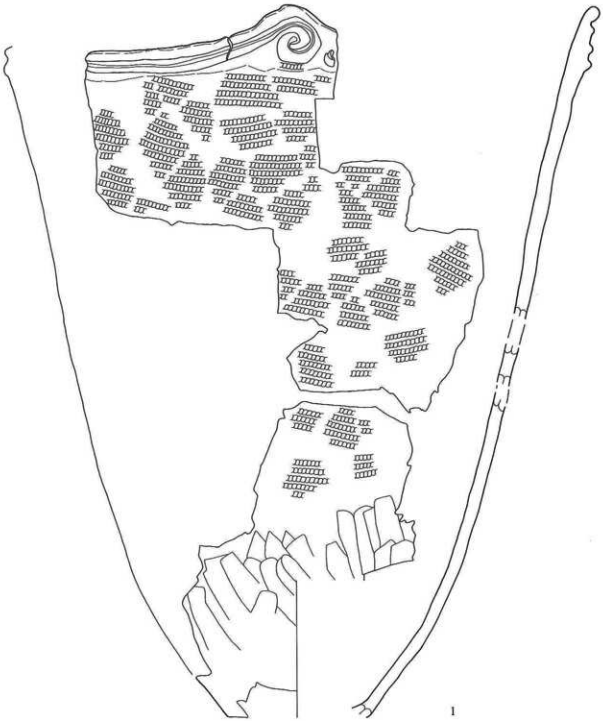
[重複]　第663号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模]　削平により大半の壁、床を失っているため、平面形は不明である。残存長は2 m48 cmである。

[壁・床]　壁は南西側のみ残存していた。第Ⅲ層を掘り込んでつくられ、壁の高さは最大で8 cm程である。床は第Ⅲ層中に平坦につくられる。炉を中心とした範囲では第Ⅵ層を主とした土壌で貼床がな



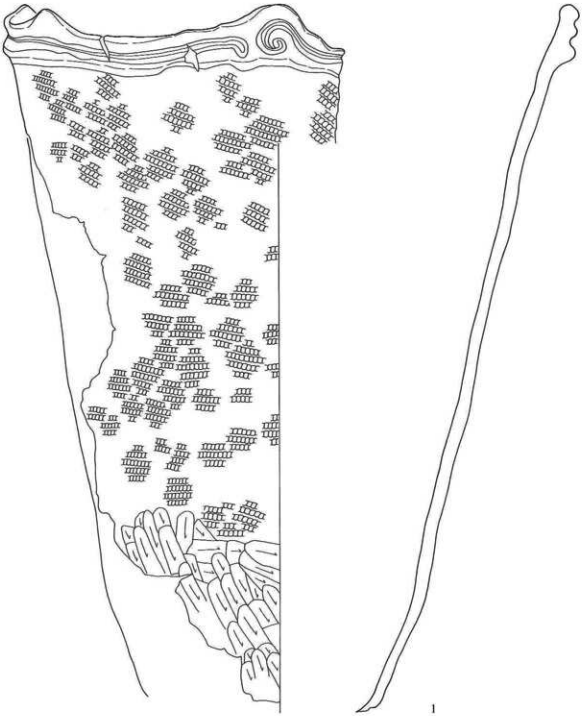
101図　第667号住居跡



0 10cm

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	550M⑤	縄認面	沈線・ミガキ	LR	LR、ケズリ	ミガキ		Ⅲ-8	3波状口縁

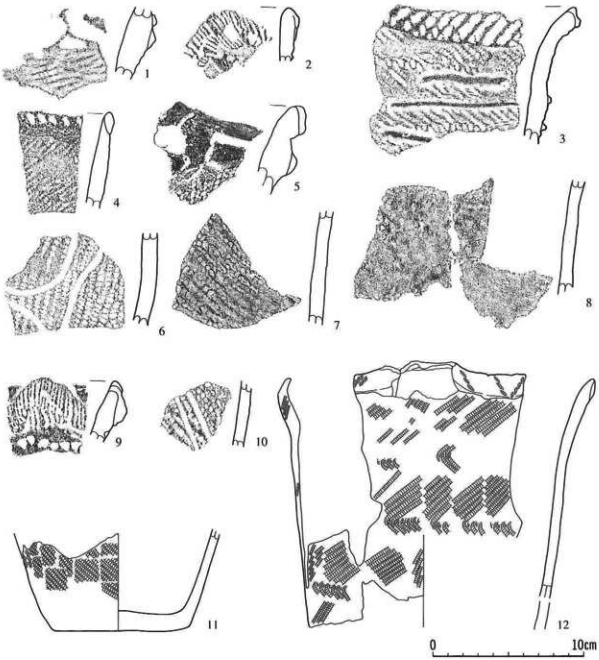
102図　その他の住居跡出土遺物(1)



0 10cm

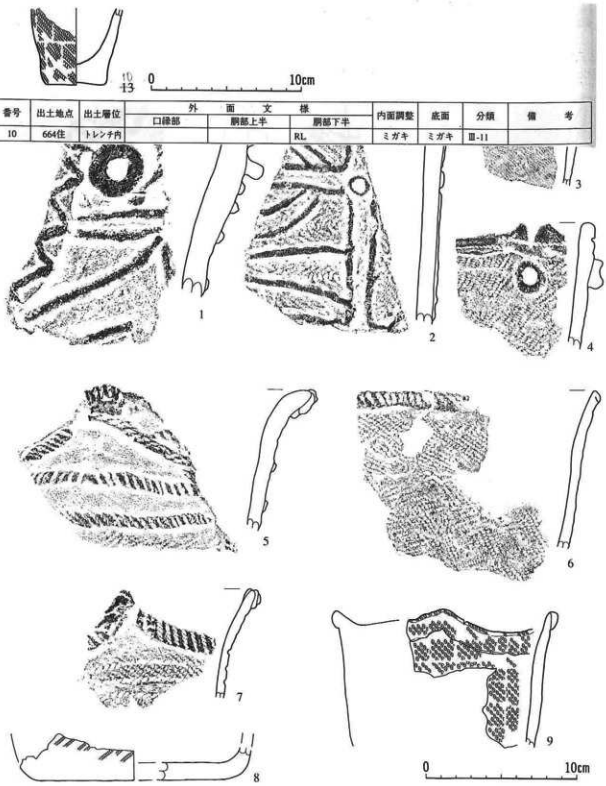
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	550Hｓ	縄認面	凹状沈線	LR	LR、ケズリ	ミガキ		Ⅲ-8	大小6波状口縁

103図　その他の住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	534H北	確認面	円状沈線	RL				Ⅲ-8	波状口縁、粗製土器(外面)
2	550H北	〃	貼付(L押)、刺突			ミガキ		Ⅲ-3	波状口縁
3	〃	〃	貼付(RL押)	結束第1種(RL)、貼付		〃		Ⅲ-4	〃
4	〃	〃	LR押	LR		〃		Ⅲ-4・5	
5	〃	〃	円状沈線	LRL		〃		Ⅲ-8	波状口
6	〃	〃		LR、沈線		〃		〃	
7	〃	〃		LR		〃		Ⅲ-11	炭化物付着(外面)
8	〃	〃		〃		〃		〃	
9	551H北	〃	貼付(L押)、刺突			〃		Ⅲ-3	
10	〃	〃		RL、沈線		〃		Ⅲ-11	
11	663H北	〃			RL	〃	ミガキ	Ⅲ-6	
12	〃	〃	貼付(RL押)	結束第1種(LR・RL)		〃	〃	Ⅲ-4	波状口縁

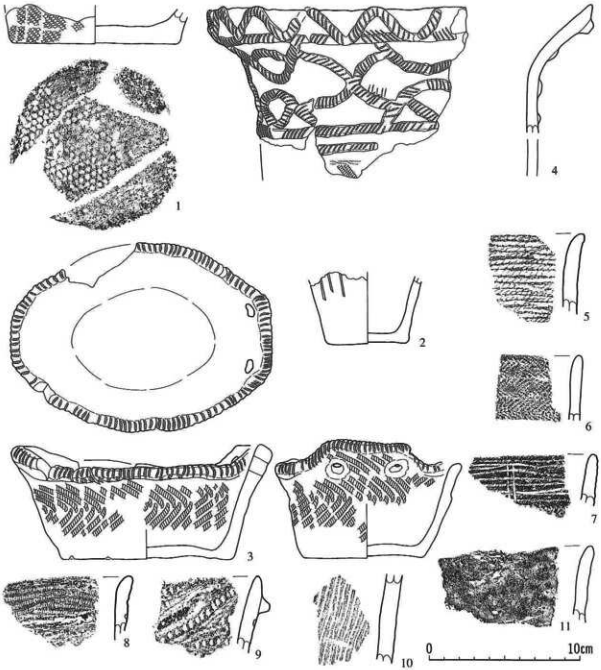
104図　その他の住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
10	664住	トレンチ内			RL	ミガキ	ミガキ	Ⅲ-11	

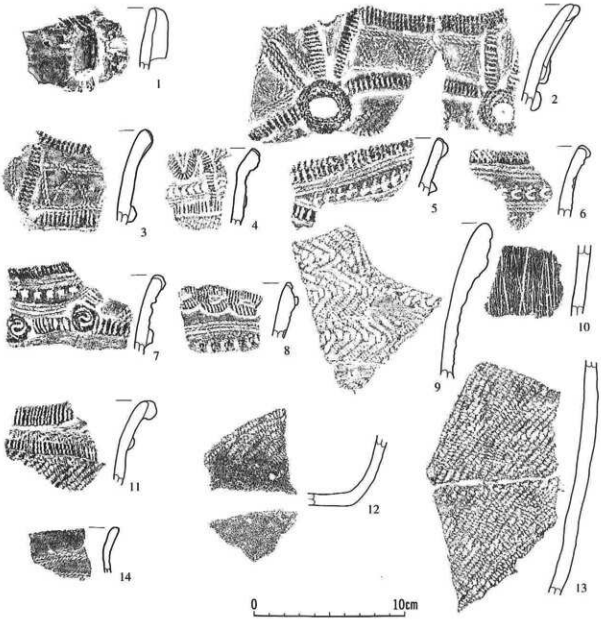
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	663H⑤	確認面	貼付			ミガキ		Ⅲ-4	波状口縁
2	*	*		結束Ⅰ種(RL・LR),貼付		*		*	
3	*	*	貼付(L押)	LR、貼付(L押)		*		*	波状口縁
4	*	*	LR	L		*		*	炭化物付着(内外面)
5	*	*	突起(口唇)、LR押	RL、貼付(ボタン状)		*		*	炭化物付着(外面)
6	*	*	貼付(LR押)	結束帯Ⅰ種(RL・LR)		*		*	*
7	*	*	貼付(R押)、貼付	RL、RL押		*		*	波状口縁
8	664H⑤	トレンチ内			LR	*	ミガキ	Ⅲ-6	
9	*	*	折返口縁(RLR)	RLR		*		Ⅲ-8	4 波状口縁

105図　その他の住居跡出土遺物(4)



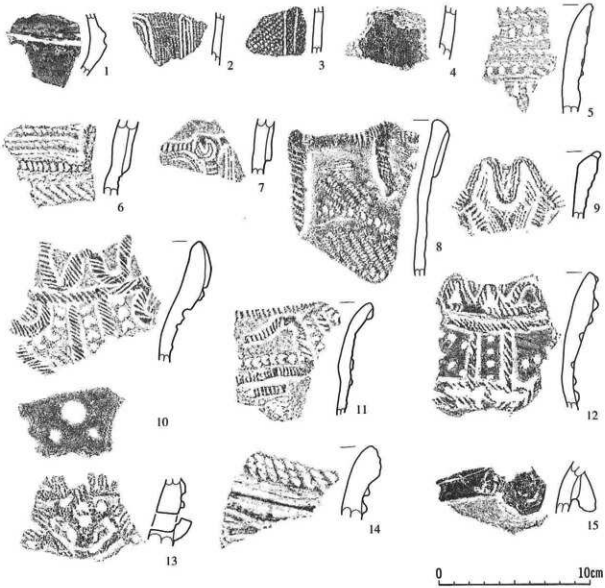
番号	出土地点	出土層位	外面文様				内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半					
1	664H覆	トレンチ内			LR			胴代痕	Ⅲ-11	
2	〃	〃			ミガキ、沈線		ミガキ	ミガキ	〃	
3	〃	確認面	貼付(R押)	結束第1種(RL・LR)	結束第1種(RL・LR)		〃	〃	Ⅲ-1・2	2波状口縁、貫通孔2
4	〃	〃	貼付(L押)	貼付(L押)、RL			〃		Ⅲ-3・4	外面に爪痕あり。
5	〃	トレンチ内	R単節1				〃		Ⅲ-3	繊維混入
6	〃	〃	結束第1種(RL・LR)				〃		Ⅱ-4・5-1	〃
7	〃	〃	R押	結束第1種					〃	〃
8	〃	〃	貼付(刺突)、R単節1						〃	〃
9	〃	〃	貼付(刺突)、L押、刺突						Ⅱ-5-2	
10	〃	〃			R単節1		ミガキ		Ⅱ-6	繊維混入
11	〃	〃	無文				〃		〃	

106図　その他の住居跡出土遺物(5)



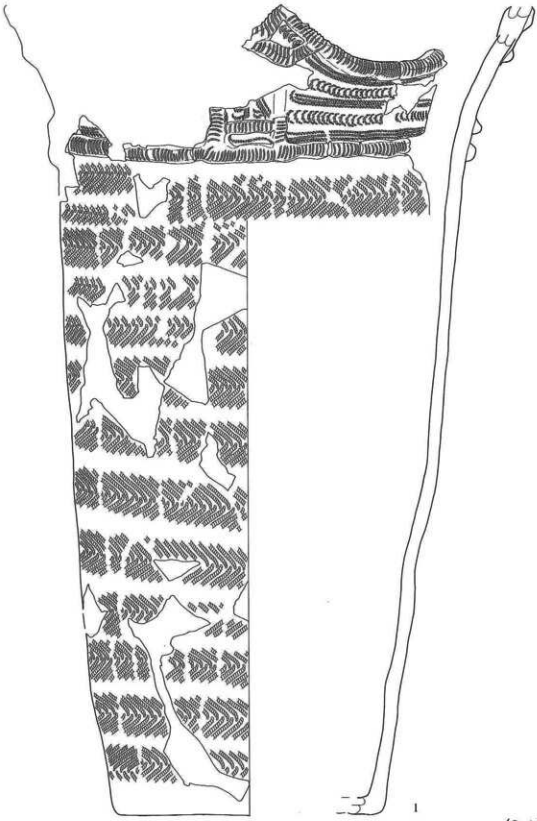
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	664H住	トレンチ内	貼付					Ⅱ-6	炭化物付着
2	〃	〃	貼付(LR押)、LR押	LR				Ⅲ-1	
3	〃	〃	LR押(口縁)、貼付LR押、LR押					〃	波状口縁、炭化物付着(外面)
4	664住	〃	貼付(L押)、L押(口縁)、L押	RL		ミガキ		Ⅲ-2	〃
5	664H住	〃	L押(口縁)、貼付L押、L・X押					〃	
6	〃	〃	L押(口縁)、L・R押					〃	波状口縁
7	〃	〃	貼付(R押)、L・R押					〃	〃
8	〃	〃	貼付(L押)、L・R押					〃	〃
9	664住	〃	結束帯1種(LR・RL)	結束帯1種(LR・RL)				〃	
10	664H住	〃		細沈線				Ⅲ-6	炭化物付着(外面)
11	〃	〃	LR・貼付(L)					〃	
12	〃	〃			LR	ミガキ		〃	炭化物付着(内面)
13	〃	〃		結束帯1種(LR)		〃		〃	炭化物付着(内外面)
14	〃	〃	LR(口縁)、無文	R押				〃	

107図　その他の住居跡出土遺物(6)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	664住	トレンチ内	沈線、無文			ミガキ		Ⅲ-8・9	
2	〃	〃		LR、沈線		〃		Ⅲ-9	
3	〃	〃		〃				Ⅲ-11	
4	〃	〃			無文	ミガキ		〃	
5	664住	踏認面	貼付(LR押)、LR押、刺突（半截竹管状）			〃		Ⅱ-5-2	
6	〃	〃	貼付(LR押)、LR押	結束第1種(LR・RL)		〃		Ⅱ-5-2・Ⅲ-1	砂礫混入
7	〃	〃	貼付(L押)、L押			〃		Ⅲ-1	
8	〃	〃	貼付(L押)、L押(口唇)	結束第1種(RL)		〃		〃	炭化物付着(外面)
9	〃	〃	貼付(LR押)、LR押			〃		Ⅲ-1・2	波状口縁
10	〃	〃	貼付(L押)、L押			〃		Ⅲ-2	〃
11	〃	〃	貼付(L押)、L押(口唇)、L押			〃		〃	〃
12	〃	〃	貼付(L押)、L押(口唇)、刺突			〃		Ⅲ-3	〃
13	〃	〃	無文 ボ?(LR押)、平縁					〃	
14	〃	〃	RL押、貼付			ミガキ		Ⅲ-4	波状口縁
15	〃	〃	貼付			〃		〃	

108図　その他の住居跡出土遺物(7)

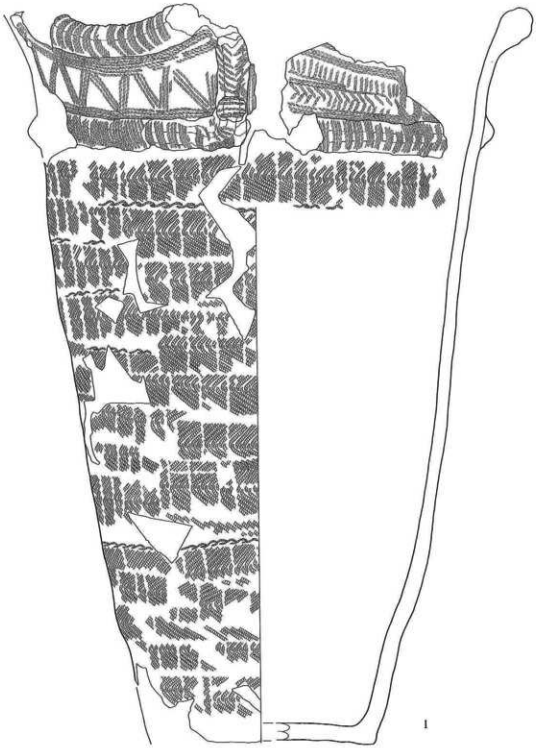


(S=1/3)

0　10cm

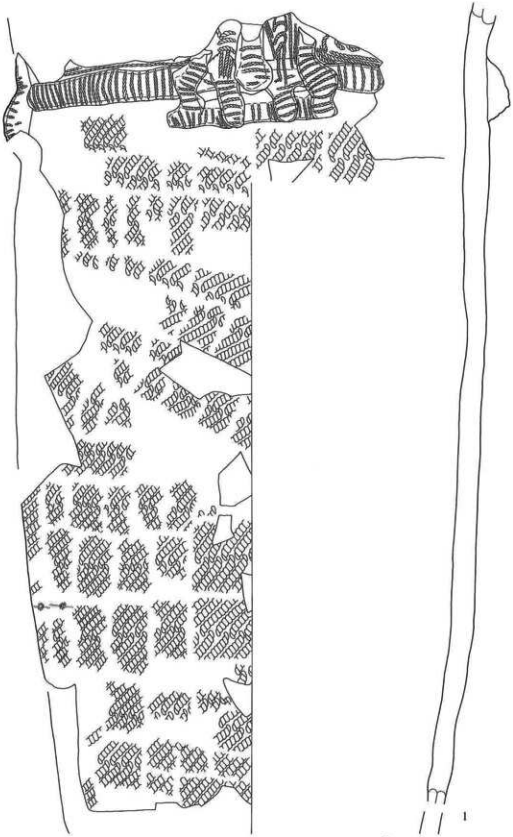
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	6668ハ	確認面	刺付(L押)、L押(馬蹄状)	結束第1種(LR・RL)	結束第1種(LR・RL)	ミガキ		Ⅲ-2	4波状口縁

109図　その他の住居跡出土遺物(8)



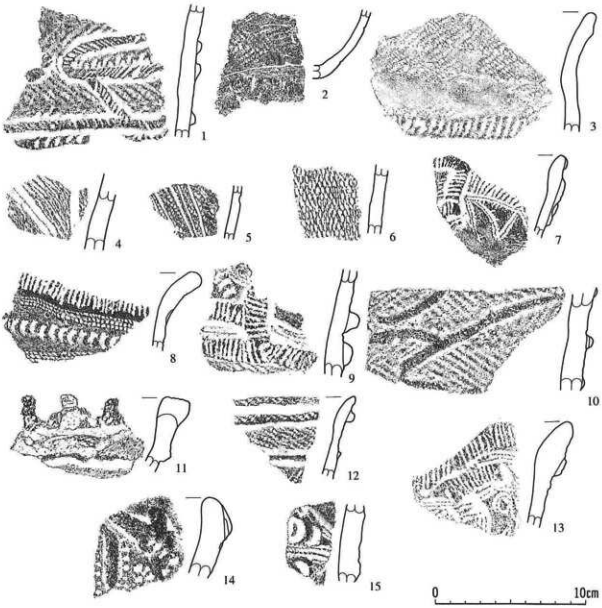
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	666Hi5	確認面	貼付（LR押）、LR	結束第1種(LR・RL)	結束第1種(LR・RL)	ミガキ	ミガキ	Ⅲ-1	4波状口縁

110図　その他の住居跡出土遺物(9)



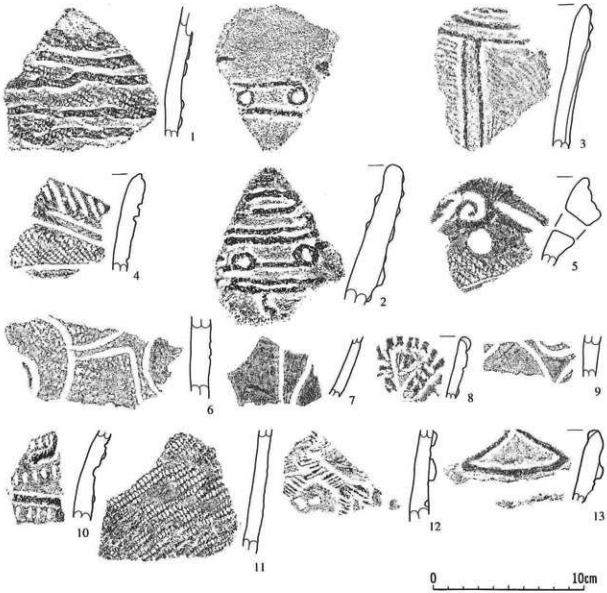
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	666d区	確認面	貼付(L押)、L押	結束第1種(LR)	結束第1種(LR)	ミガキ		Ⅲ-2	

111図　その他の住居跡出土遺物(10)



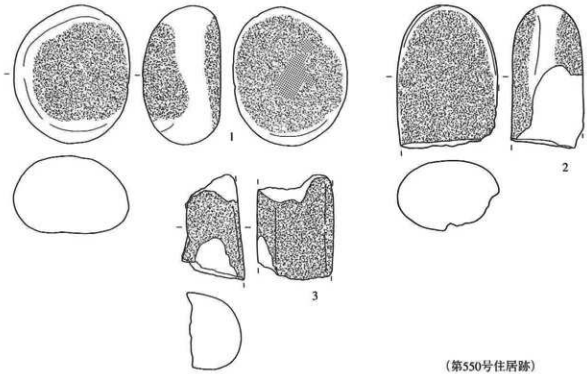
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	664住	確認面		撚糸第1種(LR・RL),貼付(L押)		ミガキ		Ⅲ-4	
2	〃	〃			撚糸第1種(LR・RL),沈線			Ⅲ-5	
3	〃	〃	LR押、LR			ミガキ		Ⅲ-6	
4	〃	〃		LR単節1、沈線		〃		Ⅲ-8	
5	〃	〃		LR、沈線		〃		Ⅲ-9	焼化物付着(外面)
6	666住	〃			多軸絡	〃		Ⅱ-6	
7	〃	〃	貼付(L押),刻押(口縁),L・R押			〃		Ⅲ-1	注口口縁,焼化物付着(内外面)
8	〃	〃	L押(口唇),L・LR押			〃		Ⅲ-2	波状口縁,焼化物付着(外面)
9	〃	〃	貼付(LR押),L・LR押			〃		〃	
10	〃	〃		撚糸第1種(LR・RL),貼付		〃		Ⅲ-4	
11	〃	〃	貼付			〃		〃	波状口縁
12	〃	〃	RL、貼付(RL)			〃		〃	
13	673住	〃	貼付(R押),R押			〃		Ⅲ-1・2	波状口縁
14	〃	〃	貼付・刺突					Ⅲ-3	〃
15	674住	〃	L・R押			ミガキ		Ⅲ-2	

112図　その他の住居跡出土遺物(11)

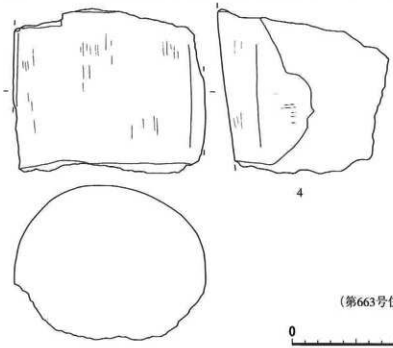


番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	674住	縄認画		RL、貼付（RL）		ミガキ		Ⅲ-4	突起内面にも貼付
2	*	*	突起（貼付）、貼付（LR押）			*		Ⅲ-4・5	
3	*	*	突起（貼付）、RL、貼付	RL、貼付		*		Ⅲ-4	波状口縁
4	*	*	RL押、RL、沈線	RL、沈線		*		Ⅲ-5	*
5	*	*	凹状沈線、貫通孔	RLR		*		Ⅲ-8	
6	*	*		LR、沈線		*		*	波状口縁
7	*	*			LR、沈線	*		Ⅲ-41	
8	675住	*	突起（貼付、LR押）、LR押			*		Ⅲ-1	
9	*	*		LR、沈線		*		Ⅲ-8	
10	676住	*	貼付（LR押）、刺突			*		Ⅲ-3	
11	*	*			LR	*		Ⅲ-6	
12	677住	*	貼付（LR押）、刺突			*		Ⅲ-3	
13	*	*	突起（貼付）			*		Ⅲ-4	突起内面にも貼付

113図　その他の住居跡出土遺物（12）



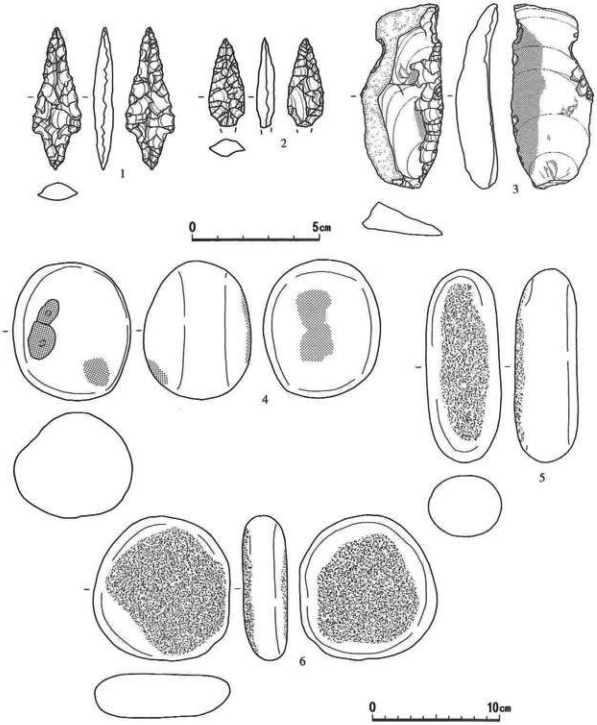
（第550号住居跡）



（第663号住居跡）

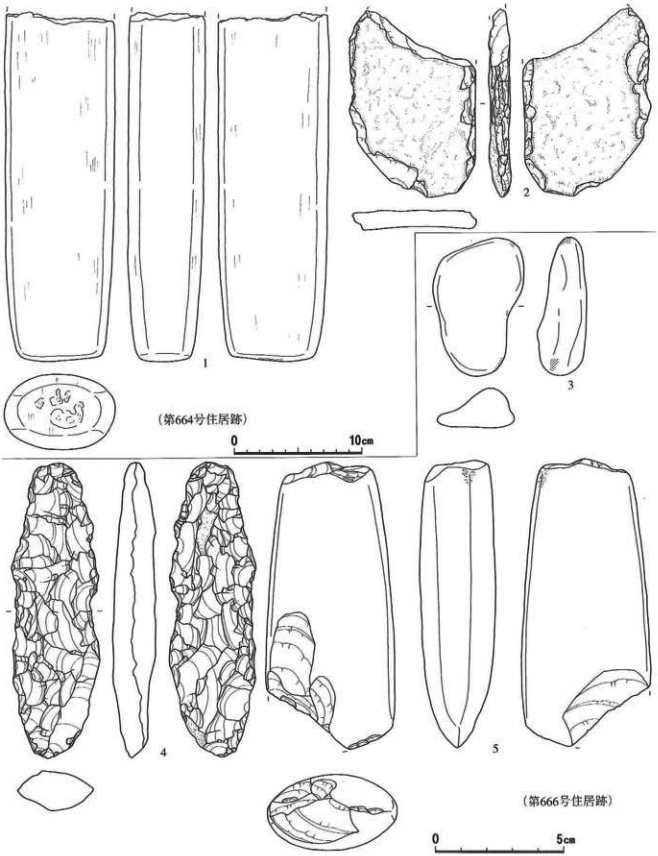
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	550住	確認面	110	79	61	810.8	流	Ic	ⅦD-141	90954
2	〃	〃	(113)	(79)	56	(752.0)	安	〃	〃	90953
3	〃	〃	(83)	(48)	(60)	(303.1)	〃	〃	石怖？　〃	90241
4	663住	〃	(129)	150	(133)	(3169.2)	〃	Ma	ⅦG-135	90965

114図　その他の住居跡出土遺物（13）



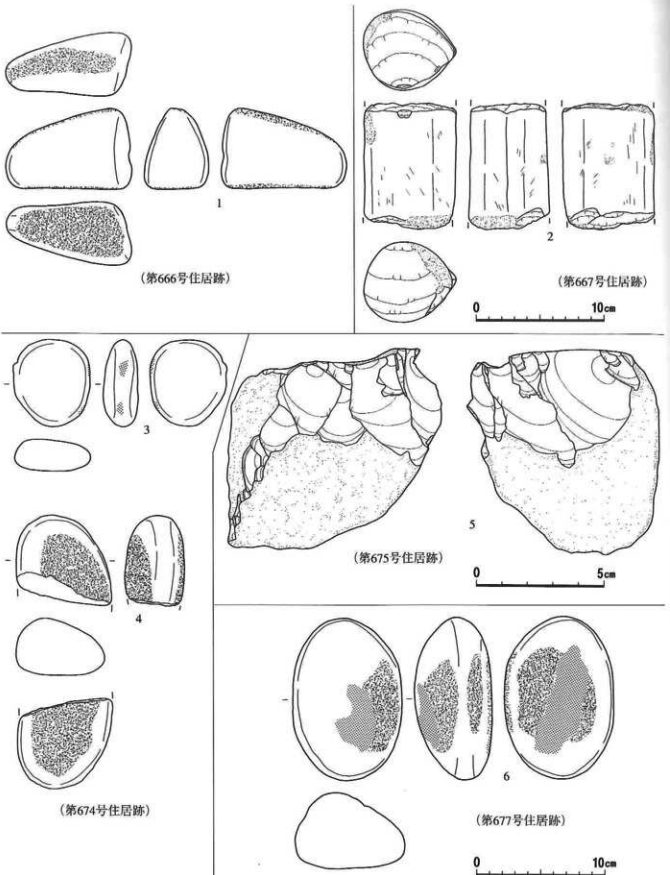
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	664住	堆積土	57	19	7	5.4	珪質	Aa	Ⅶ J-130	10047
2	〃	〃	(36)	13	7	(2.7)	〃	Ab	Ⅶ J-131	91975
3	〃	〃	73	32	16	29.5	〃	Ca	〃	99939
4	〃	確認面	108	92	84	971.3	安	Ib	〃	90971
5	〃	〃	53	58	49	636.8	流	Ic	Ⅶ J-130	90966
6	〃	〃	114	107	35	692.8	安	〃	Ⅶ J-131	90970

115図　その他の住居跡出土遺物(14)



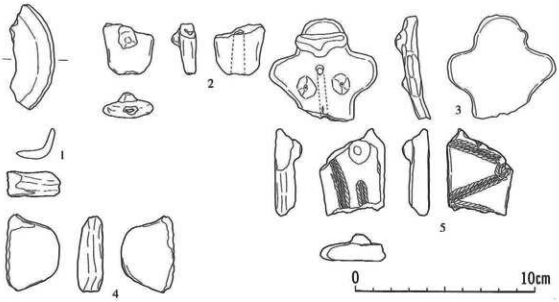
番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備　　考	整理番号
1	664住	確認面	(275)	86	59	(2630.8)	安	Ma	Ⅶ J-131	90972
2	〃	〃	(53)	58	49	(636.8)	流	J	Ⅶ J-130	90966
3	666住	〃	109	71	37	280.3	頁	Ib	Ⅶ A・B-141	90977
4	〃	〃	117	43	17	63.2	黒	Ba	Ⅶ B-141	32719
5	〃	〃	(114)	51	30	(270.4)	閃	Ha	Ⅶ A・B-141	32987

116図　その他の住居跡出土遺物(15)



番号	出土地点	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石質	分類	備考	整理番号
1	666住	確認面	63	98	50	410.2	安	Ic	Ⅶ A・B-141	90975
2	667住	床面	100	72	63	631.8	〃	Mb	欠損面敲打痕 Ⅶ H-133	90978
3	674住	確認面	68	59	26	147.3	流	Ib	Ⅶ C-141	90982
4	〃	〃	(72)	74	46	(269.5)	凝	Ic	Ⅶ B-141	90981
5	675住	〃	81	83	75	545.3	珪頁	Pa	Ⅶ C-141	90986
6	677住	〃	(128)	85	(60)	(837.6)	安	Ib	Ⅶ C-139	90970

117図　その他の住居跡出土遺物(16)



番号	出土地点	出土層位	外面模様			内面調整	底面	分類	備考	整理番号
			口縁部	胴部上半	胴部下半					
1	664住	堆積土			無文	成形痕		ミニチュア土器		8073

番号	出土地点	出土層位	計測値(cm)			文様		分類	備考	整理番号
			長さ	幅	厚さ	表面	裏面			
2	664住	確認面	(28)	(28)	(14)	LR押	LR押	土偶	頭部、胸部、腹部、脚部	10823
3	*	*	(52)	61	19	無文	無文	*	腹、胴部	10801
4	*	*	(42)	(30)	(14)	*	*	*	胸部	10811
5	*	*	(48)	(37)	(15)	LR押	LR押	*	胴部	10810

118図　その他の住居跡出土遺物(17)

され、よく踏み締まっている。

[炉]　調査区の壁面で土器埋設炉を確認した。住居の南西側は未確認のため不明であるが、床面の中央に相当する位置と思われる。口縁・胴部下半を欠いたⅢ群4類の深鉢を、正位に埋設して炉体としている。

[堆積土]　黒褐色土主体の堆積土である。

[出土遺物]　床面から石皿・台類1点、石刀1点が、床面直上から縄文時代中期中葉Ⅲ群4・5類の土器片が出土した。

[時期]　炉体土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期のものと考えられる。

(秦　光次郎)

6）柱　　穴

第20次調査で再調査した旧野球場建設予定地内を除き、4基が確認されている。うち3基で精査を行っている。今回の調査では建物等を構築するセット関係が見出せなかった。

第13694号ピット

[位置と確認]　ⅦM－127に位置する。第17次調査において、ⅦK～125～ⅦN～128に設定したトレンチの底面より確認されている。精査は行っていない。

[重複]　直上に西盛土のⅢa－5層が堆積し、本遺構が新しい。

[平面形・規模]　確認面での掘り方は、最大長60cmの略円形である。柱痕は掘り方の中央で検出され、径30cmの円形である。

[時期]　重複関係から、縄文時代中期後葉のものと考えられる。

第13696号ピット（119図、写真37）

[位置と確認]　ⅦH－133・134に位置する。底面での標高は19.88cmである。第17次調査において、柱痕とともに第Ⅴ層中で確認された。

[重複]　第13697号ピットと隣接するが重複関係は不明である。

[平面形・規模]　確認面での掘り方は、開口部で最大長89cmの不整な円形である。柱痕は掘り方の中央で検出され、径38cmの円形である。

[壁]　第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられる。深さは最大で80cmである

[堆積土]　柱痕はしまりのない黒褐色土が堆積する。掘り方は上位に暗褐色土、下位にⅤ・Ⅵ層のブロックを多く混入するオリーブ褐色土が堆積する。

[出土遺物]　出土しなかった。

[時期]　堆積土の土質から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。

第13697号ピット（119図、写真37）

[位置と確認]　ⅦH－133・134に位置する。底面での標高は19.19mである。第17次調査において、第13697号ピット精査中に確認された。

[重複]　第13696号ピットと隣接するが重複関係は不明である。

[平面形・規模]　確認面での掘り方は、径22cmの円形である。柱痕は検出されなかった。

[壁]　第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでつくられる。深さは最大で28cmである。

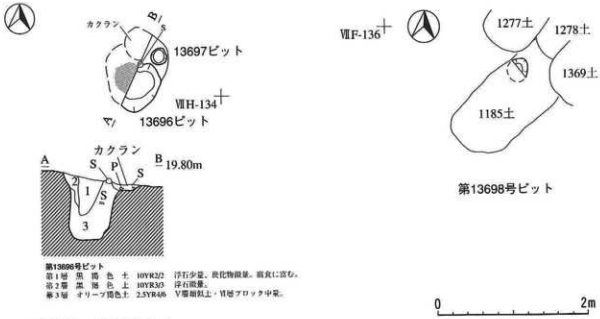
[出土遺物]　出土しなかった。

[時期]　堆積土の土質から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。

第13698号ピット（119図）

[位置と確認]　ⅦE－136に位置する。底面の標高は18.83mである。第17次調査において第1184号土坑の精査中に確認した。

[重複]　第1184号土坑より新しい。



119図　13696～13698号ピット

[平面形・規模]　開口部で径29cmの円形である。柱痕は検出できなかった。

[壁]　第1184号土坑堆積土、第Ⅵ層を掘り込んでつくられる。深さは最大で69cmである。

[堆積土]　主に褐色土が堆積する。

[出土遺物]　出土しなかった。

[時期]　重複関係から、縄文時代中期後葉以降のものと考えられる。

（秦　光次郎）

7）西盛土ー北東部分

平成６年度の旧テニスコート建設予定地で確認された西側の盛土遺構（＝西盛土）は、本調査で更に北東側に広がっていることが確認された。第663・664・667・678号住居跡、第824・825号埋設土器、第13694号ピット、第197・264・265・267・269号溝跡と重複し、第663・664・667号住居跡、第13694号ピットより新しく、第197・264・265・267・269号溝跡より古い。他の遺構との新旧関係については不明である。削平された部分を考慮に入れると、周囲に隣接した遺構とも重複していたものと思われる。

今回の調査区内では縄文時代中期中葉の円筒上層ｄ式期から、中期末葉の大木10式併行期までの包含層が確認されている。前述のラインから北東側で中期後葉の最花式から大木10式併行、ⅦＫ－Ｌ－133、ⅦＫ－136で円筒上層ｄ式の包含層を確認している。更に南西の平成６年度試掘区では、中期前葉の円筒上層ａ～ｃ式の包含層が確認されており、北東側ほど新しい包含層が堆積することも判明した。

最花式期以前に堆積した地点では、地山の土壌を多量に混入する明るい色調の層が最上層となる。南盛土、№６鉄塔区調査時にも見られたもので、本遺跡における盛土遺構の特徴でもある。第17次調査では、これを面的に追いかけることによって、西盛土の範囲を確認していった。ⅦＫ・Ｌ－133、Ⅶ

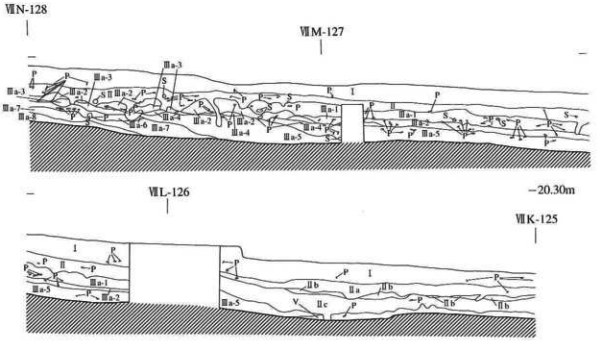
K－136では約10～20cmの厚さで堆積する。その下に、厚さ10cm未満の円筒上層ｄ式の包含層が幾重にも堆積し、盛土自体の厚みは１ｍ以上に及ぶことが確認された。

ⅦK－125～ⅦN－128に設定した先行トレンチ内では、最大45cmの厚さで残存する。最花式期から大木10式並行期に属する９層が確認できた。地山を多量に含む、炭化物を多量に含む、焼土を多量に含むなど、それぞれの層は顕著な特徴をもつ。

直上の第Ⅱ層下位は、最花式、大木10式並行期の遺物を多量に包含し、本遺構に含まれる堆積層が存在する可能性が高い。

最上層を除くいずれの層も多量の遺物を包含する。

（秦　光次郎）



第Ⅰ層	黒褐色土	10YR3/1	焼土粒少量。
第Ⅱ層	黒　色　土	10YR2/1	炭化物・焼土粒少量。
第Ⅱa層	黒　色　土	10YR2/1	炭化物・焼土粒極微量。
第Ⅱb層	黒褐色土	10YR2/2	B-Tmと思われる褐色降下火山灰（10YR4/4）がブロック状に中量、炭化物・焼土粒極微量。
第Ⅱc層	黒　色　土	10YR2/1	炭化物・遺物微量。
第Ⅲa-1層	黒褐色土	10YR3/2	遺物中量、炭化物少量、焼土粒微量。大木10式期。
第Ⅲa-2層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物・遺物少量、焼土粒微量。
第Ⅲa-3層	黒褐色土	10YR3/2	Ⅴ層由来の漸移層土（10YR3/3）多量、炭化物・遺物少量。
第Ⅲa-4層	暗赤褐色土	5YR3/3	焼土粒多量、炭化物・遺物微量。
第Ⅲa-5層	暗褐色土	10YR3/2	炭化物・焼土粒・浮石粒微量。最花式期
第Ⅲa-6層	黒褐色土	10YR3/1	遺物多量、炭化物中量、焼土粒少量。大木９～10式の遺物が多く、特に石鏃が目立つ。
第Ⅲa-7層	黒褐色土	10YR3/2	炭化物・遺物少量、焼土粒微量。

120図　西盛土土層断面図

第２節　平安時代以降の検出遺構と遺構内出土遺物

第Ⅱ層上位または第Ⅰ層中に掘り込み面を持つ遺構である。平安時代の竪穴住居跡、溝跡、畠跡、段上の造成痕跡、盗掘痕などが該当する。

第Ⅰ層中から掘り込みを持つものは盗掘痕跡である。ⅦＬ－131で４基重複して確認された。遺物を大量に含む盛土遺構中であるにもかかわらず、細片以外の遺物が残存していないことから盗掘痕と判断した。堆積土中のアルミ缶から、平成元年以降に掘られたものであることがわかった。

段上の造成痕跡は、第Ⅱ層上位から掘り込まれる。ⅦＦライン以西ではこれによる削平、盛り土によって、全体が段状に造成されている。特にⅦＧ－136とⅦＯ－128を結んだラインでは１ｍ以上の段差がつき、これによって盛土遺構の北側、第1219号土坑、第661・667号住居跡の上部等が大きく破壊されている。これらは、造林もしくは畑作に関係する痕跡と思われる。

精査を行った溝跡、畠跡については、個別に記述していく。

１）溝跡

調査区内から29条確認された。軸をＮ－47～75°－Ｅか、Ｎ－10～46°－Ｅをとって直進するものが多く、重複する際に直角に近い角度で交わる傾向がある。いずれの堆積土内でも水成層が認められず、地形にも沿っていないことから、利水用よりも区画の機能をもつ溝であろうと捉えている。堆積土にはＢ－Ｔｍが入り込む例が多く、所属時期は平安期かそれ以降のものと思われる。第264・265号溝については、旧野球場建設予定地にのびていることがわかっている。

第250号溝（121図、写真38）

[位置と確認]　ＶＴ－162とⅥＦ－157を直線で結んだ範囲に位置する。第13次調査において、第Ⅱ層中のしまりの弱い黒色土として確認した。第13・14次調査で精査を行っている。

[重複]　第２号道路跡より新しい。

[平面形・規模]　途中の19.4ｍは未確認であるが、合わせて30ｍを確認した。幅21～28ｍで、軸をＮ－46°－Ｗに向けて直進する。

[壁・底面]　第Ⅱ層中から第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込み、底から若干外傾しながら立ち上がる壁である。壁高3.5～19cmである。底面は第Ⅵ層上につくられる。

[堆積土]　黒色土主体の堆積土である。

[出土遺物]　なし。

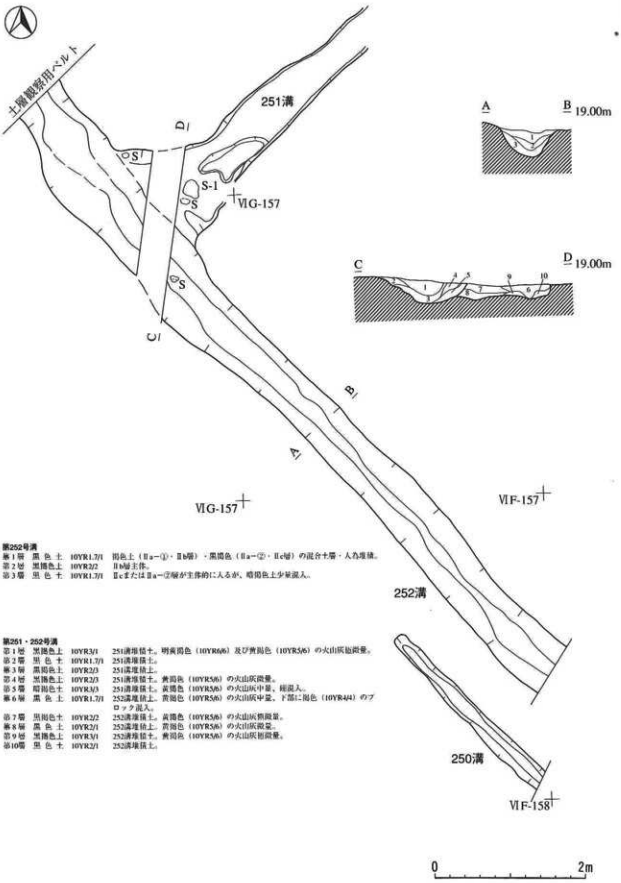
[時期]　層位関係から、平安期かそれ以降のものと思われる。

第251号溝（121図）

[位置と確認]　ⅥＤ－153とⅥＧ－156を直線で結んだ範囲に位置する。第14次調査で第Ⅱ層掘り下げ中に確認した。第14・20次で精査を行っている。

[重複]　第２号道路跡より新しく、第252号溝より古い。

[平面形・規模]　幅36～65ｍ、長さは17.4ｍを確認した。軸をＮ－47°－Ｅに向けて直進する。



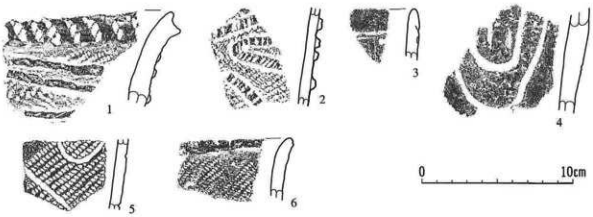
第252号溝

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	褐色土（Ⅱa—①・Ⅱb層）・黒褐色（Ⅱa—②・Ⅱc層）の混合土層・人為堆積。
第2層	黒褐色土	10YR3/2	Ⅱa層主体。
第3層	黒 色 土	10YR1.7/1	Ⅱcまたは Ⅲa—②層が主体的に入るが、暗褐色土少量混入。

第251・252号溝

第1層	黒褐色土	10YR3/1	251溝堆積土。明黄褐色（10YR6/6）及び黄褐色（10YR5/6）の火山灰粒微量。
第2層	黒 色 土	10YR1.7/1	251溝堆積土。
第3層	黒褐色土	10YR2/3	251溝堆積土。
第4層	黒褐色土	10YR2/3	251溝堆積土。黄褐色（10YR5/6）の火山灰微量。
第5層	暗褐色土	10YR3/3	251溝堆積土。黄褐色（10YR5/6）の火山灰中量。極混入。
第6層	黒 色 土	10YR1.7/1	252溝堆積土。黄褐色（10YR5/6）の火山灰中量。下部に褐色（10YR4/4）のブロック混入。
第7層	黒褐色土	10YR2/2	252溝堆積土。黄褐色（10YR5/6）の火山灰微量。
第8層	黒 色 土	10YR2/1	252溝堆積土。黄褐色（10YR5/6）の火山灰微量。
第9層	黒褐色土	10YR3/1	252溝堆積土。黄褐色（10YR5/6）の火山灰粒微量。
第10層	黒 色 土	10YR2/1	252溝堆積土。

121図　第250・251・252号溝



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	252溝	堆積土	貼付（LR押）	撚糸第1類(LR・RL)、馬具(LR)		ミガキ		Ⅲ-4	波状口縁
2	〃	〃		撚糸第1類(LR・RL)、馬具(LR)		〃		〃	
3	〃	〃	折り返し口縁	沈線、刺突		〃		Ⅲ-9	
4	〃	〃		沈線、豆沈線		〃		Ⅲ40	
5	〃	〃		RL、沈線		〃		〃	
6	〃	〃	RL			〃		Ⅲ41	

122図　第252号溝・出土遺物

［壁・底面］　第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層を掘り込み、底から若干外傾しながら立ち上がる壁である。壁高5～21cmである。底面は第Ⅵ・Ⅶ層上につくられる。

［堆積土］　黒色土・暗褐色土が主に堆積土である。

［出土遺物］　なし。

［時期］　層位関係から、平安期かそれ以降のものと思われる。

第252号溝（121・122図、写真61）

［位置と確認］　ＶＭ－171とⅦＩ－133を直線で結んだ範囲に位置する。第13次調査において第Ⅱ層中に確認した。青森市教育委員会による、都市計画道路建設予定地Ｃ区で、南側が調査された溝である。第13・14・17・20次の各調査で部分的な精査を行っている。

［重複］　第1088・1093・1099・1105・1107・1108・1112・1113・1115・1123・1124・1129・1132～1134・1141・1146・1148・1151・1152・1184・1185・1178～1180・1190・1194・1199・1200・1204・1205・1212・1214・1215号土坑、第814号埋設、第２号道路跡、第251号溝、畠跡より新しい。

［平面形・規模］　幅30cm～１ｍ10cmで、長さ83.5ｍを確認した。軸をＮ－44°－Ｗに向けて直進する。

［壁・底面］　第Ⅱａ層中から第Ⅱｂ・Ⅱｃ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層を掘り込み、底から若干外傾しながら立ち上がる壁である。壁高２～63cmである。底面は第Ⅵ・Ⅶ層上につくられる。

［堆積土］　黒色土主体の堆積土で堆積土の中位ではレンズ状にＢ－Ｔｍの粒が混入する。

［出土遺物］　堆積土内から、Ⅲ群４・９～10類の土器片が出土した。

［時期］　層位関係から、平安期かそれ以降のものと思われる。

第257号溝（123図）

[位置と確認]　ⅥK－143とⅥP－144を直線で結んだ範囲に位置する。第14次調査において第Ⅱ層中の黒色土帯として確認した。

[重複]　第1211・1212・1258号土坑、第２号道路跡より新しく、第258溝より古い。

[平面形・規模]　幅24cm～68m、長さは21m20cmを確認した。軸は東側がN－54°－E、西側がN－90°－Eと、やや湾曲する。

[壁・底面]　第Ⅲ・Ⅴ層を掘り込み、底から若干外傾しながら立ち上がる壁で、壁高は２～16cmである。底面は第Ⅲ・Ⅴ層上につくられる。

[堆積土]　黒色土主体の堆積土である。

[出土遺物]　なし。

[時期]　層位関係から、平安期かそれ以降のものと思われる。

第258号溝（124図）

[位置と確認]　ⅥO－140とⅥN－148を直線で結んだ範囲に位置する。第14次調査において第Ⅱ層中の黒色土帯として確認した。

[重複]　第２号道路跡、第257溝より新しく、第252号溝、畠跡より古い。

[平面形・規模]　幅30～42m、長さは16m20cmを確認した。軸をN－10°－Wに向けて直進する。

[壁・底面]　第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層を掘り込み、底から若干外傾しながら立ち上がる壁で、壁高は７～15cmである。底面は第Ⅴ・Ⅵ層上につくられる。

[堆積土]　黒色土主体の堆積土である。

[出土遺物]　なし。

[時期]　層位関係から、平安期かそれ以降のものと思われる。

第271号溝（124図）

[位置と確認]　ⅥP－140とⅥR－140を直線で結んだ範囲に位置する。第14次調査において第Ⅱ層中の黒色土帯として確認した。

[重複]　第２号道路跡より新しい。

[平面形・規模]　幅37～49m、長さは９m20cmを確認した。軸をN－72°－Eに向けて直進する。

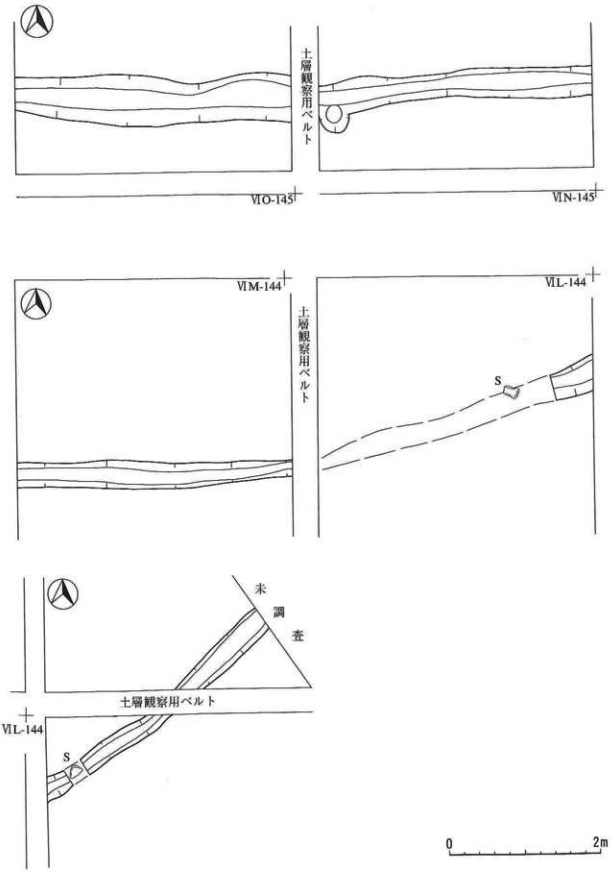
[壁・底面]　第Ⅱ・Ⅴ層を掘り込み、底から若干外傾しながら立ち上がる壁で、壁高は12～22cmである。底面は第Ⅱ・Ⅴ層上につくられる。

[堆積土]　黒色土主体の堆積土である。

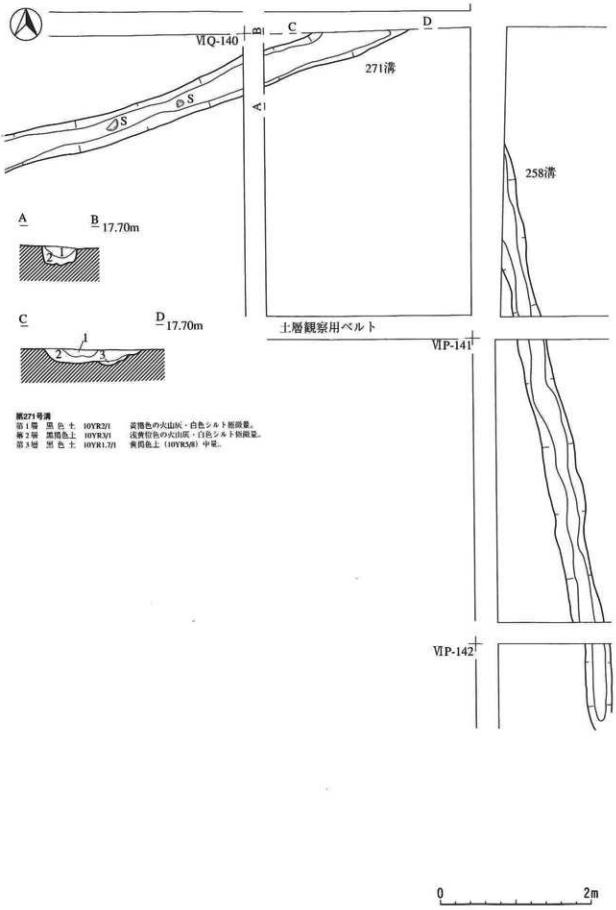
[出土遺物]　なし。

[時期]　層位関係から、平安期かそれ以降のものと思われる。

（秦　光次郎）

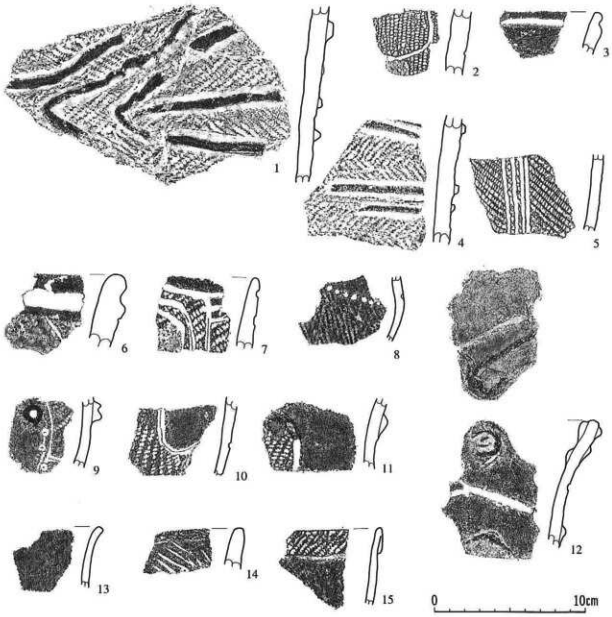

土層観察用ベルト
VIO-145
VIN-145
VIM-144
土層観察用ベルト
VIL-144
S
未
調
査
土層観察用ベルト
VIL-144
S
0
2m

123図　257号溝



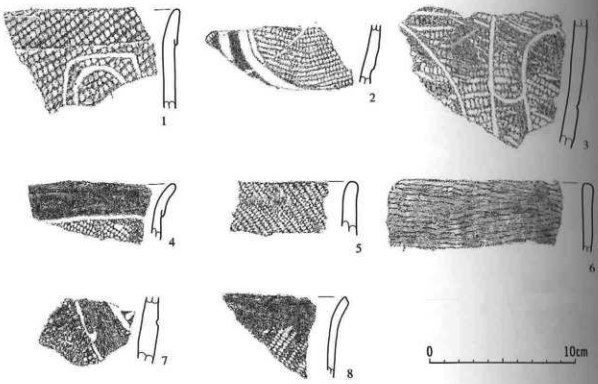
第271号溝
第1層　黒色土　10YR2/1　炭焼色の火山灰・白色シルト粗微量。
第2層　黒褐色土　10YR3/1　淡黄橙色の火山灰・白色シルト微微量。
第3層　黒色土　10YR1.7/1　黄褐色土（10YR5/6）中量。

124図　第258・271溝

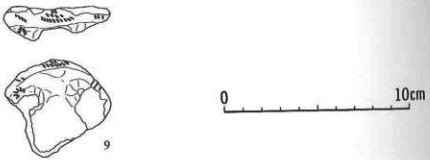


番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	197溝	堆積土		縄密第1種(LR・RL)、貼付		ミガキ		Ⅲ-4	
2	〃	〃		RL、沈線				Ⅲ-11	
3	254溝	〃	凹状沈線					Ⅲ-8	
4	263溝	〃		縄密第1種(LR・RL)、貼付		ミガキ		Ⅲ-4	
5	264溝	〃		LR、沈線				Ⅲ-8、9	
6	〃	〃	凹状沈線	RLR？、沈線		ミガキ		Ⅲ-8	波状口縁
7	〃	〃	LR、沈線					Ⅲ-9	炭化物付着(外面)
8	〃	〃	無文、円形刺突	RL、沈線		ミガキ		〃	〃
9	〃	〃		貼付(刺突)、RL、沈線、刺突(竹管状)		〃		Ⅲ-9・10	
10	〃	〃		磨消(沈線、RLR)				Ⅲ-10	
11	〃	〃		縄密(沈線、RLR)、貼付(ヒレ状)		ミガキ		〃	波状口縁、炭化物付着(内面)
12	〃	〃	貼付(ヒレ状)	貼付(ヒレ状)、[illegible]		〃		〃	〃
13	〃	〃	無文			〃		Ⅲ-11	
14	〃	〃	R単節1					〃	
15	〃	確認面	折り返し口縁(LR)	LR		ミガキ		〃	炭化物付着(内外面)

125図　その他の溝出土遺物(1)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	265溝	堆積土	折返口縁(LRL)	LRL、沈線		ミガキ		Ⅲ-9	炭化物付着(外側)
2	〃	〃		磨消(LR、沈線)		〃		Ⅲ-9・10	
3	〃	〃		LR、沈線		〃		Ⅲ-10	
4	〃	〃	折返口縁	RL		〃		Ⅲ-11	炭化物付着(外側)
5	〃	〃	RL			〃		〃	
6	〃	〃	R単節1			〃		〃	
7	266溝	確認面		磨消(LR、沈線、隆沈線)		〃		Ⅲ-10	炭化物付着(外側)
8	〃	〃	無文	RL		〃		Ⅲ-10	



番号	出土地点	出土層位	外面模様			内面調整	底面	分類	備考	整理番号
			口縁部	胴部上半	胴部下半					
9	265溝	堆積上				成形痕	台付き	ミニチュア土器		8063

126図　その他の溝出土遺物(2)

2）畠跡

[検出範囲]　第20次調査において、調査区内のⅥG～ⅦC－134～154にわたる広い範囲で、畠跡を検出した。調査区は集落跡が主に広がる低位の段丘から、南西側の丘陵地に至る北東方向に面した斜面に位置する。この斜面の比較的傾斜が緩やかな地形に、畠跡が広がる様相が把握された。この他、第14次調査においてもⅥA・B－134・135の狭い範囲で確認されている。

[確認]　畠跡は基本層序第Ⅱb層の上面において確認され、その上面に第Ⅱa層が堆積する。基本層序の第Ⅱ層は調査区内の広域にわたって堆積が認められ、第Ⅱb層を境界にその上位を第Ⅱa層、下位を第Ⅱc層に細分される。第Ⅱb層は、黒色を呈する第Ⅱa層及び第Ⅱc層に比べ色調が黒褐色と異なり、前者との識別が可能である。また、140ラインより南東側では、その上面に白頭山火山灰の堆積が認められ、両者が明確に検出可能な条件下では、畠跡の広がりを確認できた。本来はこれ以上の規模を示していたものと推察される。

[重複]　第257・258号溝跡と重複関係にあり、本遺構が新しい。

[畝の形態・規模・配列状況]　第Ⅱb層上面において、複数の直線的な溝が一定の間隔で並列する状況が確認された。これらは断面の形態が蒲鉾形を呈していることから、畠跡であると判断された。畝の方向には規則的なあり方が看取され、等高線に対し直交するN－47°～62°－Eの方向で直線的に広がる。畝間の間隔は35～60cmを計測し、畝頂部と畝間との比高差は、畝高が低く明瞭さが欠ける箇所でも3～12cmを計測する。

[畝の単位]　畝の広がり方には断絶、あるいは屈折する状況は顕著には認められず、畠跡の単位を明確に把握されない。ただし、ⅥO・P－140・141において畝の走行に一部断絶が認められることから、畠の境界を示しているとも判断される。一方、第272号溝跡の主軸方向はN－54°－Eを示し、隣接する畝跡に並列する関係にある。さらに、他の遺構間との新旧関係から両者の共時的なあり方が想定され、排水等の機能のほか、畠の区画あるいは地割りと関連した施設である可能性も想起される。

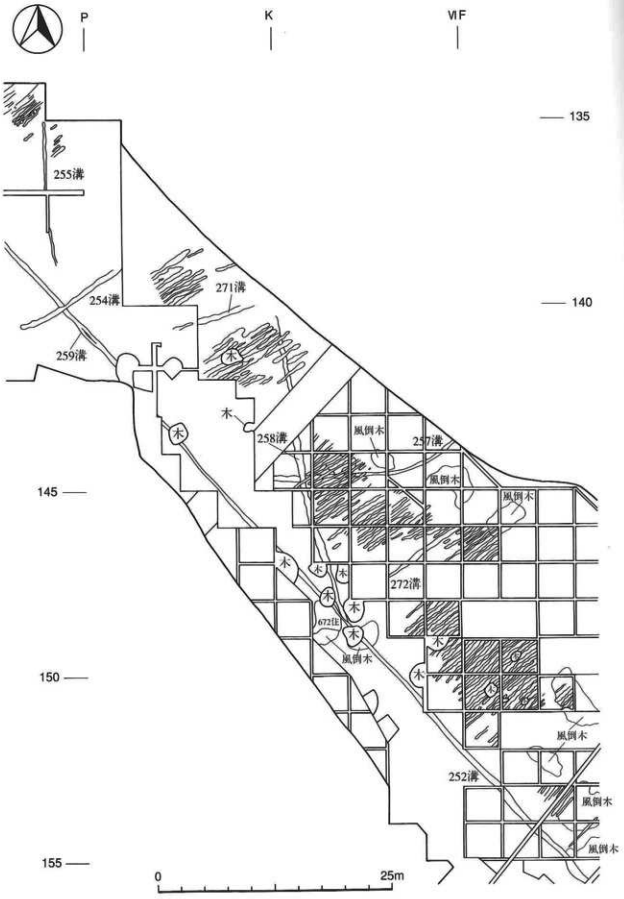
また、同じ時期の居住域とは隔絶された選地のあり方が窺え、居住域とは区別される生産域の確保が図られていたものと考えられる。また、北東に面した斜面を選定し、畝が北東から南西方向の傾きを示していることを考慮すると、作物に適した効率的な日照時間の獲得を意図したあり方を示しているとも考えられる。

[耕作土]　耕作土は基本層序の第Ⅱb層を母材とし、第Ⅱc層も一部これに含まれる。畝高には高低の差違が認められ、畝高が低く明瞭さを欠く状況も認められる。遺存状態の程度差を示すに留まらず、耕作土の母材となる第Ⅱb層あるいは第Ⅱc層の層厚の程度に比例したあり方が窺える。それと同時に、廃絶時直前における休耕等のあり方も反映されているとも想定される。また、140ライン付近より南東側では、畝の上面に白頭山火山灰の堆積が認められるが、これが耕作により攪拌された様相は窺えない。少なくとも白頭山火山灰の堆積が認められる範囲においては、この降灰以降に耕作は行われていないものと判断される。

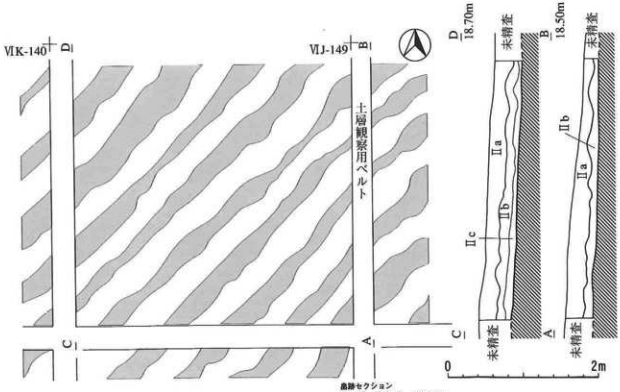
[出土遺物]　縄文土器片とミニチュア土器が出土した。

[時期]　畠跡の耕作土は第Ⅱb層を母材とし、その上面に白頭山火山灰の堆積が認められることから、畠跡は10世紀前葉以前に廃絶されたものと考えられる。

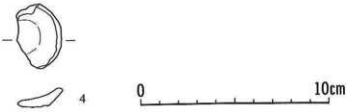
（佐々木　雅裕）


P
K
VIIF
135
140
145
150
155
255溝
254溝
259溝
271溝
258溝
257溝
272溝
252溝
672住
風倒木
木
0
25m

127図　畠跡



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	VIQ-141	Ⅱb		LR(縄束第1種?),縦付		ミガキ		Ⅲ-4	
2	VIP-141	〃	RL			〃		Ⅲ-11	炭化物付着(外側)
3	VIQ-140	〃		沈線		〃		Ⅴ	〃



番号	出土地点	出土層位	外面模様			内面調整	底面	分類	備考	整理番号
			口縁部	胴部上半	胴部下半					
4	畠跡	Ⅱb			無文	成形痕		ミニチュア土器		8093

128図　畠跡・出土遺物

遺構名	位　置	配石標高(m)	確認	精査	配石規模(長×短：m)	礫数	土坑長軸方位	土坑開口部規模(長×短：m)	備　考
第11号配石	Ⅵ B・C-163・164	20.40	13	14	5.3×4.15	83	N-73°-E	2.2×0.92	
第12号配石	Ⅵ C～E-162・163	19.31	13	14	8.82×6.72	31	N-40°-E	2.4×0.42	
第13号配石	Ⅵ D・E-160・161	19.14	13	14	4.12×3.08	54	N-42°-E		
第14号配石	Ⅵ H・I-155・156	19.53	14	未	3.74×2.75	20			
第15号配石	Ⅵ H・I-156・157	19.12	14	未	5.24×4.25	39			
第16号配石	Ⅵ J・K-155・156	21.21	14	14	4.35×3.75	16	N-42°-E	約2m×？	
第17号配石	Ⅵ J・K-152・153	19.09	14	20	4.49×4.0	50	N-50°-E	2.3×0.94	土坑内から赤色顔料
第18号配石	Ⅵ S-141	18.8	14	未	2.2×0.94	18			
第19号配石	Ⅵ E-163・164	21.3	14	未	0.64×0.48	5			
第20号配石	Ⅵ S-140	18.08	14	未	径1.15	8			
第21号配石	Ⅵ R-141	18.40	14	17	径1.2	9			礫掘り方有
第22号配石	Ⅵ R-140・141	18.0	14	未	3.44×1.22	32			
第23号配石	Ⅵ R・S-141・142	19.1	14	未	長2.70	26			
第24号配石	Ⅴ Q-170・171 Ⅴ R-170	20.4	20	未	4.06×3.50	27			
第25号配石	Ⅴ P-171・172	20.54	20	未	4.95×4.44	26			
第26号配石	Ⅴ M-168・169	19.12	20	未	4.34×1.08				
第27号配石	Ⅴ K-169・170	19.3	20	未	4.26×3.56				
第28号配石	Ⅵ M・L-150	19.74	20	未	？	13	2.10×？		

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	開口部規模(長×短：m)	時期	備　考
743土	Ⅶ E-134・135		H6	未	＞1091土	楕円形？				
1081土	Ⅶ D-139	20.3	14	未	＜1119土 ＞1170土	？	？	？×0.75	(上e)	
1082土	Ⅶ B-139	19.36	14	未		楕円形	N-29°-E	1.05×0.73		
1083土	Ⅶ B-139	19.45	14	未		円形？	？	0.98×0.73		
1084土	Ⅶ B・C-139	19.48	14	未	＞1089土	円形？	N-25°-W	1.24×1.10		
1085土	Ⅶ C・D-138	19.57	14	未	＞661H、1256土	楕円形	N-47°-E	1.84×0.70	(中前)	
1086土	Ⅶ I-132	19.58	14	未		円形	？	1.50×？	(中後)	
1087土	Ⅶ A-138・139	18.77	14	未		楕円形	N-38°-E	1.70×0.85		上面に礫
1088土	Ⅶ O-146	19.22	14	未	＜252溝	？	N-48°-E	？×0.95		
1089土	Ⅶ C-138・139	19.39	14	未	＜1084土	楕円形	N-40°-E	1.16×0.90		
1090土	Ⅶ C-139・140	20.28	14	未		楕円形	N-27°-E	1.65×1.03		
1091土	Ⅶ E-134	18.36	14	未	＜743土 ＞道路	円形	？	2.42×？		
1092土	Ⅶ D・E-134	17.98	14	未		円形	？	2.00×1.80		
1093土	Ⅶ B-138	18.64	14	14	＜252溝 ＞1140・1141土	楕円形	N-27°-E	2.45×1.40	最花	上面に礫 壁溝有
1095土	Ⅶ G-135	19.95	14	14	＜662H？	楕円形		0.87×0.50	円上b	
1096土	Ⅵ T-139	18.07	14	未	＜1136土	円形？	？	0.94×？		
1097土	Ⅶ A-139	18.56	14	未	＞1132・1160土	楕円形	N-39°-E	1.50×0.84		上面に礫
1098土	Ⅵ Q-144	19.12	14	未		楕円形	N-41°-E	1.38×0.87	(中後)	上面に礫
1099土	Ⅶ A-140	18.28	14	未	＜252・254溝	楕円形	N-38°-E	？×1.30	(中前)	上面に礫
1100土	Ⅵ Q-143・144	18.24	14	未		楕円形	N-68°-E	1.50×0.73	(円上)	
1101土	Ⅵ C-164	19.8	14	14		楕円形	N-64°-E	1.90×0.60		
1102土	Ⅵ D-165・166	20.7	14	未		楕円形	N-58°-E	1.88×0.75		
1103土	Ⅵ C・D-166	20.86	14	14		楕円形	N-50°-E	1.74×？		
1104土	Ⅵ B-164・165	19.42	14	未		楕円形	N-18°-W	？×0.80		
1105土	Ⅵ P-145	19.62	14	未	＜252溝	？	？	？		
1106土	Ⅵ P・Q-145	19.69	14	未		？	N-52°-E	？×1.04	(上a)	
1107土	Ⅵ Q-145	19.67	14	未	＜252溝	？	N-55°-E	？×0.95	(円上)	
1108土	Ⅵ Q-144	19.18	14	未	＜1109土、 253溝	楕円形	N-37°-E	？×0.75		
1109土	Ⅵ Q-144	18.85	14	未	＞1108土	楕円形	N-40°-E	1.42×0.65		
1110土	Ⅵ R-142・143	18.76	14	未	＞1111・1124土	楕円形	N-51°-E	1.85×0.87		
1111土	Ⅵ R-142・143	18.96	14	未	＜1110・1124土	楕円形？	？	？		

表3　検出遺構一覧（1）

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	開口部規模(長×短：m)	時期	備　考
1112土	Ⅵ Q・R-144	19.33	14	14	＜252溝 ＞1215土	隅丸長方形	N-45° -E	2.10×1.10？		壁溝有
1113土	Ⅵ Q・R-143	18.92	14	未	＜252溝	楕円形	N-43° -E	？×1.10		上面に礫
1114土	Ⅵ R-143	19.63	14	未		？	？	？		
1115土	Ⅵ Q-144・145	19.49	14	未	＜252溝	？	N-45° -E	？×0.65		
1116土	Ⅵ P-144・145	18.71	14	未	＞1118土	楕円形	N-61° -E	？×0.85		
1117土	Ⅵ P-145	18.72	14	未	＞1118土	楕円形	N-58° -E	1.70×0.88		
1118土	Ⅵ P-145	18.78	14	未	＜1116・1117土	楕円形	？	1.75×？		確認面から耳飾
1119土	Ⅶ D-138・139	20	14	17	＞1081・1120・1174土	隅丸長方形	N-35° -E	1.70×1.15	(上e)	壁溝有
1120土	Ⅶ D-138・139	20	14	(未)	＜1119土 ＞1121・1166・1170土	楕円形	N-50° -E	1.60×0.77		
1121土	Ⅶ D-138・139	20.16	14	未	＜1120土	楕円形	N-35° -E	2.20×0.90		
1122土	Ⅵ Q・R-142	18.14	14	未		楕円形	N-42° -E	1.40×0.75		
1123土	Ⅵ Q-144	19.57	14	未	＜252溝	？	？	？		
1124土	Ⅵ R-142・143	19.11	14	未	＜252溝、1110土 ＞1111土	？	N-37° -E	？×0.88	(中中~中後)	
1125土	Ⅵ R・S-142	18.9	14	未		楕円形	N-52° -E	2.00×1.10		
1126土	Ⅶ C-137	17.96	14	未	＜1150土 ＞1213土	楕円形	N-29° -E	1.97×0.84		上面に礫
1127土	Ⅶ B-139・140	19.74	14	17	＜1128土、 ＞552H、1225土	楕円形	N-39° -E	1.97×1.05	中前	壁溝有
1128土	Ⅶ C-139・140	19.73	14	17	＞1127土	楕円形	N-35° -E	1.94×0.90	上d	壁溝有
1129土	Ⅶ B-139	18.99	14	未	＜252溝	楕円形	N-37° -E	1.90×0.92		上面に礫
1130土	Ⅶ B-139・140	19.42	14	未	？1131土	楕円形	N-35° -E	？×0.80	(上e)	
1131土	Ⅶ B-140	19.48	14	未	？1130土	？	N-37° -E	？×0.90		
1132土	Ⅶ A-139	18.87	14	未	＜1097土、 252溝	楕円形	N-37° -E	？×0.85		
1133土	Ⅵ T-140	18.85	14	未	＜252溝	楕円形	N-51° -E	？×0.83	(上e)	
1134土	Ⅵ T-140・141	18.93	14	未	＜252・259溝	楕円形	N-20° -E	2.15×1.07	(円上)	
1135土	Ⅵ S・T-140	18.27	14	未		楕円形	N-18° -E	1.65×0.90		
1136土	Ⅵ T-139・140	17.95	14	未	＞1096土	楕円形	N-26° -E	1.80×0.77		上面に礫
1137土	Ⅶ A-139	19.14	14	未		楕円形	N-43° -E	1.57×0.80		
1138土	Ⅶ A-138	18.74	14	未	＜255溝	不整楕円形	N-49° -E	1.25×0.80	(最花)	上面に礫
1139土	Ⅶ B-138	18.18	14	未		楕円形	？	0.99×0.78		
1140土	Ⅶ B-138	18.35	14	未	＜1093・1142土	？	？	？	(中後)	
1141土	Ⅶ B-138	18.45	14	未	＜1193・1140・1143土、812・818埋、252溝	楕円形？	？		(中後)	
1142土	Ⅶ B-138	18.18	14	未	＜810埋、＞1140土	楕円形	N-35° -E	1.40×？		
1143土	Ⅶ B-137・138	17.99	14	未	＞810・812・818埋、 ＞1141・1144土	楕円形	N-37° -E	？×0.85	(最花)	
1144土	Ⅶ B-137・138	18.14	14	未	＜1143土、812・818埋、＞1145土	楕円形	N-40° -E	2.20×0.90	(円上)	
1145土	Ⅶ B-137・138	18.27	14	未	＜1144土、＞1146・1147土	楕円形	N-10° -E	2.08×？		
1146土	Ⅶ B・C-138	18.51	14	未	＜1145土・252溝、 ＞1147土	楕円形	N-10° -E	？×0.63	(最花)	
1147土	Ⅶ B・C-137・138	18.35	14	未	＜1145・1146・1148・1149土	楕円形	？	？	(上b)	
1148土	Ⅶ C-137・138	18.61	14	未	＜252溝、＞1147土	楕円形	？	？	(上c)	
1149土	Ⅶ B・C-137	18.21	14	未	＞1147・1150土	楕円形	N-65° -E	2.00×0.70		
1150土	Ⅶ C-137	18.33	14	未	＜1148・1149・1151・1152土 ＞1126土	楕円形	N-24° -E	？×0.85		
1151土	Ⅶ C-137	18.49	14	未	＜252溝、＞1152・1213土	楕円形	N-77° -E	？×0.85	(大10)	

表４　検出遺構一覧（2）

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	開口部規模(長×短：m)	時期	備考
1152土	Ⅶ C-137	18.59	14	未	＜1151土、252溝	?	?			
1153土	Ⅵ T-141	19.62	14	未	＜666H ＞1157土	?	N-51° -E	?×0.97		
1154土	Ⅵ T-141	19.45	14	未	＜1155土	楕円形	?	?		
1155土	Ⅵ T-141	19.45	14	未	＞1154土	楕円形	N-34° -E	?×0.95		
1156土	Ⅵ T・Ⅶ A-138・139	17.95	14	未		不整楕円形	N-45° -E	1.27×0.58		上面に礫
1157土	Ⅵ T-141	19.42	14	未	＜1153土	楕円形	N-20° -E	?×0.74	(円上)	
1158土	Ⅵ S・T-140・141	18.59	14	未		楕円形	N-41° -E	1.85×0.92	(円上)	
1159土	Ⅵ S・T-140	18.44	14	未		楕円形	N-30° -E	1.45×0.86		
1160土	Ⅶ A-139	18.27	14	未	＜1097土	楕円形	N-62° -E	1.60×0.88	(上c)	
1161土	Ⅵ T-139	17.9	14	未		円形	N-63° -E	0.98×0.84		
1162土	Ⅶ C・D-138・139	19.98	14	未	＜1163土、253溝 ＞661H	楕円形	N-20° -E	1.90×1.00	(上d)	
1163土	Ⅶ C・D-138・139	20.01	14	未	＜1170土 ＞661H、1162・1261土	楕円形	N-24° -E	?×0.73	(円上)	
1164土	Ⅶ D-138	19.68	14	未	＞1165土、	楕円形	?	1.63×?	(中後)	
1165土	Ⅶ C・D-138	19.57	14	未	＜1164土、＞1261土	?	?	?×0.94		
1166土	Ⅶ D-138	19.69	14	未	＜1120・1168土、253溝 ＞1164・1170土	楕円形	N-20° -E	1.67×0.85	(上b)	
1167土	Ⅶ F-135	19.65	14	未		楕円形?	N-65° -E	0.86×?		
1168土	Ⅶ D-138	19.52	14	未	＜253溝 ＞1166土	円形	N-33° -W	1.17×0.88		
1169土	Ⅵ E-165	?	14	未		?		?		
1170土	Ⅶ D-138	20.06	14	未	＜1081・1120、＞1163土	?	?	?		
1171土	Ⅶ D-138	19.95	14	未	＜1172土 ＞1173土	楕円形	N-40° -E	1.67×?	(上d)	
1172土	Ⅶ D-138	19.83	14	未	＞1171・1209土	楕円形	N-39° -E	?×0.87	(上d)	
1173土	Ⅶ D-138	20.27	14	未	＜1171土	?	?	?	(上d)	
1174土	Ⅶ D-139	20.55	14	未	＜1119土	楕円形	N-61° -E	1.55×?	(上d)	
1175土	Ⅶ D-140	21.14	14	未	＞550・551H	楕円形	N-19° -E	?×0.95	(円上)	
1176土	Ⅶ C-140	20.5	14	未	＞1177土	楕円形	N-60° -W	1.40×1.17	(上d)	
1177土	Ⅶ C・D-140	20.53	14	未	＜1176土	不整円形?	?	1.53×?	(榎藤?)	
1178土	Ⅵ T・Ⅶ A-140	18.82	14	未	＜1181土、252溝 ＞1179・1180土	楕円形	N-53° -E	?×0.83	(中後)	
1179土	Ⅵ T・Ⅶ A-140	18.83	14	未	＜1178土、252溝	楕円形	N-53° -E	?	(中後)	
1180土	Ⅵ T・Ⅶ A-140	18.84	14	未	＜1178土、252溝	楕円形	N-53° -E	2.35×?		
1181土	Ⅵ T-139・140	18.41	14	未	＜1182土 ＞1178土	楕円形	N-56° -E	2.05×0.92		
1182土	Ⅵ T-139・140	18.34	14	未	＞1181土	楕円形	N-3° -E	1.35×0.75		
1183土	Ⅶ E-135・136	18.73	14	未	＜1276・1277土	楕円形	N-33° -E	1.62×0.72	(大10)	
1184土	Ⅶ E-136	18.64	17	17	＜1185・1277～1279土、13698pit	楕円形	?	約1m×0.85	大10	
1185土	Ⅶ E-136	18.77	17	17	＞1184　1276土 ＜1277～1279・1369土、13698pit	?	N-52° -E	1.5～×0.84	大10	
1186土	Ⅶ E-136	19.3	14	未		?	?	?		
1187土	Ⅶ E-136	18.94	14	未	＜1185・1188～90土、197・263溝	?	?	?		

表5　検出遺構一覧（3）

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	開口部規模(長×短：m)	時期	備考
1188土	Ⅶ E-136	19.25	14	未	＜1189土、197溝 ＞1187土	?	?	?		
1189土	Ⅶ E-136	19.22	14	未	＜1190・1192土、197溝 ＞1187・1188土	?	?	?	(円上)	
1190土	Ⅶ E-136	18.79	14	未	＜1194土、252・260～62溝 ＞1187土	楕円形	N-50° -E	1.40×？	(中後)	
1192土	Ⅶ E-136	19.29	14	未	＜1190土 ＞1189・1193土	?	?	？×0.75	(大10)	
1193土	Ⅶ E-136・137	19.04	14	未	＜1190・1192・1194土、260・263溝 ＞1195土	?	?	?	(上c)	
1194土	Ⅶ E-136	18.79	14	未	＞1190土、＜1193土、252・260～262溝	楕円形	N-20° -E	1.15×0.85	(中後)	
1195土	Ⅶ E-136・137	19.15	14	未	＜1193土、263溝 ＞1196・1197土		?	1.27×？		
1196土	Ⅶ E-136・137	18.94	14	未	＜1195土、262・263溝 ＞1197土	楕円形	N-37° -E	1.65×0.74		
1197土	Ⅶ E-137	19.1	14	未	＜1195・1196・1198土、263溝	楕円形	?	1.40×？		
1198土	Ⅶ E-137	19.09	14	未	＜263溝 ＞1199・1201・1202・1283土	楕円形	N-42° -E	1.53×0.62		
1199土	Ⅶ D・E-136・137	18.63	14	未	1198土、262溝	楕円形	N-45° -E	1.70×0.66		
1200土	Ⅶ D・E-137	18.81	14	未	＜1201・1281土、252・262溝、＞1204土	楕円形	N-42° -E	?		
1201土	Ⅶ E-137	19.16	14	未	＜1198・1203土、262・263溝、＞1200・1202土	楕円形	N-39° -E	1.04×0.70	(上d)	
1202土	Ⅶ E-137	19.34	14	未	＜1198・1201土	楕円形	?	？×0.75	(中後)	
1203土	Ⅶ D・E-137	18.99	14	未	＜1274土、263溝 ＞1201・1204・1275土	楕円形	N-23° -E	1.68×0.66	(上d)	
1204土	Ⅶ D-137	18.81	14	未	＜1200・1203土、252溝 ＞1205土	?	N-37° -E	?	(中後)	
1205土	Ⅶ D-137	18.81	14	未	＜1204・1257・1274土、252・263溝 ＞1212土	楕円形	N-35° -E	?		
1206土	Ⅶ E-137	19.57	14	未	＜1207土	?	?	?	(円上)	
1207土	Ⅶ D・E-137	19.45	14	未	＜1208土、＞1206土	?	?	?	(上d)	
1208土	Ⅶ D-137	19.4	14	未	＜1210・1211土、253溝 ＞1207・1209土	楕円形？	N-68° -E	？×0.96	(上d)	
1209土	Ⅶ D-137・138	19.45	14	未	＜1172・1208土、253溝	楕円形	N-4° -E	？×0.67	(上d)	
1210土	Ⅶ D-137	19.02	14	17	＞1208・1209・1211・1212・1260・1280土	不整円形	?	?	大10	

表6　検出遺構一覧（4）

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	開口部規模(長×短：m)	時期	備考
1211土	Ⅶ D-137	18.69	14	17	＞1212・1257・1258土 ＜1210土、253・263溝	楕円形？	N-55° -E	1.90×？	大10	
1212土	Ⅶ D-137	18.64	14	17	＞1257・1258土、 ＜1210・1211・252・253・263溝	楕円形？	N-15° -E	？		
1213土	Ⅶ C-137	18.32	14	未	＜1126・1151土	楕円形	N-31° -E	1.63×1.05	(最花)	
1214土	Ⅶ C-137	18.72	14	未	＜1151土、252溝 ＞1152土	？	？			
1215土	Ⅵ R-144	19.46	14	14	＜1112土、252溝	楕円形	N-45° -E	1.90×1.37		上面に礫 壁溝有
1216土	Ⅶ B-135	17.3	14	未	＜665H、道路	？	？	？×2.05		
1217土	Ⅴ S-147	？	14	未						
1219土	Ⅶ F-138	20.83	17	17	＜1224土	楕円形	N-62° -E	？×0.92	梗林	壁溝有
1220土	Ⅶ K-128・129	19.34	17	17	＜264・265溝	円形	N-34° -W	1.13×0.87		
1221土	Ⅶ G-135	19.76	17	17		楕円形？	N-30° -E	1.00×0.67		
1222土	Ⅶ F-134	18.84	17	未		？	？	？		
1223土	Ⅶ E-138・139	20.67	17	未		円形	？	1.00×0.67		
1224土	Ⅶ F-138	21.24	17	(未)	＞1219土	？	？	？		
1225土	Ⅶ B-139・140	？		(未)	？1127土	楕円形	？	？		
1256土	Ⅶ C-138	19.61	17	未	＜1085・1165土	楕円形	N-48° -E			
1257土	Ⅶ D-137	18.59	17	17	＜1212・1258土、252溝	？	？	？		
1258土	Ⅶ D-138・139	18.66	17	17	＞1257土 ＜1211・1212土、252・263溝	楕円形	N-25° -W	？		
1260土	Ⅶ D-137	19.22	17	17	＜1210土	円形？	？	径約1 m		
1261土	Ⅶ D-138・139	19.92	17	未	＜1165・1262土	楕円形	N-26° -E	？×0.95		
1263土	Ⅶ C-139	20.3	17	未	＞661H	楕円形？	？	？×0.70		
1264土	Ⅶ D-138	20.34	17	未	＞1121土 ＜1120土	？	？	？		
1265土	Ⅶ E-138	20.77	17	未		？		？		
1266土	Ⅶ E-138	20.8	17	未	＞1267土	？	？	？		
1267土	Ⅶ E-138	20.87	17	未	＜1266・1268土	？	？	？		
1268土	Ⅶ E・F-138	20.87	17	未	＞1267土	円形		？		
1269土	Ⅶ F-138	21.28	17	未		？	？	？×0.75		
1270土	Ⅶ F-137	20.31	17	未		楕円形	N-37° -E	1.80×0.80		
1274土	Ⅶ D-137	18.96	17	未	＞1203・1204・1205・1275・1280土、＜263溝	楕円形	N-31° -E	1.06×0.68		
1275土	Ⅶ D-137	19.27	17	未	＞1203・1274・1280土	？	？	？		
1276土	Ⅶ E-136	19.11	17	未	＜1277土、＞1183土	？	N-39° -E			
1277土	Ⅶ E-135	18.62	17	未	＞1183～1185・1276・1278土	楕円形	N-37° -E	？×0.65		
1278土	Ⅶ E-135	18.51	17	17	＞1184・1185土、 ＜1277・1279・1369土	？	？	？		
1279土	Ⅶ E-135・136	18.37	17	(未)	＞1184・1185・1278土、＜1369土	楕円形？	N-34° -E	1.73×0.55		
1280土	Ⅶ D-137	19.16	17	未	＞1275土 ＜1260・1274土	円形	？	径0.42		
1281土	Ⅶ D・E-136・137	18.86	17	未	＞1200土	？	？	？		

表7　検出遺構一覧（5）

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	開口部規模(長×短：m)	時期	備考
1283土	ⅦD・E-137	18.88	17	未	＜1200・1204土 ＜1198・1201・1203土	?	?	?		
1289土	ⅥL-151	20.18	20	未		不整楕円形	N-57°-E	2.41×1.3		
1290土	ⅥJ-152・153	19.25	20	20		楕円形	N-49°-E	1.93×1.07	?	
1291土	ⅥI-153	19.07	20	未		?	N-51°-E	?		
1292土	ⅥF-159	19.83	20	未		不整円?	N-20°-E	2.06×1.63		
1293土	ⅥE・F-159	19.35	20	20		楕円形	N-38°-E	2.18×0.77	?	
1294土	ⅥE-159	19.08	20	20		楕円形	N-48°-E	1.44×0.46		
1356土	ⅥK-151	?	20	未		楕円形	N-80°-E	1.4×0.83		
1369土	ⅦE-136	18.38	17	未	＞1278・1279・1185土、＜197溝	楕円形	N-48°-E	1.25×?		

遺構名	位　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	掘り方規模(長×短：cm)	位置	深さ(cm)	時期	備考
810埋	ⅦB-137・138	18.3	14	未	＞1142・1143土	50×39	倒立		(大10?)	
811埋	ⅦB-138	18.2	14	未		56×53			(大10?)	
812埋	ⅦB-138	18.4	14	14	＞1141・1143・1144土、＜818埋		正立		大10	
813埋	ⅦC-137	18.3	14	14	＞1150土	?	正立	22	大10	
814埋	ⅦH-133	19.8	14	14	＜252溝	39×45	正立	25	中中	
815埋	ⅦG-135	17.8	14	未		径50	正立			
816埋	ⅦJ-130	19.5	14	未	＞664H	45×38	正立		(下d_1~上a)	
817埋	ⅤQ-149	16	14	未		58×46	正立			
818埋	ⅦB-138	18.4	14	14	＞1141・1143・1144土、812埋		正立		大10	
819埋	ⅦH-133	19.8	14	未		51×36	正立		(上e)	
820埋	ⅦA-138	19.2	14	未	＞255溝	70×66				
821埋	ⅦJ-130	20	17	未			正立			
822埋	ⅦK-140	24	17	未			正立		(円上)	
823埋	ⅦF-140	21	17	17	＞1224土	50×40	正立			
824埋	ⅦL-133	21.5	17	未	＜825埋	?	正立		(上e)	
825埋	ⅦL-133	21.5	17	未	＜824埋	?	正立		(上e)	

表8　検出遺構一覧 (6)

住居番号	位　　置	標高(m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	開口部規模(長X短：m)	深さ	炉	ピット数	時期	備考
550住	ⅦC・D-140・141	20.75	14	未	<551H、1175土、>675・676H		4.78×？				(榎林)	
551住	ⅦC・D-139・140	20.54	14	未	<677H、1175土>550H		4.22×3.45				(中後)	
552住	ⅦB・C-140・141	20.16	14	17	>673・674・676H<1127土、254溝				○		上e	
661住	ⅦC・D-138・139	20.34	14	14	<1085・1162土253溝、？1163土		？	28		2	上d	4分の1精査
662住	ⅦG・H-134・135	19.75	14	14	<663H		？	45		3	上e	
663住	ⅦG・H-135	20.19	14	未	>662H		？				(上d)	
664住	ⅦI・J-130～132	19.15	14	未	<816堰、678H		？				前期？	6型住？
665住	ⅦA・B-135	17.14	14	未	<255溝、>1216土、道路		3.86×2.78				平安	
666住	ⅥT・ⅦA-141	19.64	14	未	>1153土		？					
667住	ⅦH・I-133・134	19.89	14	14	>663H		？			1	上d	
672住	ⅥN-147・148	19.35	14	未	<252・258溝		3.0×2.67				平安	
673住	ⅦA・B-140・141	19.85	14	未	<552H、254溝		？				(上c)	
674住	ⅦB・C-141	20.27	14	未	<552H、>675・676H		？				(上d)	
675住	ⅦC・D-141	20.86	14	未	<550・674H、>676H		？				(榎林)	
676住	ⅦC-140・141	20.45	14	未	<550・552・674・675H		？				(上c)	
677住	ⅦD-139・140	20.88	14	未	>551H		？				(上d)	
678住	ⅦJ-129・130	19.01	17	未	>664H、<821堰		？×3.14					
681住	ⅦF-133	？	17	未			？	？	？	？	平安	

ピット番号	標高(m)	位　　置	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸×短軸(開口部：cm)	長軸×短軸(底面：cm)	深さ(cm)	柱痕	備考
11585pit	19.52	ⅦI-132	14	未		不整円	52×39			未確認	
11586pit	19.43	ⅦH・I-132	14	未		不整円	57×44			未確認	
11587pit	19.11	ⅦH-132	14	未		不整円	56×40			未確認	
13694pit	19.75	ⅦM-127	17	未	<西盛土	？	60×？			有	
13695pit	19.57	ⅦG-134	17	未		不整円	50×45			未確認	
13696pit	19.88	ⅦH-133・134	17	17	？13697pit	不整円	89×？	42×？	80	有	半裁
13697pit	19.19	ⅦH-133・134	17	17	？13696pit	円形	22	15	28	未確認	完掘
13698pit	18.83	ⅦE-136	17	未	>1184土	円形？			36	未確認	

※環状配石墓・埋設土器を除き、精査を行った遺構は底面で、確認のみの遺構は確認面での標高を記してある。

表9　検出遺構一覧（7）

第Ⅲ章　調査の成果と今後の課題

土坑・環状配石墓について

Ⅰ　土坑墓について

三内丸山遺跡の土坑墓は、遺跡の南側で昭和51年度に行なった県総合運動公園西駐車場予定地調査（青森県教委　第33集）によって列状配置を成すことが、東側で平成４年度に行なった旧野球場建設予定地調査と平成７・８・９年度に行なった第４・７・８次調査（青森県教委　第204・251・338集）によって道路跡を伴うことが確認され、既に報告されている。

今回報告の対象となった第13・14・17・20次調査では、環状配石墓内のものも含めて、計177基の土坑が確認されている。過去の報告された例と同様に、道路跡を伴って列状に配置されるものである。

以下、第13・14・17・20次調査で確認された土坑について、形状・時期・配置等項目を分けた上でのまとめを行う。その際、本遺跡の過去の調査例との比較・検討も行っていくが、特殊な事例の場合や他遺跡の類例を挙げる場合もある。以下から混同を避けるため、今回報告する墓域を「南西側墓域」、遺跡東側の墓域は「東側墓域」、西駐車場建設予定地内の墓域を「南側墓域」と呼び分けてゆく。なお、青森市教委の平成６年度調査分も南西側墓域に属するが、既にまとめが行なわれている（青森市教委1995）ことから、以下の記述には含めなかった。

１形状について

(1)　検出数・平面形・規模

平面形の推定できるものは125基である。長楕円形、隅丸長方形、不正な楕円形や小判型を含めた広い意味での楕円形は、113基と最も多い。他は、略円形も含めた円形でわずか15基である。東側墓域の報告（青森県教委　第338）同様、本稿でもこれら大多数を占める楕円形の土坑を土坑墓と捉え、以下検討を続ける。

開口部の長軸は98cm～２m45cmで、短軸は50cm～１m40cmで、長軸の長さと短軸の長さの比は１～3.13となる。土坑の長軸長：短軸長の値を、墓域別の散布図にしたものがグラフ１である。１：１に集まる円形土坑を除き、南西側墓域の土坑墓は短軸が42～92cm、長軸が93～２m30cmに集中域があり、長軸長が増加幅に比して短軸長の増加幅が小さくなる傾向が見られる。

また、南側墓域は南西側墓域に比べ短軸が短い傾向がある。東側墓域は南西側、南側の両墓域と分布が重なる他に、円形に近い土坑が多いといった特徴がある。

土坑の長軸：短軸の比で見る限り、南西側墓域は東側墓域と南側墓域の中間に位置するといえる。

(2)　内部構造

①　底面について

底面の傾きの有無が判断できるものは、11基である。この内７基の底面において長軸方向への傾斜が認められた。水平に底面が造られるのは４基であり、今回の調査では少数となった。もともとが傾斜地であるためか、傾斜を持つもの持たないものの比が１対１であった南側墓域より、本調査区内では高い割合で傾斜が見られる結果となった。傾斜角度は４°～7.5°であり、６°前後が多

い点において南側墓域B列（青森県教委　第33集）の調査結果と共通する。

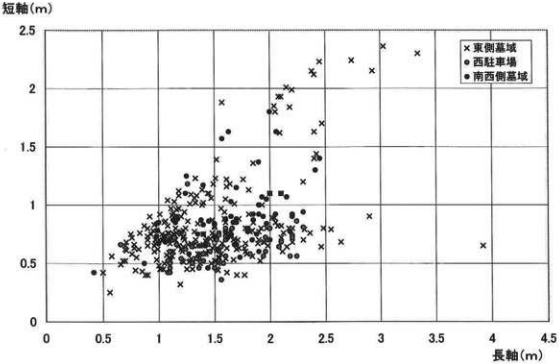
精査を行った土坑24基の内、7基の底面から汚れが確認された。この内、底面の貼り土に起因する例が第1112・1119・1127・1128・1215号土坑である。底面に第Ⅶ層の土壌が薄く貼られる際、色調の暗い土壌が混入して汚れを形成したものと考えられる。一方、汚れが認められながら貼り土がない例として第1093・1219号土坑が挙げられる。汚れが壁面に及ばず、底面に限定されることから、草木根の作用によるものではないと捉えている。他の要因として、敷板を含む敷物や埋葬遺体が引き起こした土壌の変化とも考えられるが、今後の検討課題となるものである。

② 壁溝について

第1093・1112・1119・1127・1128・1215・1219・1224号土坑の8基で確認されている。他の16基の精査土坑では壁溝が見られなかった。

壁溝には、（a）溝の中に小ピットが不規則に配置されるもの（第1127・1128号土坑）、（b）楕円形の小ピット、短い溝状のピットが連結して壁溝となるもの（第1093・1112・1119・1215号土坑）、（c）溝のみで小ピットが伴わないもの（第1219号土坑）の3種類に分かれる。（b）に見られる溝状の小ピットは、底面形状が直線的であることが多く、楕円形のものと比べて開口部と底面の最大長の差が少ない傾向がある。

壁溝の幅は5～34cm、底面からの深さ2～32cmで、（b）と（c）では特に幅と深さの差が大きく、全体的に不整な形状となる。壁溝を持つ土坑墓で、底面全体を検出し得たのは第1127・1128・1219号土坑である。この3基で壁溝の配置を観察したところ、第1127号土坑を除く2基の壁溝が全周することがわかった。部分的な精査であるが、壁溝の途切れることが確定したものには第1093・1112号土坑がある。第1127号土坑と共通して言えるのは、北壁側に壁溝の途切れが存在することである。



グラフ1　土坑の長軸・短軸比

また、壁溝には堆積土の点でも特徴が見られる。第1119・1127・1128・1219号土坑の4基で確認できた特徴は、土層が縦方向に区切られる点である。2層に分層される場合は外側、3層に分層される場合は中央に暗い色調の堆積土が見られ、それ以外では第Ⅶ層を中心とする地山の土壌が比較的多く混入する。暗い色調の堆積土は総じて横幅が狭く、第1119号土坑ではわずか2cm幅であった。

③　板壁の存在について

第11号配石土坑墓Aの壁溝からは、板材の形状を留めた炭化粒がまとまって検出されている。各炭化粒が1枚の面を成し、木目方向が揃うことから本来は1枚の板材であったと考えられる。表面を焦がした厚さ約2cmの板材であったと思われるが、板材の表裏面を示す2枚の炭化粒層のみが残存し、内部の木質部は失われている。炭化粒の木目方向から見て、板目を地面に対し垂直に据え付けたようである。

第11号配石土坑墓Aの壁溝内は炭化木片・粒が集中しており、壁全体が板壁となるよう壁溝内に板材が差し込まれていた可能性が高い。板材の内、焦げの度合いの強いものだけが残存した結果とも見ることが出来る。壁溝内での炭化粒の分布には粗密の差があり、場所によっては空白も見られる。これは、その場所における板材の有無を示すものではなく、各板材の焦げの度合いに起因するものと想定している。

前述の②において壁溝内堆積土の特徴について触れたが、これらも板材が差し込まれていた痕跡であると考えられる。以上の調査成果から、本遺跡における周溝を持つ土坑墓は、環状配石墓の内外に係わらず板壁が施されていたと見てよいものと思われる。同時期における他遺跡の例として、六ヶ所村富ノ沢（2）遺跡（青森県教委　1992）E区の第65号土壙が挙げられる。配石は伴わないが、全周する壁溝に立って炭化材が検出されている。同地区の第92号土壙では堆積土中位で横位の炭化材が検出されており、天板となる可能性がある。同じく三戸町泉山遺跡（青森県教委1992）の第171号土坑でも、東壁に沿って厚さ3cm、幅55cmの炭化材が出土している。これは壁溝を伴わない土坑墓であり、壁溝の有無が必ずしも板壁の有無に対応しないという事例である。

(3)　上部構造について

①　土坑墓上の土盛り（マウンド）について

第1167号土坑墓では、堆積土の第Ⅲ層の盛り上がりとしてマウンドが認められている。土層観察用ベルト内という、直上土を観察する上での好条件から検出できたものと思われる。後述する第16号配石でも確認されており、検出の困難さから結果的に確認数が少なくなってはいるが、決してまれな例ではなかったのかも知れない。

②　堆積土上の礫について

土坑墓113基中、22基の堆積土上面で礫が置かれているのが確認された。A類：大型の板状礫を主体とするもの（第1087・1113・1138・1139号土坑等）、B類：長さ30cm未満の礫を数個用いて組み石をなすもの（第1093・1099号土坑等）、C類：規則性は見られないが、長さ20cm以上の礫が複数置かれるもの（第1129・1125号土坑等）の3形態に分けられる。A類にはさらに中央付近に置かれる場合（A1類；第1139・1087号等土坑）と長軸上の壁際に置かれる場合（A2類；第1197・1215号土坑）とに分かれる。A類は東側墓域でも3基（第153・956・959号土坑）確認されているがB・C類は顕著ではない。

いずれも使用される礫は安山岩が多く、分布は調査区の北側に集中しているといった特徴がある。長軸礫の側縁が上となる例（第1093・1099号土坑）が見られるが、個々の礫に対応する掘り方は検出できなかった。

このほか、第1098・1100・1109号土坑の付近では角礫が散在していた。これも対応関係が不明であったため記載していないが、土坑墓と関連のある付属施設である可能性がある。

精査した第1093号土坑の例からみて、これらは縄文時代中期後葉を含む時期に属するものと思われる。なお、第812・813・813号埋設等の埋設土器においても上面に礫が見られるが、これらは縄文時代中期末葉の大木10式併行期に属するものであった。

2 堆積土と堆積土内出土遺物について

(1) 堆積土について

堆積土は暗褐色または黒褐色で、地山土塊のブロックが目立つ例はない。しかしながら掘り込んだ地山の土量に対する堆積土中の地山ブロック量は明らかに少なく、第Ⅱ層のプライマリーな堆積を示している例も確認できなかった。このことから、本調査区内の土坑墓は全て人為的に埋没したものと判断される。

その他の特徴として、周囲に残存しない土塊の混入が見られる例が挙げられる。調査区の北側では広い範囲で第Ⅵ層が失われているが、そこに構築される土坑の堆積土内では、第Ⅵ層由来の浮石粒の混入が多くの場合見られる。これは土坑墓の埋没後に、おそらくは人為的な要因によって周囲の第Ⅵ層が失われた結果とも想定される。第Ⅵ層は土坑墓の縁にも残存しないため、各土坑墓にマ

No	中期	個体土器	石錐	不定形	敲石	磨石	石皿	石棒	石棍	礫	剥片	軽石	石斧	有孔・耳飾（土製品）	その他（土製品）	その他（石製品）
1093	56(12)				1		(2)			(6)19						
1095		①				①				1	2					
1101			1							2	1					
1103																
1112	(1)		1							(2)						
1119	52(14)		1	2							8					(2)
1127	3										(1)					
1128	8(2)										1					
1184	14(2)			1	1(1)					1		(1)				
1185	8(1)		1							16	2					
1210	139(24)		1	1(27)		2				18	40					
1211	39(2)		1					(1)		1	5					
1212	4									1	2					
1215																
1219	18			1			1			2	2					
1220	30								1		1					
1221	1															
1257	3															
1258											1					
1260																
1278																
1290	4															
1293																
1294																
11配	15(4)		①							1(4)	(1)			1	1	
17配	3					(2)	(1)			(16)	(1)		(1)			
計	379(62)	①	6①(3)	5(28)	2(1)	2①(4)	1(5)	(2)	1	63(44)	56(5)	(2)	(1)	1(1)	(2)	(2)
合計	441	0	10	33	3	7	6	2	1	107	61	2	1	2	2	2

① 底面・底面直上　1 堆積土　(1) 確認面

表10 精査を行った土坑墓・環状配石墓の出土遺物

ウンドが伴っていたと仮定した場合、第Ⅵ層と共に削平を受けた可能性も考えられる。

(2) 出土遺物について

確認した全ての土坑墓について、遺物種別出土点数を集計した。土器片は835点で最も多く、遺物全体の83%を占める。次いで礫が83点で10%、剥片が36点で4%である。他に個体土器、石鏃、石匙、不定形石器、敲磨器、石皿・台石、砥石、石錘、石冠、加工のある礫石器、角柱状の礫石器、耳飾などの土製品、軽石や石製品も出土しているが、全て合わせても全体出土量の4%に過ぎない。東側墓域で見られたヒスイ製垂飾品、異形石器、半円状打製石器は、南西側墓域の土坑墓内では出土しなかった。

精査を行った24基の土坑墓では、内17基から591点の遺物が出土している。ここでも最も出土量が多いものは土器片で、441点の出土があり全体の73%となる。剥片が66点で10%、礫が63点で10%、その他が24点で4%となる。底面・底面直上の出土遺物は、第1095号土坑の個体土器と磨石各1点のみである。その他は堆積土中に散乱しており、出土状態で判断する限り副葬品であるとは見做し難く、むしろ遺構の埋没に伴う混入と判断するのが妥当と思われる。

出土した遺構数でみると、土器片が15基、礫が12基、剥片が10基からと、上記と同様の傾向が見られるが、石鏃が6基から出土している点で変化が見られる。精査を行った土坑墓の25%から出土したこととなり、出土点数は少ないが土坑墓との関連が深い遺物であると言える。

(3) 横位に土器が埋置される土坑について

第1095号土坑の底面では横位の深鉢形土器が出土している。土器は口縁部を欠き、内部に磨石が1点入った円筒上層b式である。掘り方の形状が比較的整っている点、掘り方の底面が土器よりも広くつくられる点、土器の埋まり方が深い点等においても通常の土器埋設遺構とは異なっている。

三内丸山遺跡内での類例としては、東側墓域の第166号土坑と、埋設として記載されているが第45・46号埋設土器（青森県教委　第157集）が挙げられる。土坑内の土器は共に円筒上層d式であった。

他の遺跡では、青森県六ヶ所村冨ノ沢（2）遺跡（青森県教委　1994）の第4号土坑と、青森県五戸町の八戸市との境に位置する上蛇沢（2）遺跡（青森県教委　1995）の第2・25・62号土坑墓が円筒上層c式期の例となる。2例とも列状の墓域内で確認されており、配置のされ方においても三内丸山例に近いものである。岩手県和賀町梅ノ木遺跡第Ⅶ地区（岩手県教委　1981）の第6埋設土器は、東側墓域の第45・46号埋設同様、2個体の土器が入れ子になった例である。埋設された土器は大木7b～8a式である。いずれの例も一般的な土坑墓と比べて長軸・短軸の差が少ない傾向がある。上蛇沢（2）例から判断すると、この特徴は円筒上層c式期を中心とした土坑墓全般に言えることかもしれない。

円筒上層b～d式期に散見される埋葬形態であり、列状墓を構成する施設として選択されることがある点で注目される遺構である。

3 所属時期について

精査を行った土坑墓のうち、堆積土出土遺物から時期が推定できるものは、円筒上層b式期1基（第1095土号土坑）、円筒上層d式期1基（第1128号土坑）、円筒上層e式期1基（第1119号土坑）、榎林式期1基（第1219号土坑）、最花式期2基（第1093・1211号土坑）、大木10式期2基（第1184・1185号土坑）

の8基である。円筒上層ａ・ｃ式を除く、縄文時代中期の各型式期で土坑墓が存在している。少ない事例内での判断となるが、中期後半期にあたる榎林～最花式期のものが多数を占めていると言える。

なお、時期判定の結果をまとめる過程において、時期判別法に関する2つの問題点が浮かび上がってきた。一つは、確認面出土遺物を時期判定に用いることについての危険性である。未精査の土坑墓で見た場合、時期の判別が可能な37基の内、23基が中期前半にあたる円筒上層ｂ～ｅ式期のものとなる。精査の有無によって時期の比率が逆転する結果となり、確認面遺物を時期判別に用いる場合の不確かさが表れたものと解釈している。

残る一つは堆積土内混入土による時期判定についてである。第Ⅱ層由来の土塊が堆積土中に混入されない遺構は、中期末葉に至らないそれ以前の時期と解釈したが、出土遺物から見た時期と整合しない場合が見られる。第1184・1185号土坑等では、堆積土に中期末葉の遺物を含むにもかかわらず第Ⅱ層土の混入は認められない。中期末葉に属することが明らかな埋設土器においても同様であることから、中期末葉の掘削行為と第Ⅱ層の混入という現象は必ずしも対応しないものと判断せざるを得ない。遺構の埋め立て方に起因するものかとも考えられるが、中期末葉の遺構との重複、中期末葉の遺物の出土がない限り判別不能であるため、結果この時期判別法を踏襲することとなった。今後これに替わる方法を模索・検討していく必要がある。

Ⅱ　環状配石を伴う土坑墓―環状配石墓について

調査区の南側を中心として、第11・12・13・14・15・16・17・24・25・28号配石の10基の環状配石が確認されている。うち6基の内部を精査したところ、その全てから土坑墓が検出された。残る4基も同じ構造と思われ、これらを環状配石墓と呼称することにした。以下に環状配石墓の特徴をまとめる。

1 配石内部の土坑墓について

(1)　配石内での数量・位置について

第11号配石で3基、第12・13・16・17・28号配石のそれぞれで各1基の土坑が伴っていた。多くの場合伴う土坑墓は1基であり、複数伴う例では配石の礫数が多く、配置の密度も高いものであった点は注意を引く。

位置については、配石の中心に位置すると判断された例は認められず、全て一定の方向に偏りを見せている。12号配石を除き、方角で見ると南西側、地勢で見ると斜面上方、道路跡から見ると離れた位置に構築されている。第11号配石例のように複数が伴う場合も同様で、土坑墓の全てが上述のように配置される。

(2)　平面形・規模

第28号が不整な円形として確認された以外、すべて長楕円形であり、単独で確認される土坑墓との違いは見られない。長軸・短軸の長さは第11号配石で2 m20cm×92cm、第17号配石で2 m30cm×94cmであり、長軸：短軸はともに1：2.4となる。やや大きめで細身の平面形と言えるが、土坑墓全体の中では特異な値ではない。

(3)　内部構造について

底面まで精査が及んだものは第11・17号配石内の2基のみである。全体を論じる上では少ない資料

数ではあるが、この2基の中でも底面の傾斜と汚れ、壁溝、壁板の存在が確認されており、それらのあり方も環状配石を伴わない土坑墓と同様であった。溝状を含む壁溝内の小ピット、壁溝の途切れ、底面の貼り土については、今回の精査を行った環状配石墓からは確認できなかった。

(4) 上部構造について

地表面からの盛り上がりは大部分失われていたが、第16号配石内の土坑墓上とその周囲で第Ⅴ・Ⅵ層を多く混入する人為的堆積土が確認されている。土坑墓内では沈降して厚く堆積し、壁外にも大きくはみ出すものの環状配石内に収まる点からマウンドと判断した。東側墓域の第953号土坑上でもマウンドが確認されているが（青森県教委　第338集）、第16号配石の例ではより広い範囲でマウンドがなされている。1例のみの比較ではあるが、環状配石墓内土坑墓とその他の土坑墓との相違点となる可能性がある。

堆積土上の礫については、第11・12・17号配石で認められている。第11・17号では土坑墓の中央付近に、第11・12号配石では堆積土上礫配置のA2類が見られる。この点でも環状配石を伴わない土坑墓との共通点が認められる。

(5) 出土遺物について

堆積土内の遺物は、第11号配石が18点、第17号配石が3点で、底面直上から石鏃が1点出土した第11号配石例、同じく底面直上から赤色顔料が検出された第17号配石例は、それぞれが南西側墓域での唯一の事例である。第11号配石土坑墓Aの直上からは特異な土製品も出土している。

2 環状配石について

(1) 使用される礫について

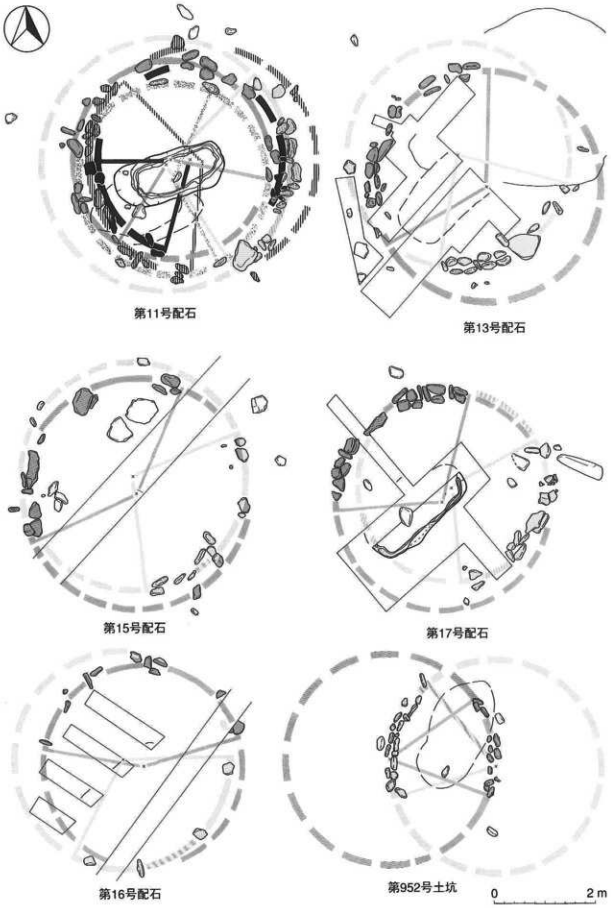
長さ20～40cmで、川原石のように表面の滑らかな、楕円形の礫が多く使用されている。板状または柱状の角礫が使用される場合、他の礫の平均に比べて倍以上の大きさとなる。使用される礫は82～13個と遺構間で差が大きく、使用礫数から20個以下（第12a・12b・14・16・28号配石）、25～40個（第15・24・25号配石）、50個以上（第11・13・17号配石）の3群に分けることも可能である。

石質は安山岩が主体で、石皿の破片や側縁使用の敲磨器類などの転用例が少数見られる。

(2) 配置の規模・形態・規則性について

配石は環状部部分と張り出し部分の二つに分けられる。環状部の礫は、長軸が輪に対して、平行または直交して置かれている。第15・28号配石では不明瞭であるが、平行置きと直行置きは一遺構内に共存する傾向が強い。第16号配石のように礫の密度が低い場合においてもこの傾向は認められる。

平行置きと直交置きの組み合わせに関しては、第13号配石の東側では2個平行－2個平行－1個直交、第17号配石の北側では2個平行―1個直交―2個平行―2個直交と規則性が見られる部分もあるが、遺構内で一貫された例はない。より強い規則性として挙げられるのは、板状・柱状の大型礫の使用とその位置についてである。第11・12・13号配石、第14・15・16・17号配石、第24・25・28号配石は、遺構配置から見て3つの群に分けられる。順にA群・B群・C群と呼称し、各群で大型礫の位置を見ていくと、A群では円弧の南東側、B群では第16号配石を除いて北西側に置かれ、C群では大型礫が使用されないといった対応関係が見られる。また、板状・柱状の大型礫が複数使用される例はC群内に限定され、この点でも遺構群との強い対応関係を示している。これら群が時期の違いに



130図　環状配石墓の多重正円構造

よるものか、被葬者の系統・立場によるものかについては、今回の調査では判断材料を得られなかった。

張り出し部は円弧から外側にかけて礫が配置されるもので、特に礫の配置が密なもの伴う傾向がある。大型の礫を用いるもの（第17号配石）、その配石内での平均的な礫を複数用い、円弧に直交する角度で全体を形成するもの（第11号配石等）、環状部からやや離れるもの（第14・15・17・24号配石）などがある。第23号配石は環状配石墓に類似した配石であるが、ハの字型の張り出しを持つ。弧状の配石部分において、2個平行－2個平行－1個直交の配置単位があり、その2単位毎に張り出し部が位置するといった規則性が見出せた。環状配石墓と認定したものではこのような規則性は見られなかった。

環状部は半径2～2.3mの配石である。「環状」と表現したが、厳密には正しい円形を成さず、1つの正円の軌跡上に全ての礫を重ね合わせることができない形状となっている。大型掘立遺構の柱穴、フラスコ型ピットの底面などに現れた当時の技術を見ても、半径2m程度であれば正円に近い施工は十分可能であったと考えられ、中途半端な円形という点で違和感が残る。この不整形状に何らかの規則性を求めて検討するため、環状部には異なる半径・中心点を持つ円弧が偶然性を超えて認められる（131図）ことに今回着眼することとした。例として、第13号配石は半径2.20mと2.28m、第15号配石は2.2m、第16号配石は1.98mと2.12m、第17号配石は2.12mと1.86mのそれぞれ2つの円による配置構成を想定することによって、大部分の礫を円弧上に収めることができる。第11号配石については、少なくとも1.88m、1.91m、1.95m、2.28m、2.32mの5つの円が必要とされる。中心点はすべて土坑墓上にあるが、互いに14～74cmの距離が置かれている。東側墓域では、対向する配石上に中心点を持つ第952号土坑の例も存在する。

これらの要因として、1つの環状配石が形成される上での段階と、それに伴う空白期間の存在を想定している。その根拠として、第11・13号配石においてその下部からも配石が確認されたことが挙げられる。また、同じ半径を用いる例が小数であること、第11号配石では土坑墓B上に環状配石が重複すること、第13・17号配石では各円弧上で異なる配置の規則性が見られること、礫数・伴う土坑墓が多い第11号配石例では、他より多くの円構造が認められることなども裏付けとなろう。

配石の構築段階を認めた場合、土坑墓の数と配石の構築回数とは対応しないこととなる。配石は埋葬時以外でも構築されることとなり、ある節目をもって配石を繰り返す葬送儀礼の存在を示す事例ともなり得る。

3 構築段階について

上述したとおり、配石自体に複数の構築段階が想定される。マウンドは、配石範囲内の掘削、土坑墓構築の後になされる。配石範囲内の掘削については1例のみの検出であり、配石、土坑墓構築との前後関係は把握できなかった。配石と土坑墓については、土坑墓埋没後に環状配石を付加している例が第11号配石で認められている。

4 所属時期について

遺構内の遺物から判断すると、第11号配石・第16号配石の土坑墓内から円筒上層e～榎林式の土器片

が、第16号配石のマウンドに伴って最花式が出土しており、中期後半期の時期幅が与えられる。層位関係においても、円筒上層ｄ式までの形成と考えられる第Ⅲｂ層上に第11～17号配石が構築され、中期末葉以降に堆積した第Ⅱｃ層が直上に堆積しており、遺物から見た時期幅と矛盾しない。土器１型式分の時期に限定できた例はないが、前々項２）の（2）で触れた板状・柱状の大型礫の遺構群との対応関係、第25号配石例から、環状配石墓内にもある程度の時期差が存在するものと思われる。

５特徴のまとめと類例について

以上から、環状配石墓の特徴は次の通りとなる。①環状の配石を伴う土坑墓である、②配石内の土坑墓は、配石を伴わない同時期のものと、形状面での大きな違いが見られない、③礫は土坑墓の周囲に円形に配列される、④配石の半径は1.9～2.3mが大部分である、⑤環状配石は複数の円弧をもとに形成される、⑥礫の粗密に係わらず、円弧に対して礫の長軸が平行・直交となる組み合わせがみられる、⑦環状配石は複数の円弧をもとに形成される、⑧円弧状に柱状もしくは板状の大型礫がひとつ、または非対称に複数配置される、⑨張り出し部を持つものがあり、特に礫が密に配置されるものに多く見られる、⑩配石範囲内でマウンドが検出される場合、配石を伴わない土坑墓のものよりも広い範囲で検出される、⑪マウンドを伴う場合、配石内に削平を伴う可能性がある、⑫土坑墓内の遺物は少ないが、特殊なものが含まれる比率は高めとなる、⑬中期後半期のいずれかの時期に属する、⑭同じ墓域内で、配石を伴わない同時期の土坑墓に作用する配置上の規則性は、環状配石墓にも作用する。

上記の特徴を踏まえ、過去の調査事例の中から環状配石墓の認定を行っていく。

南西側墓域では他に、青森市教育委員会が平成６年に南西側墓域で確認した第２号配石と第25号土坑、第３・４号配石と第16号土坑も２基の環状配石墓と認定できる。平成６年に試掘調査を行なった旧サッカー場建設予定地試掘調査では、Ｄ区３トレンチで２基の環状配石遺構が確認されており、南西側では合計14基の環状配石墓の存在が確認できる。

東側墓域では、規模が小さいが第952号土坑、第２号配石と第134・135～137号土坑、第３号配石と第161号土坑の３基が該当しよう。礫が疎らなため環状構造を見落とし易いが、第10号配石と第930号土坑、第７・８号配石と第930号土坑も環状配石墓の特徴を持っている。

同じく礫が疎らな例だが、南側墓域では第３号配石と第31号土坑、第４号配石と第27・28号土坑、第７・８号配石と第10号土坑の３基が環状配石墓と認定できる。

以上三内丸山遺跡全体では、現時点で最大22基の環状配石墓が認められる。

他遺跡の類例としては、六ヶ所村冨ノ沢（2）遺跡のＥ地区で確認された第74・75号土壙と第２号配石遺構がある。第74号土坑が最花式とされており、時期の面でも最も三内丸山例に近い例である。

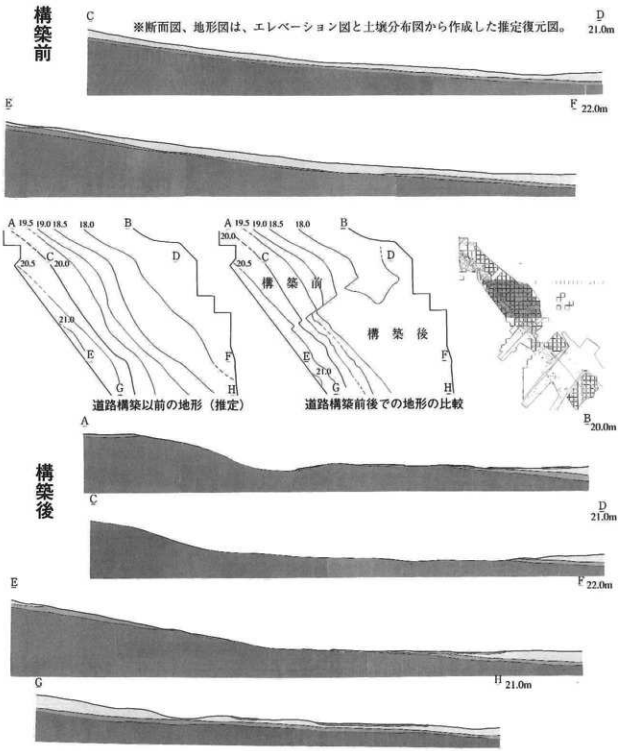
道路跡について

１　道路跡確認の経緯と南西側墓域での調査方法

三内丸山遺跡で初めて道路跡の存在が指摘されたのは南側墓域においてである。整然と配列された２列の土坑墓列に挟まれた帯状の空白地帯が、後に道路跡と紹介されている（青森県教委　1992）。

平成 4 年の旧野球場建設予定地の調査（青森県教委　第157集）では東側墓域の西側が調査され、土坑墓列と帯状の空白地帯が確認された。ここでは、空白地帯の地山に汚れが見られる点、直上の堆積土との層界が画然としている点や全体が帯状の落ち込みを見せている点が注意を引いた。

道路跡の存在が確信できたのは、平成 8 年に東側墓域で行った第 7 次調査（青森県教委　第251集）



131図　道路跡の掘削状況

からである。掘削が帯状落ち込みとして明瞭に認められ、掘削の底面では汚れと硬化の他に、道路跡の特徴的な痕跡として捉えられる地山土壌を用いたブロックの堆積が認められた。

翌年の第 9 次調査では、道路跡が墓列とともに約420m延びることがわかり、丘陵の下方へ下っていく様が確認された（青森県教委　第338集）。

これらの調査成果を受け、平成10年の第13次調査以降の調査では道路跡の検出に配慮した調査方法を用いている。隣接した青森市教育委員会の調査区（青森市教委　1996）の壁面において調査開始当初に道路跡の断面が認められたため、第Ⅱ層下部からは薄く土層を剥ぐこととした。道路面の直上では、草木根に巻き上げられた地山土壌を用いたブロックが先んじて見られ、掘りすぎを防ぐ指標となる。また、列状の環状配石墓が確認されたことにより、ボーリング棒を用いた環状配石墓の探査を先行することとした。これによって伴う道路跡のルートを間接的に把握することができた。第14次調査でロームブロックの散布に粗密が認められたことによって、ロームブロックのみを指標とした道路跡の検出に限界があることを示された。道路跡の面的確認に、土層の欠如や直上堆積土との層界の画然さといった特徴を利用するため、第20次調査からはグリッド毎に土層観察用ベルトを設定することとした。

2　道路跡の諸特徴

以上のように検出されてきた三内丸山遺跡の道路跡は、層位面と遺構配置の面において特徴がある。層位的特徴には掘削痕跡、硬化・汚れ・ブロック状の堆積など掘削で生じた底面の諸特徴、地形の改変という 3 種の痕跡が帯状として認められる。遺構配置上の特徴としては、各痕跡が直線状である、埋葬施設が並列して伴う点などが挙げられる。これら諸特徴・傾向について、以下でさらに詳しく述べてゆく。

痕跡上の特徴

[掘削痕跡について]

①帯状に分布する掘削痕跡であり、a．縄文時代以前の地層に欠落が見られる、b．掘削面と、その後の堆積層との層界が画然とするなどの層位的特徴が見られる。

[地形の変化について]

②緩やかな帯状の落ち込みになるなど、掘削による原地形の改変が見られる。

③掘削は底面・壁面の境界は明瞭に生じさせるものではない。

[底面の諸特徴について]

④掘削で露出した層の上面では、汚れや硬化が多く認められる。

⑤掘削によって露出した層は一様ではない。

⑥掘削で生じた底面は平坦で、急な勾配がほぼ見られない。

⑦掘削面に接して、粒径 7 cmまでの地山土壌のブロック（以下ロームブロック）が薄く堆積する。

⑧ロームブロックには竪穴住居の貼り床にも使用される砂質の層が選択的に使用されている。

⑨ロームブロック個々の埋没状態を観察すると、表面（上に位置する面を除く）には風化が認められない。

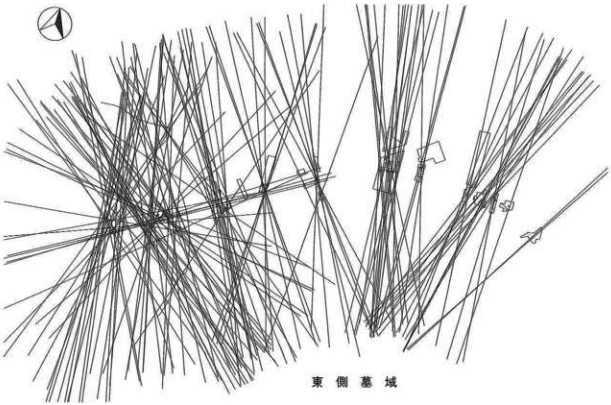
遺構配置上の特徴

⑩尾根上や段丘境界など、勾配の少ない状態を、長い距離確保できる地形において見られる。

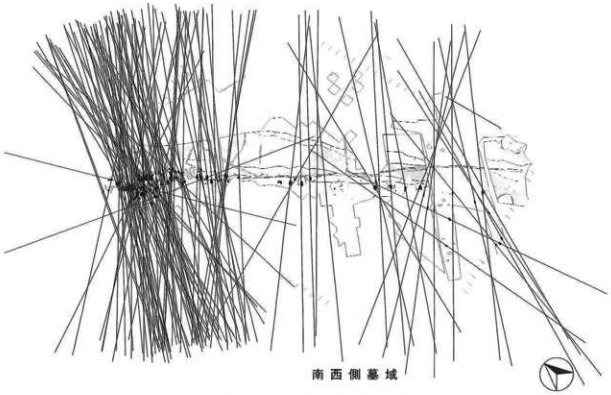
⑪各痕跡は直進する傾向が強く、カーブはあったとしても緩やかである。

⑫集落中心から外側に向けて分布が広がる。

⑬側溝等、後世の道路跡に見られる付属施設が伴わない。



東 側 墓 域



南 西 側 墓 域

132図　土坑墓の位置と長軸の向き

⑭長楕円形・隅丸方形・楕円形等の平面形をとる土坑墓が、両側、又は片側に沿って列状の墓域を形成する。この墓域には環状配石墓や埋設土器が含まれる場合もある。

⑮同時期の遺構、特に埋葬施設以外の遺構と、掘削痕跡の底面との間には重複が見られない。

⑯上記の痕跡は狭い範囲にとどまらず、数百m規模の長さで分布する。

南西側墓域での表れ方としては、①aは第Ⅲ・Ⅴ層にあたる。②は第1号道路跡にくらべ明瞭ではないが、緩斜面と推測される原地形が帯状の平坦地と急斜面に変化している（131図）。④は第Ⅵ層のみならず第Ⅶ層でも認められるが、第2号道路跡は硬化が顕著でない。⑤については第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層が見られ、第1号道路跡より多様である。⑦については第Ⅵ層が用いられる点で第1号道路跡と共通する。⑩については、第1号道路跡が尾根上に、第2号道路跡が段丘の境界に立地している。⑫については第1号が東に、第2号が南東に延びている。⑭については第1号道路跡では両側に土坑墓列が認められ、第2号道路跡で片側でのみ認められる点で違いが見られる。⑯についてはこれまでのところ、第1号道路跡が420m、第2号道路跡が185mの長さで確認されている。

さらに第2号道路跡の調査によって、次の所見が新たに加わった。

⑯第Ⅶ層が露出する範囲では、ロームブロックの散布は希薄である。第Ⅲ・Ⅴ層が残存する範囲では、ロームブロックが濃密に散布される傾向がある。

⑰土坑墓の長軸方向、底面の傾斜方向は、面する道路跡の主軸方向と直交する傾向がある（132図）。

3　縄文時代の道路跡

三内丸山遺跡の調査では、上記の特徴を持つ痕跡を縄文時代の道路跡としている。その判断理由として、人為的な痕跡である点、その痕跡が縄文時代に属している点、その痕跡が道路跡として認められる点の3点に分けて説明を加えてゆく。

まず、人為的なものであるかについては、2の①a、①b、②、⑥、⑦などから肯定される。また⑤については、⑥、⑪を優先させた結果生じたと捉えられ、同じく肯定材料となりえる。

所属時期については、掘削が第Ⅱ層からは認められず、縄文時代中期の第Ⅲ層から認められる点から縄文時代のものとできる。ロームブロックも第Ⅲ層上での堆積が認められ、ロームブロックの散布、掘削はともに縄文時代の所産といえる。遺構配置の点からも、縄文時代中期の埋葬施設が並列して伴っており、時間的な共存関係を示している。

最後に道路として認められる点として以下のことが挙げられる。

道路跡の構築場所として⑩が選定され、尚且つ⑥、⑪、⑫を保って構築されている。推定される原地形から判断して、相当量の掘削作業を要したであろう地点が存在する（131図）。⑤はこれにより掘削深度が不均一となった結果であると見ることが出来る。正回ルートを妨げる施設は確認されておらず、路線を直進させることと勾配の均一化が、掘削作業の軽減よりも優先されたことが示されている。

また、⑤は⑯の要因にもなっている。第Ⅶ層は、掘削面に露出した層としては硬い地盤であり、対して第Ⅲ層は締まりの弱い層である。ロームブロックの散布状態の違いに土壌硬度の違いが対応している。⑧から、ロームブロックは路面の補強を意図した施工法と推測されるため、⑯は底面硬度の保持・均等化を意図した施工の結果と見ることが出来る。

以上はいずれも通行上の便を優先した、意図的な措置の痕跡と見ることが出来る。

④は継続した通行に伴う直接的な痕跡と推測できる。⑮は機能を存続させる上での必要条件である。⑰は⑭と合わせて、道路跡の存在を意識した施設の配置が繰り返されるが、重複は終始避けられていたことを示している。また、①～⑭を前提とした⑮は、道路跡としての機能を考えた場合特殊な要素ではなく、また道路跡以外では該当する施設が見出せない。

古代の例を前提としたものであるが、山村信榮氏が掲げる道路跡の必要条件（山村　1994）の、連続する帯状の特定空間を形成すること、その空間内には同時期の遺構が存在しないことについても、第１・２号道路跡は満たしている。痕跡から判断する限り、古代の道路跡が道路跡であると認定する同じ理由により、これらの道路跡も道路跡と認定できるものと考える。

（秦　光次郎）

引用・参考文献

※青森県教育委員会による三内丸山遺跡の報告書については表２を参照。

青森県教委（1992）図説『ふるさと青森の歴史』シリーズ②「青い森の縄文人とその社会　縄文時代中期・後期編」

青森県教委（1994）『富ノ沢（2）遺跡発掘調査報告書Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集

青森県教委（1995）『上蛇沢（２）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第177集

青森県教委（1995）『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集

青森県教委（2002）『近野遺跡Ⅵ―県立美術館建設事業に伴う遺跡発掘調査報告―』青埋調第315集

青森市教委（1988）『三内丸山遺跡（2）遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青森市の埋蔵文化財

青森市教委（1995）『三内丸山遺跡（2）遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第28集

青森市教委（1999）『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』青森市埋蔵文化財調査報告書第45集

岩手県教育委員会（1981）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第58集

岡村　道雄（1997）「縄文時代の船と道」『ここまでわかった先史時代』角川書店

小笠原　雅行・秦　光次郎（2002）「青森県青森市三内丸山遺跡の道路跡について」『古代交通研究』第11号

小宮　恒雄（1998）「縄文時代の道」『考古学ジャーナル』434

塚原　正典（1987）『配石遺構』ニューサイエンス社考古学ライブラリー49

天間林村教委（1997）『二ッ森貝塚　平成８年度二ッ森貝塚発掘調査報告書』天間林村文化財調査報告書第５集

天間林村教委（1997）『村内遺跡発掘調査概要報告書　二ッ森貝塚発掘調査報告書７』天間林村文化財調査報告書第７集

遠野市教委（2002）『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集

成田　滋彦（1998）「円筒土器文化圏の葬制」『史跡三内丸山遺跡年報-１-』

領塚　正浩（2002）「縄文時代の道路跡―市川市向台貝塚の事例を中心として―」『市立市川考古博物館館報』第29号

山村　信榮（1994）「大宰府周辺の道路遺構」『季刊考古学』第46号

史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧（県教委発行分）

年　度	書　　名	県埋蔵文化財報告書	内　　容
昭和51	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ） 三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書 ―青森県総合運動公園建設関係発掘調査―	第33集	昭和51年度に調査した県総合運動公園西駐車場地区の調査報告
昭和53	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ） ―青森県総合運動公園建設関係発掘調査―	第47集	昭和52年度に調査した近野地区の調査報告
平成５	三内丸山(2)遺跡Ⅱ ―県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―	第157集	平成４年度に調査した旧野球場建設予定地３塁側スタンド地区検出遺構
平成５	三内丸山(2)遺跡Ⅲ ―県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ―	第166集	平成４～５年度の調査概要報告
平成６	三内丸山(2)遺跡Ⅳ	第185集	平成６年度に調査した旧サッカー場建設予定地の試掘調査報告
平成７	三内丸山遺跡Ⅴ ―第１次～４次調査報告書―	第204集	平成７年度に実施した第１次～４次調査の報告
平成７	三内丸山遺跡Ⅵ	第205集	平成４～７年度の調査概要報告
平成８	近野遺跡Ⅴ ―県営運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査報告Ⅰ―	第216集	平成６～７年度に調査した近野地区の試掘調査報告
平成８	三内丸山遺跡Ⅶ ―第５次～７次調査概要報告書―	第229集	平成８年度に実施した第５次～７次調査の概要報告
平成８	三内丸山遺跡Ⅷ ―第６鉄塔地区調査報告書１―	第230集	平成４～５年度に調査した第６鉄塔地区の検出遺構及び第Ⅲ～Ⅴc層の調査報告
平成９	三内丸山遺跡Ⅸ ―第６鉄塔地区調査報告書２―	第249集	平成４～５年度に調査した第６鉄塔地区の第Ⅵa・Ⅵb層及び自然科学分野の調査報告
平成９	三内丸山遺跡Ⅹ ―旧野球場建設予定地発掘調査報告書２―	第250集	平成４～６年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成９	三内丸山遺跡Ⅺ ―第５次～７次調査報告書―	第251集	平成８年度に実施した第５次～７次調査の報告
平成９	三内丸山遺跡Ⅻ ―第８次～10次調査概要報告書―	第252集	平成９年度に実施した第８次～10次調査の概要報告
平成10	三内丸山遺跡XIII ―第11次～13次調査概要報告書―	第265集	平成10年度に実施した第11次～13次調査の概要報告
平成11	三内丸山遺跡XIV ―第14次～16次調査概要報告書―	第282集	平成11年度に実施した第14次～16次調査の概要報告
平成11	三内丸山遺跡XV ―旧野球場建設予定地発掘調査報告書３―	第283集	平成４～６年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成12	三内丸山遺跡XVI ―旧野球場建設予定地発掘調査報告書４―	第288集	平成４～６年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成12	三内丸山遺跡XVII ―第６鉄塔地区調査報告書３―	第289集	平成４～５年度に調査した第６鉄塔地区の遺構外遺物に関する調査報告
平成12	三内丸山遺跡XVIII ―第17次～19次調査概要報告書―	第309集	平成12年度に実施した第17次～19次調査の概要報告
平成13	三内丸山遺跡XIX ―第20次～22次調査概要報告書―	第337集	平成13年度に実施した第20次～22次調査の概要報告
平成13	三内丸山遺跡XX ―第８・９次発掘調査報告書―	第338集	平成９年度に実施した第８・９次調査の報告
平成14	三内丸山遺跡21 ―第23次～25次発掘調査報告書―	第361集	平成14年度に実施した第23～25次調査の概要報告
平成14	三内丸山遺跡22 ―第13・14・17・20次発掘調査報告書―	第362集	平成11～13年度に実施した第13・14・17・20次調査の報告

写　真　図　版

第13次調査区全景（南東から）

第14次調査区全景（南東から）

写真１　調査区空撮(1)

第14次調査区北側（北東から）

第20次調査区（北東から）

写真２　調査区空撮(2)

基本土層　Ⅵ F－169 南東（14次）

同　Ⅵ F－169 北東（14次）

同　Ⅵ E－168 南東（14次）

同　Ⅵ E－168 北東（14次）

同　Ⅵ D－167 南東（14次）

同　Ⅵ D－167 北東（14次）

同　Ⅵ C－166 南東（14次）

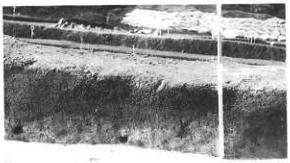
同　Ⅵ C－166 東（14次）

写真３　基本層序(1)

同　VI C－166 北東（14次）

同　VI C－166 北（14次）

同　VI B－165 南東（14次）



同　VI B－165 北東（14次）

同　VI A－165 南東（14次）

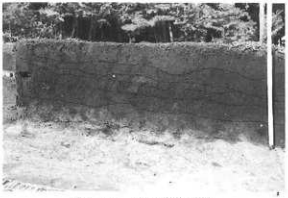
同　VI A－165 東（14次）

同　VI A－165 北東（14次）

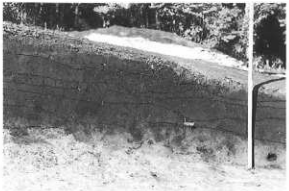
同　VI T－163 北東（14次）

写真 4　基土層序 (2)

同　Ⅵ T－163 東（14次）



同　Ⅵ C－166（分層後）



同　Ⅵ B－165 南東（分層後）

同　Ⅵ B－165 北東（分層後）

同　Ⅵ B－165 南東（分層後）

同　Ⅵ A－165 北東（分層後）

同　Ⅵ A－164 南東（分層後）

同　Ⅵ A－164 北東（分層後）

写真５　基本層序(3)

同　Ⅵ A－164 北（分層後）

同　Ⅵ T－163 南東（分層後）

同　Ⅵ T－163 北東（線あり）

同　Ⅵ T－163 北 1（線あり）

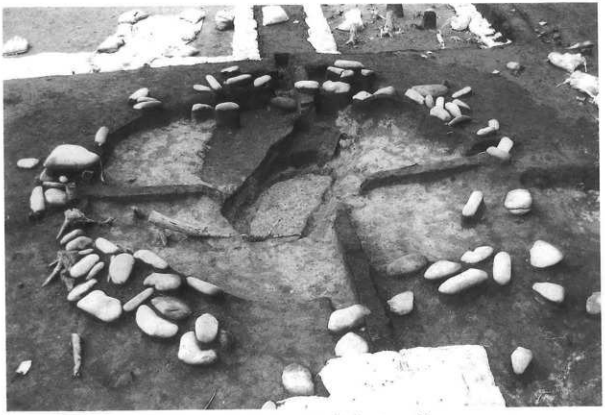
同　Ⅵ T－163 北 2（線あり）

同　Ⅵ S－161・162（線あり）

平成 6 年度青森市教委調査区　南東壁（北西から：13次）

同　南東壁（北西から：13次）

写真 6　基本層序 (4)



第11号配石　精査終了状態（北東から：14次）

同　確認状況（北から：13次）

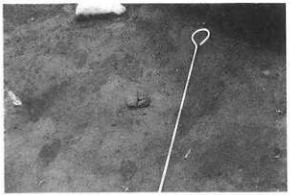
同　確認状況（南東から：13次）

同　内部の掘り下げ　（北東から：14次）

同　大石直下の第Ⅱ層の落ち込み（北から：14次）

写真７　第11号配石(1)

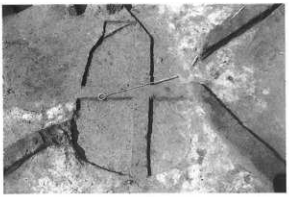
第11号配石　柱状礫直下での第Ⅱ層の落ち込み(南西から：14次)



同　土坑墓Ａ直上出土土製品（北から：14次）

同　土坑墓Ａ　完掘（北西から：14次）

同　土坑墓Ａ・Ｂ・Ｃ　確認状況（北東から：14次）



同　土坑墓Ａ　5㎝掘り下げ状況（東から：14次）

写真８　第11号配石(2)

第11号配石土坑墓A　10cm掘り下げ状況(東から：14次)

同　土坑墓A　15cm掘り下げ状況（東から：14次）

同　土坑墓A　壁溝確認（東から：14次）

同　土坑墓A　壁溝上の炭化物（東から：14次）

同　土坑墓A　土層断面（南から：14次）

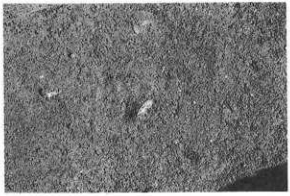
同　土坑墓A　土層断面（東から：14次）

同　土坑墓A　出土炭化板材（東から：14次）

同　土坑墓A　出土炭化板材（東から：14次）

写真 9　第11号配石 (3)

第11号配石　土坑墓Ａ　出土炭化板材（北東から：14次）



同　土坑墓Ａ　石鏃出土状況（南東から：14次）

第12号配石（北東から：14次）

同　土坑墓確認状況（東から：14次）

第13号配石　確認状況（北東から：13次）

写真10　第11・12・13号配石

第13号配石　南東側（北東から：13次）

同　土坑確認状況（北東から：14次）

第11～13号配石下のⅢb層（南から：14次）

第15号配石　確認状況（北東から：14次）

第16号配石　確認状況（南東から：14次）

写真11　第13・14・15・16号配石

第16号配石　土盛り・直上堆積土断面（南東から：17次）

同　トレンチ内土坑確認状況（北西から：17次）

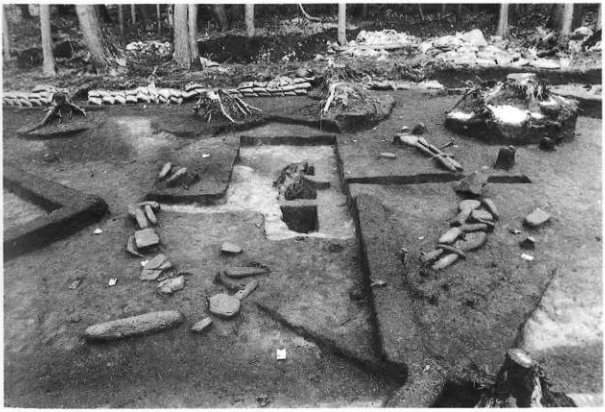
写真12　第16号配石

第16号配石　トレンチ3　マウンド断面(北西から：14次)

第17号配石　確認状況（南から：14次）

同　北西側の立石（北西から：14次）

同　土坑墓　確認状況（北東から：14次）



同　精査終了状態（北東から：20次）

写真13　第16・17号配石

第17号配石　土坑墓半割（北東から：20次）

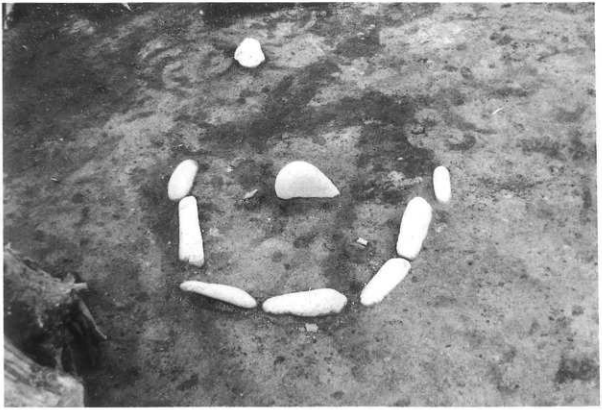
同　土坑内土層断面（南東から：20次）

第18号配石　確認状況（北から：14次）

同　確認状況（東から：14次）

第19号配石　確認状況（東南から：14次）

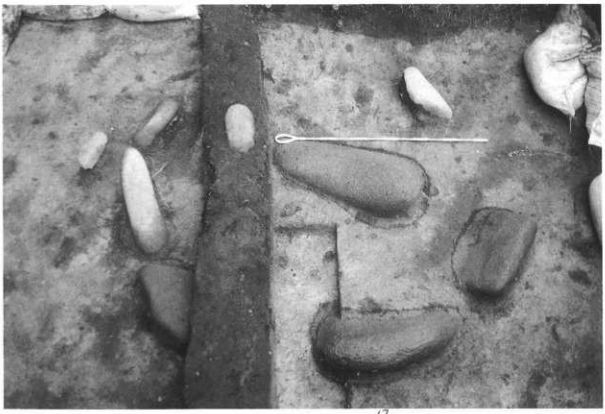
写真14　第17・18・19号配石



第20号配石　確認状況（北から：14次）

第21号配石　確認状況（東から：14次）

写真15　第20・21号配石



第21号配石　掘り方（東から：14次）

同　先行トレンチ壁面（北から：17次）

同　穿孔石製品出土状況（東から：14次）

第22号配石　確認状況（東から：14次）

第23号配石　北側土偶（北から：14次）

写真16　第21・22・23号配石

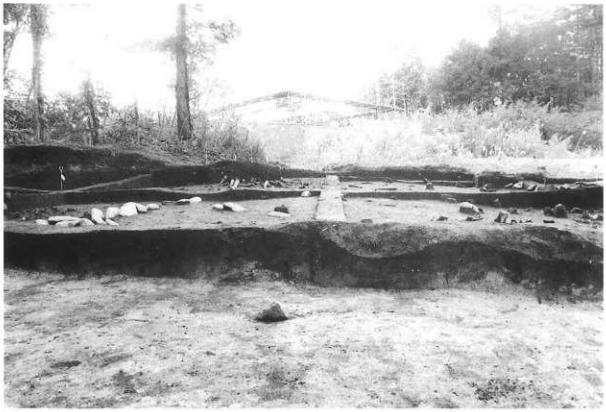
列状をなす配石・配石墓（第22号配石　南東から：14次）

第24・25号配石　確認状況（南東から：20次）

第24号配石　確認状況（北東から：20次）

写真17　配石列・第24・25号配石

第25号配石　確認状況（東から：20次）



同　内部マウンド　確認状況（東から：20次）

写真18　第25号配石

第26・27号配石　確認状況（北西から：20次）

第26号配石　確認状況（南東から：20次）

写真19　第26・27号配石

第26号配石　確認状況（北東から：20次）

同　確認状況（南西から：20次）

第27号配石　確認状況（南西から：20次）

同　確認状況（南西から：20次）

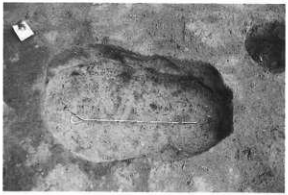
第28号配石及び土坑確認状況（東から：20次）

写真20　第26・27・28号配石

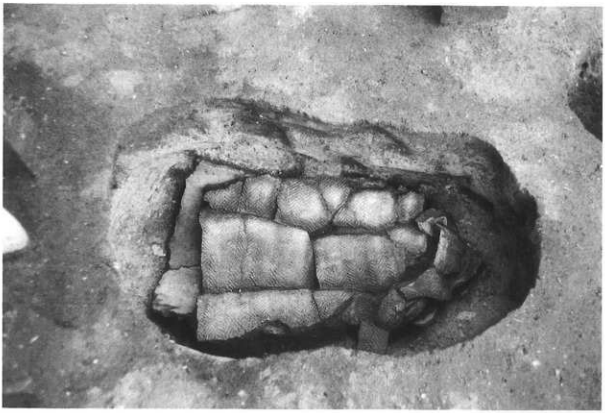
第1093土坑　半割状態（北から：14次）

同　確認状況（北から：14次）

同　土層断面（東から：14次）



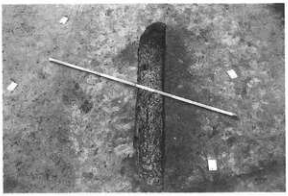
第1095号土坑　完掘（東から：14次）



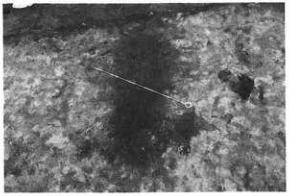
同　底面土器出土状況（東から：14次）

写真21　第1093・1095号土坑

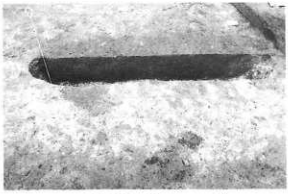
第1095号土坑　底面出土土器（東から：14次）



第1101号土坑　精査終了状態（北東から：14次）



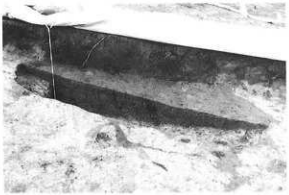
同　確認状況（西から：14次）



同　土層断面（南から：14次）

第1103号土坑　精査終了状態（北東から：14次）

同　確認状況（南東から：14次）



同　土層断面（南東から：14次）

第1112・1215号土坑　半割（北から：14次）

写真22　第1095・1101・1103・1112・1215号土坑

第1112・1215号土坑　確認状況（北東から：14次）

同　土層断面（東から：14次）

第1119号土坑（北東から：17次）

同　壁溝内堆積土（東から：17次）

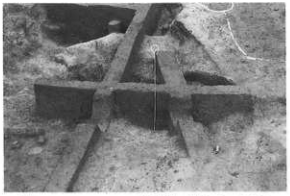
第1127・1128号土坑　完掘（東から：17次）

第1128号土坑　土層断面（南東から：17次）

写真23　第1112・1215・1119・1127・1128号土坑

第1184・1185号土坑　精査終了状態（北東から：17次）

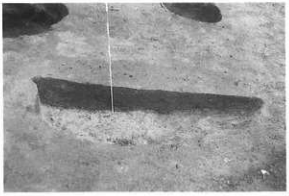
第1210・1260号土坑　土層断面（南東から：17次）



第1211・1212・1257号土坑（北から：17次）

第1220号土坑　土層断面（南西から：17次）

同　精査終了状態（西から：17次）



第1221号土坑　土層断面　堆積土（南東から：17次）

第1290号土坑　遺物出土状況（北西から：20次）

第1293・1294号土坑　確認状況（北東から：20次）

写真24　第1184・1185・1210・1211・1220・1221・1260・1290・1293～4号土坑

第1293号土坑　土層断面（東から：20次）

第1294号土坑　土層断面（南西から：20次）

第1082号土坑　確認状況（北東から：14次）

第1083号土坑　確認状況（北東から：14次）

第1086号土坑　確認状況（南から：14次）

第1187号土坑　確認状況（北東から：14次）

第1088号土坑　確認状況（北東から：14次）

第1091号土坑　周辺のあげ土（北から：17次）

写真25　第1290・1294号土坑と確認のみの土坑(1)

第1096号土坑　確認状況（北から：14次）

第1097号土坑　確認状況（北から：14次）

第1098号土坑　確認状況（北東から：14次）

第1104号土坑　確認状況（南東から：14次）

第1105～1107号土坑　確認状況（北から：14次）

第1108・1109号土坑　確認状況（北から：14次）

第1113号土坑　確認状況（東から：14次）

第1118号土坑　耳飾出土状況（北東から：14次）

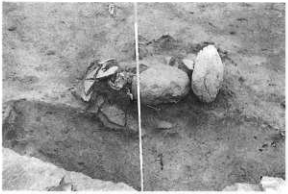
写真26　確認のみの土坑(2)

第1119・1120・1121号土坑　確認状況(東から：14次)

第1140～1152号土坑（西から：14次）

第1167号土坑　直上の第Ⅲ層の盛り上がり(北西から：17次)

第812号埋設土器　確認状況（南から：14次）



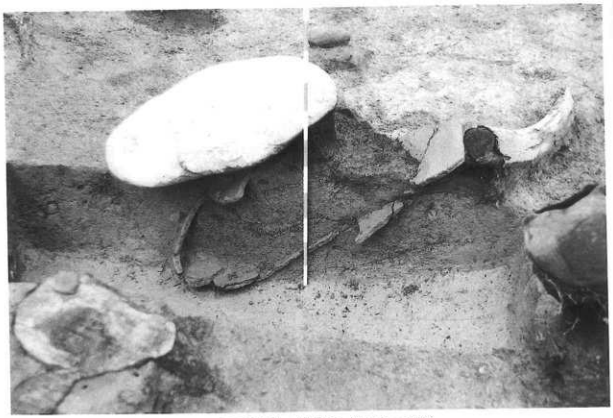
第812号埋設土器　礫直下断面（東から：14次）

第812・818号埋設土器　側面（北東から：14次）

第812・818埋設土器　断面（北東から：14次）

第813号埋設土器　確認状況（東から：14次）

写真27　確認のみの土坑(3)　・第812・813・818号埋設土器



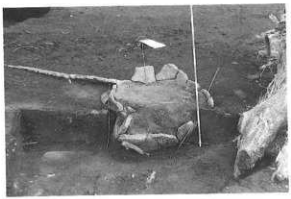
第813号埋設土器　土層断面（南から：14次）

同　側面（南から：14次）

第814号埋設土器　確認状況（西から：14次）

~~同　VIIH-133~~側面（東から：14次）

第814号埋設土器　側面

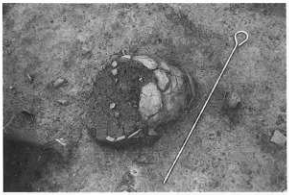


同　側面（東から：14次）

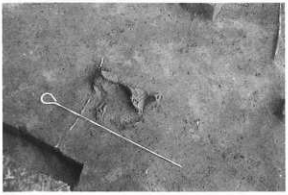
写真28　第813・814号埋設土器

第810号埋設土器　確認状況（南東から：14次）

第811号埋設土器　確認状況（南西から：14次）



同　掘り方確認状況（北西から：14次）



第815号埋設土器　確認状況（西から：14次）

第816号埋設土器　確認状況（東から：14次）

第817号埋設土器　確認状況（東から：14次）

第819号埋設土器　確認状況（北から：14次）

第820号埋設土器　確認状況（南から：14次）

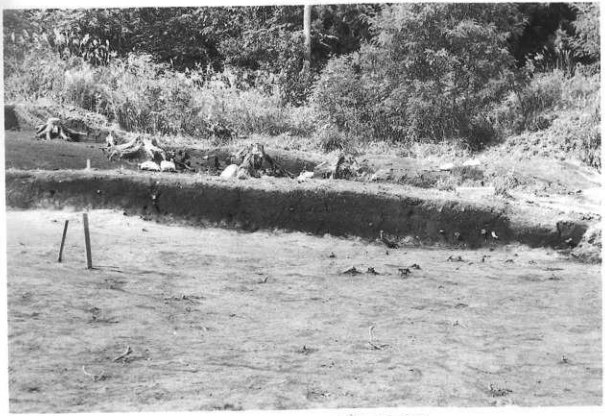
写真29　確認のみの埋設土器

道路跡と環状配石墓（北東から：13次）

道路跡の窪み（北西から：13次）

写真30

同（北西から：20次）



同（ⅥA・B～163・164　南東から：13次）

写真31

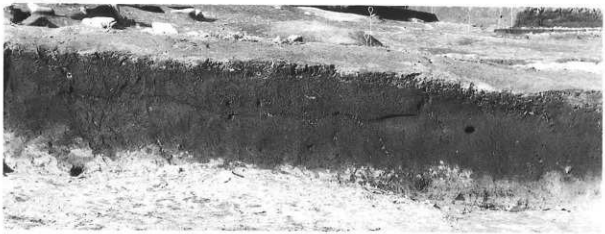
北西側道跡および道路跡の窪み（南東から：20次）

第17号配石付近道路面削平状況（北西から：20次）

写真32

道路跡断面（南東から：20次）

同　西側断面（南東から：20次）



同　西側路肩付近断面（南東から：20次）

同　路面部断面（南東から：20次）

写真33

道路面から路肩方面（ⅥＡ・Ｂ－163・164を東から）

道路削平痕跡拡大（ⅥＡ・Ｂ－163・164を南東から：13次）

写真34

道路面のロームブロック（Ⅵ G－152を南から）

同　確認状況（Ⅵ T－135から南西へ）

道路跡　センターから進行方向へ（Ⅵ E－152から北西へ：20次）

道路跡　確認部北端（Ⅵ T－135～６を南東から：14次）

同　（Ⅵ T－135～６を南西から：14次）

第17号配石北西側のロームブロック（南から：14次）

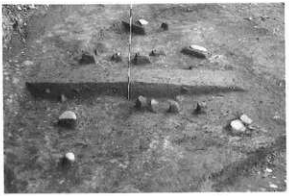
道路跡の南東側及び配石確認状況（北西から：20次）

同　窪みと道路跡断面（北西から：20次）

写真35

第522号住居跡　精査終了状態（南西から：17次）

第662号住居　完掘（北東から：14次）



同　土層断面（東から：14次）

同　硬化面・ピット・確認状況（南東から：14次）

第667号住居　確認状況（東から：14次）

同　確認状況（東から：14次）

第661号住居　確認状況（西から：14次）

第664号住居　確認状況（北から：14次）

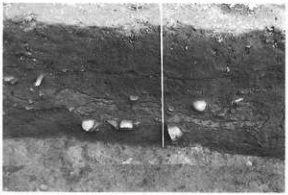
写真36　縄文時代の竪穴住居跡

第13697号ピット　柱痕土層断面（東から：17次）

第13702号ピット（南西から：21次）

第13703号ピット（南西から：21次）

西盛土の高まり（Ⅶ K－127を東から：17次）



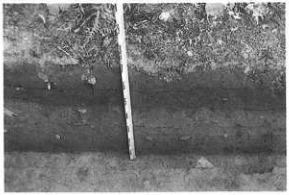
西盛土　土層断面（Ⅶ N－127を南東から：17次）

同　土層断面（Ⅶ N－127を南東から：17次）

同　土層断面（Ⅶ L－126を南東から：17次）

同　トレンチ壁面（Ⅶ L－126を北東から：17次）

写真37　ピット・盛土遺構（1）



西盛土トレンチ１　壁面（Ⅵ L－126を北東から：17次）

同　トレンチ１　壁面（Ⅵ L－126を北東から：17次）

第249・250号溝　完掘（Ⅵ F－156・157を南から：14次）

第249号溝　土層断面（Ⅵ F－156を南東から：14次）

畠跡　畝面確認状況（東から：14次）

同　確認状況（北東から：20次）

同　確認状況（北東から：20次）

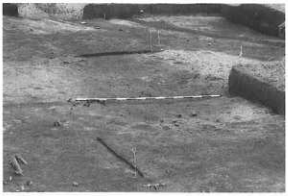
同　確認状況（北東から：20次）

写真38　盛土遺構（2）・溝跡・畠跡

畠跡　断面（Ⅵ I －149を東から：20次）

同　確認状況（Ⅵ K－149を北東から：20次）

第Ⅱ層中の硬化面（Ⅵ F－150を南西から：14次）



第665号住居　確認状況（東から：14次）

Ⅵ T～Ⅶ D 第Ⅱ層除去後（北東から：14次）

Ⅶ A～D－137～139遺構確認状態（北から：17次）

Ⅵ Q－146～Ⅵ Q－142第Ⅱ層除去後（北東から：14次）

第17号配石周辺第Ⅱ層除去後（北東から：14次）

写真39　畠跡・平安時代の住居・第Ⅱ層直下の状態

第Ⅲａ・Ⅲｂ層の盛り上がり（Ⅵ D－166～Ⅵ E－165を東から）

同　断面（Ⅵ D－166～Ⅵ E－165を北東から）

同　断面（Ⅵ E－165～Ⅵ D－164を南東から）

第Ⅱ層　出土土器（Ⅵ T－139を東から）

第14・15号配石南西　第Ⅲｂ層除去後（北東から：14次）

旧野球場地区南側調査区全景（西から：20次）

旧野球場地区南西壁（Ⅵ F－124～Ⅵ D－127を北西から：20次）

同（Ⅵ Q－132～Ⅵ T－130を北から：20次）

写真40　第Ⅲ層と直下の状態・第Ⅱ層の出土遺物・旧野球場建設予定地内

同（Ⅵ S－131～Ⅵ T－130を北から：20次）

同（Ⅵ Q－132～Ⅵ T－130を北西から：20次）

発掘現場の見学風景

作業風景　14次

同　14次

同　14次

同　14次

同　20次

写真41　旧野球場建設予定地内・作業風景

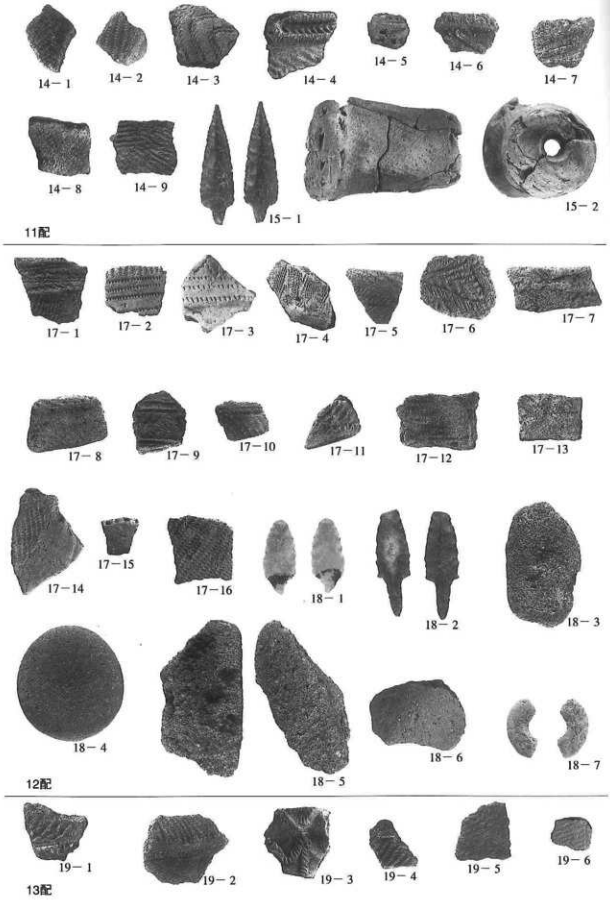


写真42　第11・12・13号配石出土遺物(1)

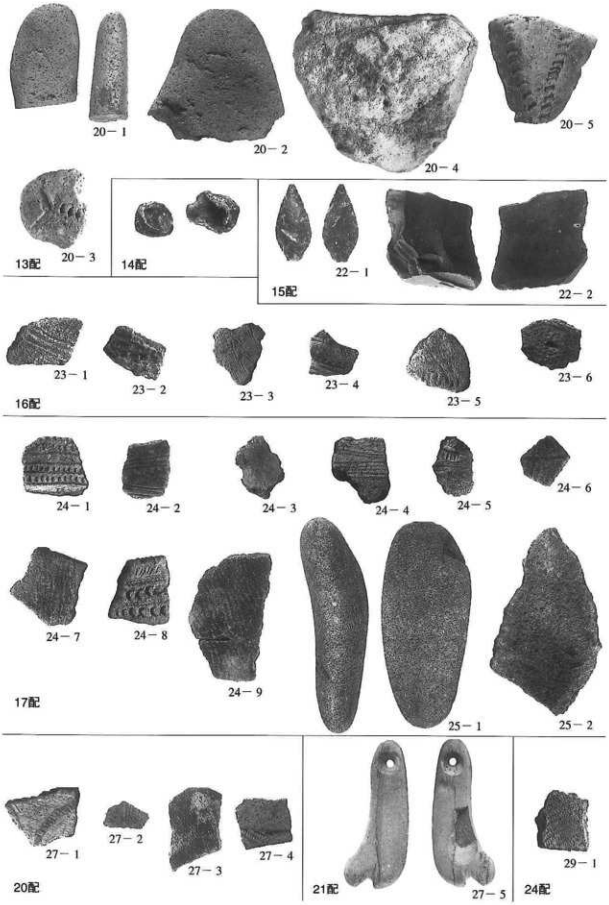


写真43　第13・14・15・16・17・20・21・24号配石出土遺物(2)

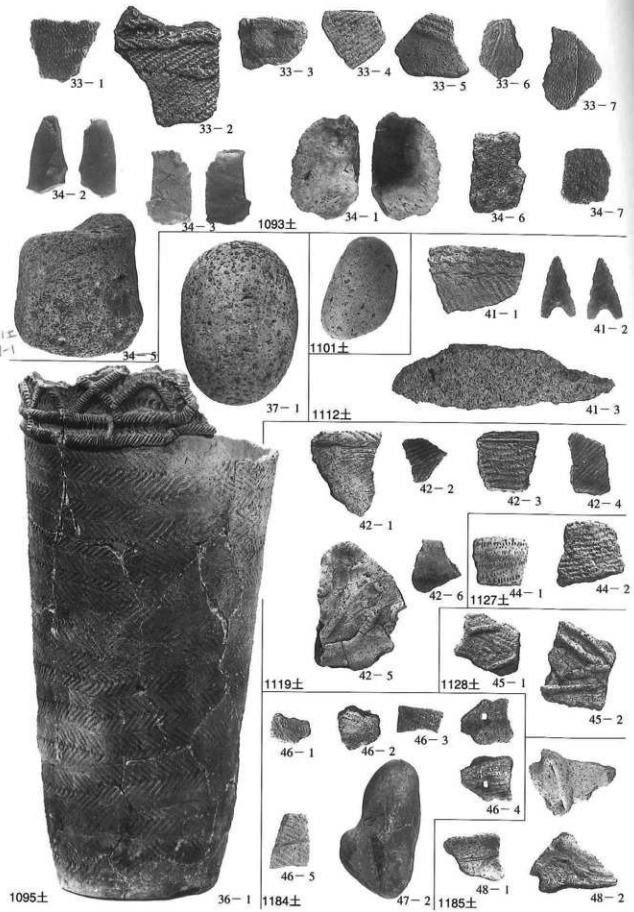


写真44　第1093・1095・1101・1112・1119・1127・1128・1184・1185号土坑出土遺物

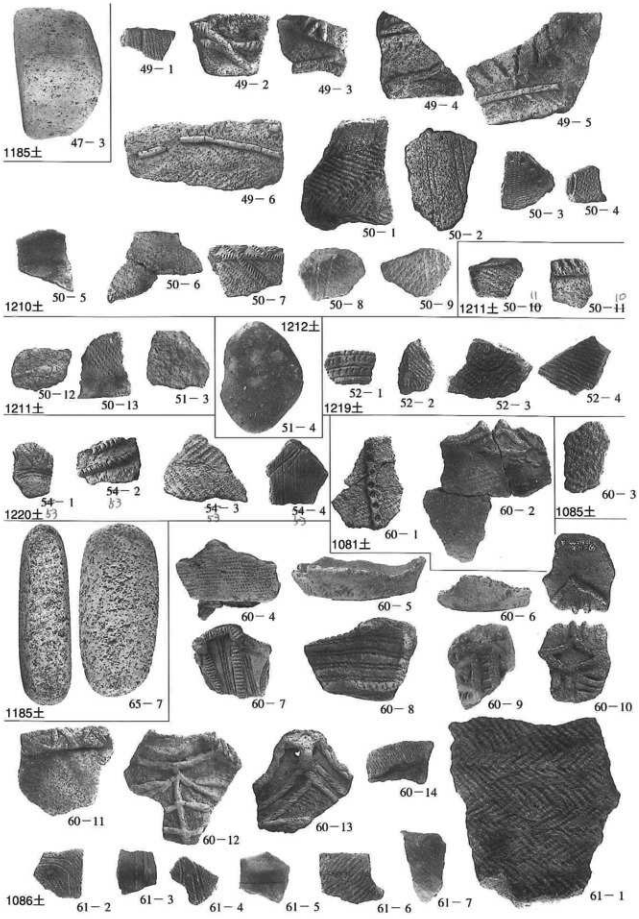


写真45　第1185・1210・1211・1212・1219・1220号土坑、その他の土坑出土遺物(1)

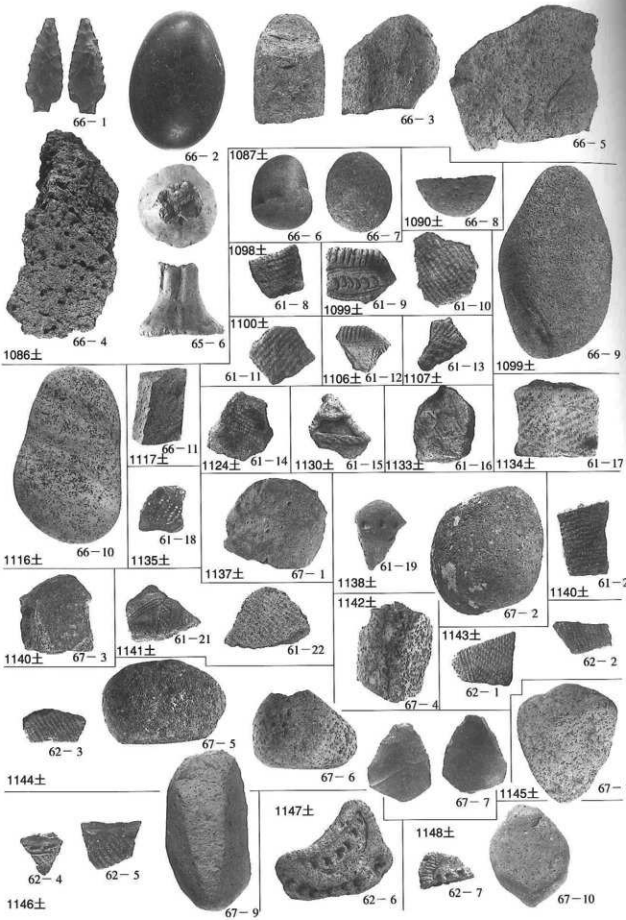


写真46　その他の土坑出土遺物(2)

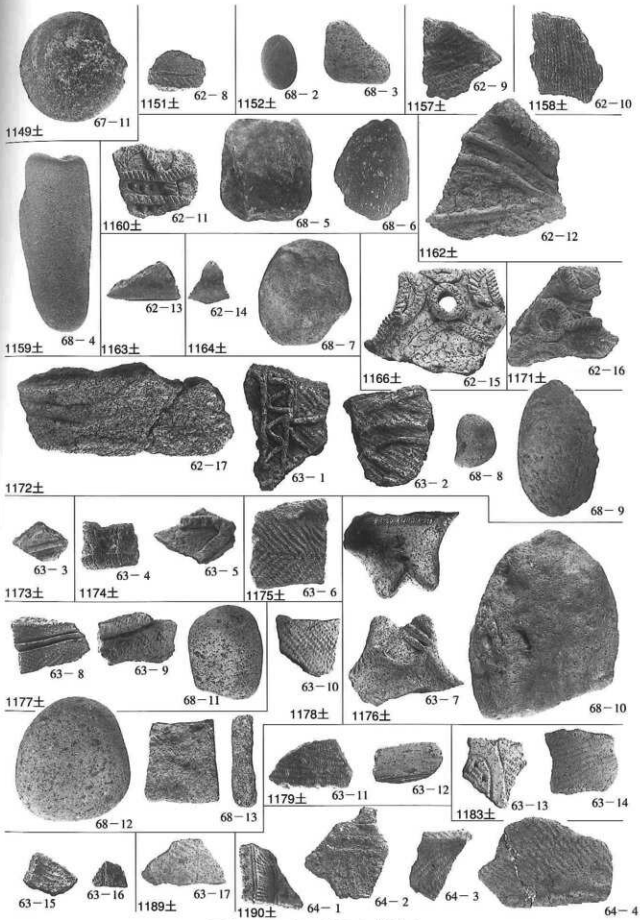


写真47　その他の土坑出土遺物(3)

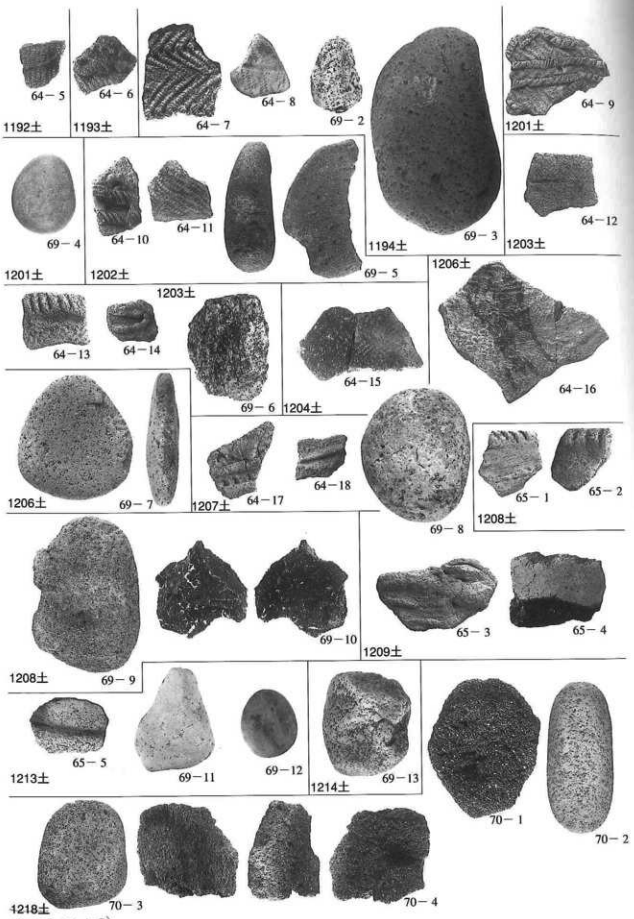


写真48　その他の土坑出土遺物(4)

812埋　74－1

813埋　75－1

814埋　76－1

818埋　77－1

写真49　第812・813・814・818号埋設出土遺物

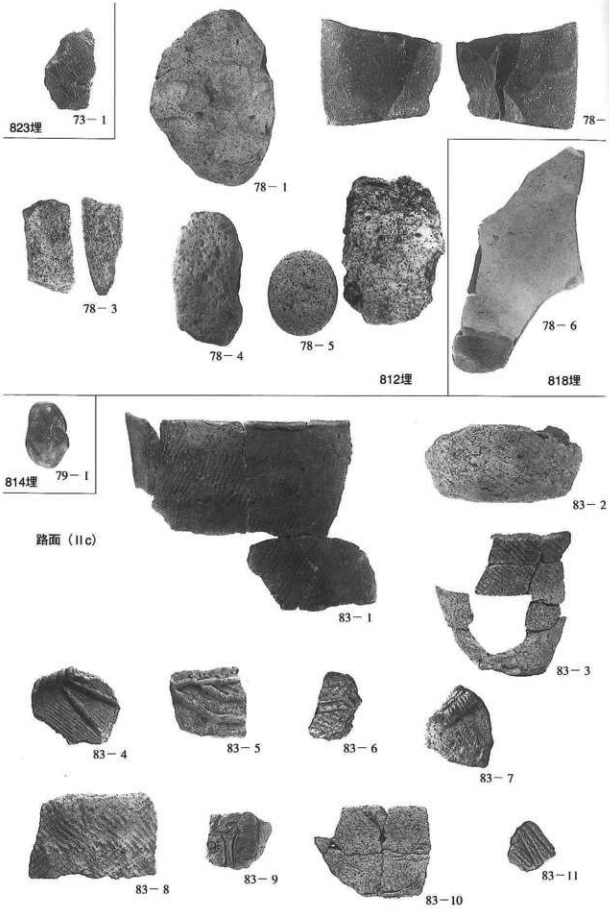


写真50　第812・814・818号埋設・道路跡直上出土遺物(1)

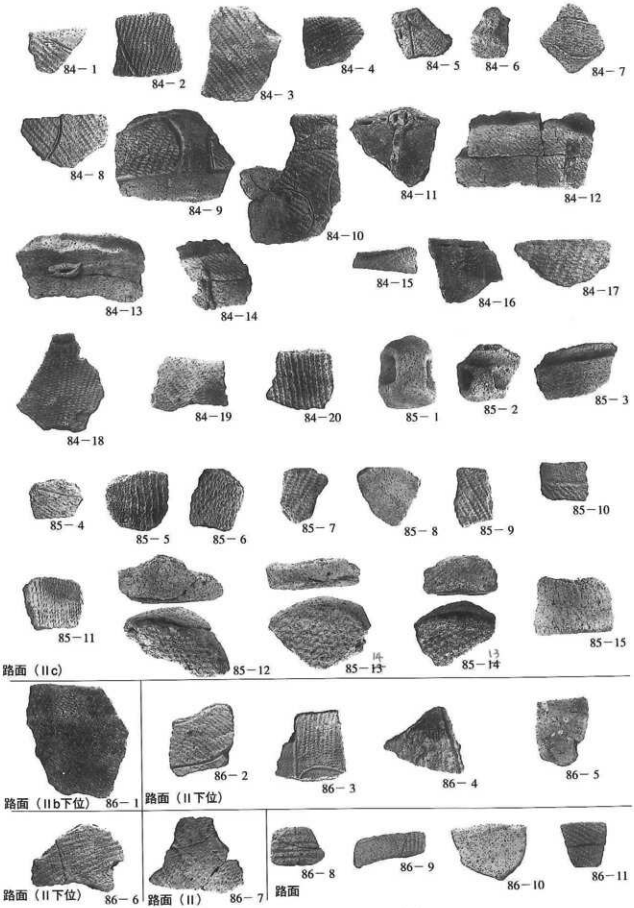


写真51　道路跡直上出土遺物(2)

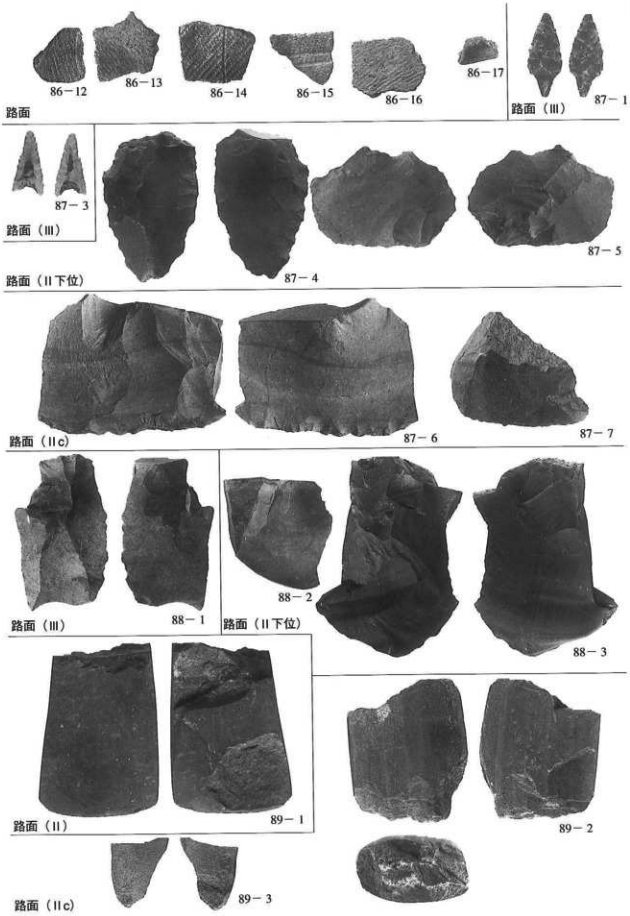


写真52　道路跡直上出土遺物(3)

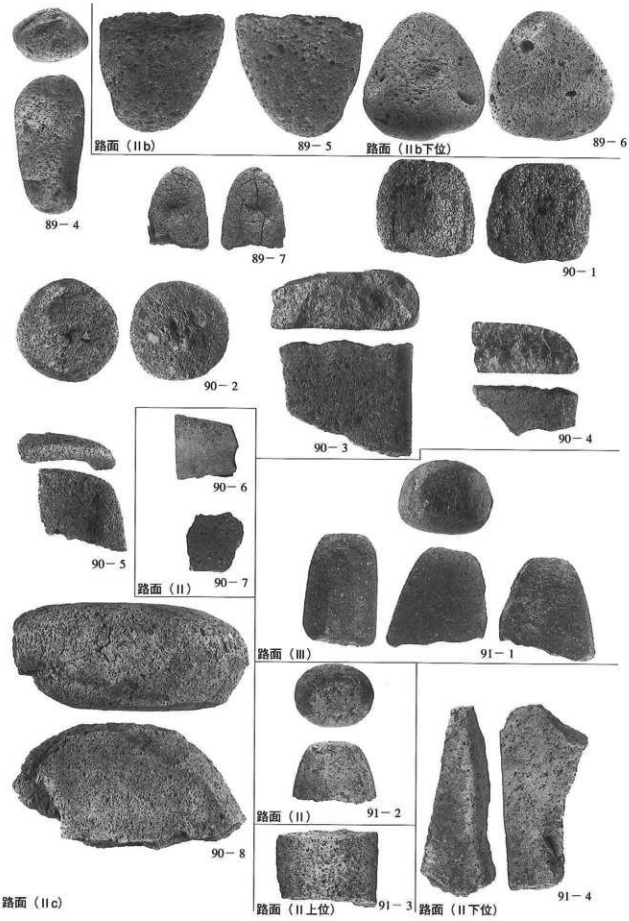


写真53　道路跡直上出土遺物(4)

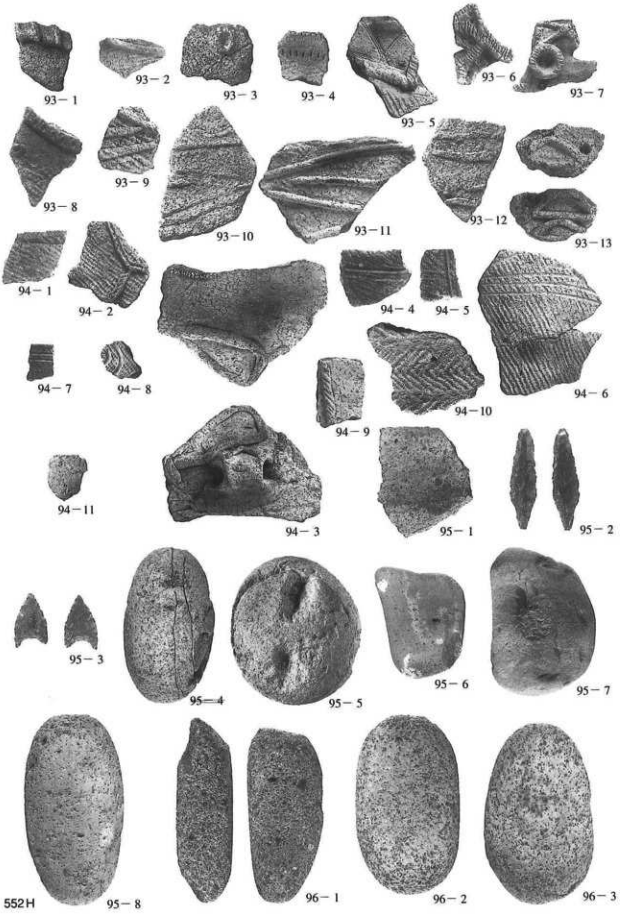


写真54　第552号住居跡出土遺物

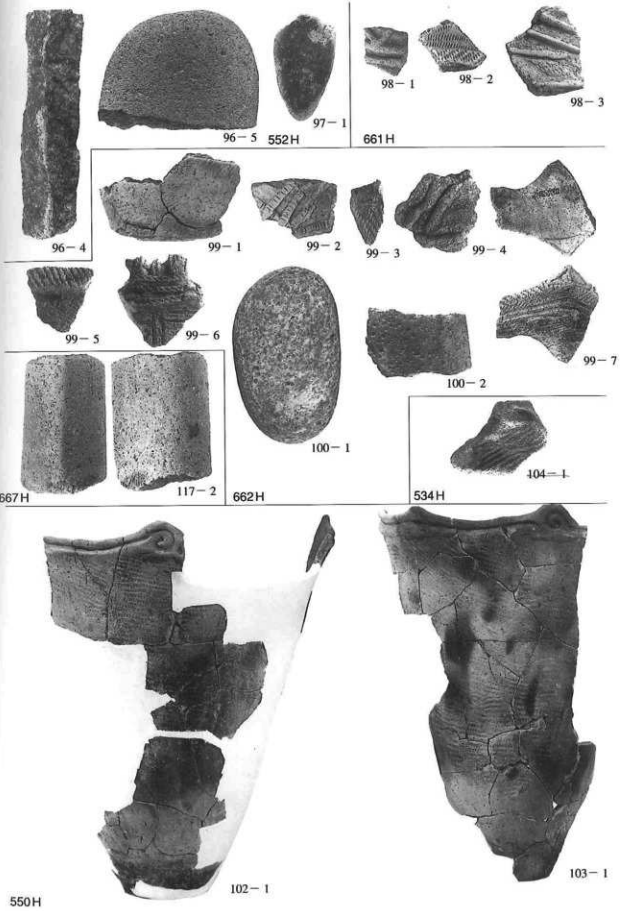


写真55　第552・661・662・667号住居跡・その他の住居跡出土遺物(1)

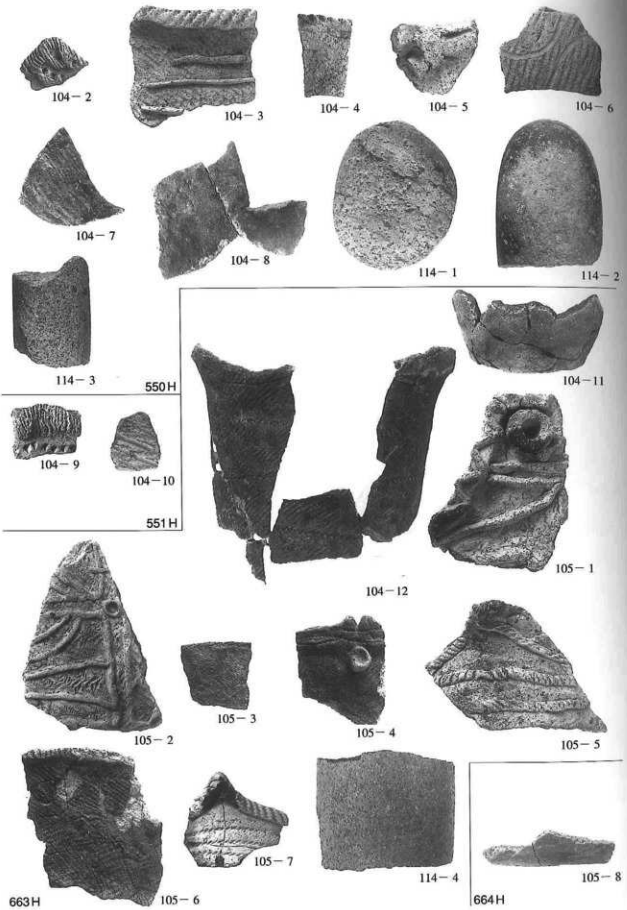


写真56　その他の住居跡出土遺物(2)

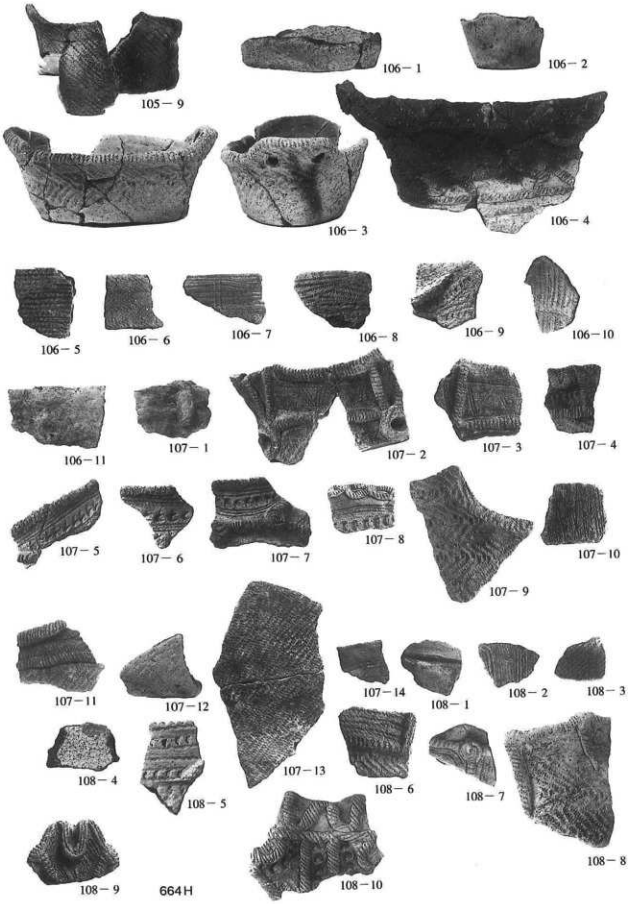


写真57　その他の住居跡出土遺物(3)

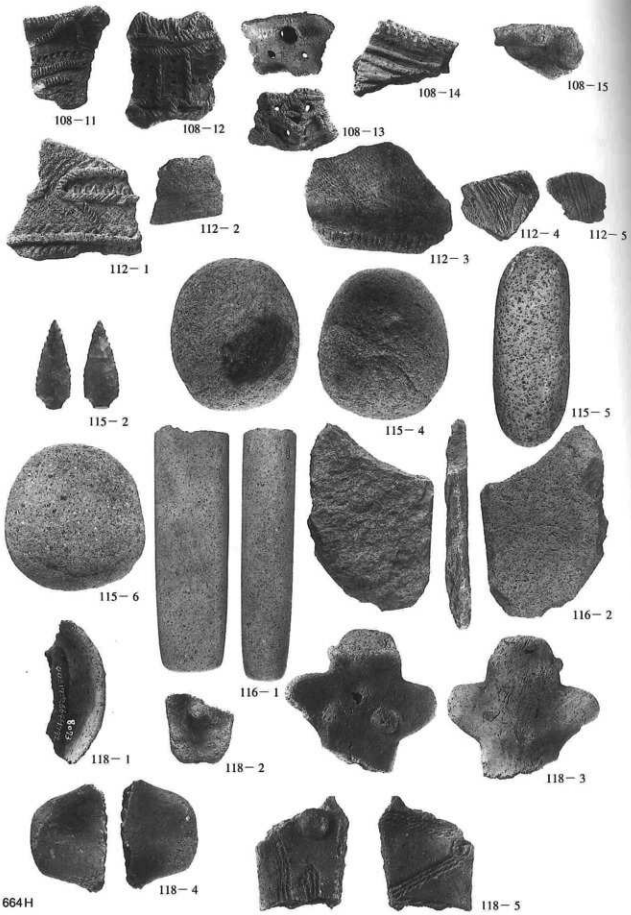
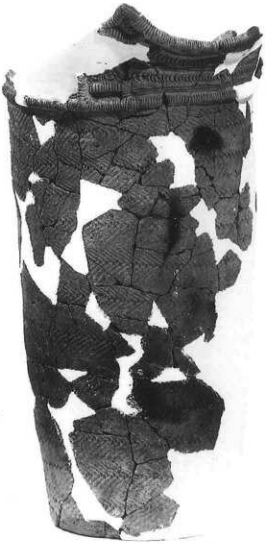


写真58　その他の住居跡出土遺物(4)



109－1

666H

110－1

写真59　その他の住居跡出土遺物(5)

111－1

112－6

112－7

112－8

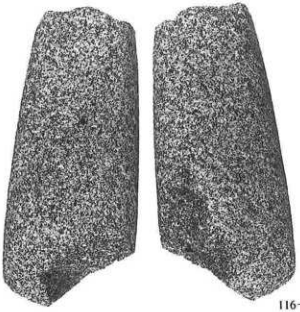
112－9

112－10

112－11

112－12

116－3


116－5

117－1

666H

112－13

673H

112－14

112－15

674H

113－1

写真60　その他の住居跡出土遺物(6)

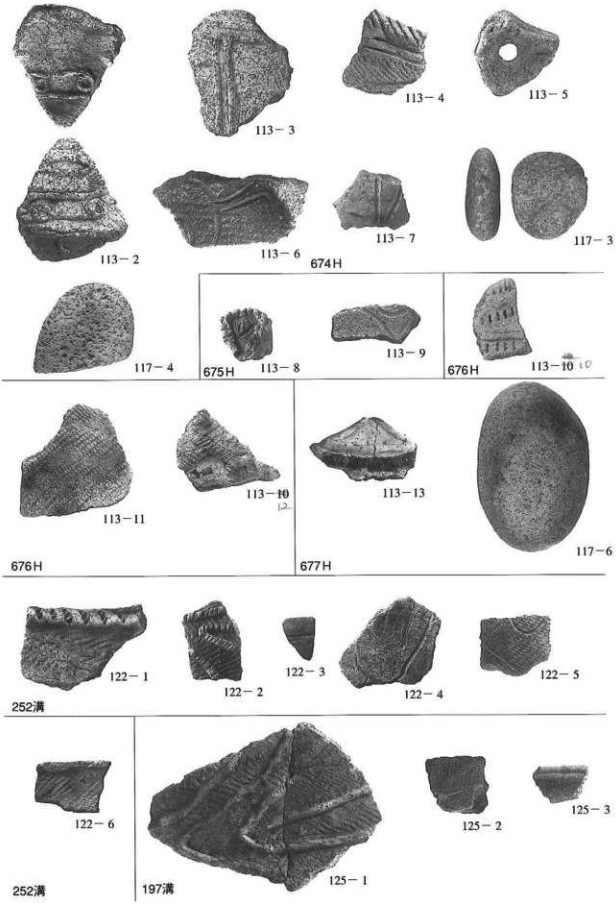


写真61　その他の住居跡(7)・第252号溝・その他の溝出土遺物

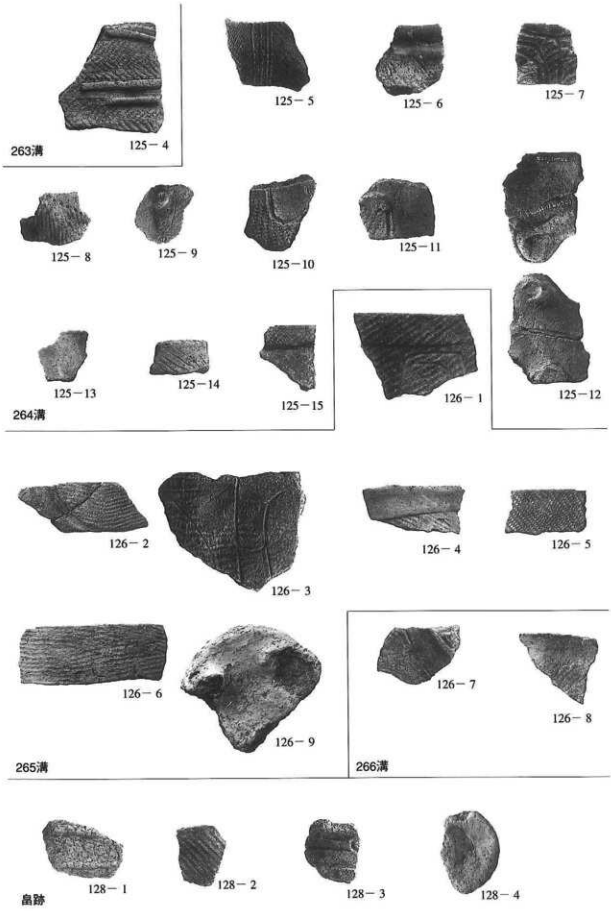


写真62　その他の溝・畠跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さんないまるやまいせき　にじゅうに
書　　名	三内丸山遺跡22
副　書　名	－第13・14・17・20次調査報告書１－　遺構・遺構内遺物編
巻　　字	
シ リ ー ズ 名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第362集
編 著 者 名	齋藤岳・秦光次郎・佐々木雅裕
編 集 機 関	青森県教育庁文化財保護課
所　在　地	青森市新町二丁目3番1号　ＴＥＬ017-734-9924
発 行 年 月 日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	旧日本測地系 (Tokyo Datum) 北緯	旧日本測地系 (Tokyo Datum) 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
さんないまるやまいせき 三内丸山遺跡	あおもりけんあおもりし おおあざさんないあざまるやま 青森県青森市大字三内字丸山	02201	01021	40° 48′ 40″	140° 42′ 20″	・19980601～ 19981030 ・19990512～ 19991029	8,235	集落規模・変遷解明のための学術調査
				旧日本測地系 (JGD2000) 北緯	旧日本測地系 (JGD2000) 東経	・20000522～ 20001027 ・20010618～ 20001122		
				40° 48′ 50″	140° 42′ 07″			

所収遺跡	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
三内丸山遺跡 第13・14・17・20次調査区	集落跡	縄文時代 平安時代 時期不明	竪穴住居跡　18棟 配石遺構　18基 土坑　172基 埋設土器　16基 道路跡　1条 柱穴　4基 盛土遺構 竪穴住居跡　1棟 溝跡　29条 畠跡	縄文土器 （前～中期） 石器	・縄文時代前・中期の大規模集落跡の調査。 ・墓域を中心とした４ヵ年（第13・14・17・20次）にわたる調査の報告書。 ・環状配石墓を含む列状墓と縄文時代の道路跡を検出。

青森県埋蔵文化財調査報告書第362集

三内丸山遺跡22

—第13・14・17・20次調査報告書1—

発行日　平成15年3月31日

発　行　青森県教育委員会

編　集　青森県教育庁文化財保護課
〒030-0801 青森市新町2丁目3－1
電話　017－734－9924

印刷所　東北印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦1丁目2－12